# 九州横断自動車道関係
# 埋蔵文化財調査報告

## — 50 —

朝倉郡朝倉町所在中妙見遺跡の調査

原の東遺跡の調査Ⅰ

1998

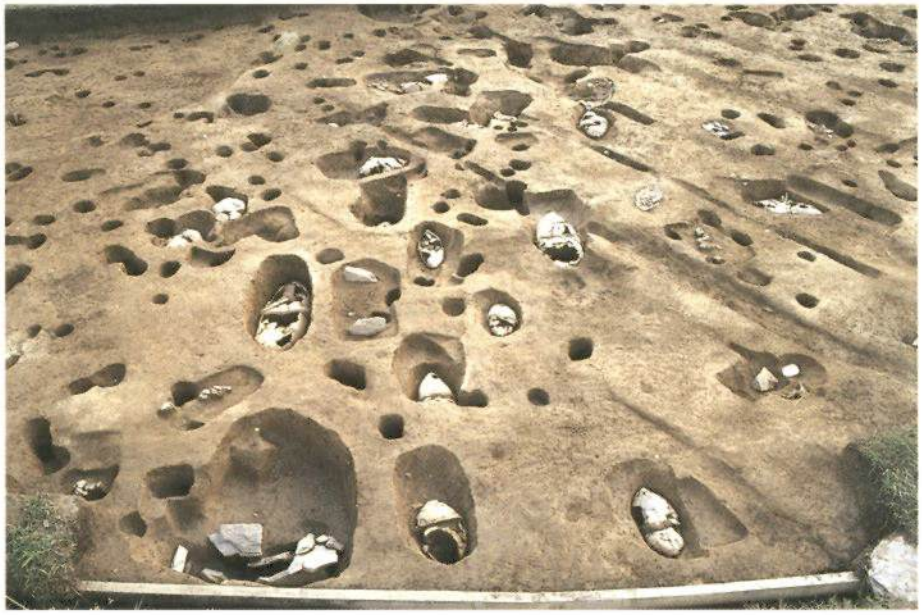
福岡県教育委員会

# 九州横断自動車道関係
# 埋蔵文化財調査報告

— 50 —

朝倉郡朝倉町所在中妙見遺跡の調査

原の東遺跡の調査 I



原の東遺跡Ⅰ区の弥生時代墓地群

# 序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和58・62年度に実施した九州横断自動車道建設に伴う、朝倉郡朝倉町所在の中妙見遺跡、原の東遺跡についての埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

九州横断自動車道関係の発掘調査は昭和63年度に完了し、平成２年３月10日には朝倉日田間が開通し、現在では全線開通していますが、出土文化財資料の整理は継続実施して、報告書も順次刊行する予定です。

調査に際しましては、地元の方々をはじめ関係各位のご協力をいただき、多大な成果をあげることができました。深く感謝いたします。

なお、本書が文化財愛護思想の普及、学術研究に役立つことを望みます。

平成10年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光　安　常　喜

# 例　言

1　本書は、昭和58・62年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて実施した、九州横断自動車道建設によって破壊される埋蔵文化財の発掘調査の報告書で、九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告の50冊目にあたる。

2　出土遺物は、県文化課甘木事務所・太宰府事務所および九州歴史資料館において整理したが、実施にあたり九州歴史資料館の横田義章と岩瀬正信・塩足里美らの協力を得た。

3　掲載写真のうち、遺構写真は各調査担当者が撮影し、遺物写真撮影には九州歴史資料館の石丸洋と北岡伸一の協力を得た。また、航空写真の一部は国土地理院提供の写真を使用した。

4　挿図のうち、遺構図は各調査担当者と小田和利・日高正幸・武田光正・狐塚省三が実測し、遺物図は小池史哲と、岡由美子・棚町陽子・田中典子・久富美智子・坂田順子・堀江圭子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久美子・山本千鶴美・岡泰子が実測した。また図面の浄書には、塩足里美・秋吉邦子・江口佳子の助力を得た。

5　挿図で使用する方位は新平面直角座標系IIの座標北を使用した。

6　本書の執筆は、Vを佐々木隆彦、IV－2（2・3）を小田が分担し、他は小池が担当した。なお、編集は小池が担当した。

# 本 文 目 次


Ⅰ　調査の経過 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 8

Ⅲ　中妙見遺跡の調査 …… 11

1　はじめに …… 11

2　遺構と遺物 …… 12

3　おわりに …… 19

Ⅳ　原の東遺跡Ⅰ区の調査 …… 21

1　はじめに …… 21

2　弥生時代墓地群の調査 …… 21

（1）　甕棺墓 …… 21

（2）　石棺墓 …… 64

（3）　木棺墓 …… 66

（4）　土壙墓 …… 68

3　弥生時代生活遺構の調査 …… 71

（1）　住居跡 …… 71

（2）　袋状竪穴・方形竪穴 …… 73

（3）　土器溜まり …… 76

（4）　土　坑 …… 78

4　その他の弥生時代以降の遺構と遺物 …… 84

5　縄文時代の遺構と遺物 …… 96

6　おわりに …… 110

Ⅴ　原の東遺跡Ⅳ区の調査 …… 113

1　はじめに …… 113

2　遺跡の概要 …… 113

3　遺構と遺物 …… 115

1　竪穴住居跡 …… 115

2　溝状遺構 …… 116

3　出土遺物 …… 117

4　おわりに …… 119

# 図 版 目 次


巻頭図版　原の東遺跡Ⅰ区の弥生時代墓地群

本文対照頁

図版1　中妙見・原の東遺跡周辺航空写真（国土地理院提供　KU-76-2X C11-35）……8
2-1　中妙見・原の東遺跡遠景航空写真（南西上空から）……8
-2　中妙見遺跡遠景（長島遺跡から）……11
3-1　中妙見遺跡調査区全景（西から）……11
-2　中妙見遺跡調査区全景（東から）……11
4-1　1号住居跡（南から）……12
-2　2号住居跡（南から）……14
-3　1号竪穴遺構（南から）……15
5-1　1号建物跡（西から）……18
-2　2号建物跡（南から）……18
6　出土土器・石製品……13
7-1　原の東遺跡Ⅰ区全景（東から）……21
-2　Ⅰ区弥生時代墓地群（西群、北から）……21
8-1　1号甕棺墓（南東から）……21
-2　2号甕棺墓（西から）……21
-3　2号甕棺墓（東から）……25
9-1　3号甕棺墓（東から）……25
-2　4号甕棺墓（南東から）……28
-3　5号甕棺墓（東から）……30
10-1　5号甕棺墓（西から）……30
-2　被下甕除去後の5号甕棺墓（東から）……30
-3　6号甕棺墓（西から）……33
11-1　7号甕棺墓（東から）……33
-2　8号甕棺墓（北西から）……35
-3　8号甕棺墓近景（北西から）……35
12-1　9・10号甕棺墓（南から）……36
-2　9号甕棺墓（北から）……36
-3　10号甕棺墓（西から）……36

図版13-1　11号甕棺墓（南から）……38
-2　被上甕除去後の11号甕棺墓（南から）……38
-3　12号甕棺墓（南から）……41
14-1　被上甕除去後の12号甕棺墓（南から）……41
-2　13号甕棺墓（南東から）……41
-3　13号甕棺墓（北東から）……41
15-1　14号甕棺墓（南東から）……44
-2　15号甕棺墓（北西から）……48
-3　16・17号甕棺墓（南から）……48
16-1　17号甕棺墓（南から）……49
-2　18号甕棺墓（西から）……50
-3　19号甕棺墓（南西から）……52
17-1　20号甕棺墓（西から）……54
-2　21号甕棺墓（東から）……56
-3　22号甕棺墓（南東から）……56
18-1　23号甕棺墓（北西から）……57
-2　24号甕棺墓（北から）……61
-3　25号甕棺墓（西から）……61
19-1　26号甕棺墓（南東から）……63
-2　26号甕棺墓（北東から）……63
20　1～3号甕棺使用土器……21
21　4・5号甕棺使用土器……28
22　6～9号甕棺使用土器……33
23　10～12号甕棺使用土器……37
24　13～15号甕棺使用土器……44
25　16～18号甕棺使用土器……48
26　19～21号甕棺使用土器……52
27　23～25号甕棺使用土器……61
28　22・26号甕棺使用土器……57
29-1　1号石棺墓（南東から）……64
-2　2号石棺墓（西から）……66
-3　3号木棺墓（北から）……68
30-1　1号木棺墓（東から）……66

図版30-2　1号木棺墓（西から）……66
-3　2号土壙墓（北から）……68
31-1　1号袋状竪穴（南東から）……73
-2　袋状竪穴・土器溜まり・土坑出土土器……74
32　大溝出土土器1……84
33　大溝出土土器2……84
34　大溝・ピット・包含層出土土器……81
35-1　包含層出土土器・土製品・鉄滓……92
-2　調査風景……21
36-1　1号埋甕……96
-2　埋甕使用土器……96
-3　方形土坑出土縄文土器……97
37　円形土坑出土縄文土器……97
38　包含層出土縄文土器……102
39　出土石器1……106
40　出土石器2・土偶……109
41-1　原の東遺跡俯瞰……113
-2　IV区全景……113
42-1　7号竪穴住居跡（南から）……115
-2　8号竪穴住居跡（南から）……116
43-1　9号竪穴住居跡（南から）……116
-2　溝3（北から）……116
44　IV区出土遺物……117

# 挿 図 目 次


第１図　九州横断自動車道関係路線図（1/780,000）…… 2
第２図　中妙見遺跡・原の東遺跡周辺地形図（1/10,000）…… 6
第３図　中妙見遺跡・原の東遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000）…… 9
第４図　中妙見遺跡周辺地形図（1/2,000）……11
第５図　中妙見遺跡遺構配置図（1/300）……12
第６図　１・２号住居跡実測図（1/60）……13
第７図　１・２号住居跡出土土器実測図（1/3）……14
第８図　１号竪穴遺構実測図（1/60）……15
第９図　竪穴遺構等出土土器実測図（1/3）……16
第10図　１・２号建物跡実測図（1/60）……17
第11図　１号柵列状遺構実測図（1/60）……18
第12図　出土石製品実測図（1/2）……19
第13図　原の東遺跡周辺地形図（1/2,000）……22
第14図　Ⅰ区弥生時代墓地群（西群、1/100）……23
第15図　１～５号甕棺墓実測図（1/30）……24
第16図　１・３号甕棺使用土器実測図（1/6）……26
第17図　２号甕棺使用土器実測図（1/6）……27
第18図　４・６号甕棺使用土器実測図（1/6）……29
第19図　５号甕棺使用土器実測図（1/6）……30
第20図　Ⅰ区弥生時代墓地群（東群、1/100）……31
第21図　６～10号甕棺墓実測図（1/30）……32
第22図　７～９号甕棺使用土器実測図（1/6）……34
第23図　７号甕棺墓付近出土土器実測図（1/4）……35
第24図　10・25号甕棺使用土器実測図（1/6）……37
第25図　11～13号甕棺墓実測図（1/30）……39
第26図　11号甕棺使用土器実測図（1/6）……40
第27図　12・15号甕棺使用土器実測図（1/6）……42
第28図　13号甕棺使用土器実測図（1/8）……43
第29図　14～17号甕棺墓実測図（1/30）……45
第30図　14・16・23号甕棺使用土器実測図（1/6）……46

第31図　14号甕棺墓墓壙出土土器実測図（1/4）……47
第32図　17号甕棺使用土器実測図（1/6）……50
第33図　18～21号甕棺墓実測図（1/30）……51
第34図　18・19号甕棺使用土器実測図（1/6）……53
第35図　19号甕棺墓墓壙出土土器実測図（1/4）……54
第36図　20・21号甕棺使用土器実測図（1/6）……55
第37図　22号甕棺墓実測図（1/30）……57
第38図　22・26号甕棺上甕使用土器実測図（1/8）……58
第39図　22・26号甕棺下甕使用土器実測図（1/8）……59
第40図　23～25号甕棺墓実測図（1/30）……60
第41図　24号甕棺使用土器実測図（1/6）……62
第42図　26号甕棺墓実測図（1/30）……64
第43図　1・2号石棺墓実測図（1/30）……65
第44図　石棺墓・木棺墓出土土器実測図（1/4）……66
第45図　1～3号木棺墓実測図（1/30）……67
第46図　1～3号土壙墓実測図（1/30）……69
第47図　4号土壙墓実測図（1/30）……70
第48図　4号土壙墓出土土器実測図（1/4）……70
第49図　1号住居跡実測図（1/60）……72
第50図　1号住居跡出土土器実測図（1/4）……73
第51図　1・2号袋状竪穴実測図（1/30）……73
第52図　1・2号袋状竪穴出土土器実測図（1/4）……74
第53図　方形竪穴実測図（1/40）……75
第54図　方形竪穴出土土器実測図（1/4）……75
第55図　1・2号土器溜まり遺構実測図（1/30）……76
第56図　1・2号土器溜まり遺構出土土器実測図（1/4）……77
第57図　1～5号土坑実測図（1/30・1/60）……79
第58図　1～5号土坑出土土器実測図（1/4）……80
第59図　ピット出土土器実測図（1/4）……82
第60図　大溝断面土層実測図（1/60）……84
第61図　大溝出土土器実測図1（1/4）……85
第62図　大溝出土土器実測図2（1/3）……87
第63図　大溝出土土器実測図3（1/6）……88

第64図　大溝出土土器実測図４（1/3）……90
第65図　大溝出土土器実測図５（1/3）……91
第66図　土製品実測図１（1/2）……92
第67図　調査区南壁土層実測図（1/60）……93
第68図　包含層出土土器実測図（1/4）……94
第69図　ピット出土土器実測図（1/3）……95
第70図　土製品実測図２（1/2）……95
第71図　１号埋甕実測図（1/30）……96
第72図　１号埋甕使用土器実測図（1/3）……96
第73図　方形土坑実測図（1/30）……97
第74図　円形土坑実測図（1/30）……97
第75図　方形土坑出土土器拓影（1/3）……98
第76図　円形土坑出土土器拓影１（1/3）……99
第77図　円形土坑出土土器拓影２（1/3）……100
第78図　円形土坑出土土器拓影３（1/3）……102
第79図　包含層出土縄文土器拓影１（1/3）……103
第80図　包含層出土縄文土器拓影２（1/3）……104
第81図　縄文時代の石器実測図１（1/3）……107
第82図　縄文時代の石器実測図２（1/3）……108
第83図　縄文時代の石器実測図３（1/1・1/2）……109
第84図　土偶実測図（1/2）……109
第85図　原の東遺跡IV区遺構配置図（1/200）……114
第86図　７号・８号竪穴住居跡実測図（1/60）……115
第87図　９号竪穴住居跡実測図（1/60）……116
第88図　IV区出土土器実測図１（1/3）……117
第89図　IV区出土土器実測図２（1/3）……118
第90図　IV区出土土器実測図３（1/3）……119

# 付　図　目　次

付図１　原の東遺跡西部（Ⅰ・II・IV区）遺構配置図（1/200）

# 表 目 次

表１　原の東遺跡Ｉ区弥生時代の墓地一覧表 ……111

# I　調査の経過

**発掘調査の経過**

中妙見遺跡の調査は昭和58年６月１日から同年６月８日の間に実施した。また、原の東遺跡の第１次調査は、昭和58年９月７日から昭和58年10月27日まで実施した。

道路公団側では、朝倉工事区で山田採土場から平野部の本線工事部分に盛土するための土砂搬出のためのパイロット道路（工事専用仮設道路）開通を急いでいた。この道路は、本線外の部分を使用する部分や、既設農道を拡幅する部分もあったが、用地外部分などで試掘調査の結果、文化財での支障は殆どないとされていた。

文化財側では、長島遺跡の全面調査が進行中で、山田採土場での予備調査も進めていて、パイロット道路のために長島遺跡では北側部分の調査を先行させているという状況であった。調査日誌をもとに、今回報告分の中妙見遺跡と原の東遺跡に係わる経過を振り返ると、

６月１日（水）　長島遺跡の東側にある中妙見遺跡部分ではパイロット道路部分が文化財試掘後に掘削工事されていたが、残された部分に遺構の存在が予想され、表土を剝いだところ、住居跡などが発見されたので、長島遺跡と並行して発掘調査を実施した。

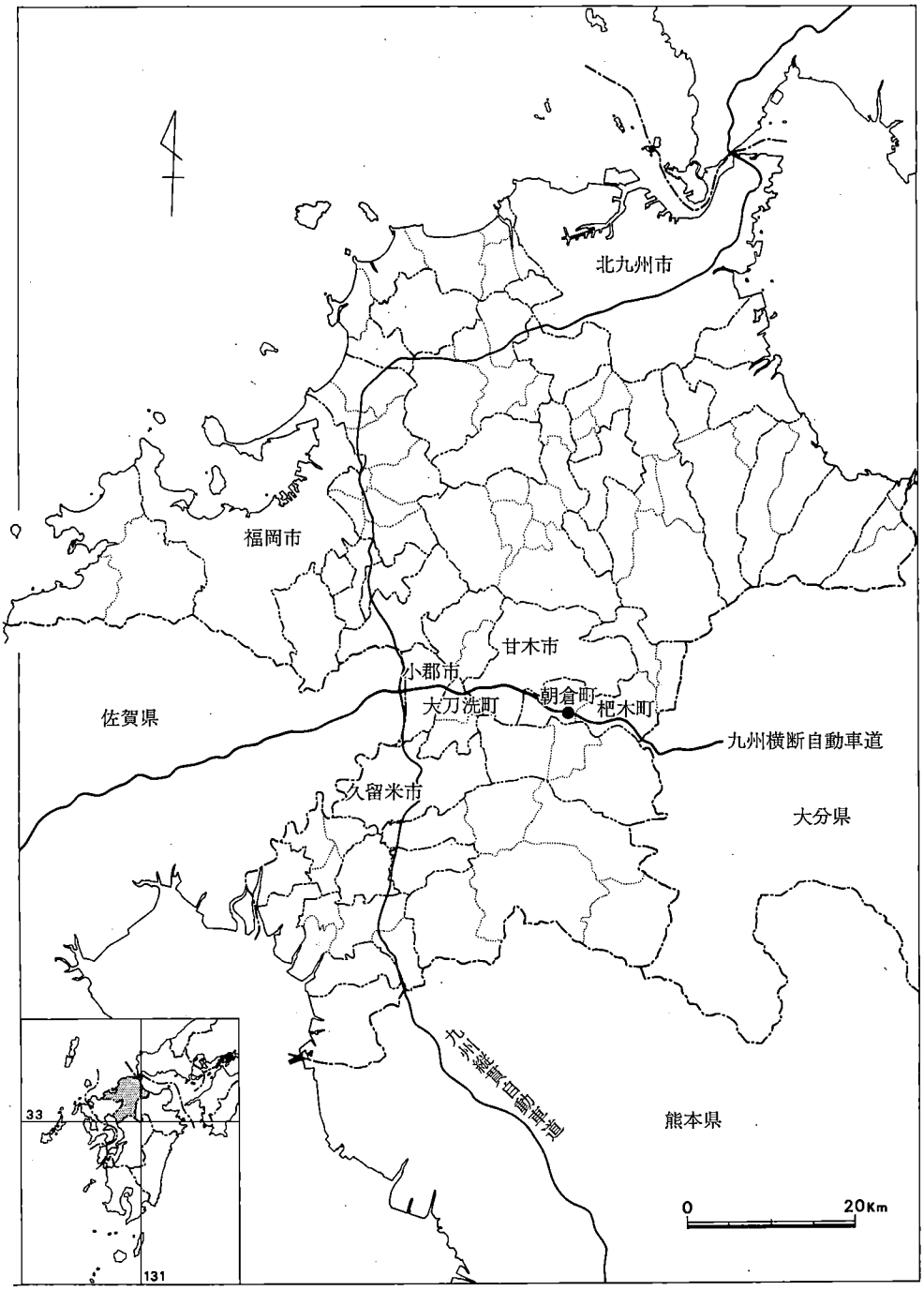
６月11日（土）パイロット工事部分で掘削される予定の、第29地点の西端から県道の間の崖に近い部分について、工事施工業者の塩見組から文化財での支障についての確認があったため、塩見組使用のバックフォーを用いて崖の上の平坦面を試掘調査したところ、弥生土器を含む遺構が発見されたために調査を要する旨報告し、協議して長島遺跡を優先させながら全面調査することとなった。

７月19日（火）第29地点を原の東遺跡として、遺構の広がりなどを明確にするため、23日までの間に表土を除去したが、甕棺墓群、溝状遺構などが発見され、弥生時代と古墳時代の遺跡で、密度も濃いことが明確になった。

長島遺跡の調査も、古墳時代から奈良時代にかけての集落で密度が濃く、調査に手間取っていたが、お盆休みのための点検中の塩見組担当者から、本線外の工事用道路工事部分で土器片などが出土しているとの連絡があり、８月17日～19日の間に鎌塚西遺跡を緊急に発掘調査したが、諸般の事情で、表土除去済みながらも、原の東遺跡の調査本格化までに時間を要した。

９月７日（水）長島遺跡は調査中であったが、作業員の半数を原の東遺跡に投入できることになり、発掘機材を搬入して遺構検出作業を開始した。

９月８日（木）塩見組担当者から、工事用道路取り付け部分で石棺墓が発見されて人骨が見えている旨の連絡が入り、現地踏査したが、石棺系の竪穴式石室であり、これも緊急に発掘調




**第1図**　九州横断自動車道関係路線図（1/780,000）

査する必要があったため、長島遺跡、原の東遺跡調査と並行して、この小松原堤古墳を13日～20日の間に発掘調査した。

9月9日（金）長島遺跡、柿原遺跡群、薬師堂遺跡などの調査中の遺跡と、横断道路線内の調査予定地点を、ヘリコプターに搭乗して航空写真撮影する。

9月26日～28日　台風接近

10月3日（月）長島遺跡C地区の調査が終了し、原の東遺跡の調査に専念できる。

10月6日（木）甕棺墓のほか石棺墓や木棺墓も存在することが明らかになり、墓地群の北側が崖端側に広がる可能性もあり、農道脇の水路まで部分拡張する。

10月14日（金）原の東遺跡I区の全景写真撮影

10月20日（木）小郡工事区で鳥栖インターチェンジに隣接する水田部分での調査が渇水期に行う必要があり、小郡正尻遺跡への調査体制が要求されていた。原の東遺跡では、調査面積の割に日数を要し、土曜日・日曜日返上で調査にあたっていたが、道路公団側との協議で、10月下旬には原の東遺跡を終了させて、小郡正尻遺跡の調査に入ることとなった。

10月23日（日）実測作業を進め、甕棺墓群の中で最も大きな26号甕棺墓を発見し、これを掘り下げ始める。

10月27日（火）26号甕棺墓の実測・収納作業が終了。縄文時代の遺構・遺物も存在することから調査区南端に設定していた、下層試掘トレンチの土層実測などの実測作業も終了。機材を撤去・搬出して、原の東遺跡I区の現地調査を終了する。

昭和62年度の、原の東遺跡IV区に係わる調査経過は、Vを参照されたい。

なお、原の東遺跡は、全体面積が10,000㎡を越していて、遺構・遺物の存在も濃厚であったために、長期間の調査を必要とした。II～IV区は昭和62年6月から調査を開始して、丸1年間以上の期間を要し、翌63年度にも継続実施して、すべての調査を終了したのは昭和63年7月10日のことであった。

**遺物の整理**

原の東遺跡と中妙見遺跡の出土遺物整理は、土器・石器類を福岡県教育庁文化課甘木事務所と太宰府事務所、および九州歴史資料館復原室で、鉄製品等は九州歴史資料館保存科学室において昭和61年度以降に実施したが、報告書の作成年度は諸般の事情で平成9年度以降ということになった。平成9年度は、中妙見遺跡と、原の東遺跡のうち西端部のI区とIV区について報告する。

なお、残るII区・III区の調査成果については、次年度に報告する予定である。

**調査関係者**

昭和58年度と昭和62年度の調査関係者は下記のとおりである。

| | | 58 | 62 |
|---|---|---|---|
| 日本道路公団福岡建設局 | | | |
| | 局　長 | 今村　浩三 | 杉田　美昭 |
| | 次　長 | | 菱刈　庄二 |
| | 総務部長 | 落合　一彦 | 安元　富次 |
| | 管理課長 | 梅田　道人 | 森　宏之 |
| | 管理課長代理 | 野口　利夫 | 三野　徳博 |
| 日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所 | | | |
| | 所　長 | 乗松　紀三 | 風間　徹 |
| | 副所長 | 西田　功 | 西田　功 |
| | 〃　（技術担当） | 中村　義治 | 友田　義則 |
| | 庶務課長 | 松下　幸男 | 徳永　登 |
| | 用地課長 | 岩下　剛 | 松尾　伸夫 |
| | 工務課長 | 山口　宗雄 | 後藤　二郎彦 |
| | 小郡工事区工事長 | 友田　義則 | |
| | 甘木工事区工事長 | 猪狩　宗雄 | |
| | 朝倉工事区工事長 | 平沢　正 | 上野　満 |
| | 杷木工事区工事長 | 前田　雄一 | 小沢　公共 |
| 福岡県教育委員会 | | | |
| 総括 | 教育長 | 友野　隆 | 竹井　宏 |
| | 教育次長 | 安部　徹 | 大鶴　英雄 |
| | 管理部長 | 伊藤　博之 | |
| | 指導第二部長 | | 大平　岩男 |
| | 文化課長 | 藤井　功 | 窪田　康徳 |
| | 〃　課長補佐 | 中村　一世 | 平　聖峰 |
| | 課長技術補佐 | | 宮小路　賀宏 |
| | 〃　庶務係長 | 松尾　満 | 加藤　俊一 |
| | 〃　事務主査 | 長谷川　伸弘 | 竹内　洋征 |

| | | 58 | 62 |
|---|---|---|---|
| 調　査 | 文化課調査第２係長 | 栗原　和彦 | |
| | 調査班総括 | | 柳田　康雄 |
| | 技術主査 | | 井上　裕弘 |
| | 〃 | | 木下　修 |
| | 〃　主任技師 | 児玉　真一 | 中間　研志 |
| | 〃 | 新原　正典 | 佐々木　隆彦 |
| | 〃 | 中間　研志 | 伊崎　俊秋 |
| | 〃 | 佐々木　隆彦 | |
| | 〃 | 小池　史哲 | |
| | 〃　技　師 | | 小田　和利 |
| | 〃　文化財専門員 | | 木村　幾多郎 |
| | 〃　臨時職員 | | 日高　正幸 |
| 調査補助員 | | 高田　一弘 | 高田　一弘 |
| | | 日高　正幸 | 武田　光正 |
| | | 小田　和利 | |
| | | 高山　浩一 | |

中妙見遺跡・原の東遺跡にかかわる昭和58年度の発掘調査は、栗原と新原・小池が担当し、日高・小田・高山が補助した。一方、昭和62年度に実施した原の東遺跡第２次発掘調査は木下・佐々木が担当した。

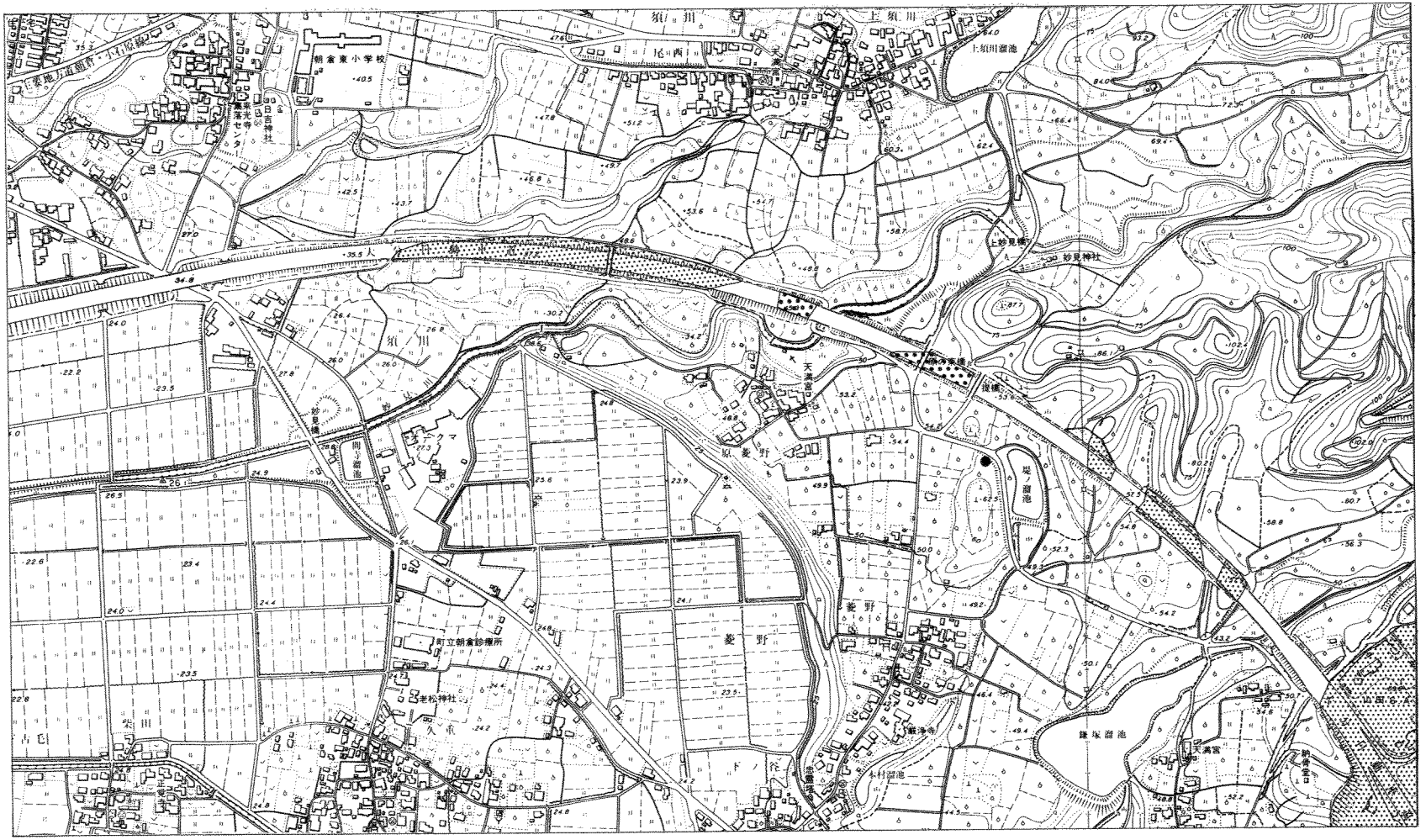
昭和58・62年度の発掘作業には次の方々が参加された。

天野ヨシエ　岩下キヨ子　岩下シノブ　岩下スミ子　岩下タマエ　岩下チヅ子
岩下テル子　岩下トミ子　岩下　陽子　岩下ヨシ子　岩下ヤナエ　半田　久子
半田　松子　星野ミエ子　星野美代子　星野百合子　星野　禮子　松尾テル子
池田　和博　古賀　勇　吉橋　秀美　田村　伸一　本松　真一　原野　昌伸
堀尾　孝之　狐塚　省三

また、朝倉町役場建設課の古賀隆信氏、工事施工業者の塩見組からは種々の協力を得た。

**報告書作成時の関係者**

本書作成にかかわる、平成９年度の関係者は次のとおりである。




**第2図**　中妙見遺跡・原の東遺跡周辺地形図（1/10,000）

日本道路公団九州支社

| | | |
|---|---|---|
| | 支社長 | 藤波　督 |
| | 調達用地部長 | 田中　慎二郎 |
| | 管理課長 | 松尾　俊昭 |
| | 管理課長代理 | 酒井　正弘 |
| | 担当 | 渡　宏之 |
| | 日田工事事務所長 | 藤木　和啓 |
| | 日田工事事務所庶務課長 | 大野　誠治 |

福岡県教育委員会

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 教育長 | 光安　常喜 |
| | 教育次長 | 松枝　功 |
| | 指導第二部長 | 竹若　幸二 |
| | 文化課長 | 石松　好雄 |
| | 参事兼文化財保護室長 | 柳田　康雄 |
| | 課長補佐 | 城戸　秀明 |
| | 課長技術補佐兼保護室長補佐 | 井上　裕弘 |
| | 参事補佐兼保護室調査班総括 | 橋口　達也 |
| 庶務 | 参事補佐兼管理係長 | 黒田　一治 |
| | 管理係事務主査 | 鶴我　哲夫 |
| 整理 | 九州歴史資料館参事補佐 | 佐々木　隆彦（執筆担当） |
| | 京築教育事務所参事補佐 | 小池　史哲（　〃　） |
| | 南筑後教育事務所技術主査 | 小田　和利（　〃　） |
| | 文化課整理指導員 | 岩瀬　正信 |
| | 〃 | 北岡　伸一 |

出土遺物の整理は、九州歴史資料館と文化課太宰府事務所・甘木事務所で行ったが、土器類の水洗・接合・復原には小島佐枝子・中塩屋リツ子・石井紀美子・藤井カオル、有馬信子・植山洋子・奥村千恵子・鬼木美知子・栗栖絹子・平石史子、土器類の実測作業には、棚町陽子・田中典子・堀江圭子・藤原さとみ・坂田順子・久富美智子・堀之内久美子・江口幸子・山本千鶴美・古田美穂、遺構図等の整理・浄書には塩足里美・秋吉邦子・江口佳子・渡辺輝子・木村康子・吉永真砂子、鉄製品の保存処理には九州歴史資料館の横田義章学芸第二課長などの協力を得た。このほかにも発掘作業・報告書作成作業を通じて、多くの方々の協力をうることができた。感謝に耐えない。

# II　位置と環境

中妙見（Nakamyoukenn）遺跡は、福岡県朝倉郡朝倉町大字須川字中妙見と一部下妙見に所在する。遺跡の東側は大字菱野との境にもなる妙見川が流れ、妙見川は遺跡の南側を廻って西南側に向かうが、小さく浅い谷を距てた西側には長島遺跡が位置する。

原の東（Harunohigashi）遺跡は、朝倉町大字菱野字原の東と一部楠平に所在する。中妙見遺跡とは、妙見川を挟んで対峙する位置にあり、東側では妙見古墳群や小松原堤遺跡に隣接する。

中妙見遺跡・原の東遺跡は、朝倉山塊から派生する中位段丘の先端部に立地していて、先端での標高48.0m、原の東遺跡の高所で標高60.2mを測る。大分自動車道建設に先立つ発掘調査を実施した部分は遺跡の一部であろうが、この辺りの遺跡は広範囲に拡がっているものと推定される。両遺跡周辺の南側は筑後川が形成した段丘崖であり、眼下に筑後川の平坦面と国道386号線を望むことができる。この段丘は妙見川などの小河川の浸蝕による開析谷が刻まれ、両遺跡の脇では比高が10mを越している。

以前はこの崖の縁などに櫨の木が多数植えられていたといわれるが、調査時には南側崖部分で栗・銀杏の木など、開析谷側の崖では孟宗竹がめだち、遺跡部分の平坦面では以前は蜜柑・葡萄栽培が盛んだったが、柿栽培と早生キャベツなどの蔬菜栽培も盛んに行われていた。

**歴史的環境**

朝倉町周辺では、斉明天皇の朝倉廣庭宮推定地の問題などから古代遺跡に対する関心は高く、古くから遺跡・遺物が注目・紹介されてきた。加えて、九州横断自動車道建設に伴う発掘調査は、長大な範囲での遺跡・遺物群を露出させることとなった。さらに、道路交通網の整備などから派生した種々の開発に伴う発掘調査も増加している。これらを資料をもとに周辺の歴史的環境についてみることにしよう。

旧石器時代遺跡は、原の東遺跡でナイフ形石器などの出土する包含層が検出されているが、朝倉町山の神遺跡・上の宿遺跡でもナイフ形石器が出土し、約21000年前のAT火山灰の降下の痕跡もある。

縄文時代では、原の東遺跡・金場遺跡・上の宿遺跡で早期の石組炉跡・集石遺構が発見されている。押型文土器などの出土は甘木市・朝倉町・杷木町の路線内遺跡の過半数でみとめられるような状況であり、筑後川対岸の水縄山麓部の遺跡からも出土している。前期の遺構・遺物は金場遺跡・上の宿遺跡・稗畑遺跡・外之隈遺跡・杷木町天園遺跡などから、中期は上の宿遺跡・稗畑遺跡などでみられる。後期の例は上の宿遺跡・稗畑遺跡・杷木町中町裏遺跡・上池田

**第3図**　中妙見遺跡・原の東遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000．朝倉町管内図を改変）

A　塔ノ上遺跡　B　大澤端遺跡　C　石成久保遺跡　D　中道遺跡　E　西法寺遺跡　F　大庭久保遺跡　G　上の原遺跡　H　狐塚南遺跡　I　治部ノ上遺跡
J　座禅寺遺跡　K　才田遺跡　L　長島遺跡　**M　中妙見遺跡**　**N　原の東遺跡**　O　妙見古墳群　P　鎌塚遺跡　Q　山ノ神遺跡　R　山田遺跡群
S　長田遺跡　T　金場遺跡　U　上ノ宿遺跡　V　恵蘇山遺跡　W　神畑遺跡　X　大迫遺跡　Y　外之隈遺跡　Z　杷木宮原遺跡　a　中町裏遺跡
b　志波桑ノ本遺跡　c　志波岡本遺跡　d　江栗遺跡　e　鎌塚西遺跡　f　小松原堤古墳　1　金川中島田遺跡　2　石成古墳　3　上原遺跡　4　久保烏遺跡
5　宇土ノ上遺跡　6　狐塚古墳　7　八並遺跡　8　宮地嶽古墳群　9　宮地嶽前方後円墳　10　立野古墳群　11　宮野A古墳群　12　宮野B古墳群　13　長安寺古墳群
14　朝倉橘廣庭宮推定地　15　長安寺廃寺　16　小隈古墳群　17　上須川古墳群　18　山後山古墳群　19　山ノ神古墳群　20　山田古墳群　21　山田柳古墳群
22　奈良ヶ谷古墳群　23　麻底良城跡　24　志波宝満宮古墳　25　恵蘇八幡宮古墳群　26　山田ウラ山遺跡　27　鎌塚古墳　28　剣塚古墳　29　古毛遺跡

遺跡や、浮羽町柳瀬遺跡など水縄山麓部の遺跡や吉井町月岡古墳周辺からの出土がある。晩期の遺物も路線内の遺跡の多くから発見され、水縄山麓部の遺跡・吉井町塚堂遺跡など筑後川自然堤防上の遺跡からも出土している。

弥生時代には、初期の遺跡として支石墓4基や竪穴住居跡群などが発見された杷木町畑田遺跡がある。前期から後期の住居跡・貯蔵穴群は、中道遺跡・上の原遺跡・長島遺跡・原の東遺跡・鎌塚遺跡・長田遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡・吉井町大碇遺跡・鷹取五反田遺跡などで調査されているが、近年話題になった甘木市平塚川添遺跡は筑後川支流小石原川の氾濫原の微高地に立地する旧河川流路を利用した環壕遺跡だとされる。墓地では中期初頭～前半の木棺墓・甕棺墓が、大庭久保遺跡・上の原遺跡・原の東遺跡・上の宿遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡などで調査され、後期末前後の墓地の調査も、長島遺跡・外之隈遺跡・狐塚南遺跡・宇土ノ上遺跡などで実施された。

古墳時代では、朝倉町座禅寺遺跡・治部ノ上遺跡などで方形周溝墓が調査され、前期の墓地が中位段丘上に占地する。中期の大型古墳や前方後円墳は筑後川対岸の微高地などに、月岡古墳・塚堂古墳・日岡古墳などが築かれている。後期古墳は高位段丘縁などで古墳群を形成している。朝倉町山後山古墳群も最近調査された。

奈良・平安時代の集落は、筑後川右岸の中位段丘上の平坦面に位置する中道遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡・長島遺跡・鎌塚遺跡・長田遺跡などで調査された。大迫遺跡・杷木宮原遺跡・志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡では同一規模で主軸方向の共通する大型掘立柱建物跡群がみられ、朝倉橘廣庭宮に関わる可能性が考えられる。

中世の遺構では才田遺跡・長島遺跡・志波桑ノ本遺跡などがある。才田遺跡の土壙からは舶載陶磁器が多数出土している。

**中妙見遺跡・原の東遺跡の位置**

中妙見遺跡の位置は、新平面直角座標系IIのX＝42.000、Y＝－23.550地点付近の東西約50mに亘り、横断道基点からのSTANo. 204＋40～205＋40 の区間でもある。調査部分はこのうち480㎡である。なお、経緯度では、東経130°44′49″、北緯33°22′40″付近に相当する。

原の東遺跡は、X＝41.820、Y＝－23.190地点からX＝41.900、Y＝－23.420付近の東西約250mの範囲に亘り、横断道基点からのSTANo. 206＋80～209の区間でもある。調査部分は路線幅が45m程度あり約11000㎡であるが、調査がパイロット道路分と本線分などで実施時期が異なり、県道西側のパイロット道路分をⅠ区、県道から東側で町道原の東・木谷線との間をII区、町道原の東・木谷線より東側をIII区、県道より西側で、Ⅰ区北側の一段低い字楠平部分をIV区と便宜上区分する。原の東遺跡の今回報告箇所は、このうちⅠ区とIV区である。この辺りは、経緯度では、東経130°44′55″、北緯33°22′40″付近に相当する。

# Ⅲ　中妙見遺跡の調査

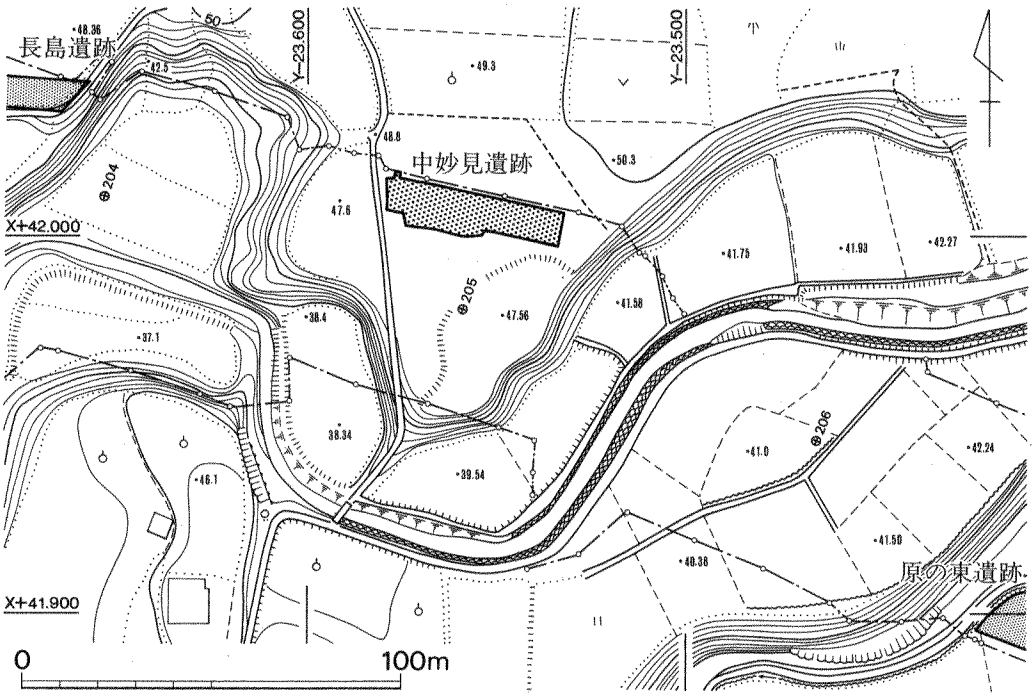
# III　中妙見遺跡の調査

## 1　はじめに

筑後川中位段丘上の緩傾斜地は、北側の朝倉山塊に源を発して流下する小河川で谷が刻まれる。この小河川の一つ妙見川は蛇行しながら長島遺跡との間を浸食していて、南側へ舌状に突出した部分が中妙見遺跡の占地する部分である。

この部分は、朝倉郡朝倉町大字須川字中妙見・下妙見の旧地番で1885・1886-1・-2・1919-2・1920～1922番地に該当し、横断道のSTA204＋40～STA205＋40部分、国土座標のX＝＋42000、Y＝－23550付近に相当する。

横断道関係文化財包蔵地の第28地点として当初から注意されていたが、工事用パイロット道路部分については事前の試掘調査によって遺構・遺物が発見されず、掘削工事された。しかし、掘削工事壁面に柱穴状ピットが現れ、土師器片なども幾らか発見された。このため、掘削の及んでいない用地北半部で再度試掘調査を実施したところ、遺構・遺物の存在が確認されたので、




**第4図**　中妙見遺跡周辺地形図（1/2,000）

北半部で町道中妙見線の西側の1886-1・-2番地部分を全面発掘調査することにした。

発掘調査区域は、既設の農道の確保と、安全面からの掘削壁面側での保全区域を残さざるを得ないなどの制約はあったものの、長さ48m、幅10m前後の約480m²に及ぶ範囲である。

調査は、昭和58年6月1日～6月8日の間に、当時、長島遺跡を調査中の文化課調査第2係長　栗原和彦、主任技師　小池史哲、調査補助員の日高正幸が担当して実施した。

調査区で発見された遺構は、

| | | | |
|---|---|---|---|
| 竪穴住居跡 | 2 | 掘立柱建物跡 | 2 |
| 土坑 | 1 | 竪穴遺構 | 1 |
| 柵状遺構 | 1 | 柱穴状ピット | |

などである。

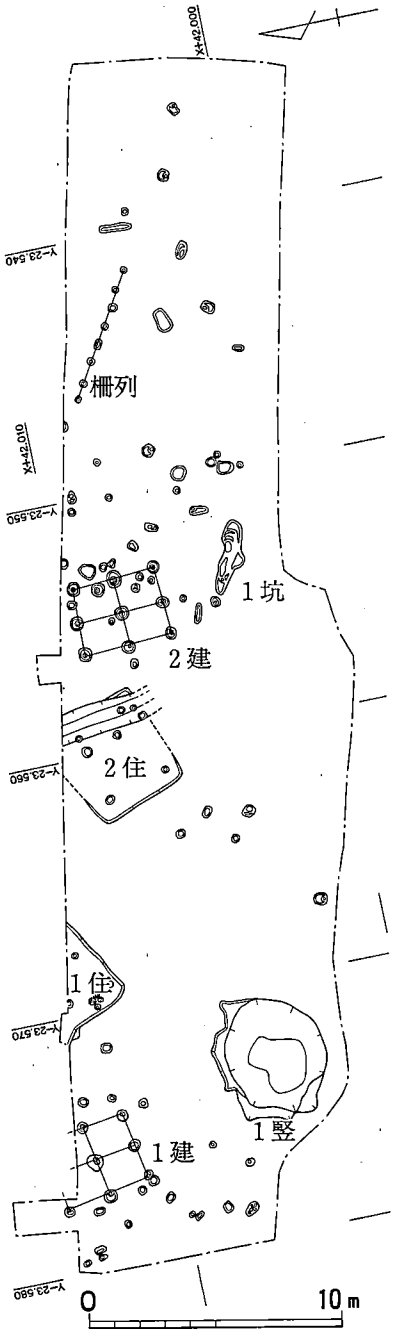
## 2　遺構と遺物

**1号住居跡**（図版4－1、第6図）

調査区北端部の西寄りに位置する住居跡で、半分以上が調査区域外に潜る。方形ないし長方形プランで、南隅はやや丸みをもつ。側壁は高さ0.1mも残らない程に削平され、南東辺の長さ3.4m、南西辺の長さ3.3m分を確認したが、調査区域内で東西の隅部を検出し得ない。主軸方向はN50°Eを向く。

住居跡中央部の硬化面直上で須恵器片などが出土した外には、明確な遺物出土をみない。住居跡内では、柱穴状ピットが7ヶ所発見され、いずれも直径20cm、深さ20～30cm規模のもので、隅部のピットと東側のピットが主柱穴になるものとみている。

南西辺の西寄りでは、掘り方の外側で焼土が発見され、ブロック状に黒色土に混じるもので、カマドの可能性もあるが、区域外まで少し拡張して確認しても遺




**第5図**　中妙見遺跡遺構配置図（1/300）

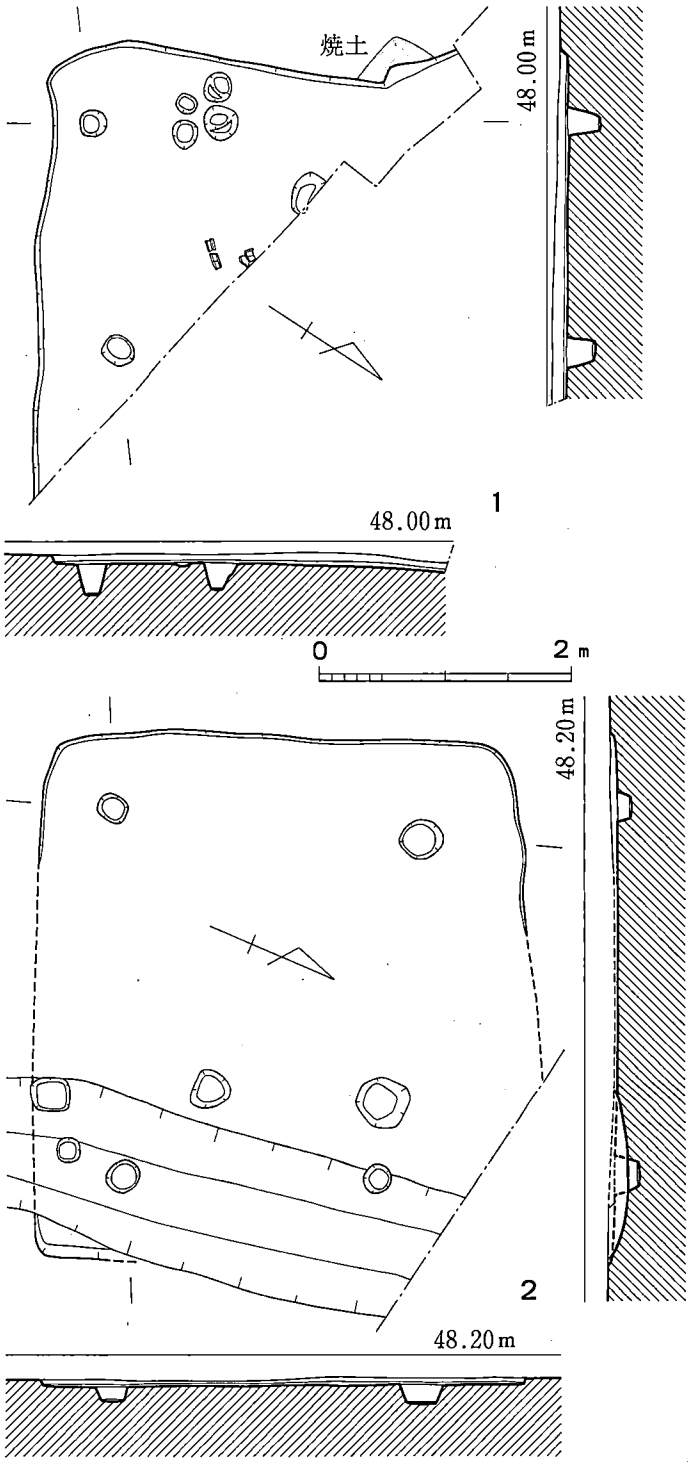
存状況が悪く、明確ではない。

出土土器（第７図）

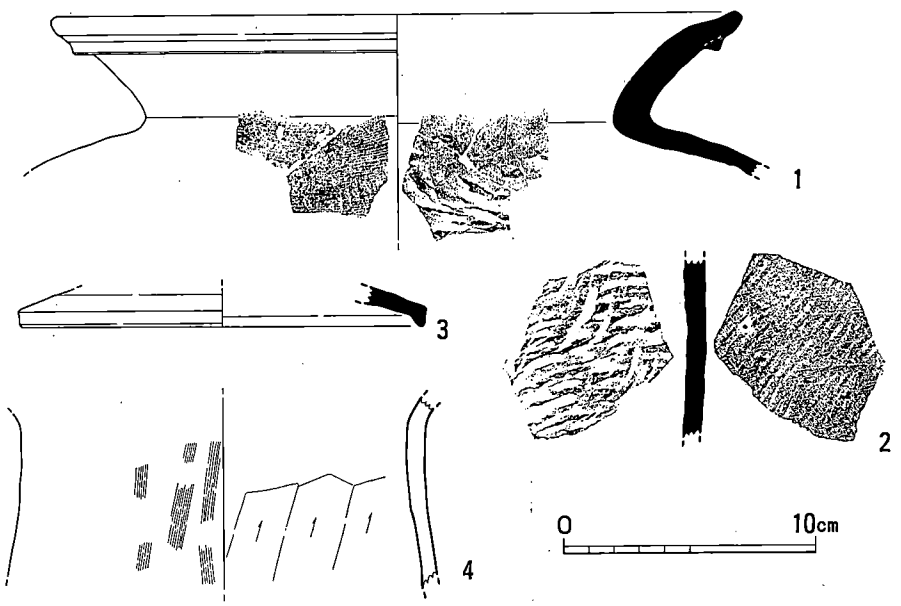
須恵器甕（１・２）

１は復原口径27.4cm、残存器高6.3cmの口縁部破片である。括れた頸部から口縁部が強めに外反して、口縁部は端部がやや上方に摘まれたような形状で、口唇端部は丸みをもつ。外面の口縁直下に断面三角形凸帯が巡る。胴部外面は平行叩き痕とナデ痕、内面は同心円当て具痕がみられ、口縁部内外面は回転ナデ調整される。胎土に細砂粒を含み、灰色ないし暗灰色に堅く焼成され、口縁部内面に灰かぶりがみられる。２は外面に平行叩き痕、内面に同心円当て具痕をもつ胴部破片。胎土には細砂粒を僅かに含み、灰色ないし淡灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯蓋（３） 復原口径16.0cmの、鳥嘴状のかえりを有する杯蓋片で、天井部は残ら




**第６図** １・２号住居跡実測図（1/60）




**第7図**　1・2号住居跡出土土器実測図（1/3）

ない。細砂粒を胎土に含み、灰色にやや堅く焼成されている。

**2号住居跡**（図版4－2、第6図）

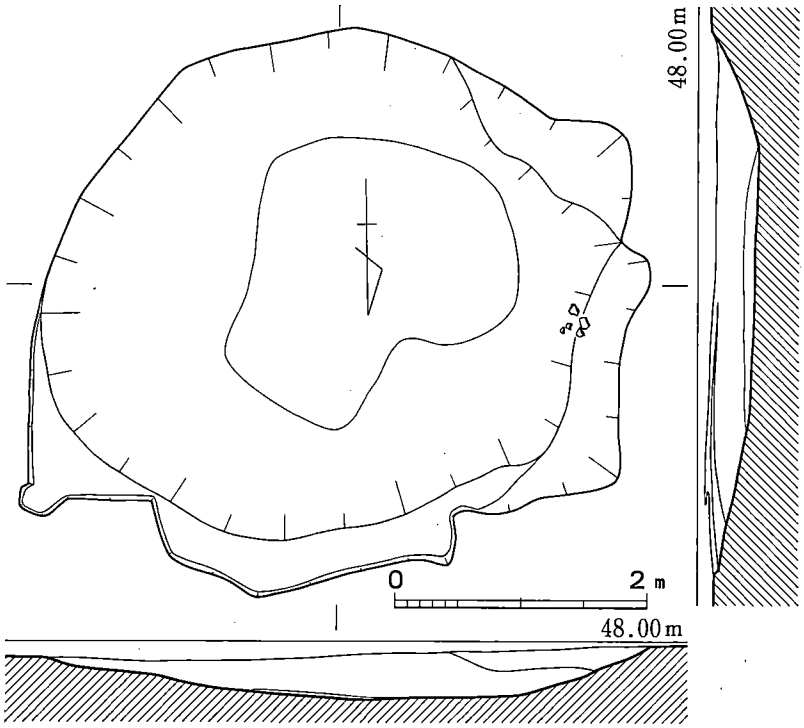
調査区北端部の中程で発見され、1号住居跡の約5m東南東に位置する、隅丸方形プランとみられる住居跡。北隅が調査区域外に潜り、近代の畦溝によって東部を削り取られるが、東西4.2m、南北3.8～3.9m程の広さを有し、主軸方向はN64°20′Eを向く。畑地開墾等による削平が激しく、周壁は高さ0.1mも残らない状態で、住居跡床面中央部の硬化面までの堆積土も極めて少ない。床面を掘り込む柱穴状ピットは7～8ヶ所発見され、いずれも直径20cm、深さ20～30cm規模だが、四隅に近い位置にあるピットが主柱穴であろう。

カマドも、北西辺・北東辺での削平が顕著なため明確にし得ないが、他の二辺側で確認されないため、北西辺か北東辺側に付設されていた可能性が高い。

土器などの遺物出土は極めて少ない。

出土土器（図版6、第7図）

土師器甕（4）　口縁端部と胴下半を欠く破片で、口縁部は緩やかに外反し、胴部は僅かに膨らむ。復原胴部径16.0cm前後の大きさの甕で、口縁部は肥厚するものと思われる。胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削りされる。胎土に石英・雲母・砂粒を含み、暗黄褐色に焼成されている。




**第8図**　1号竪穴遺構実測図（1/60）

**1号竪穴遺構**（図版4－3、第8図）

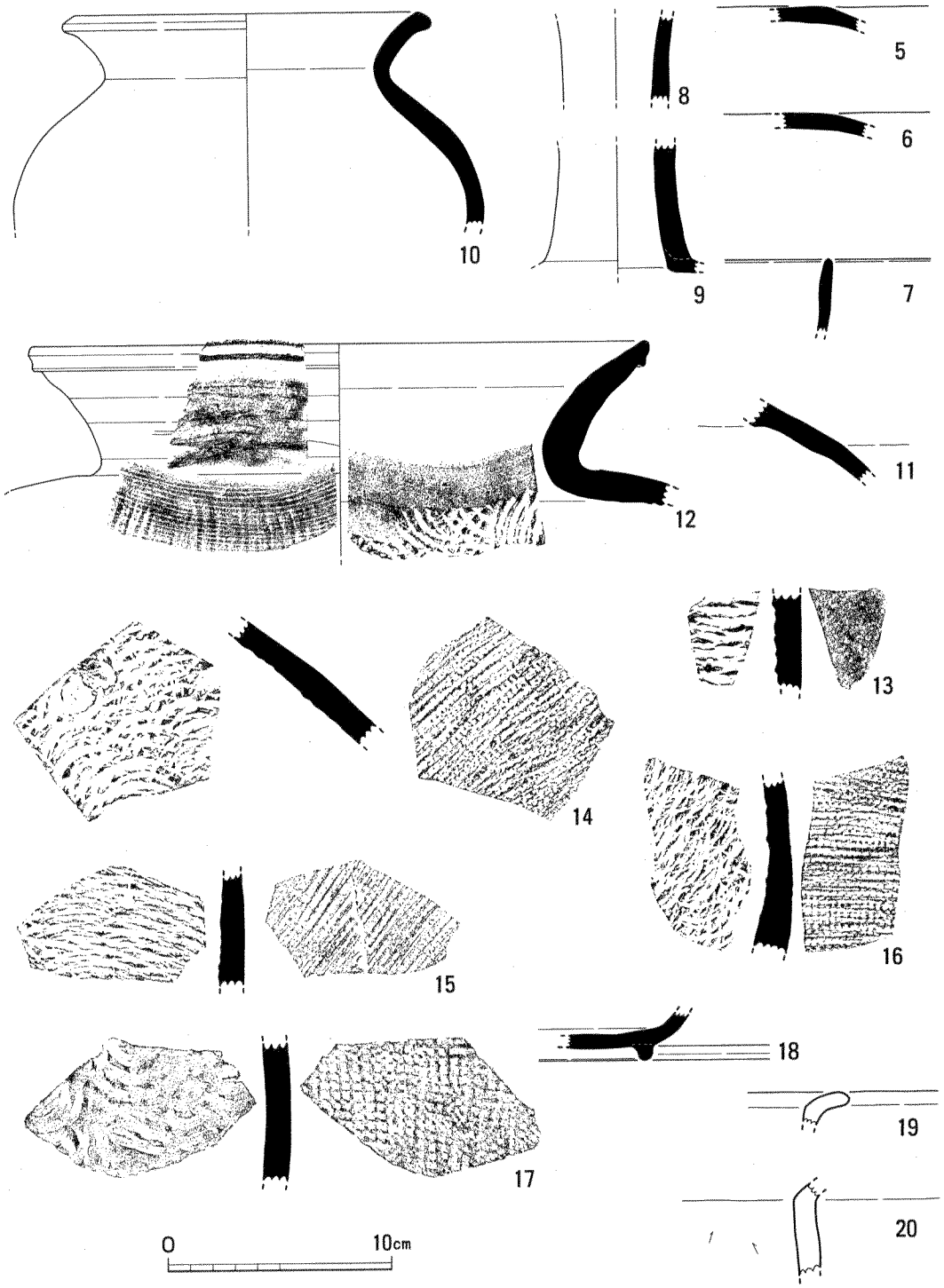
調査区西南隅部で発見された不整楕円形プランを呈する遺構で、黒色土が堆積していた。上縁では東西径4.8m、南北径4.4mを測る。周壁は極めて緩やかな傾斜で、中央部の深さは0.4m弱である。

出土土器（図版6、第9図）

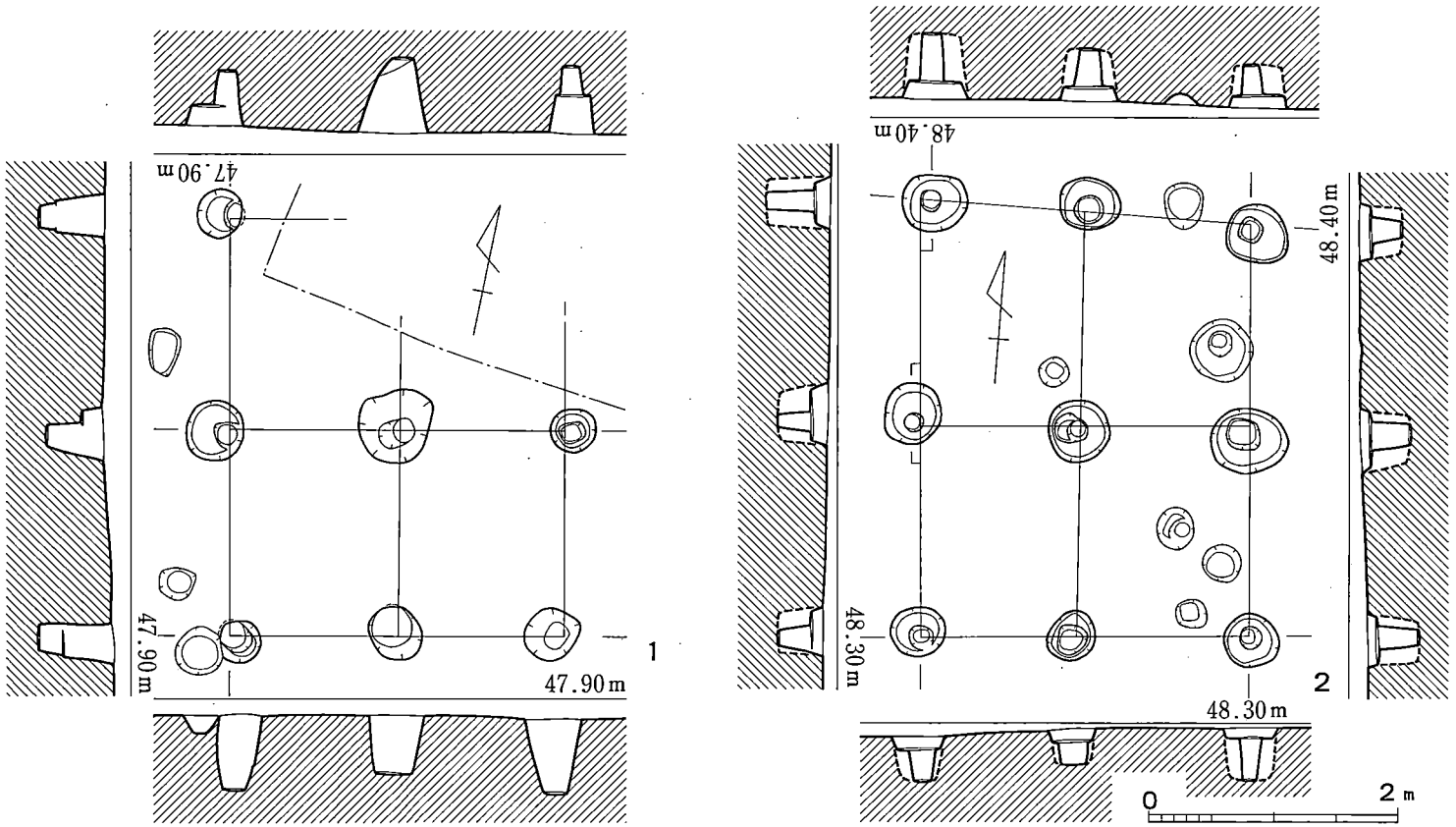
須恵器杯蓋（5・6）　ともに天井部破片で、口縁部などの状況は分からないが、別個体である。外天井は回転ヘラ削り調整される。胎土に細砂粒を含み、やや軟質に焼成され、灰色を呈する。

須恵器杯（7）　直に立ち上がる口縁部破片で、端部側はやや肥厚気味である。細砂粒を胎土に含み、緑灰色に堅く焼成される。

須恵器長頸壺（8・9）　ともに頸部破片だが別個体であろう。8は口縁部側、9は胴部に繋がる接合部で、内外面ともにナデおよび回転ナデ調整されている。胎土に細砂粒を含み、灰色に焼成される。




**第９図**　竪穴遺構等出土土器実測図（1/3）




**第10図**　1・2号建物跡実測図（1/60）

須恵器甕（10～17）　10・11は胴部内外面を回転ナデおよびナデ調整する甕で、壺に近い器形をなすものと思われる。10では復原口径15.4cm、残存器高9.5cm、胴最大径21.0cmの大きさ。口縁部は緩やかに外反し端部は肥厚気味。胴部はやや扁球状でなで肩である。胎土はともに細砂粒を含み、10は堅い焼成で淡灰色、11は軟質な焼成で茶灰色を呈する。

12は復原口径27.8cmの大きさの甕で、胴部へは大きく広がる。口縁部は緩やかに外反して端部はつまみ上げ気味ながらも外側に低い断面三角凸帯を巡らせる。胴部外面は平行叩き目とカキ目、内面は同心円当て具痕がみられる。胎土に細砂粒を含み、暗灰色に焼成される。

13～17は胴部破片で、外面に格子目叩き痕、内面に同心円当て具痕がみられ、13の外面には回転ナデ調整が加わる。13～16は平行叩き目に似た格子叩き目でが、17の叩き目は整然とした格子目をなす。いずれも細砂粒を胎土に含み、灰色ないし暗灰色に堅く焼成される。

**1号掘立柱建物跡**（図版5－1、第10図）

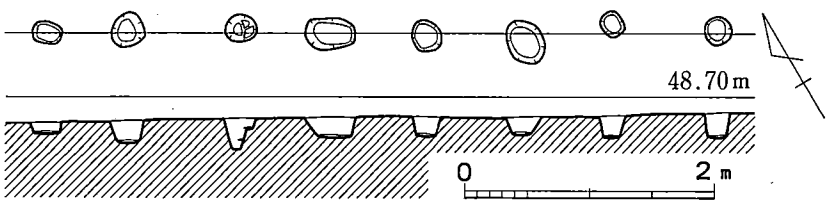
調査区北西隅部で発見され、一部が調査区域外に潜るものの、拡張トレンチでの状況からみて2×2間の総柱建物跡であることが明らかである。主軸方向はN11°30′Wを向き、南北の梁行3.4m、東西の桁行2.7mを測る。柱穴は直径40cm前後、深さ50～60cmに残り、中央の柱穴はやや径が大きい。柱穴からは何らの遺物も出土していない。

**2号掘立柱建物跡**（図版5－2、第10図）

調査区中央部の北側で発見された遺構で、2号住居跡の約2m東側に位置する。2×2間の総柱建物跡である。主軸方向N 2°Wを向き、ほぼ南北に近い梁行き3.45m、東西の桁行き2.64mを測る。柱穴は直径40～50cm、深さ30～50cmに残り、柱穴からは何らの遺物も出土しなかった。

**1号柵列状遺構**（図版3－2、第11図）

調査区の北東部で発見された遺構で、北側は調査区域外に潜る。主軸方向N58°40′Wを向き、8つの柱穴状ピットがほぼ等間隔に並ぶ。ピットは直径20cm前後、深さ20cm前後と掘立柱建物跡の柱穴に比して小振りで、堆積土もやや淡い色調を呈するが、どのピットからも遺物出




**第11図**　1号柵列状遺構実測図（1/60）

土は全くみられなかった。

### 1号土坑（第5図）

2号建物跡の約2m南側に位置する。長軸方向がN67°Wを向く不整楕円形プランの土坑である。長さ2.9m、幅0.7m、深さ0.3m強を測る。中央部で深く、西端部へはなだらかな傾斜をもつ。土師器小片が出土したものの図示しえない。

### その他の遺構と遺物

掘立柱建物跡および柵状遺構を構成する柱穴以外の柱穴状ピットでは、その性格を判断し得なかった。これらのピット出土の遺物もほとんどみられなかった。

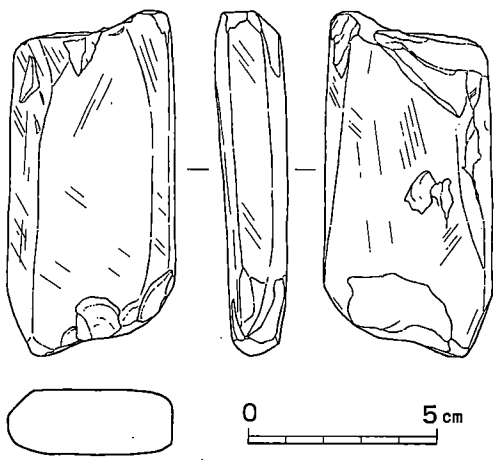
包含層出土土器（図版6、第9図）

須恵器杯身（18）　高台を有する杯身で、口縁部を欠き全体の形状は不明。底部端に四角形断面の高台が貼り付けられるが、磨滅して丸みをもつ。細砂粒を胎土に含み、軟質な焼成で灰色を呈する。

土師器甕（19・20）　19は強く外反する口縁部破片で、口縁部はさほど肥厚せず端部は丸みをもつ。胎土に細砂粒・石英・雲母を含み、橙褐色に焼成されている。20は頸部から胴部にかけての破片で、外面の一部にハケ目、内面にヘラ削り痕がみられる。胎土に細砂粒・石英・雲母を含み、橙褐色に焼成されている。

石製品（図版6、第12図）

砥　石　調査区西部の遺構検出面から出土した。長さ9.1cm、幅4.5cm、厚さ1.8cmの大きさの、扁平な硬砂岩製砥石で、各面とも砥面として利用されている。形状からみて、欠損した磨製石斧を再利用したものと思われる。重量127.4gを測る。




**第12図**　出土石製品実測図（1/2）

## 3　おわりに

中妙見遺跡では、調査区に残された遺構・遺物の量が僅かなため、遺跡の性格を十分に理解し得ない恨みもある。しかし、住居跡では1号住居跡出土土器に8世紀にかかる頃の須恵器杯蓋片を含んでいることから、この時期に住居跡が存在していた可能性は高い。また2軒の住居跡が重複する

ことなく、比較的近距離に位置して、主軸方位に極端な差をもたないことを考慮すれば、２軒の時期に大差のないことも想定しうる。一方、掘立柱建物跡は２棟ともに２間×２間の総柱建物跡であり、南北に近い方向に梁行を設定していることから、建物跡相互にも大きな時期差がないと考えることも可能である。竪穴遺構はその性格は分からないが、時期的には住居跡と同時期にみても差し支えのない資料が出土していて、これらの遺構が比較的近距離に配置するため、この遺構も時期的に近接あるいは同時期並行の可能性も有している。しかし、堆積土の異なる柵状遺構については時期が下降するものと思われる。

# 図　　版

中妙見・原の東遺跡周辺航空写真（国土地理院提供 KU-76-2X C11-35）

図版 2

1　中妙見・原の東遺跡遠景航空写真（南西上空から）

2　中妙見遺跡遠景（長島遺跡から）

1

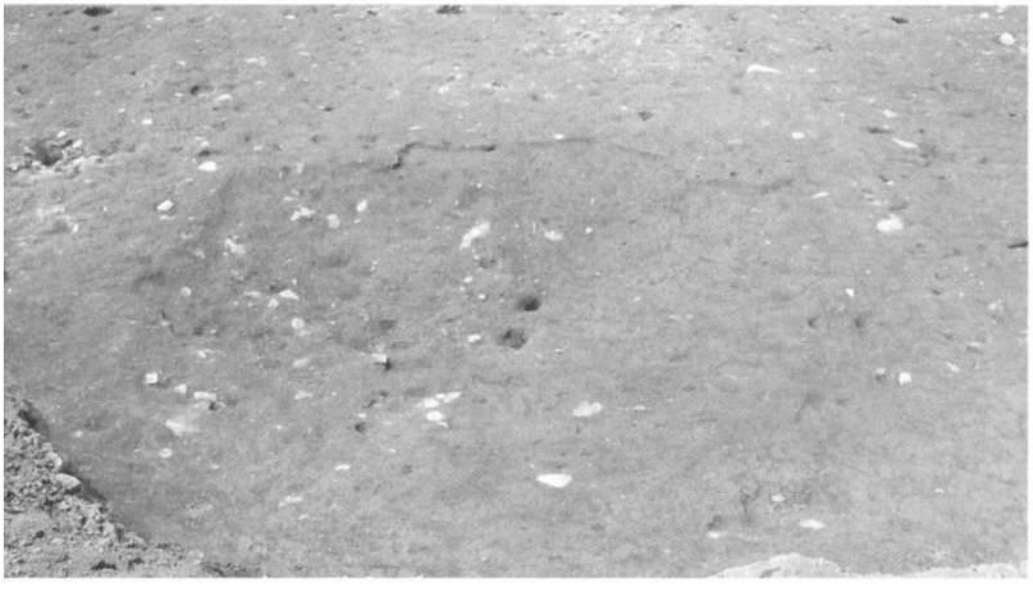
2

1　中妙見遺跡調査区全景（西から）　2　中妙見遺跡調査区全景（東から）

図版 4

1

2



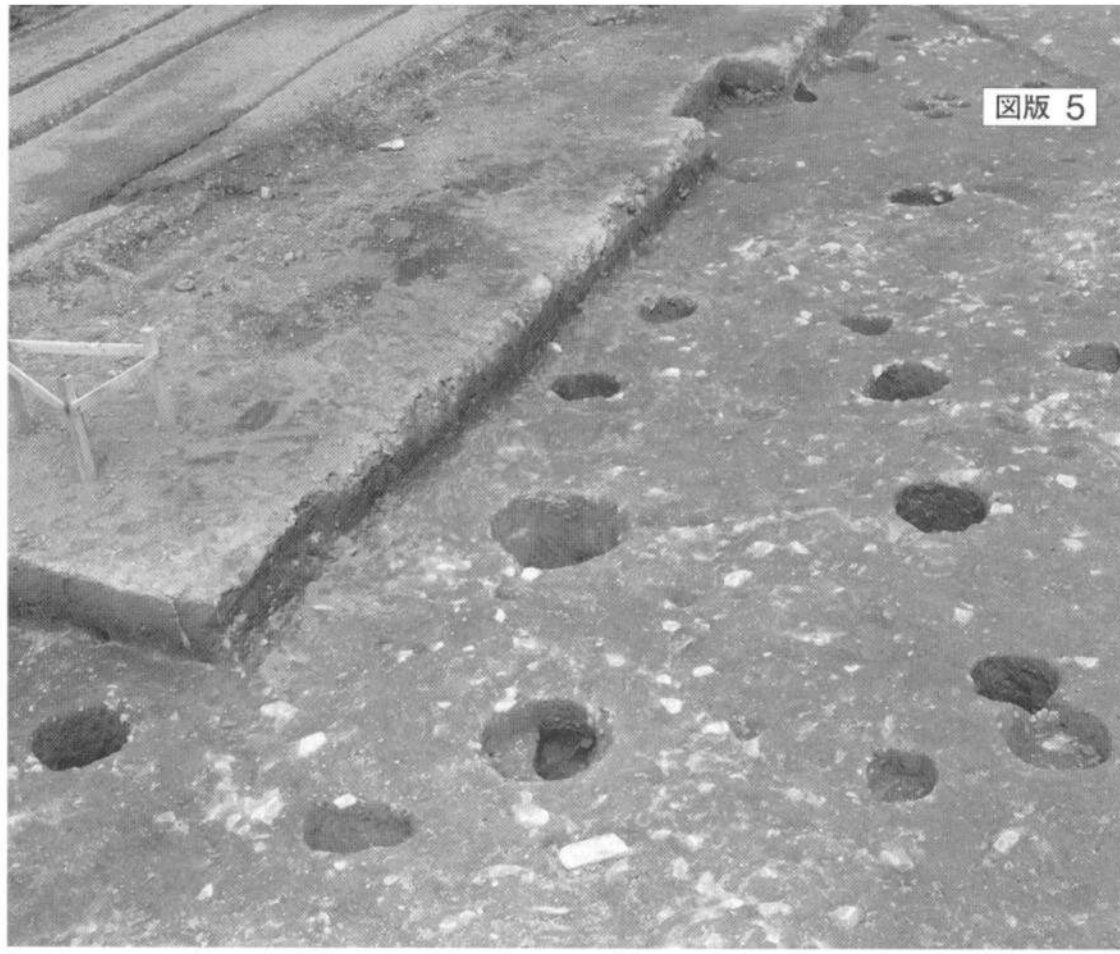
3

1　1 号住居跡
（南から）

2　2 号住居跡
（南から）

3　1 号竪穴遺構
（南から）

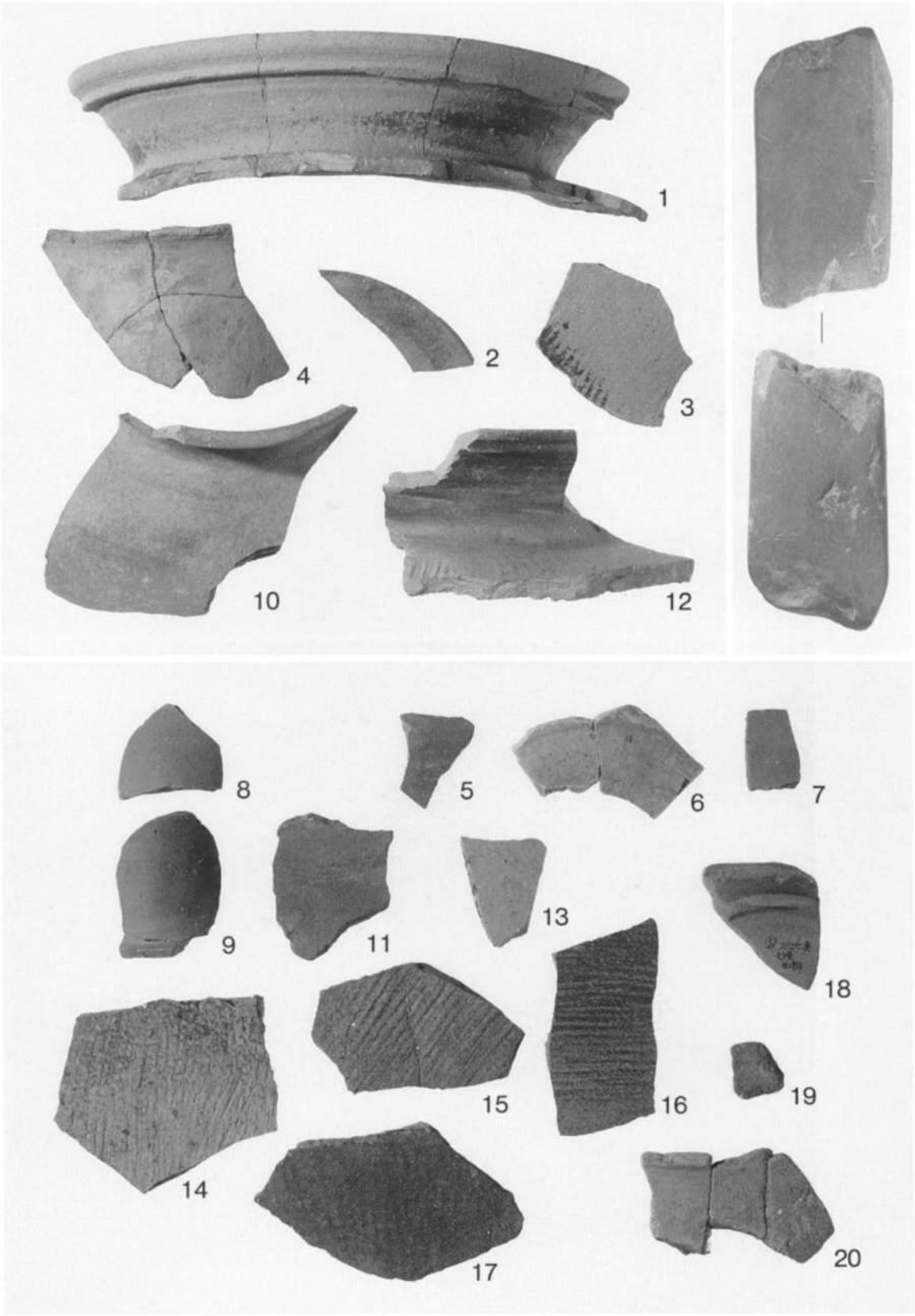
1



2

1　1 号建物跡（西から）　2　2 号建物跡（南から）

図版 6




出土土器・石製品

# Ⅳ　原の東遺跡Ⅰ区の調査

# Ⅳ　原の東遺跡Ⅰ区の調査

## 1　はじめに

原の東遺跡Ⅰ区は、調査範囲の狭さにもかかわらず、高密度に遺構が発見された調査であった。原の東遺跡Ⅰ区では、以下のような遺構が発見された。

| | |
|---|---|
| 弥生時代墓地遺構 | 甕棺墓26基、石棺墓２基、木棺墓３基、土壙墓４基、 |
| 弥生時代生活遺構 | 竪穴住居跡１棟、袋状竪穴２基、方形竪穴１基、 |
| | 土器溜まり２基、土坑５基、ピット、 |
| 古墳時代～中世 | 大　溝１条、柱穴状ピット多数 |
| 縄文時代 | 埋甕遺構１基、方形土坑１基、円形土坑１基、遺物包含層　など |

## 2　弥生時代墓地群の調査

### （１）甕棺墓

**１号甕棺墓**（図版8-1、第15図）

甕棺墓群のなかでは西端部の中程に位置する。長さ1.0ｍ、幅0.5ｍ、深さ1.0ｍ強の不整楕円形プランの墓壙で、壙底は東側へ僅かに傾斜する。

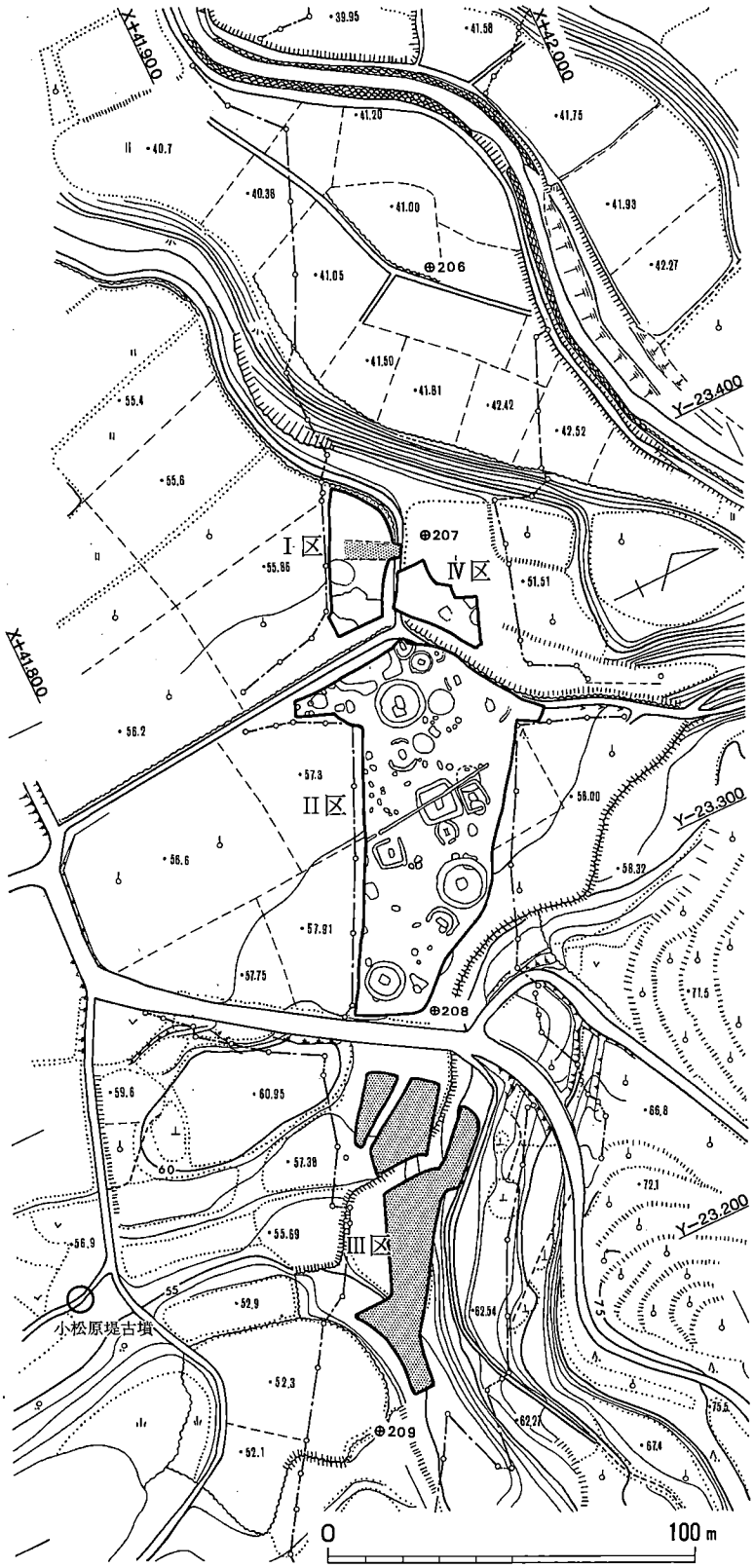
甕棺は上位を大きく削平されている。主軸方向をN58°15′Eに向ける、接口式の合わせ口甕棺でほぼ水平に埋置されるものの、南西側が僅かに高めで、上甕らしい北東側甕がやや下がり気味である。上甕の凸帯付近に相当する壙底に小さな粘土塊があり、甕棺の安定を図ったものと目されるが、接口部に目貼りされた粘土はあまり明確でない。棺内外からの遺物出土はみられなかった。なお、甕棺下端の標高は標高55.6ｍである。

上　甕（図版20、第16図）

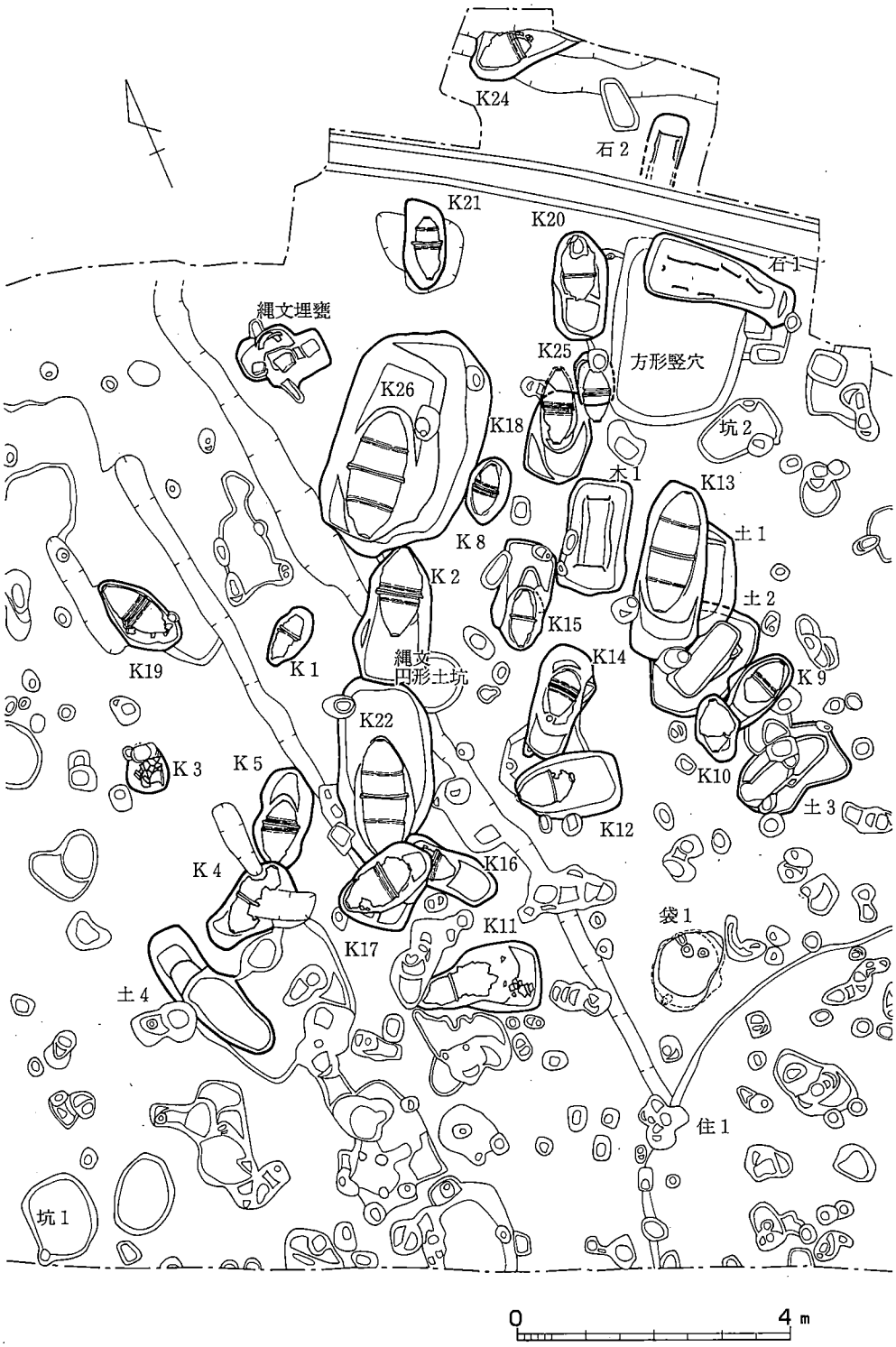
復原口径38.6cm、残存器高29.1cmの大きさで、胴部が最大径34.6cmとあまり膨らまない器形の鉢形土器である。口縁部は肥厚する逆Ｌ字状断面をなし、口縁部下に１条のＭ字形断面の凸帯が巡る。底部へは窄まるが、底部は残らない。内外面ともにヘラ磨き調整されるが、内面は全体に磨滅が進む。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、黄茶褐色ないし灰黄褐色に焼成されるが、外面の一部は黒っぽい色調を呈する。

下　甕（図版20、第16図）

復原口径37.0cm、残存器高42.0cm、胴最大径35.0cmの大きさの甕で、胴部はやや膨らみ、底

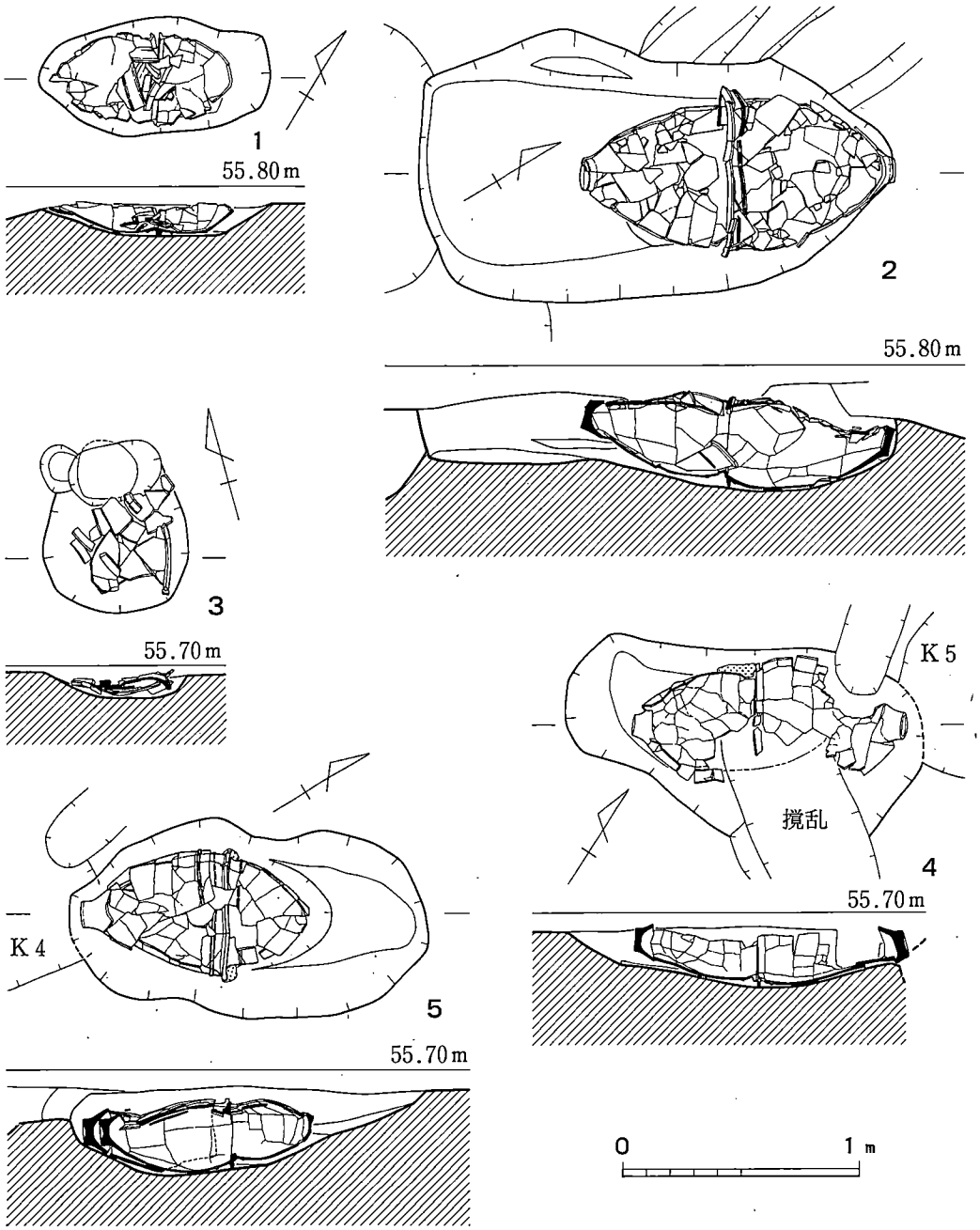



**第13図**　原の東遺跡周辺地形図（1/2,000）




**第14図**　Ⅰ区弥生時代墓地群（西群）（1/100）

部は窄まって厚めの底になるものと思われるが、欠損して残らない。口縁部は内側にやや傾斜する逆Ｌ字状断面をなし、口縁端部外面は浅く凹む。口縁部下に１条の低い断面三角形の凸帯




**第15図**　１～５号甕棺墓実測図（1/30）

が巡り、胴部はわずかに膨らむ。胴部外面はハケ目調整、内面はナデ調整されている。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石粒を含み、黄褐色ないし赤茶褐色に焼成される。

甕の特徴から、弥生中期前葉ないし中頃の所産とみられる。

**2号甕棺墓**（図版8-2･3、第15図）

1号甕棺墓の約1m東側に位置し、22号甕棺墓と一部重複して墓壙の一部を切られる。墓壙は長さ2.0m、幅1.1m、深さ0.3mで、墓壙内の北側壁の底に横坑が穿たれている。横坑には下甕胴下半部が挿入され、上甕の後ろ側には0.7m四方ほどの空間がある。葡萄栽培の施肥溝で攪乱されて下甕を中心に破損が激しい。

甕棺は、主軸方向をN30°50′Eに向け、傾斜角度5°30′に埋置される。接口式の合わせ口甕棺で、接口部の目貼り粘土は不明だが、接口部下の壙底に粘土が残ることから目貼りされたものとみられる。棺内外からの遺物出土はみられなかった。なお、甕棺下端の標高は標高55.3mである。

上　甕（図版20、第17図）

口径50.4cm、器高59.7cm、胴最大径50.0cm、底径11.5cmの大きさで、胴部がやや膨らむ器形の甕形土器である。口縁部はわずかに内傾する逆L字状断面で内面側にやや突出し、口縁端部外面は浅く凹む。口縁部下に1条のM字形断面の凸帯が巡る。窄まる底部は厚めで、外底面はレンズ状に凹む。胴部外面はハケ目調整、内面は粗くヘラ磨き調整されるが、外面の頸部に指頭の凹凸が明瞭に残る。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色ないし灰黄褐色に焼成される。

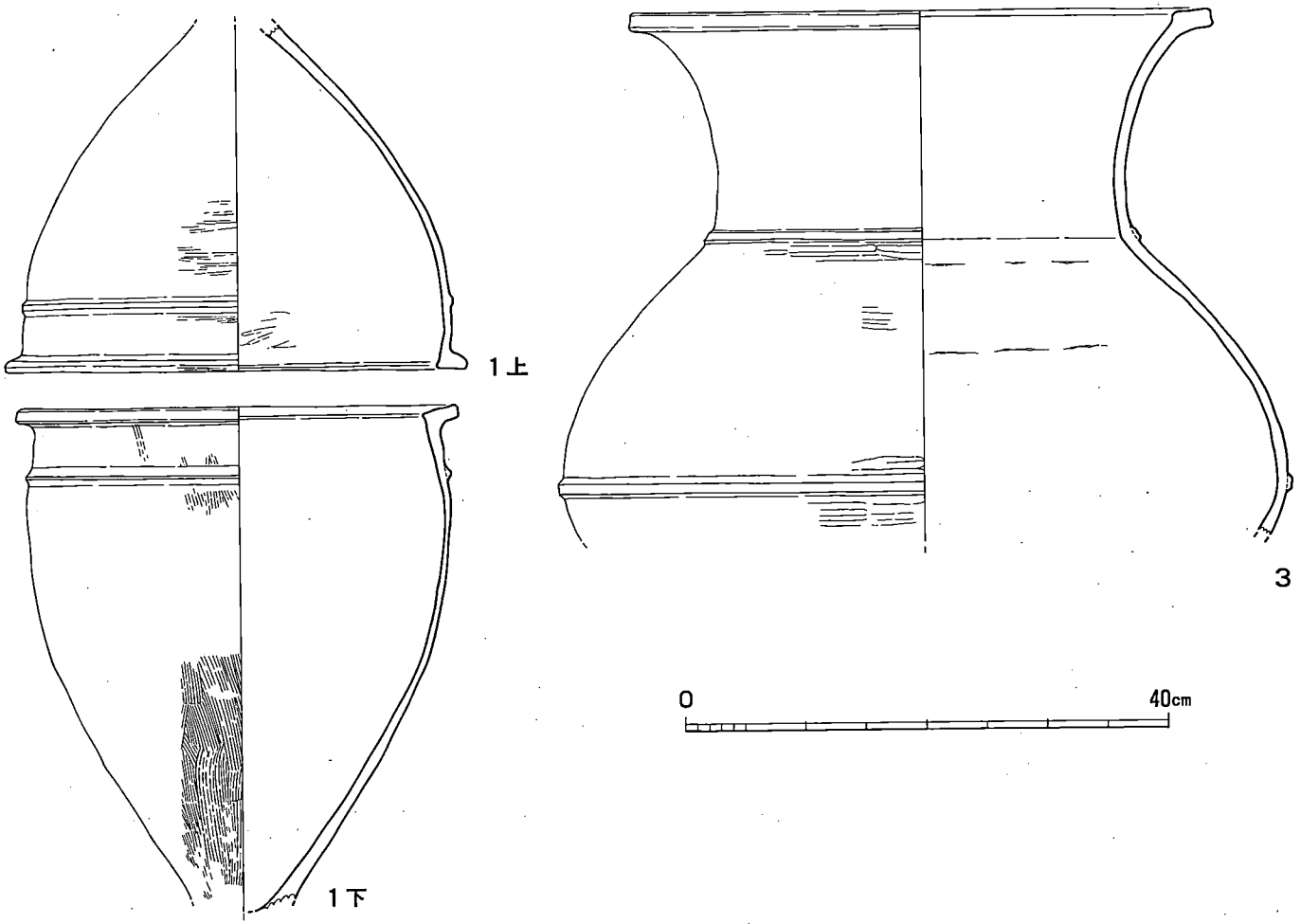
下　甕（図版20、第17図）

口径61.2cm、器高66.0cm、胴最大径58.9cm、底径11.4cmの大きさの甕形土器。胴部はやや膨らみ、窄まる底部は厚めで、底面は浅くレンズ状に凹む。口縁部は内側にやや傾斜する逆L字状断面をなし、内面側にやや突出し、口縁端部外面は浅く凹む。口縁部下にM字形断面の凸帯が1条巡り、頸部外面の指頭の凹凸が明瞭に残る。M字状凸帯は上甕の方がややシャープなつくりである。胴部外面はハケ目調整、内面は板痕の残る板ナデで調整されている。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石粒を含み、灰黄褐色ないし橙褐色に焼成され、内底部は黒い色調を呈する。

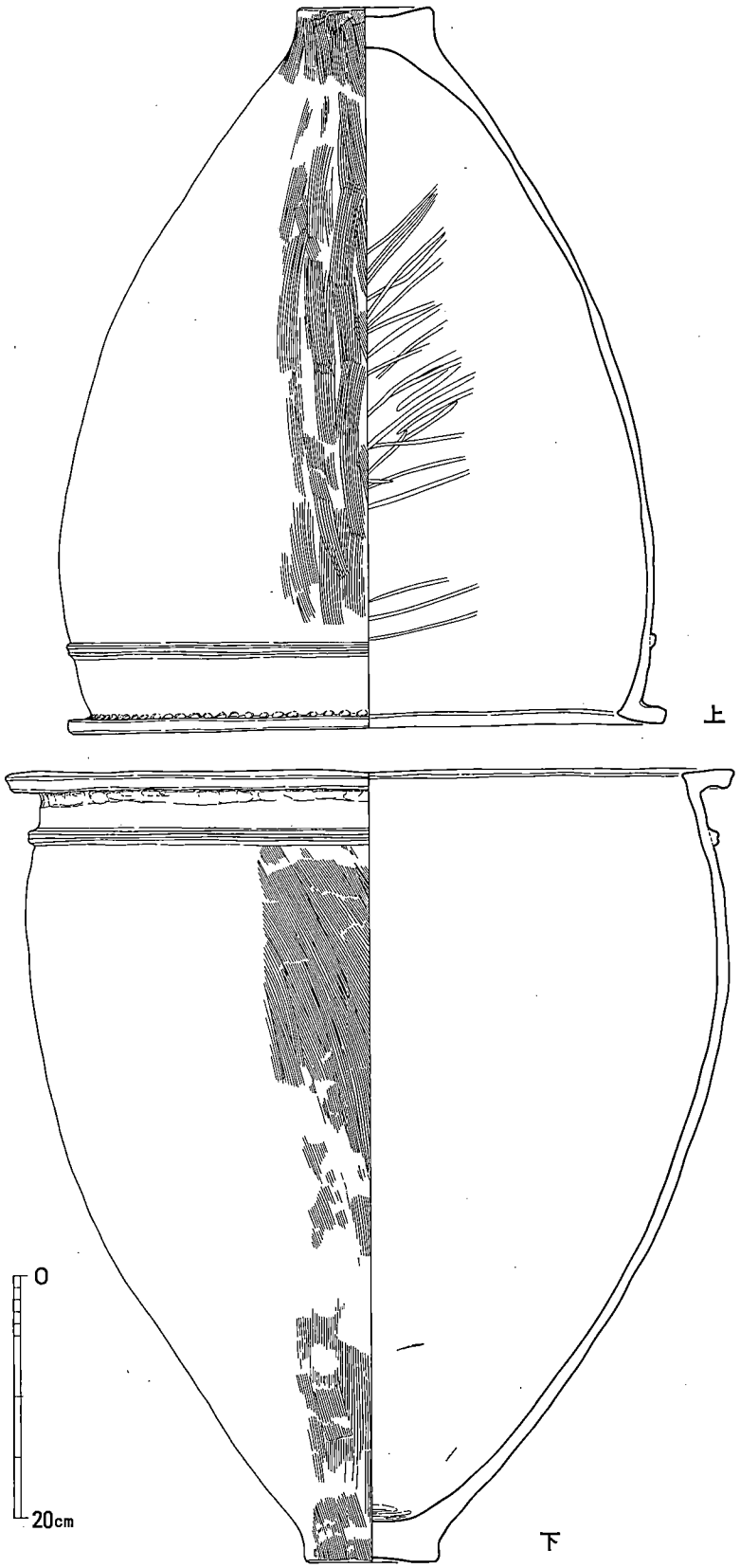
上・下甕使用土器の特徴からみて、弥生中期初頭頃のものであろう。

**3号甕棺墓**（図版9-1、第15図）

1号甕棺墓の約2m西南西に位置する。上部の削平が顕著で、かつ北側の一部を切り込む柱穴状ピットなどで攪乱されている。直径0.6mほどの広さの不整円形プラン内に、口縁部と胴部




**第16図**　1・3号甕棺使用土器実測図（1/6）




**第17図**　2号甕棺使用土器実測図（1/6）

の破片が重なる状態で発見された。壺形土器の口縁部が東側を向き、主軸方向はN75°Wを向く。木蓋？の単甕の可能性もあるが、底部側が残らず、甕棺か否かの判断に苦しむ。甕棺下端の標高は標高55.6mを測る。

甕　棺？（図版20、第16図）

復原口径48.4cm、残存器高40.8cm、胴最大径60.0cmの大きさの壺形土器。胴部がやや膨らむ器形の甕形土器である。わずかに内傾する平坦で肥厚した口縁部は内面側に段をもち、口縁端部外面は浅く凹む。口頸部は緩やかに外反して開き、胴部はなで肩に膨らむ。胴部最大径の位置と頸部に各1条のM字形断面の凸帯が巡る。内外面ともにヘラ磨き調整されるが、磨滅風化が進む。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成される。

壺形土器の特徴から、弥生中期中頃を前後する時期のものとみられる。

**4号甕棺墓**（図版9-2、第15図）

3号甕棺墓の約2m南側に位置する。横坑の先端が5号甕棺墓墓壙と一部重複している。葡萄栽培の肥料溝の掘削による攪乱、爪付きバックフォーの攪乱などを被り遺存状況はやや悪い。墓壙は長さ1.5m、幅0.7m前後の不整楕円形で、深さ0.2m強しか残らない。

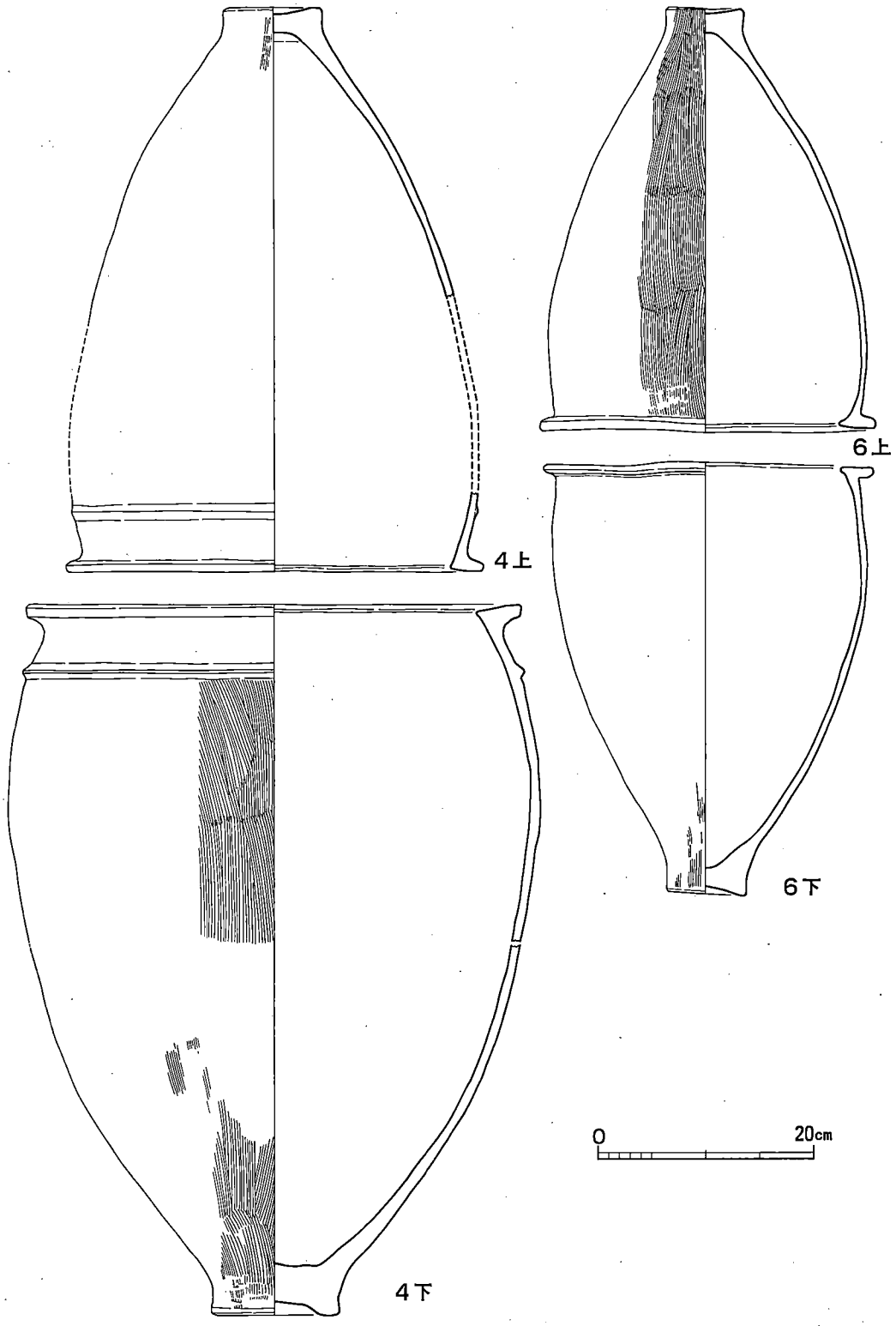
甕棺は主軸方向N57°E、傾斜角度1°30′で西側が高めに埋置されている。他の甕棺の検出状況などからみて、南西側甕が上甕かと推測されよう。甕形土器の接口による合わせ口甕棺で目貼り粘土の痕跡が僅かに北側の接口部に残る。棺内外からの遺物の出土はみられなかった。甕棺下端の標高は標高55.4mを測る。

上　甕（図版21、第18図）

胴部は脆弱なため接合できないが、復原口径39.0cm、推定器高53.0cm、底径9.2cmの大きさで、口径と胴部径がほぼ同じの甕であろう。口縁部は逆L字状断面をなし、口縁部下に1条の低い断面三角形の凸帯が巡るものの剝落が顕著で残りは悪い。底部はやや厚めで、外底面はレンズ状に凹む。底部付近の外面にハケ目が僅かに残るが、外面は全体に磨滅が進み、内面はナデ調整されているようである。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、黄色味のある黄灰色ないし黄褐色に焼成されている。

下　甕（図版21、第18図）

下甕も脆弱なために、胴部がうまく接合しないが、復原口径46.0cm、復原器高65.5cm、胴最大径49.4cm、底径11.9cmの大きさの甕である。口縁部は逆L字状断面をなし、胴部に向かって膨らむ口縁部下に1条の低い断面三角形の凸帯が巡る。底部は厚めで、外底面は上底状をなす。胴部から底部の外面はハケ目調整、内面はナデ調整されている。胎土に1mm大程の砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石粒を含み、黄茶褐色に焼成されるが、外面にはやや灰色っぽい部分もみられる。



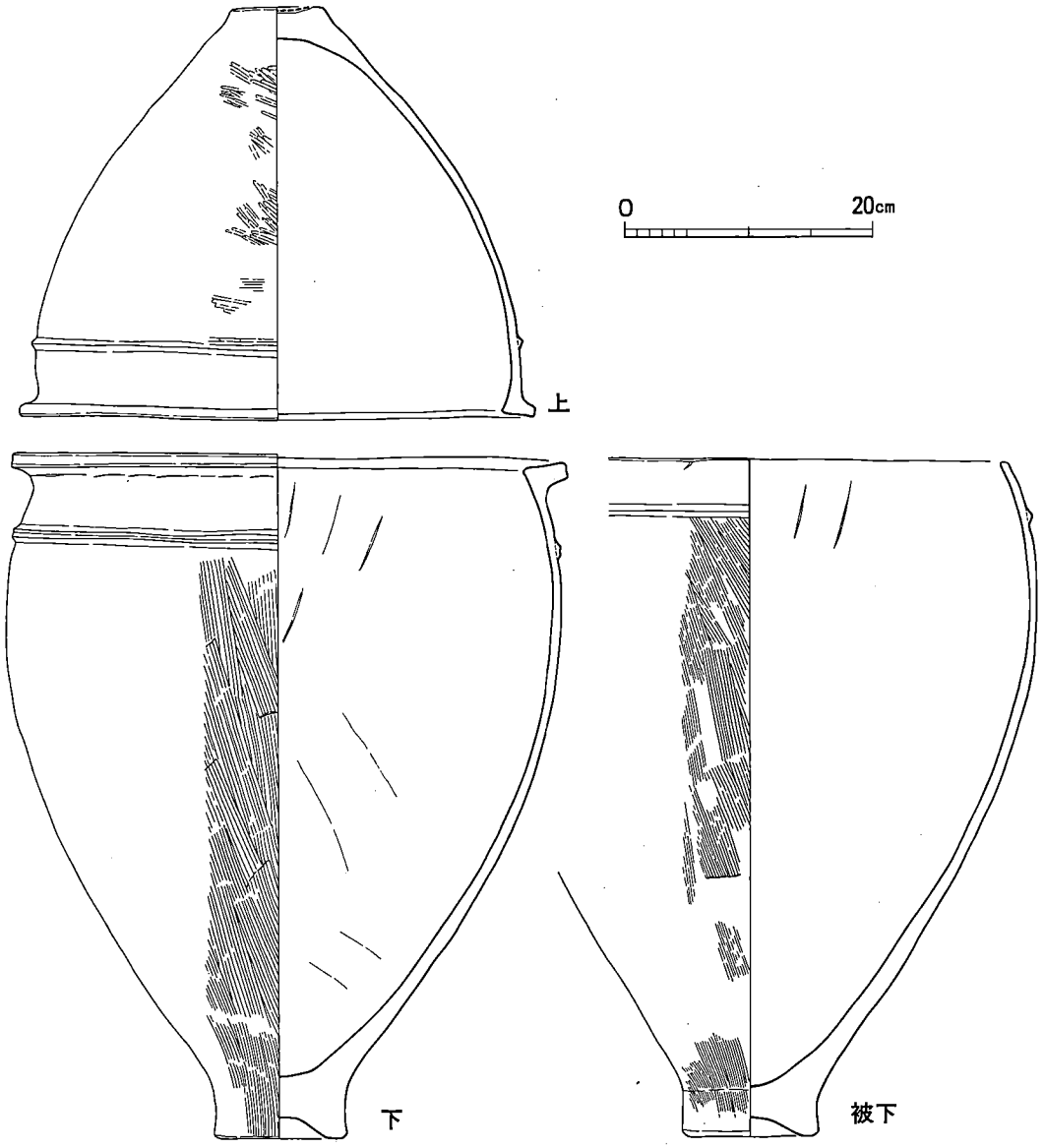

**第18図**　4・6号甕棺使用土器実測図（1/6）

**5号甕棺墓**（図版9-3･10-1･2、第21図）

4号甕棺墓の北東側に隣接して、一部4号甕棺墓横坑の先端と重複する。

墓壙は長さ1.5m、幅0.7m余りの楕円形プランで、南西側で深さ0.35mを測る。壙内の北東側は甕棺底部との間に僅かながら空間を有する。

甕棺は接口式の合わせ甕棺で、横坑に挿入される甕形土器を下甕にして、鉢形土器の上甕を




**第19図**　5号甕棺使用土器実測図（1/6）

接口するもので、更に胴上半部を打ち欠いた甕形土器を被下甕にしている。甕棺は主軸方向N32°10′Eを向き、北東側が僅かに高い傾斜角度2°30′に埋置されている。接口部の一部には目貼り粘土が僅かに残るが、棺内外からの遺物の出土はみられなかった。甕棺下端の標高は55.3mを測る。

上　甕（図版21、第19図）

口径41.6cm、器高33.0cm、底径7.4cmの大きさの鉢形土器。口縁部は厚めの逆L字状断面をなし、口唇端部はつまみ上げ気味である。口縁部下に1条の断面三角形凸帯が巡る。底部はやや厚めで、外底面はレンズ状に浅く凹む。外面は全体にヘラ磨き調整、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗黄茶色に焼成されている。

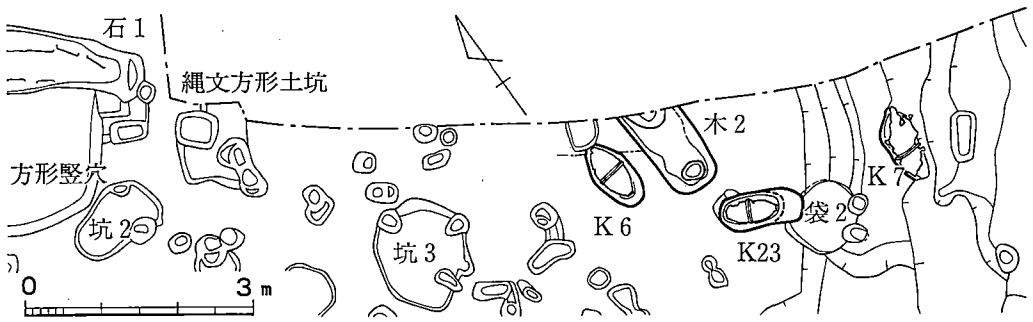
下　甕（図版21、第19図）

口径45.0cm、器高54.5cm、胴最大径44.8cm、底径10.8cmの大きさの甕形土器。口縁部は厚めの逆L字状断面をなし、口縁端部外面は凹み気味に整えられる。胴部側へ膨らむ口縁部下に1条の断面M字形凸帯が巡る。底部は厚く、外底面は上底状をなす。胴部から底部の外面はハケ目調整、内面は板状工具痕の残る板ナデおよびナデで調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石粒を含み、黄褐色に焼成されるが、内面には黒っぽい部分もみられる。

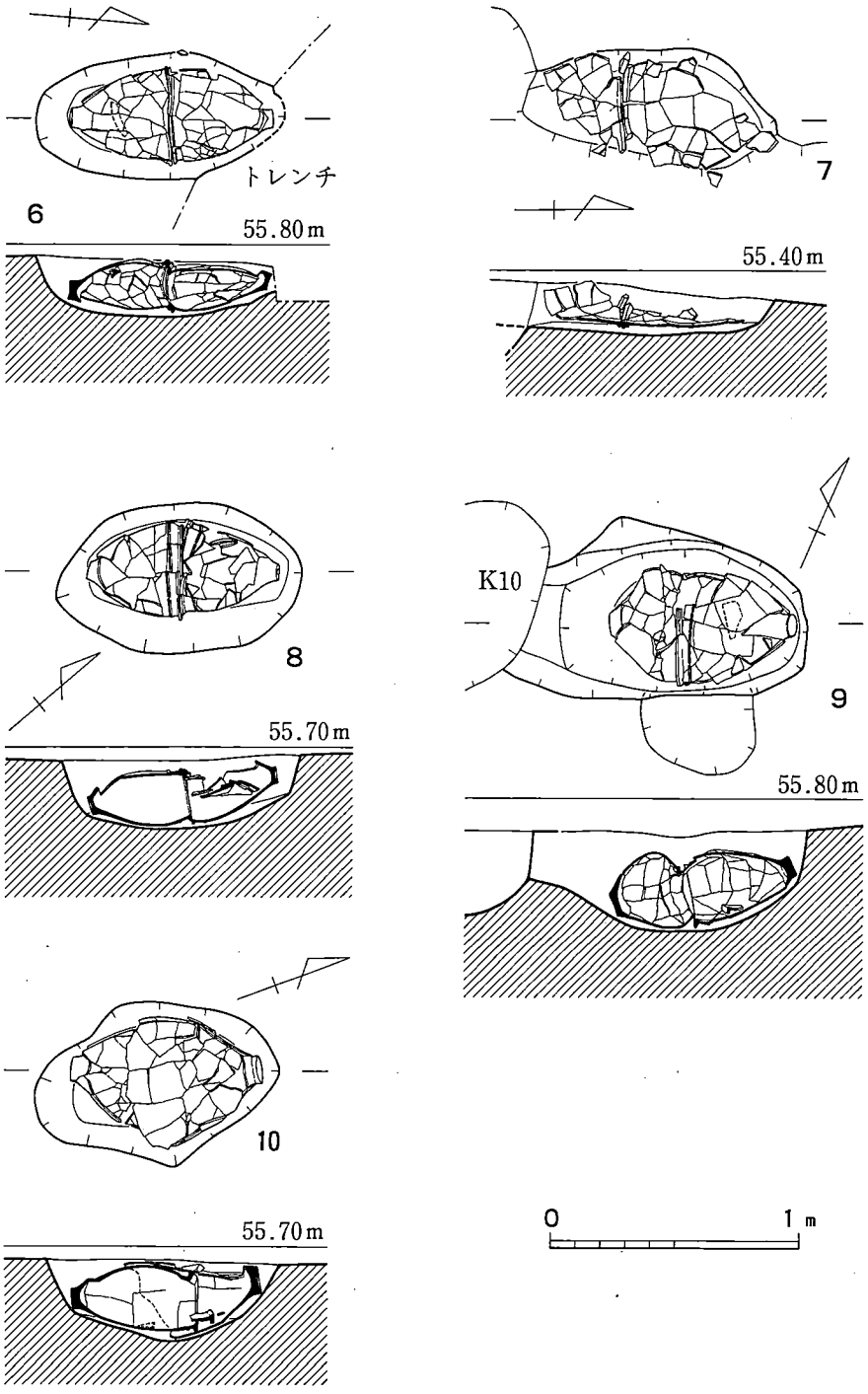
被下甕（図版21、第19図）

口縁部を打ち欠いた甕形土器で、打ち欠き部分の復原径40.0cm、残存器高54.3cm、復原胴最大径44.8cm、底径11.0cmの大きさ。胴部へ向かって膨らむ口縁部下に断面三角形凸帯が1条巡る。底部は厚めで、外底面はレンズ状に凹む。凸帯下から底部にかけての外面はハケ目調整、内面は板状工具痕の残る板ナデおよびナデで調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、黄褐色に焼成されるが、内面には黒っぽい部分もみられる。

甕の特徴から、弥生中期初頭頃とみられる。




**第20図**　Ⅰ区弥生時代墓地群（東群）（1/100）




**第21図**　6～10号甕棺墓実測図（1/30）

**6号甕棺墓**（図版10-3、第21図）

大半を占める甕棺墓群とは約6mの空間を空けて、調査区北東部に位置する(第20図)。試掘トレンチと後世の柱穴状ピットによって北側の上部を失い、長さ約1.0m、幅0.5mの楕円形プランの掘り方は、0.2m程の深さを残す程度である。

甕棺は接口式の合わせ口甕棺で、主軸方向N 4°30′Wを向き、ほぼ水平に据えられたようだが、北側の甕形土器が上甕であろうか。上部から何らかの力が加わったらしく、下甕内の胴部中程に、下甕の口縁部の一部が移動している。目貼り粘土は残されておらず、棺内外からの遺物出土はみられなかった。なお、甕棺下端の標高は55.55mを測り、甕棺と墓壙底間には炭化物が散在している。

上　甕（図版22、第18図）

口径31.1cm、器高39.0cm、胴最大径29.6cm、底径7.2cmの大きさの甕形土器。口縁部はT字に近く内面側に突出する逆L字状断面をなし、口唇端部は丸みをもつ。底部はやや厚めで、外底面はレンズ状に浅く凹む。外面は全体にハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、灰黄褐色ないし暗黄茶褐色に焼成されている。

下　甕（図版22、第18図）

口径30.6cm、器高39.7cm、胴最大径29.4cm、底径7.4cmの大きさの甕形土器。口縁部はT字に近く内面側に突出する逆L字状断面をなし、口縁端部は丸みをもつ。底部は厚めで、外底面は上底状をなす。外面は底部付近にハケ目調整痕が残るものの磨滅が進み、内面はナデで調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、橙褐色に焼成されるが、内面は黒っぽい。

甕の特徴からみて、弥生中期初頭頃にみてよいだろう。

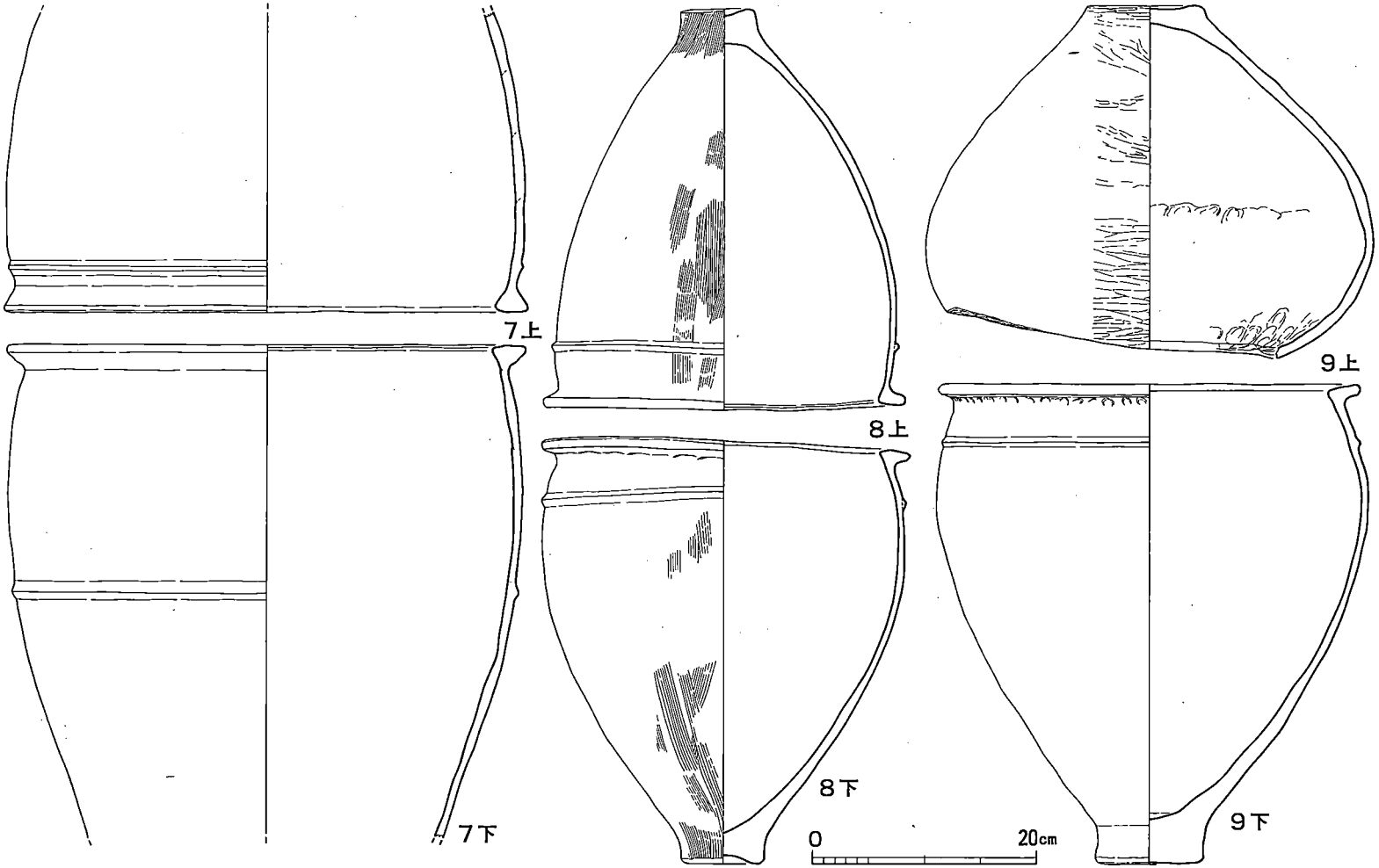
**7号甕棺墓**（図版11-1、第21図）

間に23号甕棺墓を挟み、6号甕棺墓の約3m東南東側に位置する。後世の通路の可能性もある大溝状遺構によって東南側を大きく削り去られている。墓壙の掘り方は殆ど残らず、東側では甕棺の割れ面に沿って掘り方の堆積土が識別できる程度で、掘り方の深さは0.1m強に残るのみである。

甕棺は接口式の合わせ口甕棺で、主軸方向をN 0°45′E前後の方向に向け、傾斜角度4°弱に南側が高めに据えられる。掘り方の遺存状況が悪いために上下甕の判断はし難いが、南側甕を仮に上甕としておきたい。棺内外からの遺物出土はみられなかった。至近の位置から甕底部が出土したものの、上・下甕に接合するか否かは分からない。なお、甕棺下端の標高は55.25mを測る。

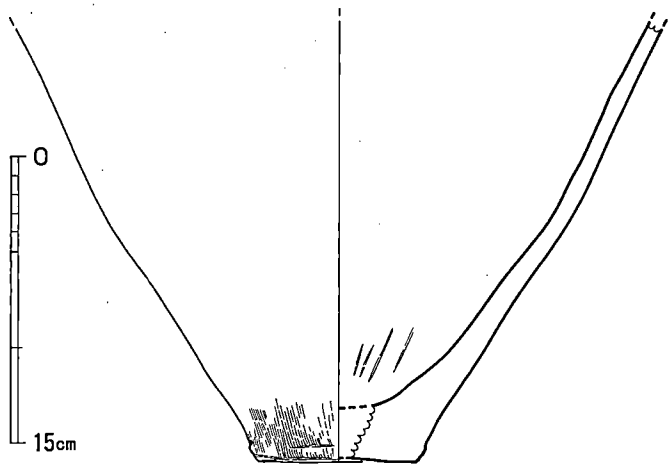
上　甕（第22図）

約1/4の残存度で、復原口径47.0cm、残存器高 27.2cm、胴最大径46.4cmの大きさの甕形土器。




**第22図**　7～9号甕棺使用土器実測図（1/6）

口縁部は肥厚したT字状断面をなし、口唇端部は丸みをもつ。口縁部下に低い断面三角形凸帯が1条巡る。内外面ともに風化磨滅が進み調整手法は不明。胎土に砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、黄茶褐色に焼成されている。




**第23図**　7号甕棺墓付近出土土器実測図（1/4）

下　甕（図版22、第22図）

約1/4の残存度で、復原口径46.6cm、残存器高44.6cm、胴最大径46.2cmの大きさの甕形土器。口縁部は肥厚したT字状断面をなし、口縁端部は丸みをもつ。胴部中程に1条の断面三角形凸帯が巡る。内外面ともに風化磨滅が進み、調整手法は不明。胎土に砂粒･赤褐色粒･角閃石粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

付近出土の甕形土器底部（第23図）

底部付近の破片で、復原底径8.4cm程の大きさ。殆ど括れないが胴部は膨らみ、底部は厚い。外面は磨滅するが、ハケ目が僅かに残り、内面は底部付近に板状工具痕の残るもののナデ調整らしい。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、黄茶褐色に焼成されるが、一部黒色を呈する部分がある。

甕棺使用土器の特徴からみて、弥生中期初頭頃に属するものとみられる。

**8号甕棺墓**（図版11-2･3、第21図）

2号甕棺墓の約1m東側に位置する。掘り方は長さ1.0m、幅0.6m、深さ0.3m弱の規模で、楕円形プランを呈する。甕棺は主軸方向N40°20′E、埋置角度10°に北東側が高く据えられている。

甕棺は接口式の合わせ甕棺で、北東側の甕形土器の法量がやや小さいことから上甕であろう。目貼り粘土は顕著でなく、遺物はみられない。なお、甕棺下端の標高は55.4mを測る。

上　甕（図版22、第22図）

口径32.5cm、器高36.4cm、胴最大径30.5cm、底径6.5cmの大きさの甕形土器。口縁部は肥厚気味の逆L字状断面をなし、口唇端部は丸みをもつ。口縁部下に断面三角形凸帯が1条巡るが、剝離した部分が多い。底部はやや厚めで、外底面はレンズ状に凹む。外面は全体にハケ目調整、

内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄褐色ないし橙褐色に焼成されている。

下　甕（図版22、第22図）

口径33.0cm、器高38.7cm、胴最大径32.6cm、底径7.5cmの大きさの甕形土器。口縁部は逆Ｌ字状断面をなし、口縁端部は丸みをもつ。口縁部下に断面三角形凸帯が１条巡る。底部は厚めで、外底面はレンズ状に凹む。外面はハケ目調整、内面はナデで調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、黄茶褐色に焼成される。

上下の甕の特徴から、中期初頭頃であろう。

**9号甕棺墓**（図版12-1･2、第21図）

甕棺群の東隅にあり、６号甕棺墓の約６ｍ西側に位置する。10号甕棺墓と掘り方の一部が重複していて、10号甕棺墓の掘り方よりも先行する。掘り方は長さ1.2ｍ、幅0.65ｍの楕円形プランで、深さ0.4ｍ前後。

甕棺は挿入式の合わせ口甕棺で、北東側に甕形土器、南西側に口頸部を打ち欠いた壺形土器を上甕にしている。壺形土器底部が低く、下甕の甕形土器底部が高い傾斜角度11°30′に据えられて、主軸方向N66°Eに向けられている。目貼り粘土は不明で、甕棺内外からの遺物出土はみられなかった。

上　甕（図版22、第22図）

口頸部を打ち欠いた壺形土器で、残存器高31.9cm、胴最大径40.0cm、底径10.5cmの大きさ。胴部は扁球形状に上位で膨らみ、やや厚めの底部は外底面がレンズ状に浅く凹む。外面は全体にヘラ磨き調整、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄茶褐色ないし黄褐色に焼成され、外面の一部は黒色を呈する。

下　甕（図版22、第22図）

口径37.8cm、器高43.5cm、胴最大径38.5cm、底径9.6cmの大きさの甕形土器。口縁部は逆Ｌ字状断面をなし、外反するが、口縁端部は丸みをもつ。口縁部下に断面三角形凸帯が１条巡る。胴部は丸みをもって膨らみ、底部は厚い。内外面ともに風化磨滅が進み、調整手法は不明。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、黄褐色に焼成される。

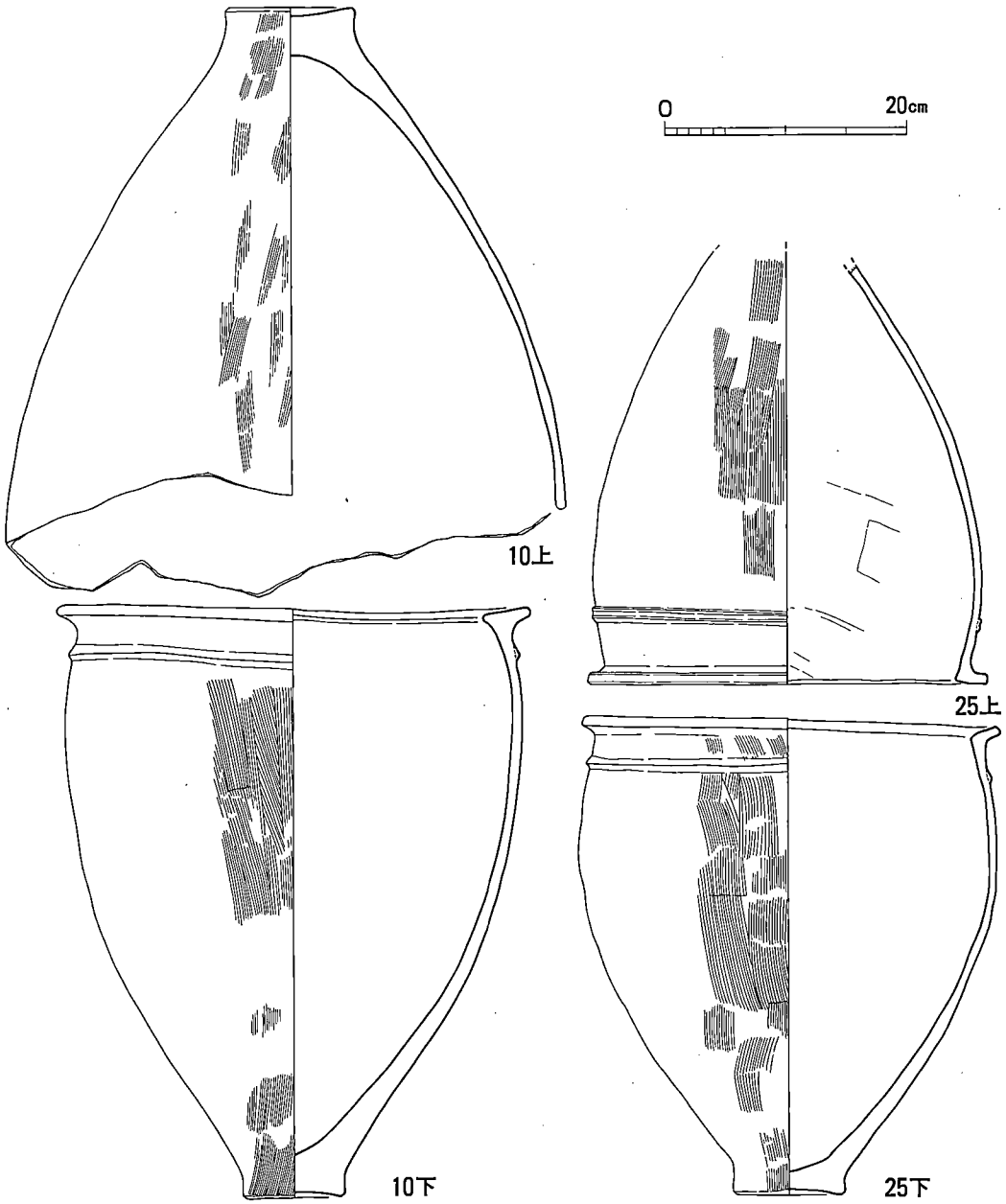
上甕は中期初頭、下甕は中期初頭から前葉のもので、前葉に近い時期のものであろう。

**10号甕棺墓**（図版12-1･3、第21図）

９号甕棺墓の西側に隣接して、墓壙の一部が重複する。墓壙は長さ1.0ｍ、幅0.6ｍ前後の楕円形様プランで、深さ0.3ｍ前後に残る。

甕棺は覆口式の合わせ口甕棺で、主軸方向N20°30′Eを向き、傾斜角度６°に北東側が高く埋置

されるが、北東側の甕形土器は口縁部が打ち欠かれ、南西側の完形甕形土器口縁部を覆い包む状態で検出された。目貼り粘土は不明で、下甕内に下甕口縁部の一部が転落して出土した他には、棺内外からの遺物出土はみられなかった。なお、甕棺下端の標高は55.35ｍを測る。




**第24図**　10・25号甕棺使用土器実測図（1/6）

上　甕（図版23、第24図）

胴部で打ち欠いた甕形土器で、残存器高48.0cm、胴最大径46.5cm、底径10.8cmの大きさ。やや厚めの底部は外底面がレンズ状に凹む。外面は全体にハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄茶褐色に焼成され、内面は黒い色調を呈する。

下　甕（図版23、第24図）

口径39.3cm、器高49.8cm、胴最大径38.0cm、底径8.5cmの大きさの甕形土器。口縁部はＴ字に近く内面側に突出した逆Ｌ字状断面をなし、口縁端部は丸みをもつ。口縁部下に断面三角形凸帯が１条巡り、胴部は膨らみ、底部は厚く外底面がレンズ状に浅き凹む。外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

上下の甕の特徴からみて、中期前葉頃の時期に属するであろう。

**11号甕棺墓**（図版13-1･2、第25図）

10号甕棺墓約４ｍ南西に位置する。

墓壙は、西側端で後世のピットによる攪乱を受けて、下甕底部側が削られている。長さ1.3ｍ、幅1.0ｍの不整長方形プランで、西側壁に横坑を穿って下甕を挿入していて、全長は1.9ｍを測り、深さは0.3ｍに残る。

甕棺は、接口式の合わせ甕で、主軸方向をN86°Wに向け、傾斜角度２°30′西側が高く埋置される。接口部付近が大きく陥没し、旧状をとどめないが、上甕は胴下半の片側を含め底部を欠き、これを補うように壺形土器の胴部2/3程度の破片で覆い被せている。

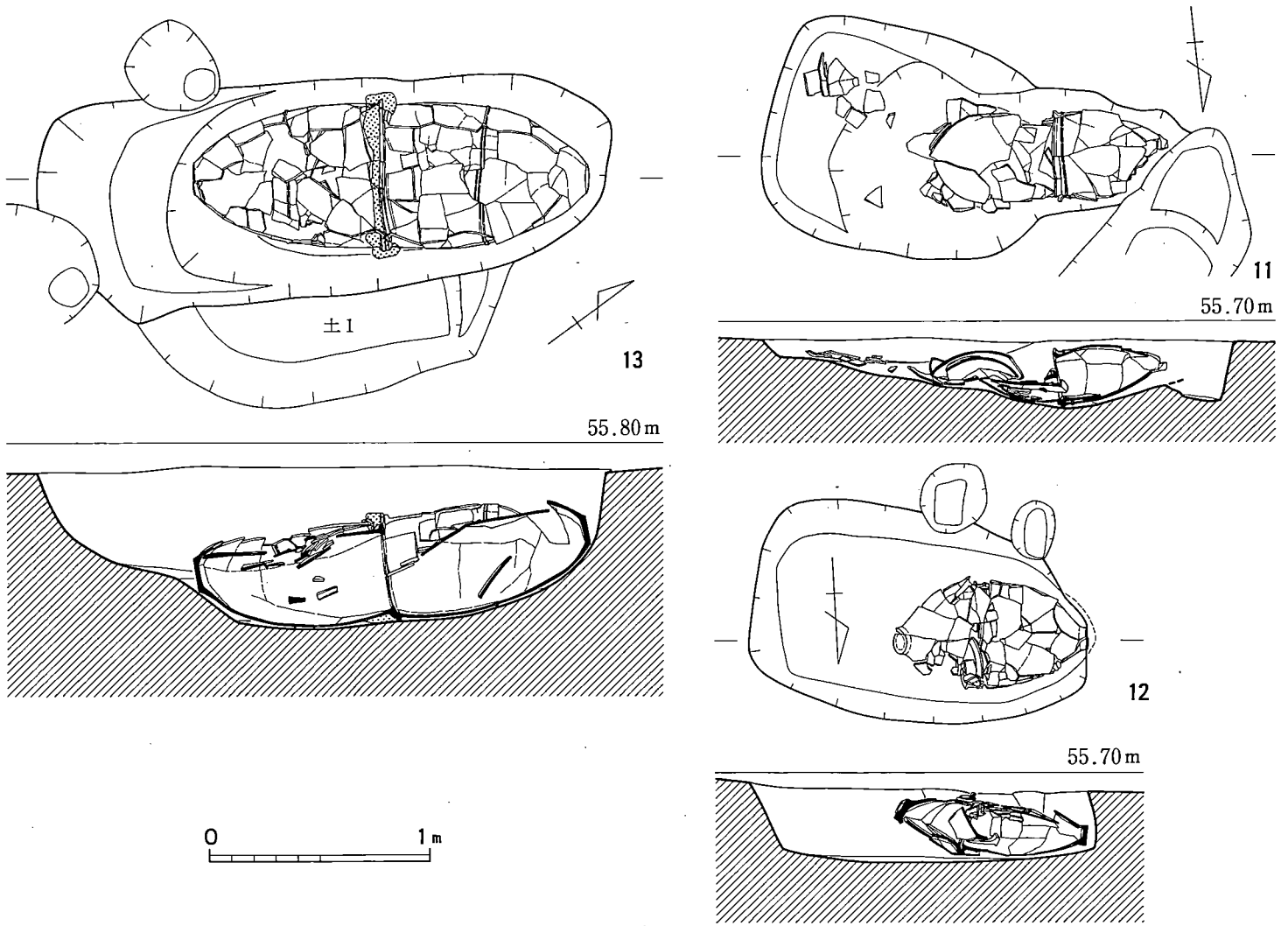
接口部では上甕口縁部の一部に粘土が残り、目貼り粘土が施設されていたことがわかる。甕棺の下端は標高55.3ｍの高さにある。また墓壙内の南東隅にやや離れて、上甕の胴下半部の破片が出土した。なお、墓壙内上部から混入とみられる鞴羽口片１点が出土した。

被上甕（図版23、第26図）

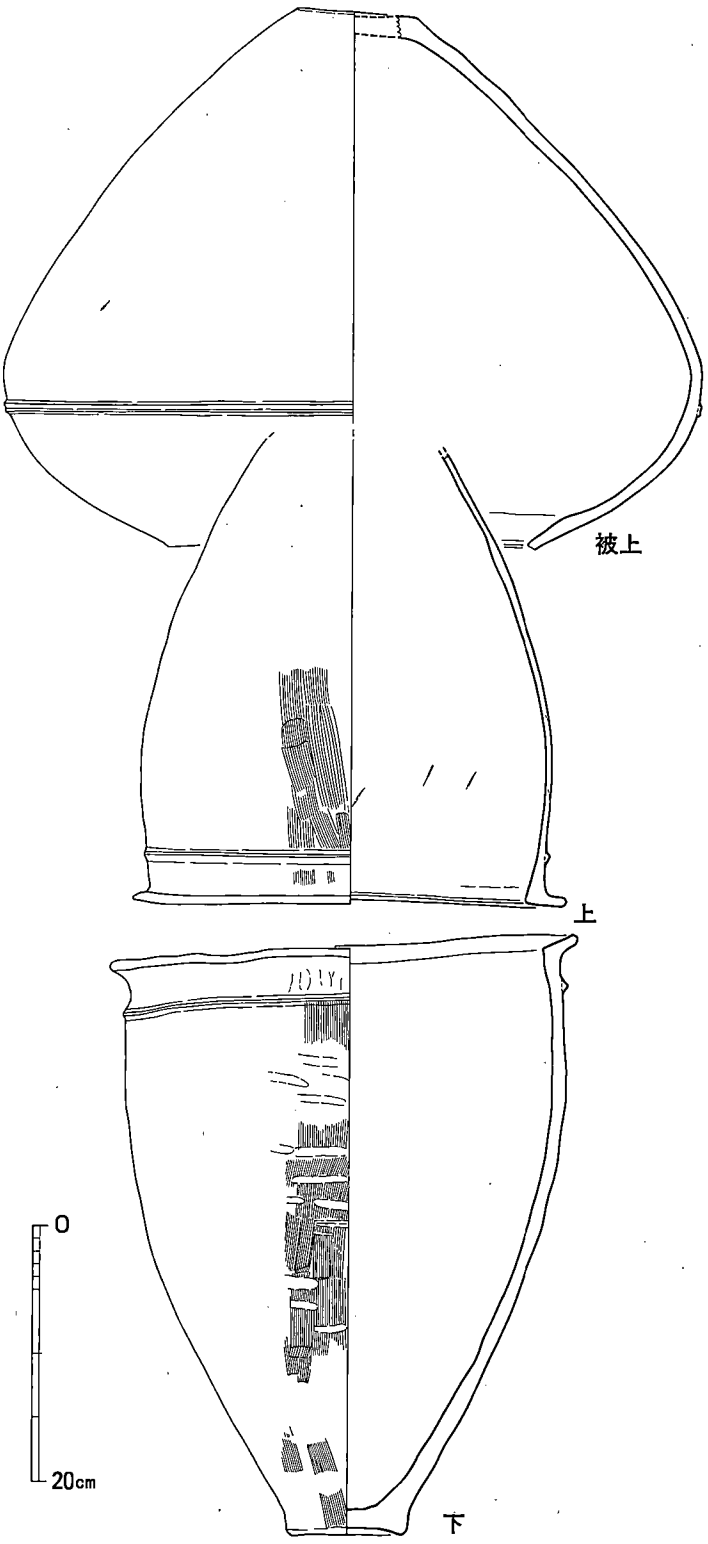
口頸部を打ち欠いた壺形土器で、残存器高30.0cm、胴最大径55.4cm、底径10.0cmの大きさ。脆弱で残りの悪い底部は外底面がレンズ状に凹む模様である。胴最大径の位置にややシャープな断面Ｍ字形凸帯が１条巡る。内外面ともに風化磨滅が進むものの、内面はナデで調整され、外面はヘラ磨き調整であろうか。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、淡黄褐色ないし橙褐色に焼成される。

上　甕（図版23，第26図）

底部を打ち欠いた甕形土器で、口径34.5cm、残存器高36.6cm、胴最大径32.7cmの大きさ。口縁部は逆Ｌ字状断面をなし、口縁部下に１条の断面三角形凸帯が巡る。外面はハケ目調整、内面は板状痕の残る板ナデおよびナデで調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄褐色ないし橙褐色に焼成される。




**第25図**　11～13号甕棺墓実測図（1/30）




**第26図**　11号甕棺使用土器実測図（1/6）

下　甕（図版23，第26図）

口径37.1cm、器高46.7cm、胴最大径35.2cm、底径9.7cmの大きさの甕形土器。口縁部は逆Ｌ字状に近く外反し、口縁端部は丸みをもつ。口縁部下に断面三角形凸帯が１条巡り、胴部はさほど膨らまず、底部は外底面がレンズ状に浅く凹む。外面は叩き痕の残るハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、黄茶褐色ないし灰黄褐色に焼成される。

鞴羽口（図版35-1、第70図）

ガラス質の融着物が付着する小破片で、長さ5.5cm、幅6.5cm、厚さ3.0cmほどの大きさ。胎土は精良で、雲母を少量含み、褐色に焼成されるが、二次加熱を受けて赤変する。

甕棺の時期は、その特徴からみて、弥生中期前葉頃のものとみられるが、被上甕棺使用土器などに幾分か古式の様相がみられる。

**12号甕棺墓**（図版13-3･14-1、第25図）

10号甕棺墓の１ｍ余り西側に位置し、14号甕棺墓と一部重複して14号の墓壙の一部を切る。墓壙は長さ1.5m、幅1.0ｍの隅丸長方形プランで、深さ0.3ｍに残るが、西側壁に横坑が掘られている。

甕棺は、接口式の合わせ甕で、主軸方向をN87°Wに向け、東側が高い傾斜角度８°に埋置される。合わせ方は特異で、下甕の甕形土器口縁部に、口頸部のみの壺形土器口縁部を合わせ、更に甕形土器の胴下半部で壺ともども覆い被せている。接口部に施設された目貼り粘土は不明であり、甕棺下端は標高55.3ｍの高さにある。

被上甕（図版23、第27図）

口頸部を打ち欠いた甕形土器で、残存器高37.5cm、残存部の胴部径47.0cm、底径10.7cmの大きさ。やや厚めの底部は外底面が上げ底状をなす。内外面ともに風化磨滅が進むものの、内面はナデで調整され、外面はハケ目調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、暗黄茶褐色ないし橙茶褐色に焼成される。

上　甕（図版23、第27図）

口径40.3cm、残存器高17.0cm、頸部外径27.6cmの大きさの壺形土器の口頸部で、胴部以下を欠く。口縁部上面は平坦で内傾し、内面側端部が突出して鋤先状の段をなし、端部外面は浅く凹む。口頸部は緩やかに外反し、胴部側に屈曲するようである。外面ともにヘラ磨き調整され、頸部外面は２～３cmおきに放射状の暗文状文様をなす。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、灰黄褐色ないし淡褐色に焼成されている。

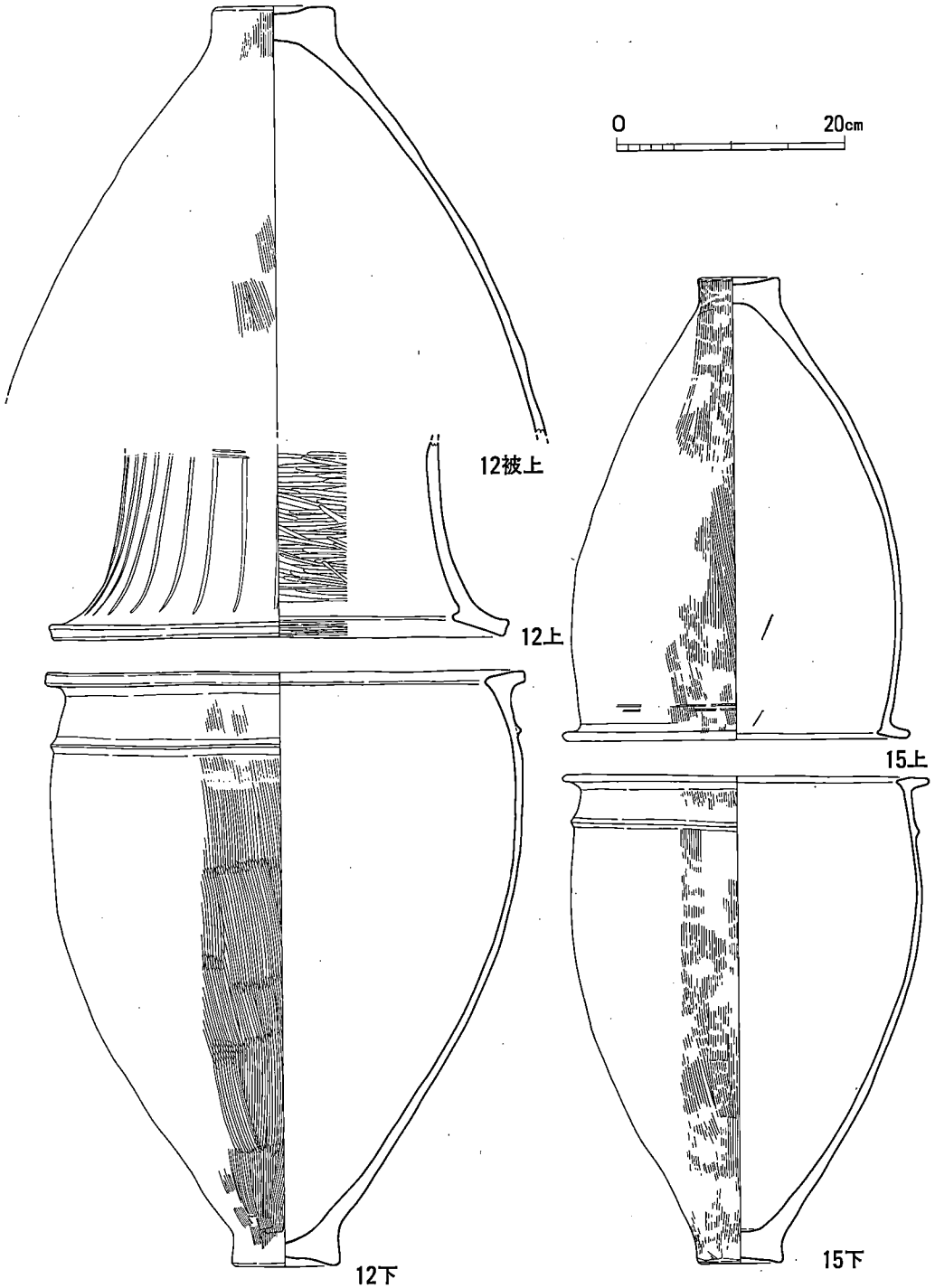
下　甕（図版23、第27図）

口径42.0cm、器高51.8cm、胴最大41.5cm、底径9.5cmの大きさの甕形土器。口縁部はＴ字に近く内側が突出した逆Ｌ字状断面をなし、口縁端部外面は面をもつ。口縁部下に断面三角形凸帯が１条巡り、胴部はさほど膨らまず、底部は外底面がレンズ状に浅く凹む。外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、灰黄褐色ないし橙褐色に焼成されるが、内面の一部は黒い。

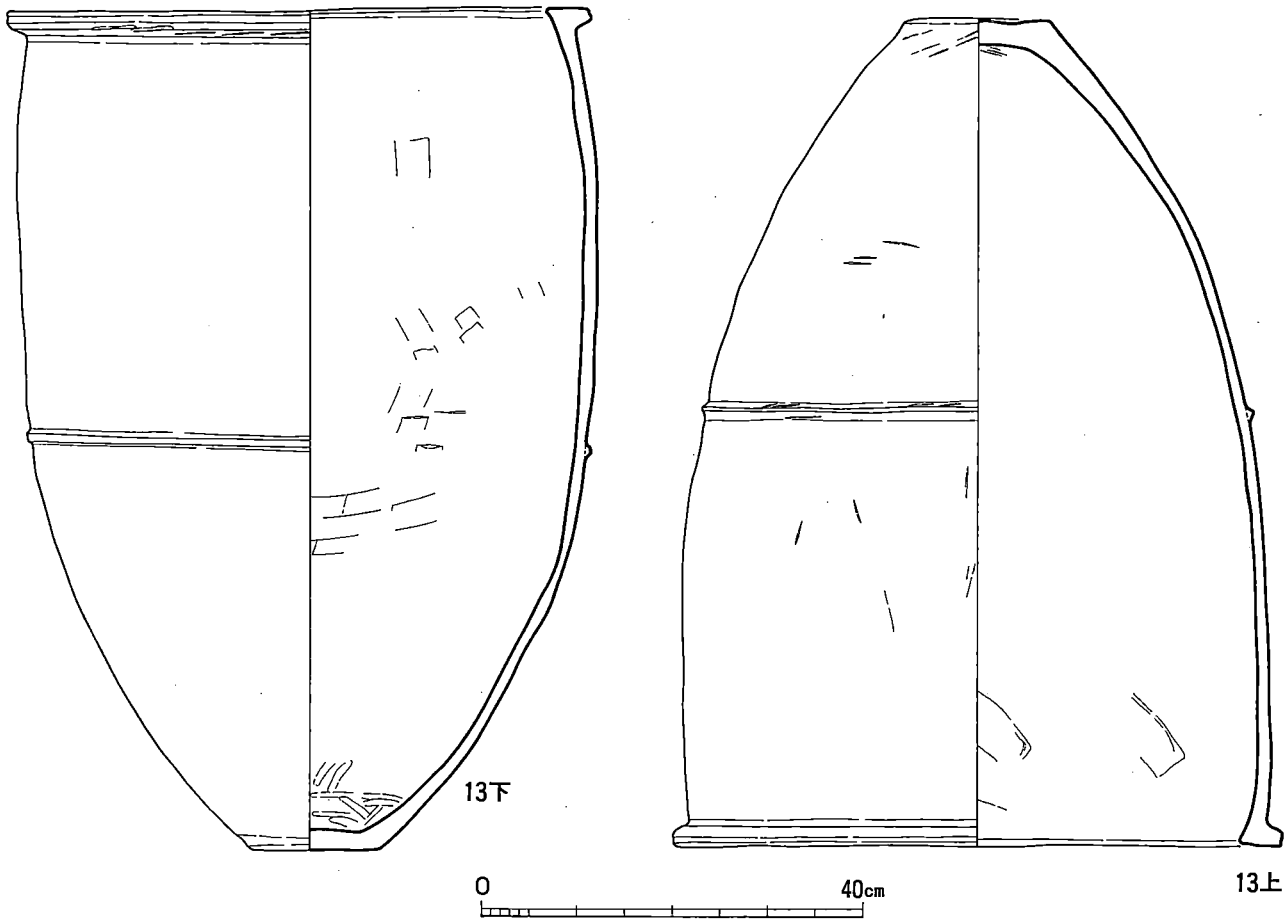
上下の甕の特徴では、中期前葉頃に属すが、被上甕の底部に幾分か古式の様相がみられる。

**13号甕棺墓**（図版14-2･3、第25図）

２号土壙墓を挟んで９号・10号甕棺墓の北側、12号甕棺墓の約２ｍ北東側に位置する。墓壙はやや大きな掘り方で、長さ1.5ｍ程度、幅1.5ｍ弱の隅丸方形プラン。深さ0.7ｍを残すが、北東側に横坑が掘られていて全長2.6ｍを測る。壙内の東側には長さ1.0ｍ、幅･深さともに0.5ｍ程のテラスがある。調査時には、西側にある後世の柱穴状ピットなどの他に、壙内の攪乱坑を確認できなかったが、接口部や上甕胴部に陥没がみられることや、棺内に壺形土器口縁部破片




**第27図**　12・15号甕棺使用土器実測図（1/6）




**第28図**　13号甕棺使用土器実測図（1/8）

が混入していることなどから、攪乱を受けたことは明らかであろう。テラス部分が土坑あるいは土壙墓であった可能性も否定しえないが、調査時には前後関係などを確認し得なかった。

甕棺は、接口式の合わせ甕棺で、主軸方向N37°Eを向き、北東側の下甕がやや高い6°30′の傾斜で埋置されている。接口部の目貼り粘土は、青灰色粘土が上甕口縁部側に巻き付けられ、全周する。甕棺内外からの遺物出土はみられなかった。なお甕棺の下端は標高54.95mである。

上　甕（図版24、第28図）

口径64.0cm、器高87.8cm、胴最大径61.5cm、底径15.8cmの大きさの大形甕。口縁部は肥厚した逆L字形断面をなし、口縁端部外面は浅く凹む。胴部はさほど膨らまず、中程のやや下位に断面三角形凸帯が1条巡る。器壁は全体に厚めで、肥厚する底部は外底面が幾分上げ底状をなす。内外面ともに板状痕の残る板ナデで調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、灰黄褐色に焼成される。

下　甕（図版24、第28図）

口径61.7cm、器高89.5cm、胴最大径60.9cm、底径13.5cmの大きさの大形甕。口縁部は肥厚した逆L字形断面をなし、口縁端部外面は浅く凹む。胴部はさほど膨らまず、中程に鈍い断面M字形凸帯が1条巡る。器壁は全体に厚めで、肥厚する底部は外底面が平坦。内面は板状痕の残る板ナデで調整されるが、底部付近にはヘラ磨き痕がみられる。外面は板ナデ調整されるが、痕跡は口縁部下面に残る程度である。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、灰黄褐色ないし灰黄茶褐色に焼成される。

上下の甕棺使用土器の特徴から、中期初頭ないし前葉の時期であろう。

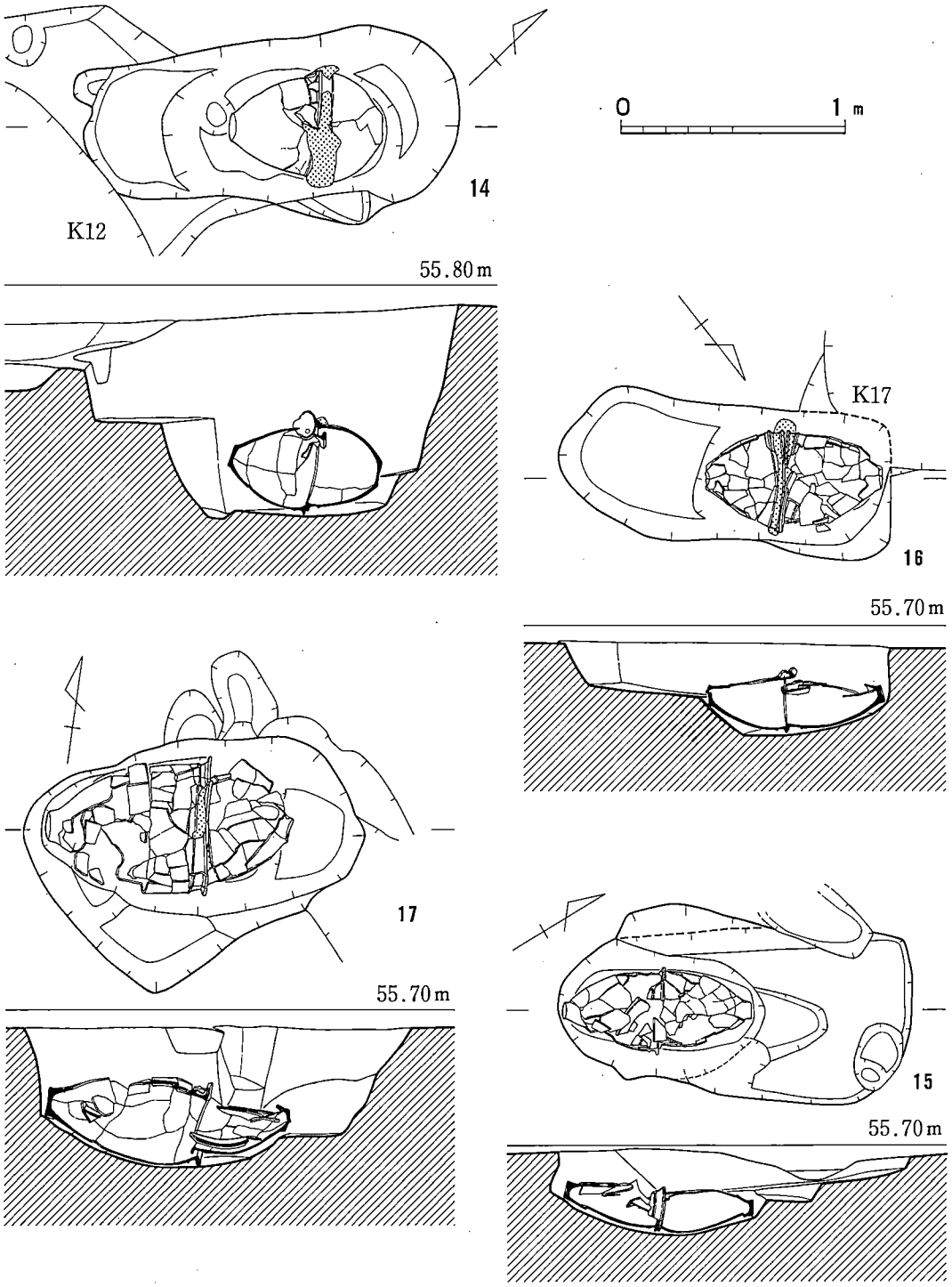
**14号甕棺墓**（図版15-1、第29図）

12号甕棺墓の北側に隣接し、13号甕棺墓の約1.5m西南西に位置する。

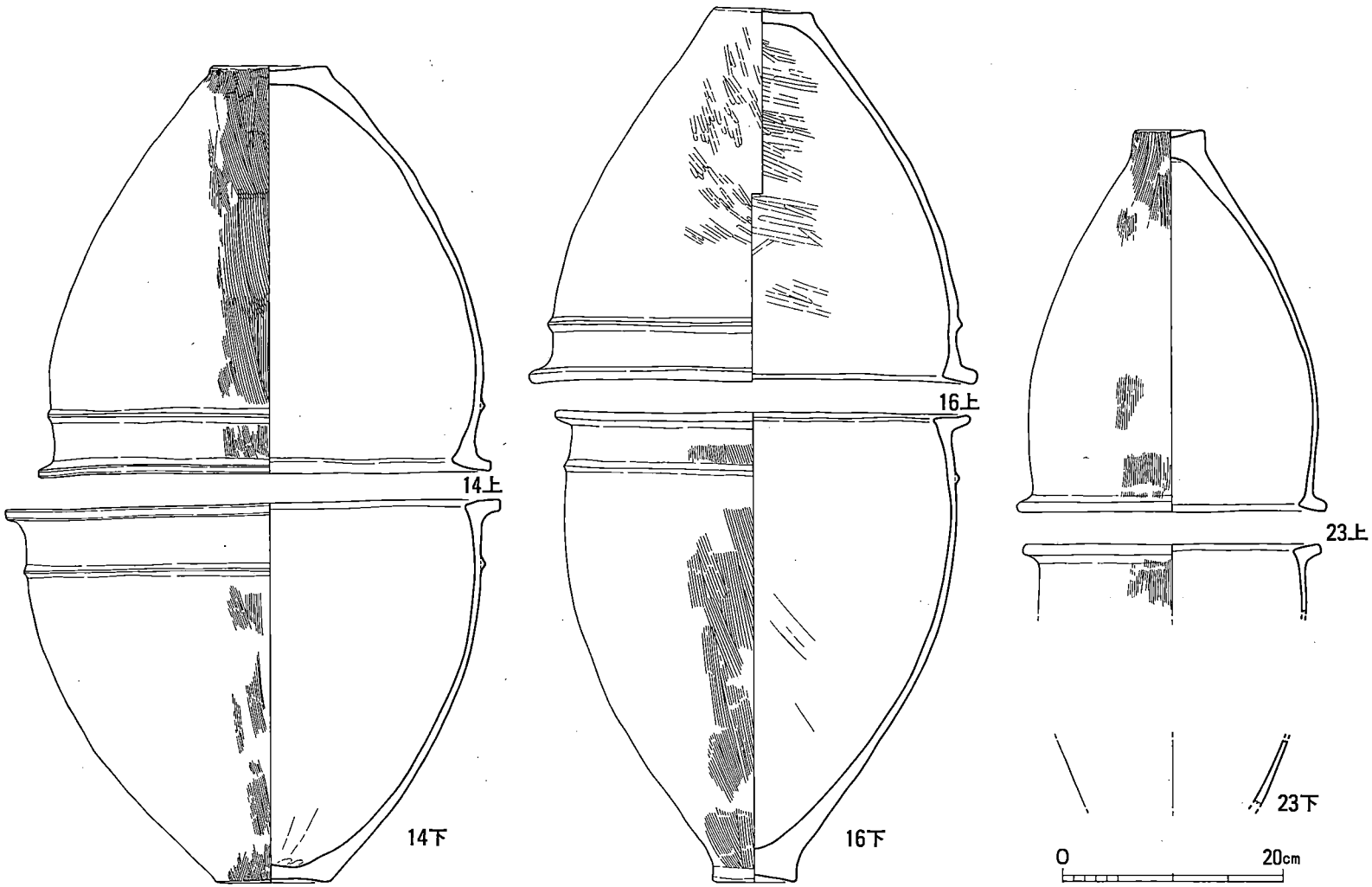
墓壙は12号甕棺墓の墓壙に一部切られ、径1.2～1.3mの不整円形プランの北東側に、長さ1.2m、幅0.7～0.8mの楕円形プランがついた平面形をなす。不整円形プランの部分は浅めで深さ0.2mを越さないが、楕円形プランの部分は階段状に深くなり、最大で0.9mの深さを有する。

甕棺は接口式の合わせ口甕棺で、深い壙底に主軸方向N43°40′Wを向け、傾斜角度7°30′に南西側の上甕がやや高く埋置されている。甕棺に使用される土器は上甕・下甕ともに鉢形土器で、接口部は上から2/3位まで淡黄灰白色粘土で目貼りされている。なお。接口部の上に別個体の小形甕の底部破片が乗り、下甕の口縁部が甕棺内に落ち込んでいる。何らかの攪乱が加わったものであろう。目貼り粘土の上にみられた甕底部以外に、壙内の上部から弥生土器片などが出土しているものの、図示しえる資料は少ない。なお、壙内下部および棺内からの遺物出土はみられなかった。また、甕棺下端の標高は54.85mである。

上　甕（図版24、第30図）




**第29図**　14～17号甕棺墓実測図（1/30）




**第30図**　14・16・23号甕棺使用土器実測図（1/6）

口径41.3cm、器高37.5cm、胴最大径39.7cm、底径11.0cmの大きさの鉢形土器。口縁部は逆Ｌ字形に外反し、口縁端部外面は面をなす。口縁部下に断面三角形凸帯が１条巡り、胴部はさほど膨らまない。肥厚する底部は外底面がレンズ状に浅く凹む。外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、黄橙色ないし橙褐色に焼成されるが、外面の一部は暗茶褐色を呈する。

下　甕（図版24、第30図）

口径45.2cm、器高34.8cm、胴最大径41.5cm、底径10.5cmの大きさの鉢形土器。口縁部は逆Ｌ字形に外反し、口縁端部外面は面をなす。口縁部下に断面三角形凸帯が１条巡り、胴部はさほど膨らまない。肥厚する底部は外底面がレンズ状に浅く凹む。外面はハケ目調整、内面はナデ調整され底部付近に指頭の凹凸が残る。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、橙褐色ないし黄茶褐色に焼成される。

墓壙内出土土器（第31図）

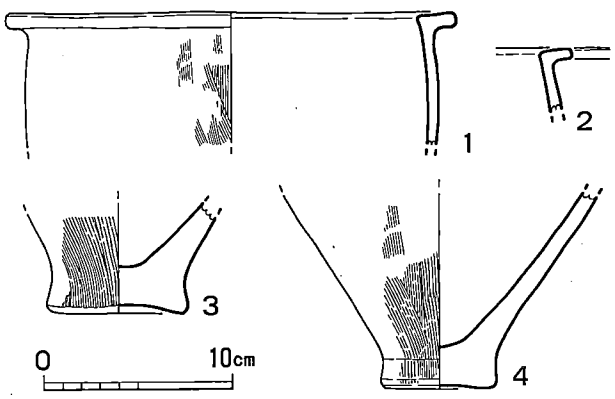
甕形土器（１～４）　墓壙内の上部堆積土から出土した資料である。１・２の口縁部破片は逆Ｌ字形の口縁部で、平坦な上面は僅かに内傾する。１では復原口径24.0cmの大きさ。胴部はさほど膨らまず、外面はハケ目調整される。３・４の底部はやや厚めで、外底面はレンズ状に凹む。胴部側の外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。これらの甕破片はいずれも、胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、暗黄褐色などに焼成されている。

甕棺使用土器は、上・下甕ともに中期前葉期のもので、墓壙内上部出土土器はむしろ中期中頃に近い時期のもので、甕棺埋葬後の攪乱が加わったものであろう。

**15号甕棺墓**（図版15-2、第29図）

14号甕棺墓の北側に隣接する。墓壙は、長さ1.3～1.5m、幅0.8mの隅丸長方形ないし楕円形プランで、深さ0.1～0.2m程度ながら、さらに南西側に深さ0.2m程の坑を掘り窪めて、甕棺を埋置している。壙内に後世の攪乱ピットが数ヶ所あり、これによって上甕胴部の一部が壊され、下甕口縁部片が棺内に転落している。

甕棺は接口式の合わせ口甕棺で、主軸方向N31°Eを向き、傾斜角度7°に南西側が高く据えられている。本来、隅丸長方形の墓壙の長




**第31図**　14号甕棺墓墓壙出土土器実測図（1/4）

軸に沿って南西側に横坑を穿って下甕底部側を挿入したものと思われるが、上甕はやや下がって発見された。小形甕を接口させているが、目貼り粘土は顕著ではない。

壙内、甕棺内からの若干の弥生土器片が混入出土したものの図示しえる資料はない。甕棺下端は標高55.3mの高さである。

上　甕（図版24、第27図）

口径30.5cm、器高40.2cm、胴最大径29.5cm、底径7.2cmの大きさの小形の甕形土器。口縁部はT字に近く内面側に突出する平坦口縁で、端部は丸みをもつ。胴部はやや膨らみ、厚く肥厚する底部は外底面がレンズ状に凹む。口縁部下に断続的に沈線状の痕跡が巡ることから本来凸帯が貼り付けられていたものとみられる。外面はハケ目調整、内面は板痕の残るナデで調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、黄茶褐色に焼成されるが、部分的に黒い色調を呈する。

下　甕（図版24、第27図）

口径32.2cm、器高42.5cm、胴最大径30.8cm、底径7.6cmの大きさの小形の甕形土器。口縁部はT字に近く内面側に突出する平坦口縁で、端部は丸みをもつ。口縁部下に断面三角形凸帯が1条巡る。胴部はやや膨らみ、厚く肥厚する底部は外底面がレンズ状に凹む。外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、黄茶褐色に焼成されるが、外面の一部は黒い色調を呈する。

甕棺使用土器は、上甕・下甕とも中期中頃に属するものである。

**16号甕棺墓**（図版15-3、第29図）

12号甕棺墓の約1m西側に位置して、17号・22号甕棺墓と一部重複しする。17号甕棺墓の上甕側墓壙の上に、16号甕棺墓の横坑が穿たれていることから17号甕棺墓よりも後出する甕棺墓であろう。

墓壙は、長さ1.5m、幅0.6mの長楕円形プランで、南東側は深さ0.2m前後しか残らないが、北西側に掘り窪められた横坑はさらに0.15m深い。

甕棺は接口式の合わせ口甕棺で、主軸方向N51°30′Wで、南西側が上甕とみられるが、埋置角度1°40′に北西側が高く据えられている。甕棺の接口部には目貼り粘土が上側から2/3程度まで顕著にみられる。なお、棺内外からの遺物出土はみられず、甕棺下端は標高55.25mである。

上　甕（図版25、第30図）

口径40.9cm、器高34.5cm、胴最大径36.8cm、底径9.2cmの大きさの鉢形土器。口縁部は逆L字形に外反し、肥厚するが口縁端部外面はやや面をなす。口縁部下に断面三角形凸帯が1条巡り、胴部は殆ど膨らまない。底部は外底面がレンズ状に僅かに凹む。内外面ともに全体にヘラ磨き調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、黄橙色に焼成されるが、灰黄褐

色や黒色を呈する部分もある。

下　甕（図版25、第30図）

口径37.8cm、器高43.0cm、胴最大径35.8cm、底径7.6cmの大きさの甕形土器。口縁部は肥厚気味で、端部は丸みをもつ。口縁部下に断面三角形凸帯が１条巡り、胴部は僅かに膨らむ。厚く肥厚する底部は外底面がレンズ状に凹む。外面はハケ目調整、内面は板痕の残るナデで調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、淡い橙茶褐色に焼成されるが、内面は黒い。

甕棺使用土器は、上甕・下甕ともに、中期初頭～前葉頃のものである。

**17号甕棺墓**（図版15-3･16-1、第29図）

16号甕棺墓の西側に隣接する甕棺墓で、16号甕棺墓より先行し、22号甕棺墓より後出するとみられる。後世のピットで攪乱されて、甕棺は陥没している。

墓壙は上部を16号甕棺墓に削られるが、長さ1.7m、幅0.9m、深さ0.6mの楕円形プランで、西側に下甕底部を挿入する横坑が穿たれていたようであり、壙底面は甕棺の膨らみにほぼ合致している。

甕棺は、主軸方向N81°30′Eを向き、東側の上甕底部が横坑に挿入された下甕底部よりも低い、傾斜角度５°に据えられている。下甕の胴部中程に後世の柱穴状ピットによる攪乱穴がある。接口式の合わせ甕棺だが、目貼り粘土は上部に僅かにみられたがさほど顕著でない。甕棺内外からの遺物出土はみられず、甕棺下端の標高は55.0mである。

上　甕（図版25、第32図）

口径45.0cm、器高38.7cm、胴最大径42.2cm、底径9.8cmの大きさの鉢形土器。口縁部は逆Ｌ字形に外反し、内面側に突出気味で、肥厚する口縁端部外面はやや面をなす。口縁部下に断面三角形凸帯が１条巡り、胴部は殆ど膨らまない。底部は外底面がレンズ状に僅かに凹む。外面はハケ目が残るもののハケ目をナデ消すかヘラ磨き調整しているようである。内面は粗めのヘラ磨き痕が残る。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成される。

下　甕（第32図）

口径43.6cm、器高68.0cm、胴最大径56.5cm、底径11.5cmの大きさの甕形土器。口縁部は逆Ｌ字状に外反するが、肥厚気味の端部外面は面をなす。口縁部下に鈍い断面Ｍ字形凸帯が１条巡り、胴部が膨らみ、肥厚する底部は外底面がレンズ状に凹む。外面はハケ目調整、内面は粗めのヘラ磨きで調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、茶褐色に焼成されるが、内面は暗茶褐色を呈する。

上甕、下甕ともに、中期初頭～前葉期のものだが、上甕の胴部が膨らまないことから、中頃に近い前葉期であろう。

### 18号甕棺墓

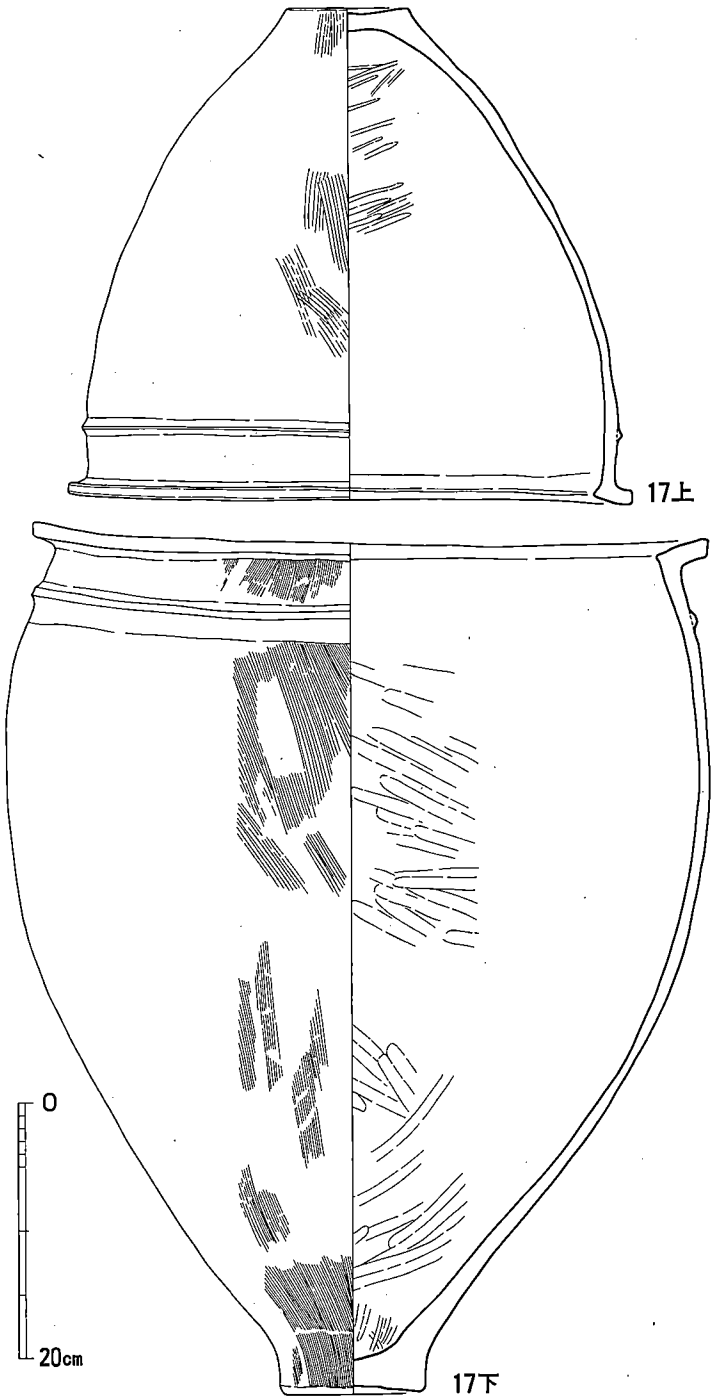
（図版16-2、第33図）

8号甕棺墓の北東方に隣接して、東側に位置する25号甕棺墓と一部重複する。

墓壙は、長さ1.3m、幅0.9mの不整方形プランで、階段状の壙底をもつが、最も深い南西側で深さ0.5mを残す。

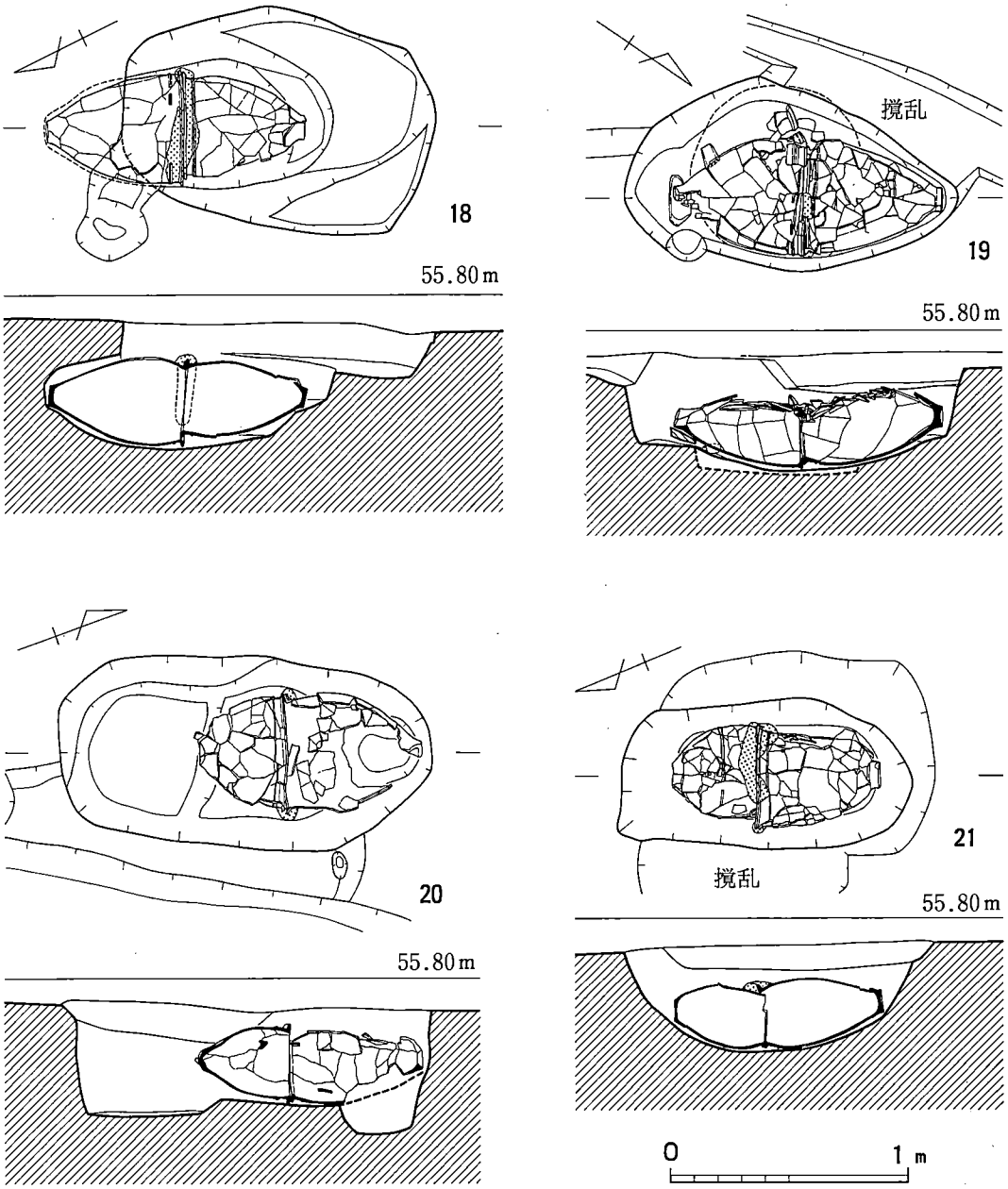
甕棺は、南南西—北北東方向のN26°Eに主軸方向を向け、北北東側壁に横坑を穿ち下甕底部を挿入する接口式の合わせ口甕棺だが、下甕底部よりも上甕底部が僅かに低い傾斜角度1°に埋置されている。接口部は黄灰色の粘土で下位まで目貼りされている。下甕は後世の柱穴状ピットで攪乱され、甕の器壁も脆弱なために遺存状況はやや悪い。甕棺内外からの遺物出土はみられなかった。甕棺下端の標高は55.2mである。

上　甕（図版25、第34図）




**第32図**　17号甕棺使用土器実測図（1/6）

口径38.7cm、器高50.3cm、胴最大径39.3cm、底径9.5cmの大きさの甕形土器。口縁部は逆Ｌ字形断面に近く、上面は平坦で端部は丸みをもつ。胴部は膨らみ、窄まった底部は厚めに肥厚して外底面がレンズ状に僅か凹む。口縁部下にＭ字形断面の凸帯が１条巡る。外面は叩き目の残




**第33図**　18～21号甕棺墓実測図（1/30）

るハケ目調整、内面は板痕の残るナデで調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、灰黄褐色ないし淡橙褐色に焼成されるが、部分的に黒い色調を呈する。

下　甕（図版25、第34図）

胴部が脆弱で、巧く復原し得ないが、復原口径42.0cm前後、推定器高57.0cm、胴最大径39.6cm、底径8.8cmの大きさの甕形土器。逆Ｌ字状断面の口縁部は、僅かに内傾する上面が平坦で、端部は丸みをもつ。口縁部下には低い三角形断面の凸帯が１条巡り、胴部はやや膨らむ。厚く肥厚する底部は外底面がレンズ状に凹む。外面は磨滅するがハケ目調整らしく、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、淡褐色に焼成される。

甕棺使用土器は、中期前葉～中頃に属するものであろう。

**19号甕棺墓**（図版16-3、第33図）

甕棺墓群の北西隅部に占地して、１号甕棺墓の北西、３号甕棺墓の北北東約1.5ｍに位置する甕棺墓である。葡萄畑の肥料溝などの攪乱で、墓壙の西側を削られている。墓壙は、長さ1.5ｍ弱、幅0.8ｍの長楕円形プランで、底までの深さは0.5ｍを残す。南西側の甕棺底部と壙底の僅かな空間には、緑泥片岩扁平石で隙間を支えている。また中央の壙底は、僅かに炭化物を含む黄白色粘土で充填される円形坑と重複している。この坑は直径0.7～0.8ｍ、深さ0.05ｍ前後に残されていて、甕棺よりも先行する。

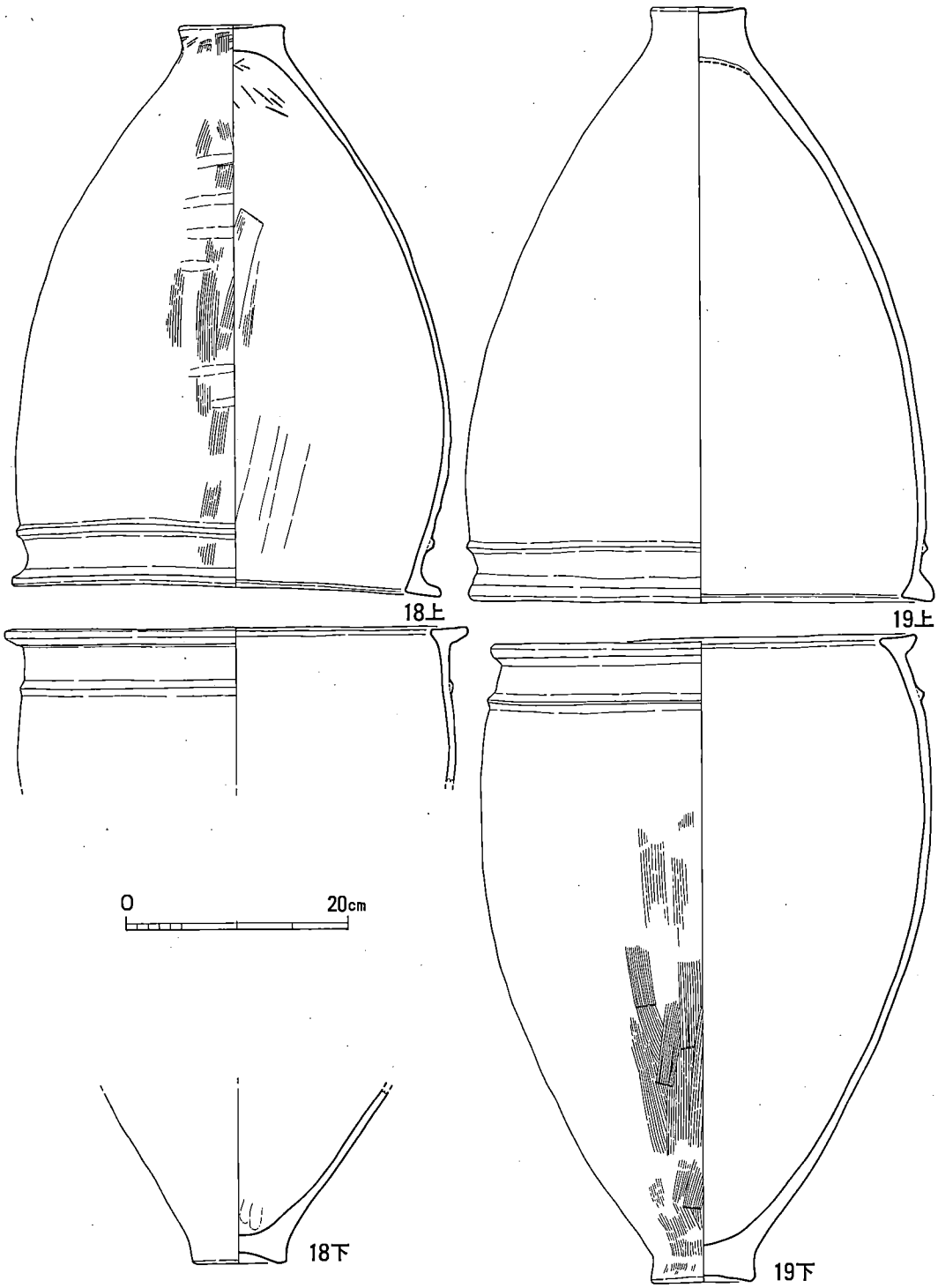
甕棺は主軸方向 N34°W を向き、南東側甕が上甕であろう。埋置角度は 0°20′で水平に近いが、僅かに上甕側が高い傾斜を有している。接口式の合わせ甕棺で、目貼り粘土は接口部に僅かに残る。甕棺内からの遺物出土はみられなかった。また壙内の南端部から混入したとみられる、弥生土器片が若干出土した。また、先行する円形坑からは粘土以外の遺物は出土しなかった。なお、甕棺下端の標高は55.25ｍである。

上　甕（図版26、第34図）

口径42.0cm、器高53.0cm、胴最大径41.5cm、底径8.6cmの大きさの甕形土器。口縁部は肥厚する逆Ｌ字形で、平坦な上面は僅かに内傾する。口縁部直下に断面三角形凸帯が１条巡り、胴部はやや膨らみ、窄まった底部は厚く外底面がレンズ状に僅かに凹む。外面は全体に磨滅風化が進み、内面はナデ調整らしい。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、黄褐色に焼成されるが、灰色っぽい色調を呈する部分もある。

下　甕（図版26、第34図）

口径38.5cm、器高57.7cm、胴最大径40.7cm、底径9.4cmの大きさの甕形土器。逆Ｌ字形で肥厚する口縁部は上面がやや内傾し、端部は丸みをもつ。口縁部直下に断面三角形凸帯が１条巡り、胴部は僅かに膨らむ。窄まった底部は厚く肥厚して外底面がレンズ状に凹む。外面はハケ目調整、内面はナデで調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含み、黄褐色ないし暗黄褐



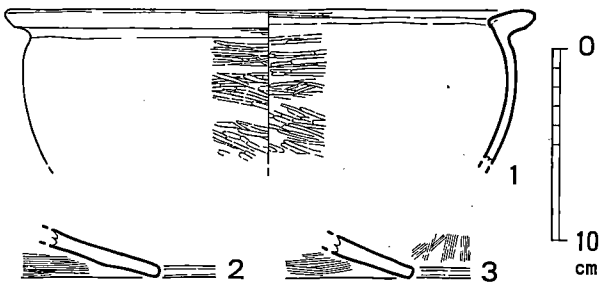

**第34図**　18・19号甕棺使用土器実測図（1/6）

色に焼成される。

墓壙内出土土器（第35図）

鉢形土器（1）　復原口径28.0cm、胴最大径26.3cmの大きさの胴部が扁球形に膨らむ器形で、口縁部は逆L字形に肥厚する。内外面ともにヘラ磨き調整される。

高　杯？（2・3）　ともに裾部破片で大きく開き、内外の器面をハケ目調整される。




**第35図**　19号甕棺墓墓壙出土土器実測図（1/4）

甕棺使用土器は中期初頭期のもので、墓壙内出土土器は中期中頃のものであろう。

**20号甕棺墓**（図版17-1、第33図）

18号甕棺墓の北東方に隣接する甕棺墓である。

墓壙は、長さ1.6m、幅0.8mの長楕円形プランで、深さ0.4mを残す。北端部に後世の柱穴状ピットで攪乱された部分があり、甕の下半部が大きく攪乱されている。壙南端部と甕棺の間には長さ0.5m前後の空間があり、壙底面も幾分か深めである。

甕棺は、下甕に甕形土器、上甕に鉢形土器を使用した接口式の合わせ口甕棺で、主軸方向N19°30′Eを向き、傾斜角度がほぼ水平に埋置される。目貼り粘土は削平・攪乱を受けたためか、接口部両脇に粘土が残るものの顕著ではない。上甕の口縁部の一部は甕棺内に転落し、上甕の底部は上からの圧力がかかり押し潰された状態で発見された。甕棺内外からの遺物出土はみられず、甕棺下端の標高は55.3mを測る。

上　甕（図版26、第36図）

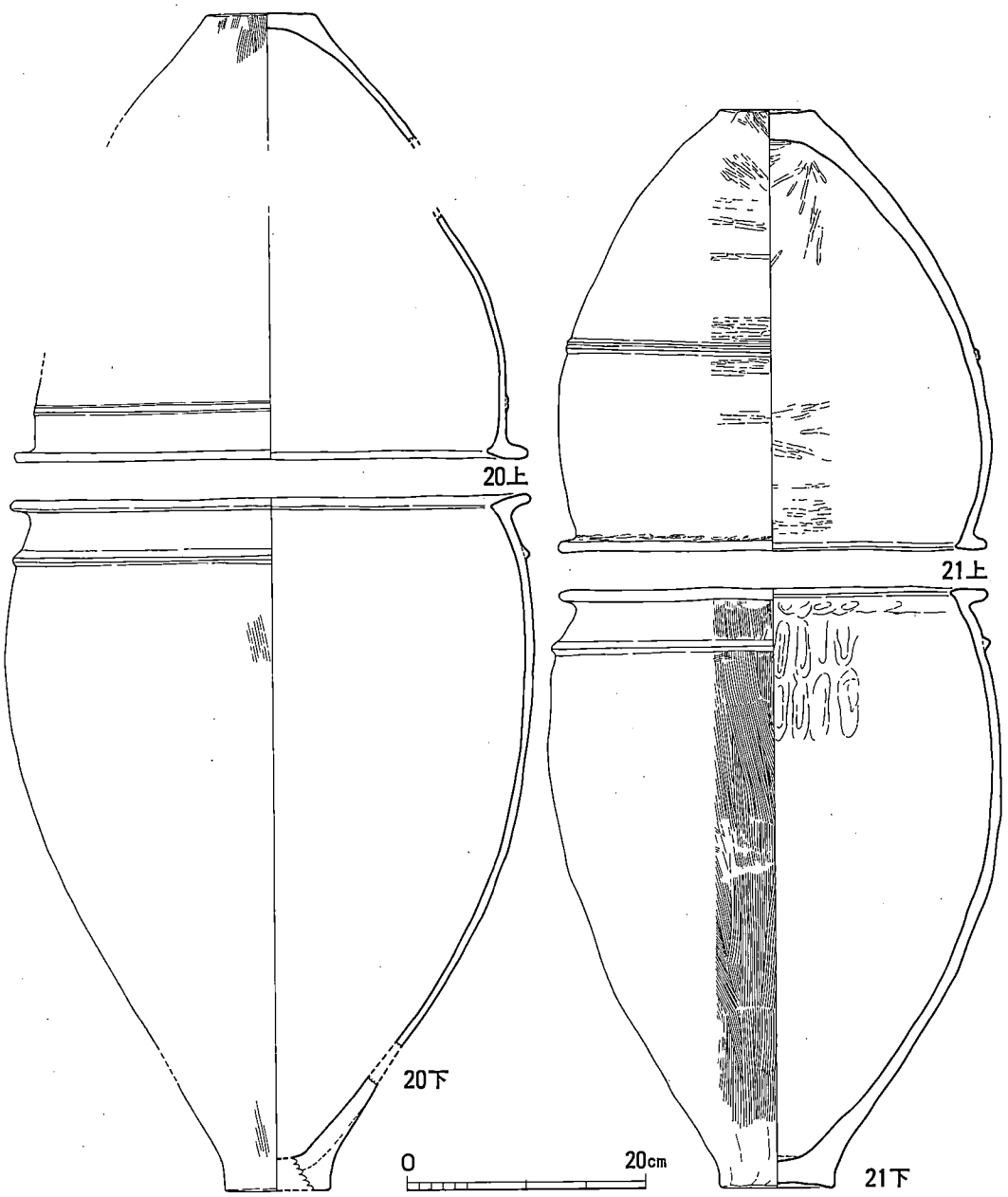
口径48.3cm、推定器高33.0cm、胴最大径39.7cm、底径9.2cmの大きさの鉢形土器。口縁部はT字に近く内面側に突出する平坦口縁で、上面がやや内傾し端部は丸みをもつ。胴部はやや膨らみ、やや肥厚する底部はほぼ平底である。口縁部下にM字形断面の扁平な凸帯が1条巡る。外面はハケ目調整らしく、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、淡橙色ないし淡茶褐色に焼成される。

下　甕（図版26、第36図）

口径43.7cm、器高55.5cm、胴最大径44.5cm、底径9.0cmの大きさの甕形土器。口縁部は逆L字形断面で内傾し、内面側端部は尖るが、端部外面は丸みをもつ。口縁部下に断面三角形凸帯が1条巡り、胴部は膨らむ。窄まった底部は厚く肥厚するが外底面は欠損する。外面は風化磨滅するものの一部ハケ目が残り、内面はナデ調整らしい。胎土に砂粒・赤褐色粒・角閃石粒を含

み、橙褐色ないし淡赤茶褐色に焼成される。

甕棺使用土器の特徴から、中期中頃に属するとみられる。




**第36図**　20・21号甕棺使用土器実測図（1/6）

**21号甕棺墓**（図版17-2、第33図）

20号甕棺墓約２ｍ北西方に位置する。墓壙は長さ1.3ｍ、幅0.8ｍの不整方形プランで、一段下がった部分では長さ1.2ｍ、幅0.6ｍの広さの長楕円形に近いプランとなる。壙底は船底に近い形状で、深さ0.4前後に残る。

甕棺は、下甕に甕形土器、上甕に鉢形土器を用いた、接口式の合わせ口甕棺で、主軸方向をN22°Eに向け、水平に近いものの南西側の下甕が僅かに高い傾斜角度２°30′に埋置される。

接口部に施設された目貼り粘土は顕著に残されていたが、甕棺内からの遺物出土はみられず、墓壙内からは図示しえないものの弥生土器片が若干出土した。なお、甕棺下端の標高は55.25ｍを測る。

上　甕（図版26、第36図）

口径36.0cm、器高36.5cm、胴最大径36.3cm、底径8.0cmの大きさの甕形土器。口縁部は逆Ｌ字形断面で僅かに内傾し、口縁端部外面は丸みをもつ。胴部は膨らみ、胴最大径の位置のやや下位にＭ字形断面凸帯が１条巡る。厚めの底部は外底面がレンズ状に僅かに凹む。内外面ともに全体にヘラ磨き調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、黄褐色ないし黄茶褐色に焼成されるが、内面の大半は黒っぽい色調を呈する。

下　甕（図版26、第36図）

口径36.0cm、器高49.9cm、胴最大径38.0cm、底径9.7cmの大きさの甕形土器。口縁部は内傾気味の逆Ｌ字形断面で、内面側に突出気味、端部は丸みをもつ。胴部に向かって膨らむ口縁部下に断面三角形凸帯が１条巡る。厚めの底部は外底面がレンズ状に凹む。外面はハケ目調整、内面は口縁部側に指頭痕の残るナデで調整される。胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石粒を含み、黄茶褐色に焼成されるが、外面の一部はやや黒っぽい。

甕棺使用土器の特徴から、中期中頃に近い前半頃に属するとみられる。

**22号甕棺墓**（図版17-3、第37図）

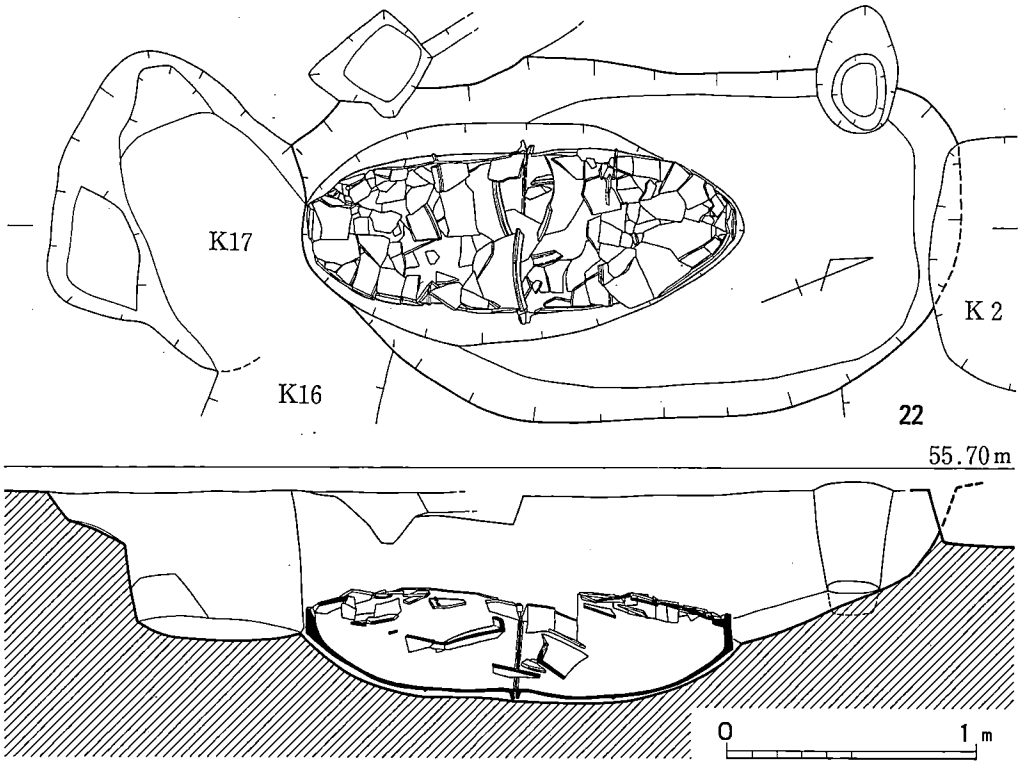
16号・17号甕棺墓の北側に隣接して、両者と墓壙の一部が重複する。

墓壙は長さ2.0ｍ、幅1.4ｍの隅丸長方形プランで、深さ0.6ｍを残すが、甕棺の規模だけ更に掘り下げて、下甕底部側を挿入する横坑を穿ったようで、全長2.6ｍ、深さの最大値0.8ｍを測る。

甕棺は接口式の合わせ口甕棺で、主軸方向N22°Eを向き、南側の下甕が高い４°10′の傾斜角度に埋置される。接口部の目貼り粘土は不明で、甕棺下端の標高は54.8ｍを測る。墓壙内からは弥生土器片などが出土したものの、いずれも小破片のため図示しえない。

上　甕（図版28、第38図）

口径60.7cm、器高84.0cm、胴最大径59.5cm、底径13.0cmの大きさの大形甕。口縁部は逆Ｌ字形断面で、上面はやや内傾し、口縁端部外面は浅く凹む。緩やかに膨らむ胴部をもち、胴最大




**第37図**　22号甕棺墓実測図（1/30）

径の位置のやや下位に台形に近い三角形断面の凸帯が１条巡る。やや厚めの底部は外底面が上げ底状に僅かに凹む。内外面ともに全体に板痕の残るナデないし磨きで調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、暗黄褐色ないし黄茶褐色に焼成される。

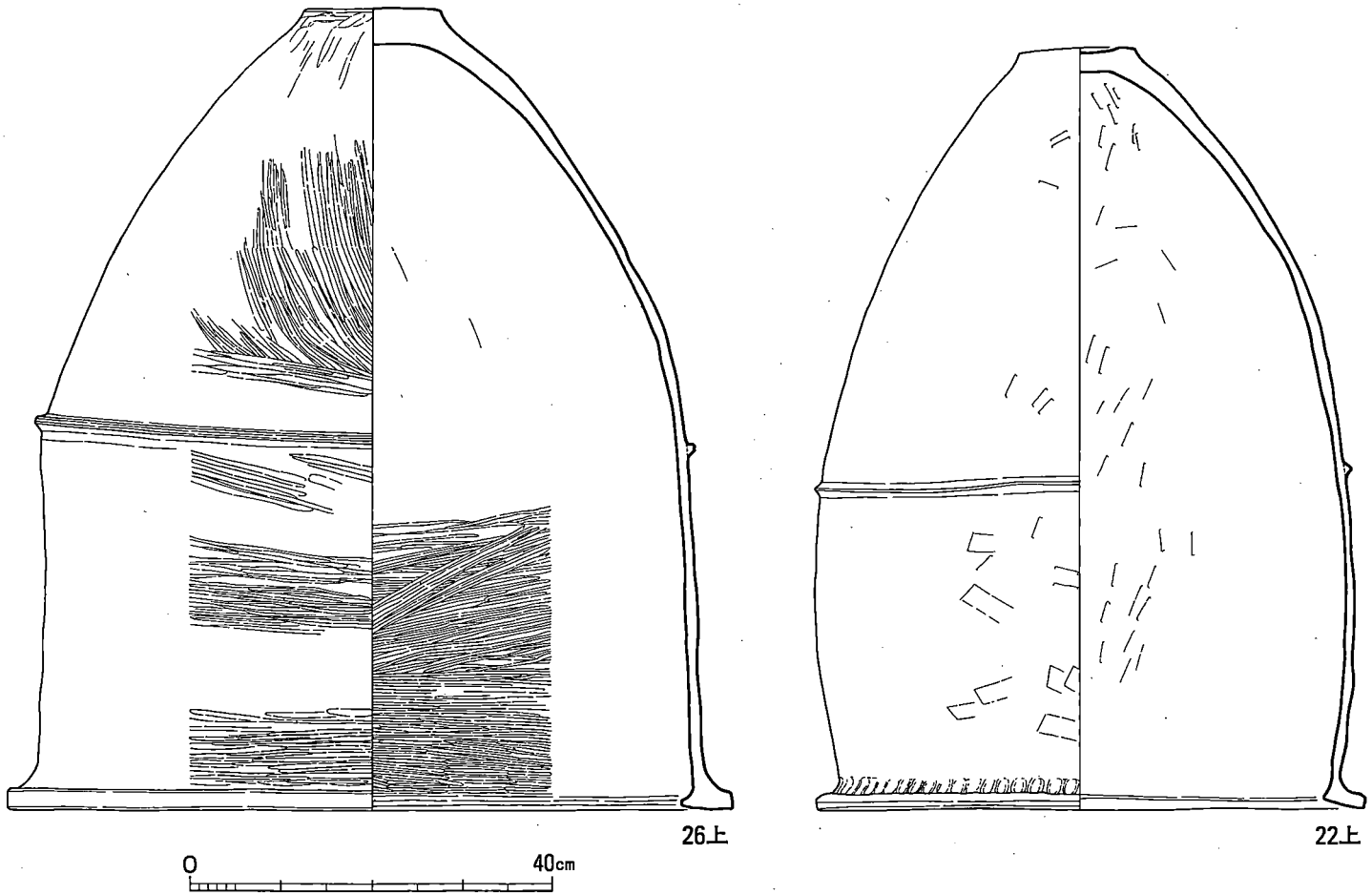
下　甕（図版28、第39図）

底部を失うが、口径64.4cm、残存器高84.4cm、胴最大径61.5cmの大きさの大形甕。口縁部は肥厚気味で上面が平らな逆Ｌ字形断面で、内面側にはつまんだように突出し、端部外面は浅く凹む。胴部は余り膨らまないが、胴部最大径の位置に台形に近い断面三角形凸帯が１条巡る。外面はヘラ磨きで調整されて頸部に指押さえ痕が明瞭に残る。一方内面は風化磨滅が進むがナデ調整らしい。胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石粒を含み、暗茶褐色ないし茶褐色に焼成される。

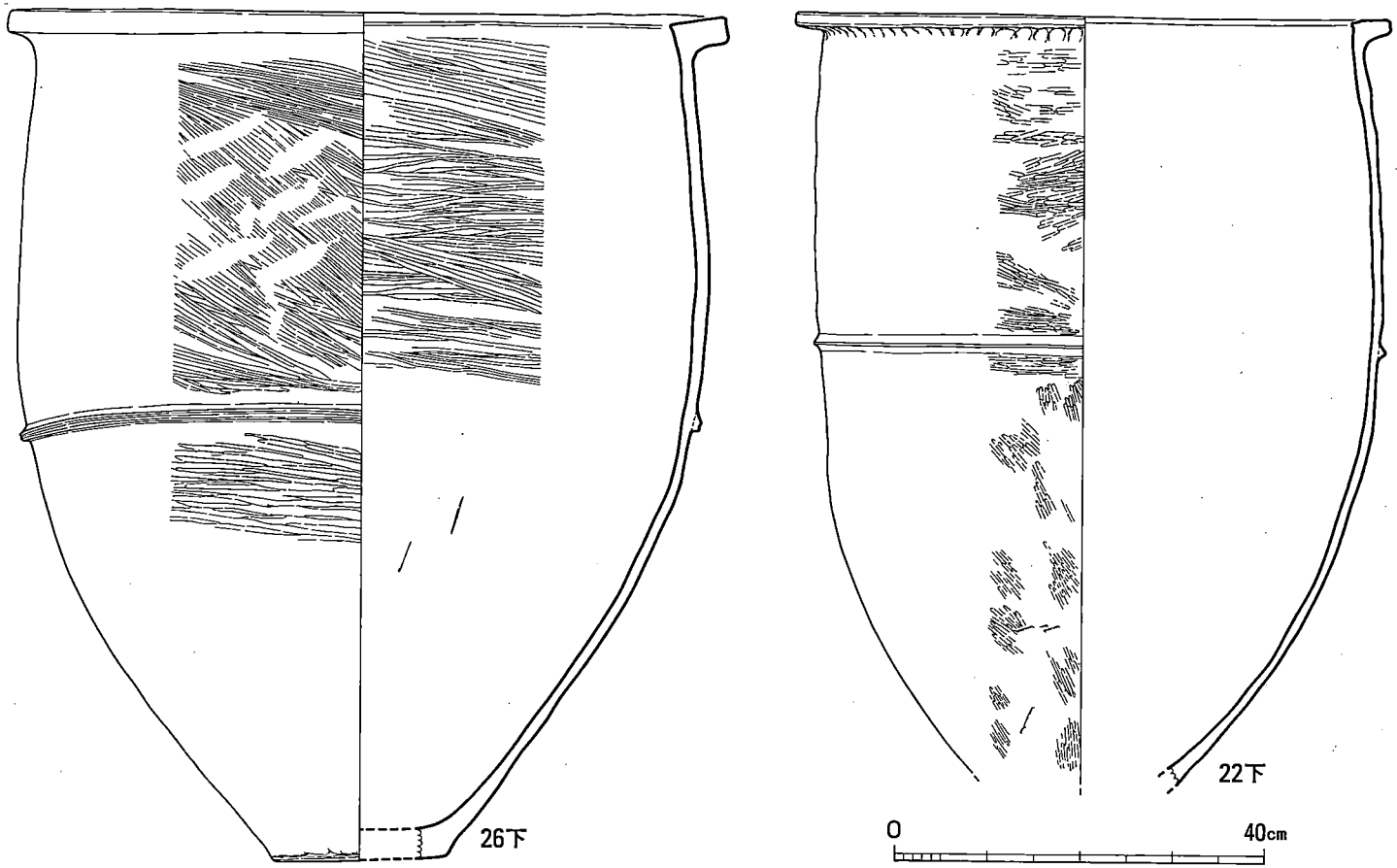
甕棺使用土器の特徴から、中期初頭期に属するとみられる。

**23号甕棺墓**（図版18-1、第40図）

調査区東部の６号甕棺墓と７号甕棺墓に挟まれた位置に占地する。後世のピットや溝で攪乱される。




**第38図**　22・26号甕棺上甕使用土器実測図（1/8）



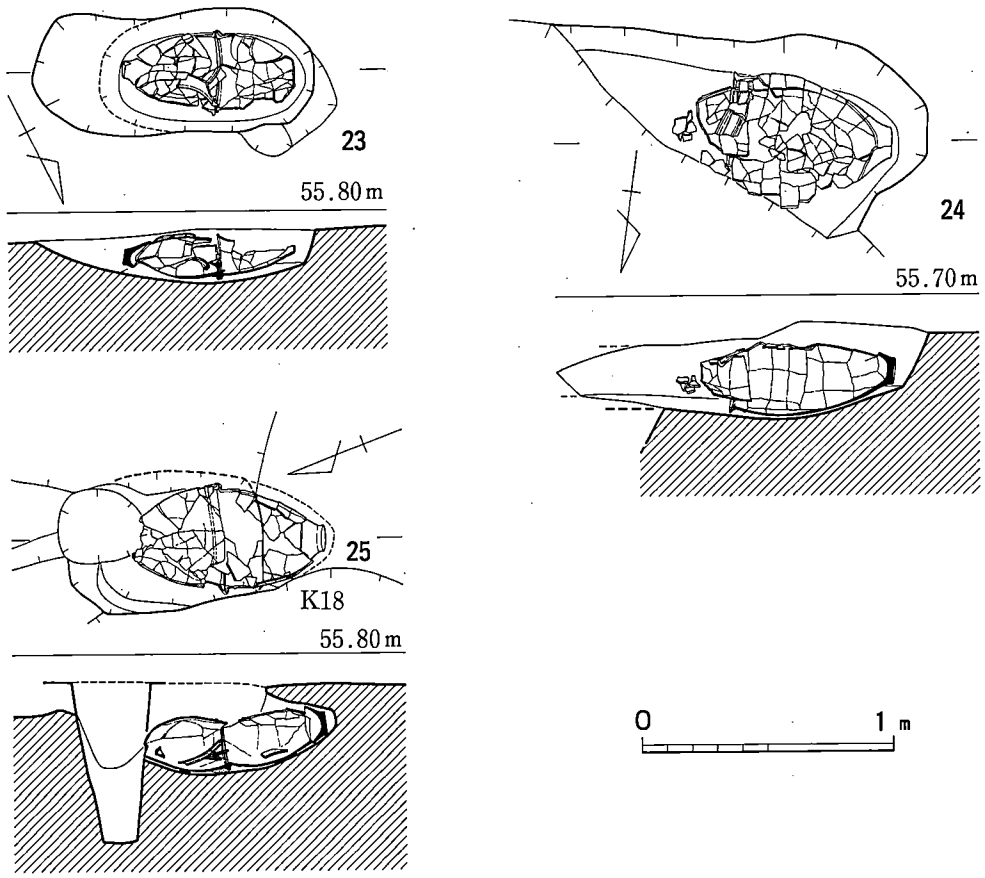

**第39図**　22・26号甕棺下甕使用土器実測図（1/8）

墓壙は長さ1.1m強、幅0.6mの長楕円形プランで、南東—北西方向に軸があり、船底形の壙底は深さ0.25mに残る。

甕棺は接口式の合わせ口甕棺で、主軸方向N63°30′Wを向き、傾斜角度3°30′と水平に近く埋置されるが、壙内の空間が広い南東側を上甕側とみたとき、上甕底部が下甕底部よりも僅かに低い位置になる。上下甕ともに上半部を削平され、大半を失う下甕は底部も残らない。接口部の目貼り粘土施設は不明で、甕棺内外からの遺物出土はみられなかった。甕棺下端の標高は55.5mを測る。

上　甕（図版27、第30図）

口径28.2cm、器高35.0cm、胴最大径26.4cm、底径6.4cmの小形の甕形土器。口縁部は肥厚気味の逆L字形断面で、上面はやや内傾して内面側にやや突出し、口縁端部は丸みをもつ。胴部は余り膨らまず、厚めの底部は外底面が上げ底状に凹む。外面にはハケ目が残り、磨滅する内面はナデ調整らしい。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、黄褐色ないし黄茶褐色に焼




**第40図**　23～25号甕棺墓実測図（1/30）

成される。

下　甕（図版27、第30図）

胴部の大半と底部を失い全容は分からないが、口径27.2cm、口縁部の残存高6.3cm、胴最大径24.5cmの小形の甕形土器。口縁部は肥厚気味の逆Ｌ字形断面で、やや内傾して内面側にわずかに突出し、端部外面は丸みをもつ。胴部は余り膨らまない。外面はハケ目、内面は風化磨滅するがナデ調整らしい。胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石粒を含み、黄茶褐色に焼成される。

甕棺使用土器の特徴から、中期初頭～前葉期の甕棺であろう。

**24号甕棺墓**（図版18-2、第40図）

農道敷調査区の北端で発見された甕棺墓で、21号甕棺墓の約３ｍ北東側に位置するが、北側は妙見川に面した崖側で大きく削り去られている。

墓壙は、北東側を大きく削り取られているが、長さ1.5ｍ以上、幅0.8ｍの長楕円形らしいプランをなし、深さ0.3ｍ強の深さである。

甕棺は、口縁部を打ち欠いた上甕が、下甕の口縁部内に挿入される、挿入式の合わせ口甕棺で、主軸方向Ｎ63°30′Ｅを向き、傾斜角度３°30′と水平に近いものの西側が僅かに高い角度に埋置されている。

目貼り粘土は不明で、甕棺内外からの遺物出土はみられなかった。甕棺下端の標高は55.2ｍを測る。

上　甕（図版27、第41図）

復原口径39.2cm、残存器高7.0cmの大きさ甕形土器。口縁部は肥厚気味の逆Ｌ字形断面で、上面がやや内傾して、端部は丸みをもつ。胴部へは余り膨らまず、口縁部したに断面三角形凸帯が１条巡る。内外面ともに風化磨滅が進み調整手法は不明だが、内面はナデ調整であろう。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、黄褐色に焼成される。

下　甕（図版27、第41図）

口径45.7cm、器高60.8cm、胴最大径49.0cmの大きさの甕形土器。口縁部は上面が内傾する逆Ｌ字形断面で、端部外面は丸みをもつ。胴部へ向かって膨らむ口縁部下に低めの三角形断面凸帯が１条巡る。内外面ともに風化磨滅するが、内面はナデ調整らしい。胎土に砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石粒を含み、灰黄褐色ないし橙褐色に焼成される。

甕棺使用土器の特徴から、中期前半頃の時期の甕棺とみられるが、上甕の胴部の特徴は中頃に近い。

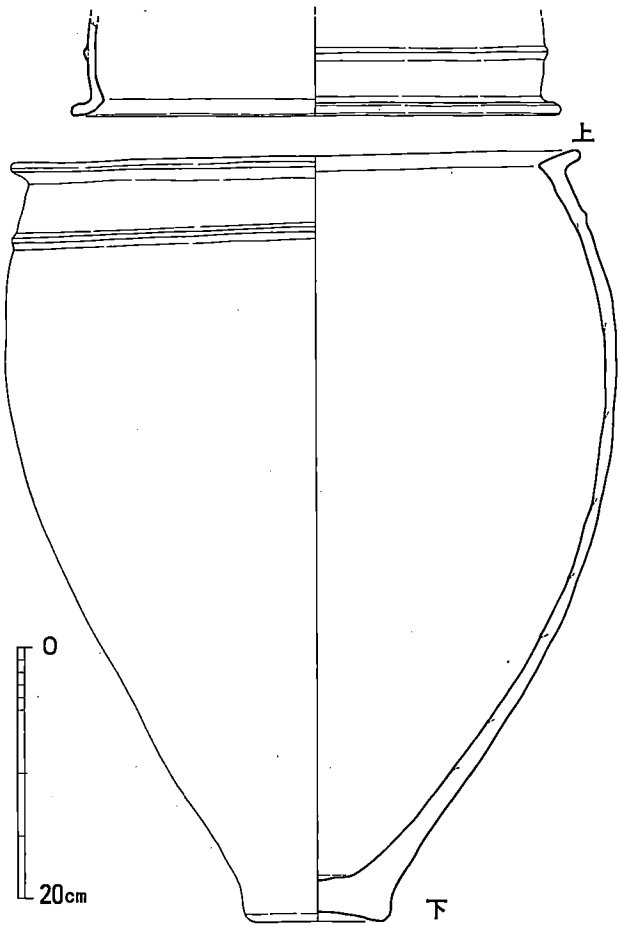
**25号甕棺墓**（図版18-3、第40図）

調査区北部に占地していて、18号甕棺墓の東側に隣接し、20号甕棺墓の南方に位置する。

墓壙は、長さ0.7m強、幅0.6m前後の隅丸長方形ないし楕円形プランで、深さ0.1～0.2m程度で、南側周壁に下甕底部を挿入する横坑が掘り込まれている。また、壙内の北側には後世の柱穴状ピットが掘り込まれ、上甕底部を失う。

甕棺は、上下甕ともに甕形土器を用いた接口式の合わせ口甕棺で、目貼り粘土が壙底までみとめられる。主軸方向はN21°30′Eを向き、傾斜角度7°に南西側の下甕底部が高く据えて埋置されている。

壙内、甕棺内からの遺物出土はみられなかった。甕棺下端の標高は55.3mを測る。




**第41図**　24号甕棺使用土器実測図（1/6）

上　甕（図版27、第24図）

底部を失うが、口径33.2cm、残存器高35.5cm、胴最大径32.2cmの小形甕形土器。口縁部は逆Ｌ字形断面で、平坦な上面は端部がつまみ出し気味で、端部外面は面をなす。緩やかに膨らむ胴部をもち、口縁部下にＭ字形断面凸帯が１条巡る。外面はハケ目調整、内面は板痕の残る板ナデないしナデ調整らしい。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含み、茶褐色ないし黄茶褐色に焼成され、底部側外面は黒っぽい。

下　甕（図版27、第24図）

口径34.7cm、器高39.5cm、胴最大径34.8cm、底径9.3cmの小形甕形土器。口縁部は逆Ｌ字形断面で、平坦な上面は内傾し、端部はつまみ上げ気味となる。胴部は緩やかに膨らみ、窄まった底部はやや厚めで、外底面がレンズ状に凹む。口縁部下には１条の断面三角形凸帯が巡る。外面はハケ目、内面はナデで調整される。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石粒を含み、橙

褐色ないし黄茶褐色に焼成されるが、外面の胴下半で帯状の黒っぽい色調の部分がみられる。

甕棺使用土器の特徴から、中期前半頃の甕棺とみられる。

**26号甕棺墓**（図版19-1･2、第42図）

2号甕棺墓の北側にあり、21号甕棺墓との間に位置するが、2号甕棺墓に先行する甕棺墓である。

墓壙は、長さ3.4m、幅2.1mの長楕円形プランで、深さ0.9m前後を有すが、東側には幅0.3～0.4mのテラスがあり、北東側は長さ0.7m程の余裕がある。

甕棺は、接口式の合わせ口甕棺で、主軸方向N38°Eを向き、北東側が上甕とみられるが、埋置角度1°に南東側の下甕側が高く据えられている。甕棺の接口部には目貼り粘土が施設されるが、全体に西側に多く、僅かながら壙底にまで及ぶ。棺内からの遺物出土はみられず、甕棺下端の標高は54.75mを測る。壙内からは縄文・弥生土器片や、敲石・削器などの石器や石片が出土したが、別項で触れる石器以外には、図示しえる資料は少ない。

上　甕（図版28、第38図）

口径80.0cm、器高88.5cm、胴最大径75.2cm、底径15.2cmの大きさの大形甕。口縁部は上面が僅かに内傾するものの、肥厚して内面端部が突出しT字状断面に近い。口唇端部はつまみ気味で、端部外面は面をなす。胴部はほとんど膨らまないが、胴最大径の位置にM字形断面の凸帯が1条巡る。やや厚めの底部は外底面が平坦にナデ調整される。胴部は内外面ともにヘラ磨き調整され、内面の胴下半部は板ナデ調整の板痕が残る。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を含むが精良で、暗茶褐色ないし茶褐色に焼成される。

下　甕（図版28、第39図）

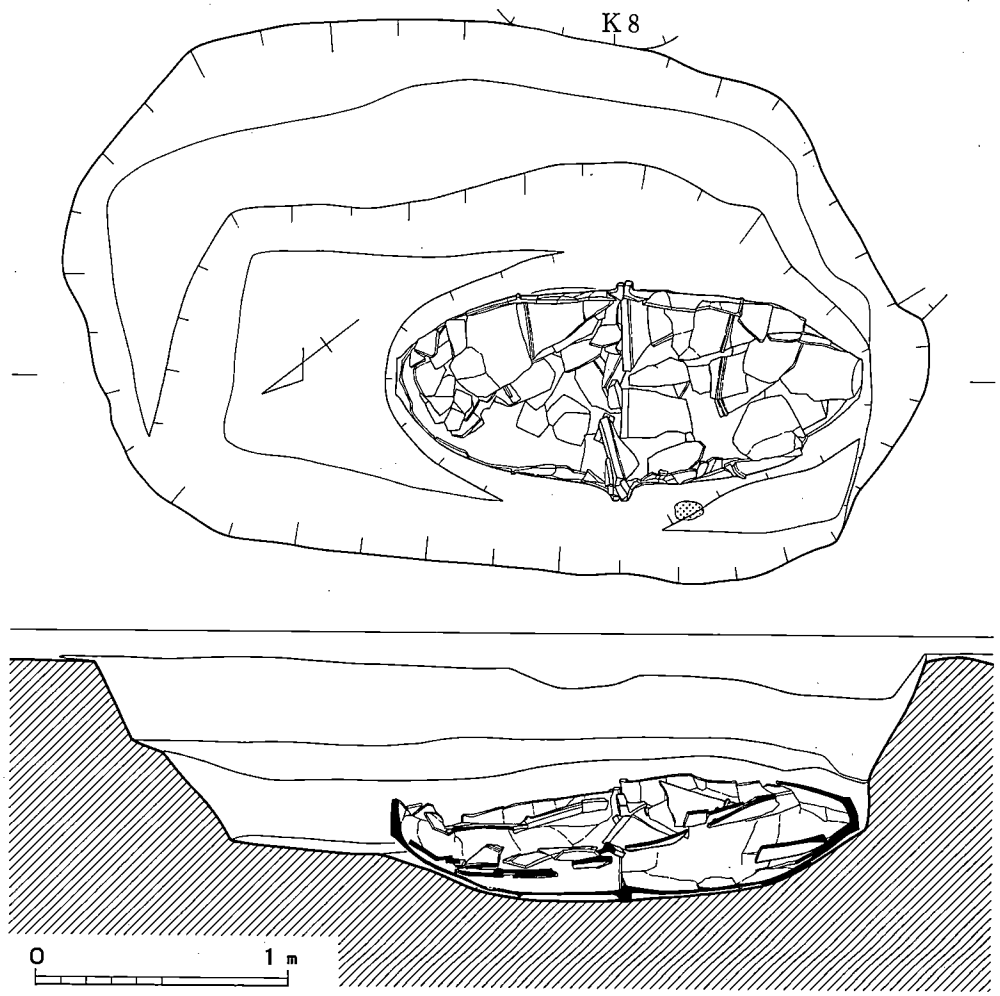
口径78.5cm、器高92.5cm、胴最大径75.0cm、底径19.2cmの大きさの大形甕。口縁部は肥厚する逆L字形断面で、上面はやや内傾し、口縁端部外面は面をなす。胴部は極緩やかに膨らみ、胴部最大径の位置付近にM字形断面凸帯が1条巡る。内外面ともにヘラ磨き調整されるが、内面の胴下半には板ナデ調整の板痕が残る。胎土は細砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石粒を含むが精良で、暗茶褐色ないし茶褐色に焼成される。

石　器（図版40、第82図）

敲　石（12）　別項の縄文時代の遺物で記述するが、この石器は弥生時代前期末頃まで多様される種類のものであり、弥生時代に属する可能性もある。

削　器（16）　別項の縄文時代の項で記述する。

甕棺使用土器の特徴からみて、弥生前期の特徴を残した、中期初頭から前葉頃のものとみられる。



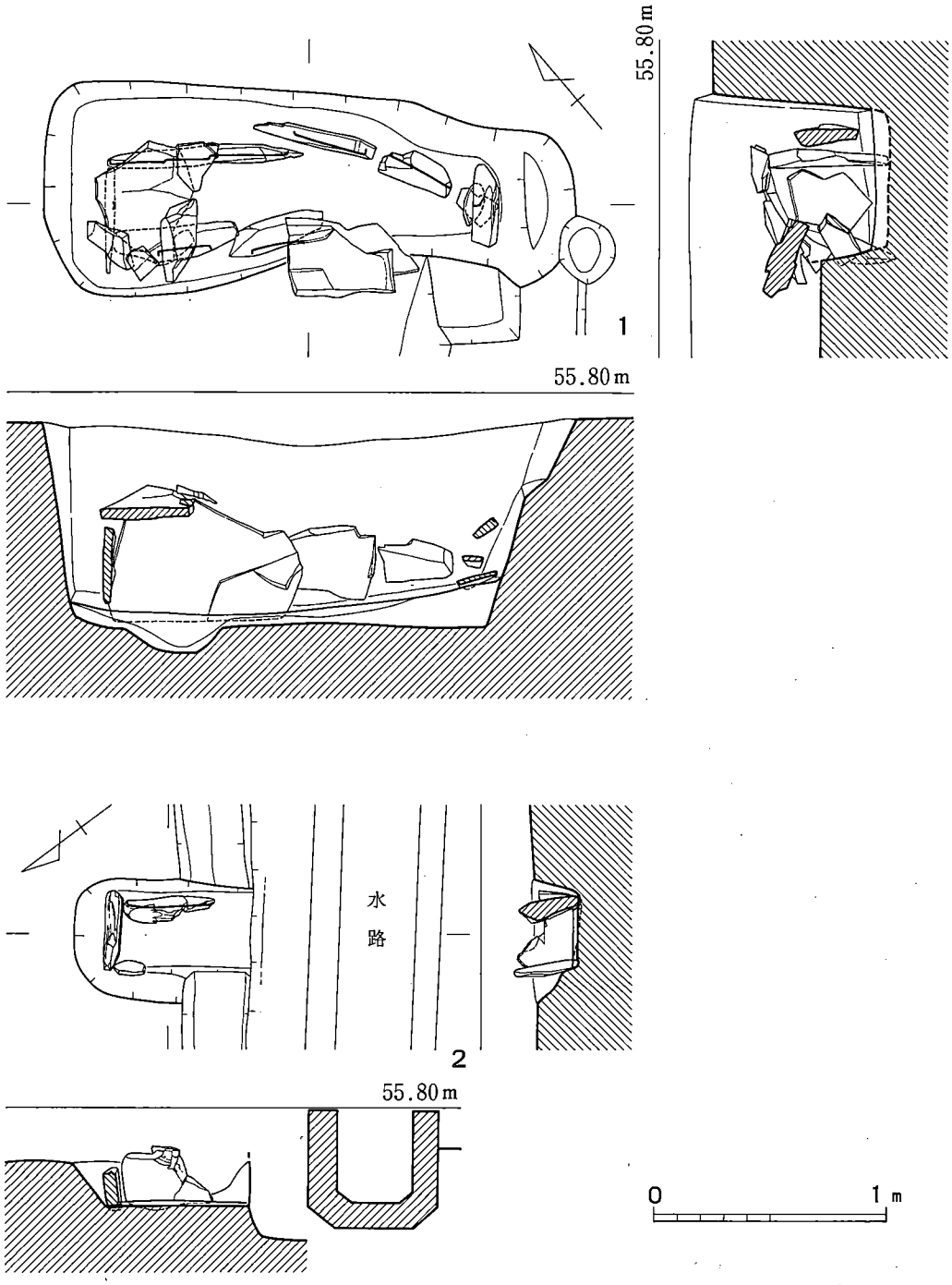

**第42図**　26号甕棺墓実測図（1/30）

## （2）石棺墓

**1号石棺墓**（図版29-1、第43図）

20号甕棺墓の東側に直交して配され、方形竪穴を切っている。墓壙は隅丸長方形を呈し、長軸228cm、短軸91cm、深さ85cmを測る。後世の掘削により石材が抜き取られ、蓋石は1枚を留めるにすぎない。側板は東側が3枚、西側も3枚であろうが、南端の石は浮いた状態である。北側が頭位であるが、屍床面は足下側に上がっている。主軸方位はN49°Wを示す。墓壙の埋土中からは弥生土器の小片が出土している。

出土土器（第44図）




**第43図**　1・2号石棺墓実測図（1/30）

1は胴部が丸みを帯びることから鉢になろう。口縁部は逆L字形を呈し、口径は18.4cmに復原した。器面調整は外面ハケ目、内面指オサエの後ナデによる。2は甕の底部破片で、復原底径8.4cm。器面調整はナデにより、外面には指頭圧痕が付く。

**2号石棺墓**（図版29-2、第43図）

1号石棺墓の北東に位置し、同石棺墓と直交して配置される。墓壙は隅丸長方形を呈するが、水路に切られているため長軸は102cmの遺存状態である。短軸は53cmで、深さは削平により19cmを測るにすぎない。石材は抜き取られ、北側小口石と両側板1枚を残す程度である。側板の基部には部分的に粘土を入れて押さえている。主軸方位はN43°Eを示す。副葬品・共伴土器の出土はなかった。

## （3）木棺墓

甕棺墓と長軸を等しくして配列され、総数3基検出した。本跡の木棺墓の形態には、

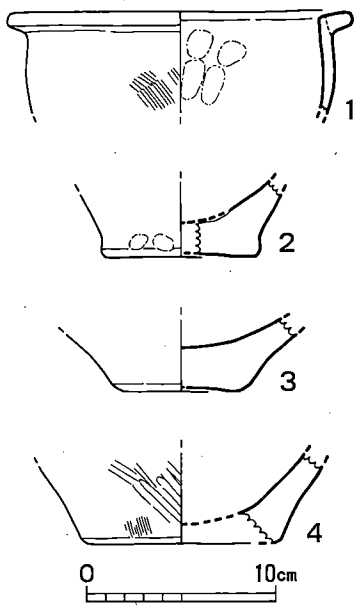
I類　両小口に石を立てたもの（1号木棺墓）

II類　小口・側壁とも板を立てたもの（2・3号木棺墓）

の2タイプがある。何れも、副葬品・共伴土器を有しておらず、時期は明確にし難いが、弥生中期前半の甕棺墓に切られている木棺墓があるので、大略弥生中期初頭～前半頃であろう。

**1号木棺墓**（図版30-1·2、第45図）

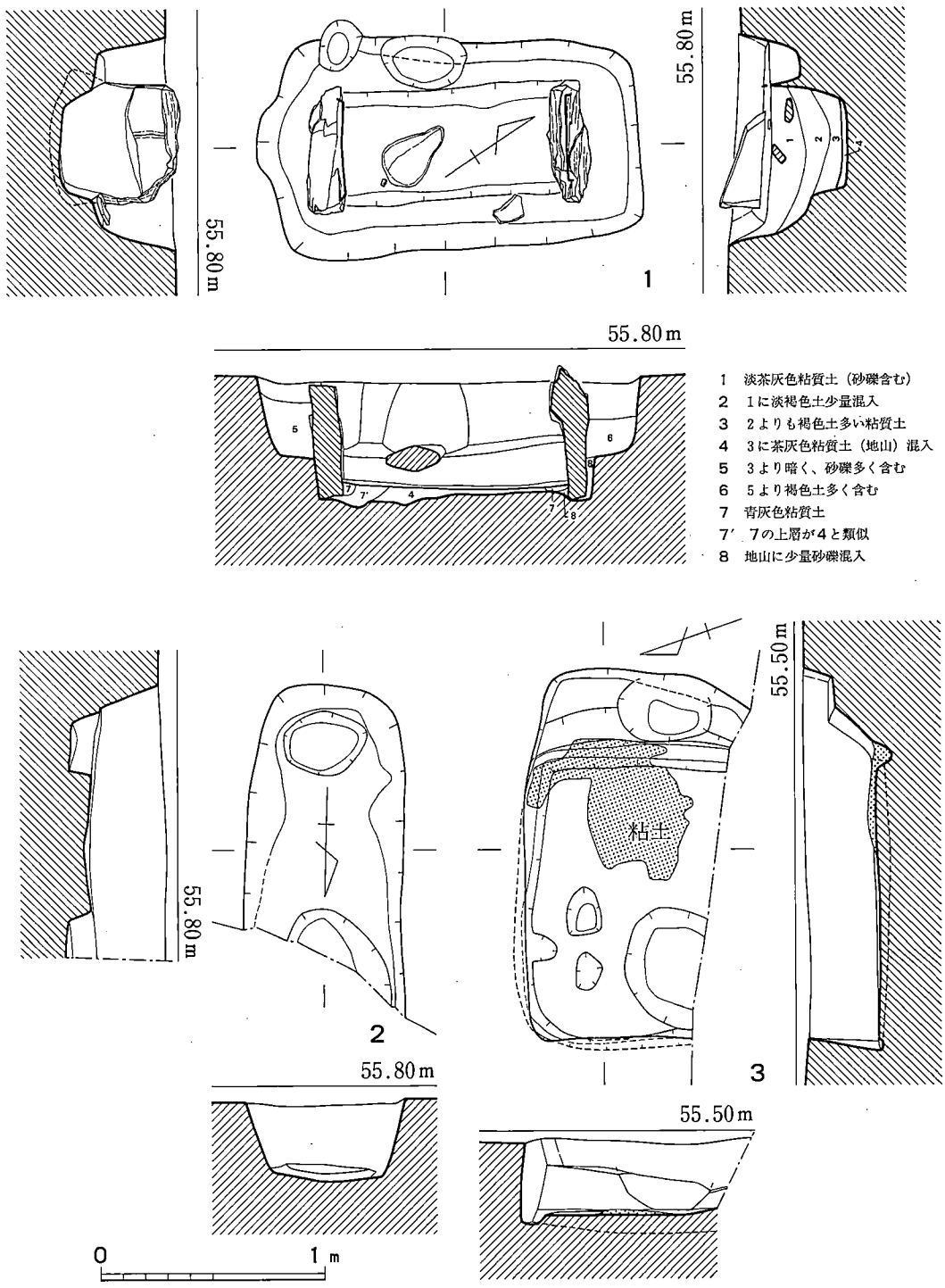
13・15号甕棺墓の中間に位置するI類の木棺墓である。墓壙は隅丸長方形を呈し、長軸170cm、短軸90cmを測り、検出面から30cm下がって屍床が掘り込まれる。屍床は長さ92cm、幅36cmで、茶灰色土を一旦埋めて屍床面を形成している。小口石は緑簾片岩の割石で、高さ50～58cm、幅55～59cm、厚さ15cm前後のものである。主軸方位はN30°Eを示す。埋土中には河原石が落ち込んでおり、弥生土器片が出土したが図示に耐えない。




**第44図**　石棺墓·木棺墓出土土器実測図（1/4）

**2号木棺墓**（第45図）

6号甕棺墓の東側に並葬される。両小口には円形




**第45図**　1～3号木棺墓実測図（1/30）

の掘り込みがみられ、小口板を立てていたものと考えられる。墓壙は二段掘りと思われるが、一段目は失われている。屍床は隅丸長方形を呈し、残存長132cm、幅59cmを測る。主軸方位はN2°Wを示す。埋土中から弥生土器片が出土している。

出土土器（第44図）

3は壺の底不破片で、底径は7.4cmに復原した。若干の上げ底で、器肉は2.1cmと厚い。器面は磨滅が著しいが、ヘラ磨きを施している。4は甕の底部破片で、復原底径は10.6cm。器面調整は外面ヘラ磨き、内面ナデによる。胎土に石英・雲母・角閃石を含み、色調は肌色を呈する。

**3号木棺墓**（第45図）

調査区南西部の調査区境に位置する。墓壙は東側にステップを有するので二段掘りと考えられる。墓壙は隅丸長方形を呈し、長軸170cm、深さ30cmを測る。短軸は発掘区外に伸びるため88cmの検出状況である。三面で5～12cm幅の小溝を検出しており、II類の木棺墓である。屍床は長さ120cm、確認幅77cmを測り、東側には灰白色粘土が敷かれている。主軸方位はN71°Wを示す。副葬品・共伴土器の出土はなかった。

## （4）土壙墓

**1号土壙墓**（第46図）

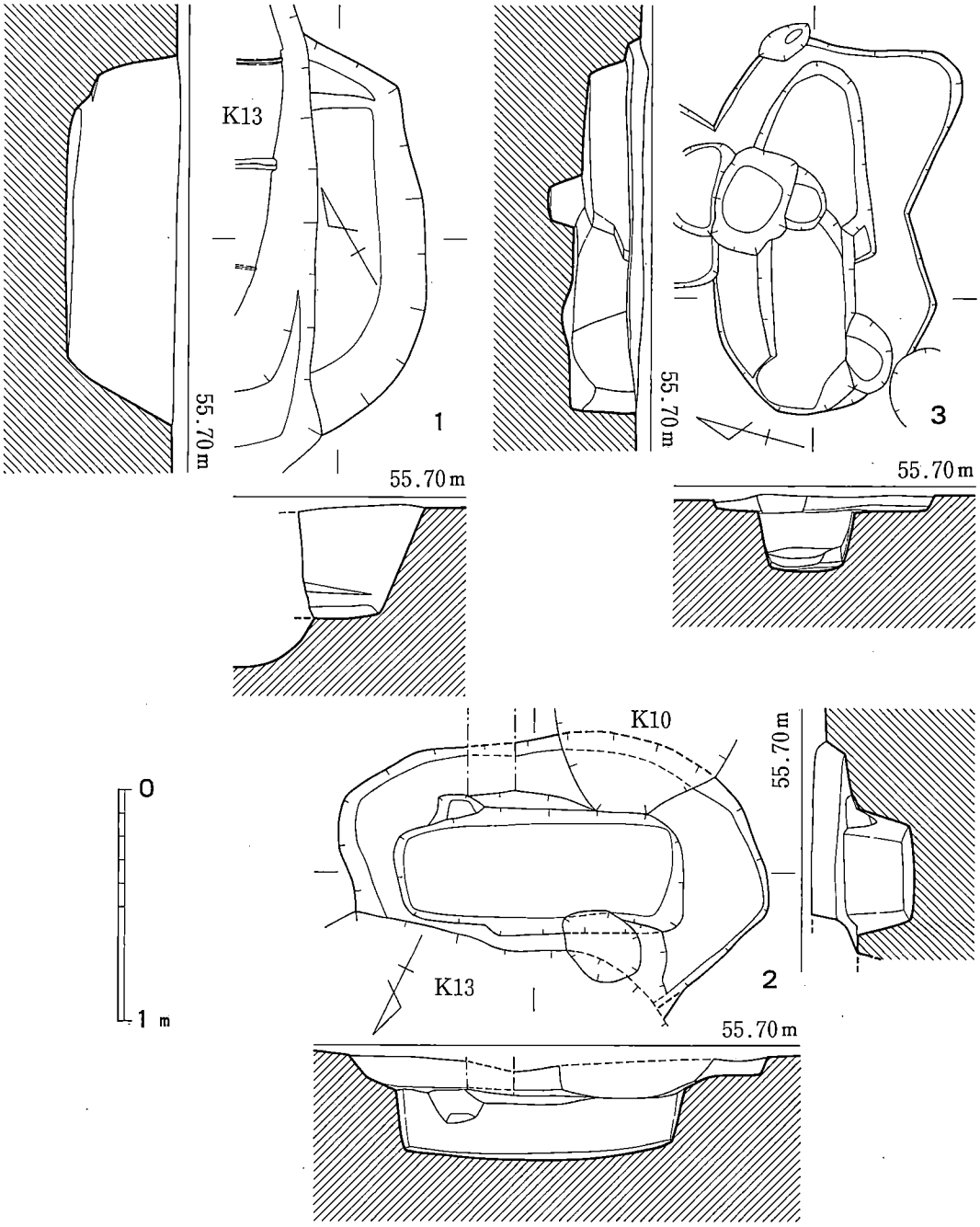
13号甕棺墓の墓壙内に検出された、テラス状の部分を1号土壙墓とした。甕棺墓に切られるために、本来の規模は不明だが、上面で長軸160cm＋α、短軸50cm以上？、深さ45cmを測る。頭位は特定できないが北側であろうか。主軸方位はN30°30′Eを示す。埋土中からの遺物の出土はみられなかった。

**2号土壙墓**（図版30-3、第46図）

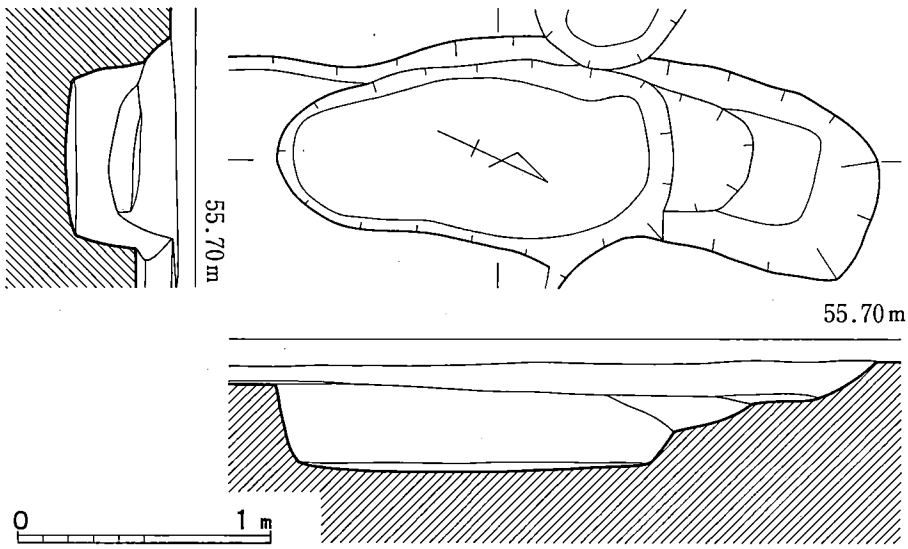
10号甕棺墓と13号甕棺墓に切られて両者の中間に位置する。墓壙は二段に掘り込まれ、上面は楕円形を呈し、長軸186cmを測る。短軸は13号甕棺墓に切られるため96cmの遺存状態である。屍床は隅丸長方形を呈し、長軸117cm、短軸40cm、深さ30cmを測る。屍床幅が若干広い西側が頭位になろう。主軸方位はN66°Wを示す。埋土中から弥生土器小片が出土しているが、図示に耐えない。

**3号土壙墓**（第46図）

2号土壙墓の80cm南側に並列して埋葬される。墓壙は二段に掘り込まれ、上面は不整形を呈し、長軸161cm、短軸92cm、深さ6cmの遺存状態である。屍床は長円形を呈し、長軸152cm、短軸




**第46図**　1～3号土壙墓実測図（1/30）




**第47図**　4号土壙墓実測図（1/30）

41cm、深さ26cmを測る。屍床幅が広い東側が頭位になろう。主軸方位はN75°Eを示す。副葬品・共伴土器の出土はなかった。

**4号土壙墓**（第47図）

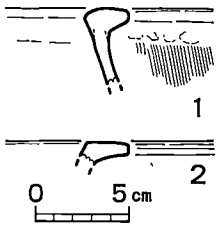
4号甕棺墓の西側に隣接する土壙墓で、不整形な土坑状の落ち込みと重複する。墓壙は長楕円形で、北側は緩やかに落ち込む。上面で長軸240cmを有するが、深さをもつ南側160cm程が長軸である可能性がある。短軸は80cm、深さ40cmを測る。屍床幅が広めな北側が頭位であろう。主軸方位はN25°Wを示す。埋土中から弥生土器小片と縄文土器小片が少量出土した。

出土土器（第48図）

**甕**（1）肥厚して上面がやや丸みをもつ逆L字形口縁の破片で、胴部へ膨らむ模様である。胴部外面をハケ目調整した後にヨコナデ調整するが、口縁部下に指押さえ痕が残る。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、暗黄褐色に焼成される。

**高　杯**（2）上面がほぼ平らな、鋤先状に近い形状の逆L字形を呈する口縁部破片で、胴部側へは内湾する。口縁端部外面は浅く凹む。胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み、茶褐色に焼成される。

これらの土器は弥生中期前半に相当するものであろう。




**第48図**　4号土壙墓出土土器実測図（1/4）

# 3　弥生時代生活遺構の調査

## （1）住居跡

### 1号住居跡（第49図）

調査区の南部で発見され、甕棺墓群の南側に位置する。南半部は調査区域外に潜るが、直径8.5m前後の円形プランの住居跡で、周壁は10～20cmしか残らない。ほぼ平らな床面は主に中央部が黄褐色粘土で硬く突き固められる。床面の調査区端で本来住居跡中央に相当する位置には、直径1.2m程度、深さ30cm弱の中央土坑があり、土坑周辺の床面には木炭・灰が薄く堆積して黒色を呈する。床面を掘り込む柱穴状ピットは多数あるが、このうち比較的深さを有するピットが中央土坑を囲むように、周壁との間に並び、主柱穴と推定される。なお、北東側床面下に重複する5号土坑調査時には床面との前後関係が不明確であったが、おそらく住居跡が後出するものと思われる。住居内堆積土は一部暗黄褐色土っぽい色調を呈するが、殆どが暗茶褐色粘質土で、弥生土器片を含むが量的にはさほど多くはなく、出土土器では脆弱な資料が多い。床面との区別は明瞭で、床面に食い込むように打製石斧や縄文土器片が出土したものの、縄文時代の遺構を確認できる状況ではなかった。

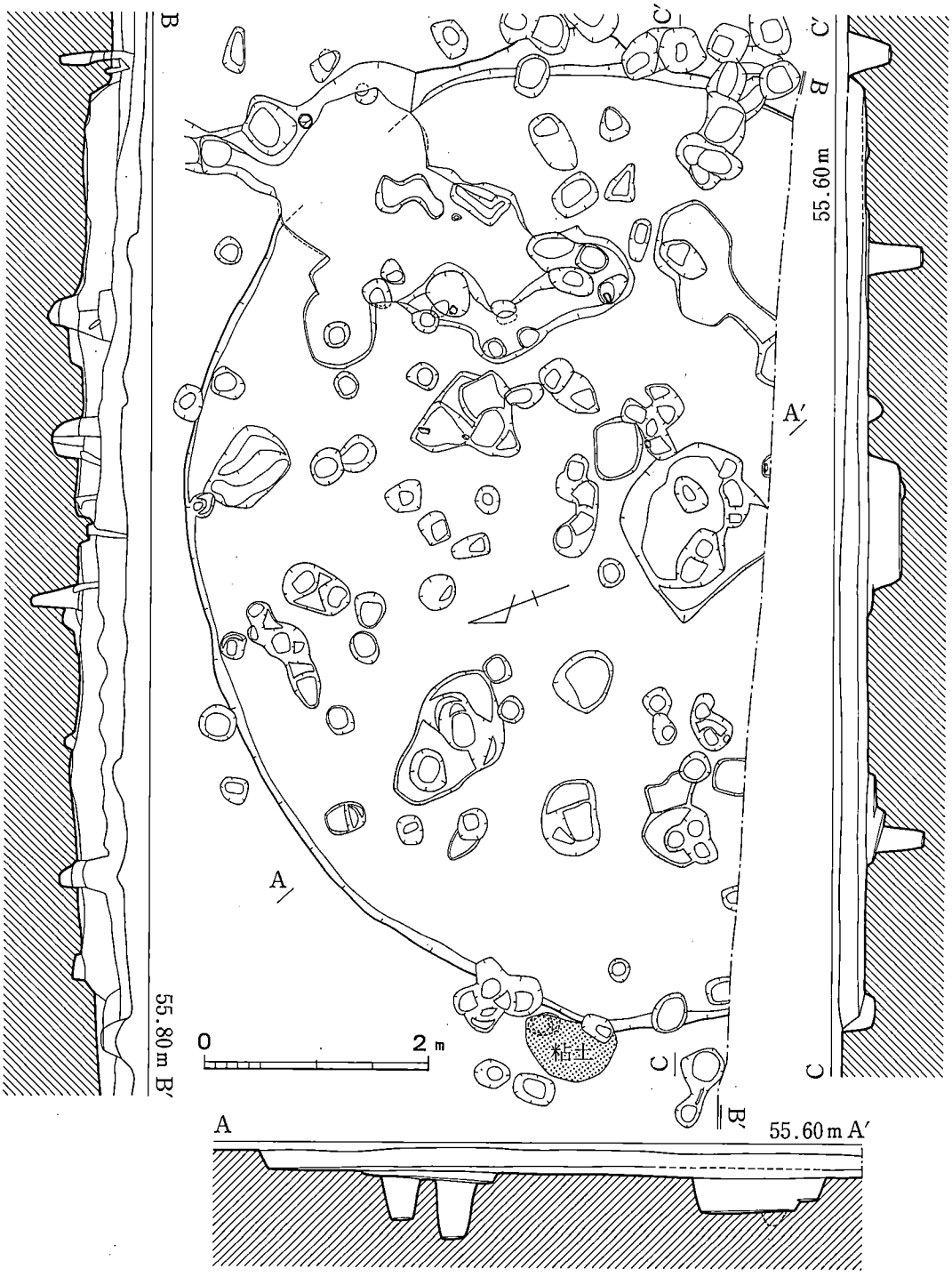
出土土器（第50図）

土器片は多数出土したが、胴部破片の資料が圧倒的で、完形資料や図上で大きく復原し得る資料すらもみあたらない。口縁部・底部破片のうち幾つかを図示する。

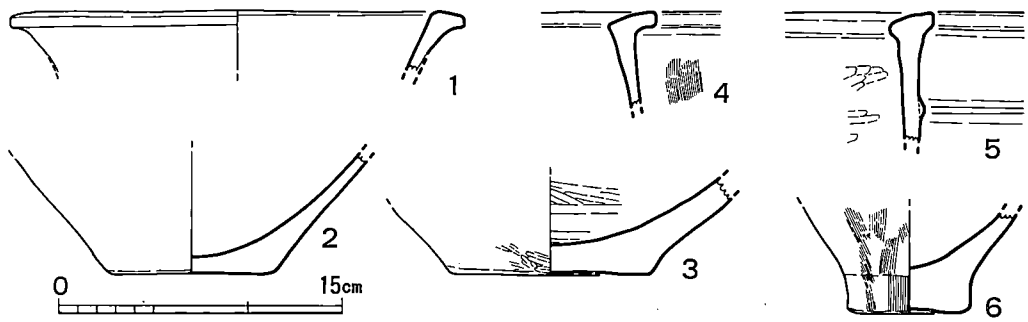
壺形土器（1～3）　1は復原口径24.0cmの大きさの口縁部破片で、頸部から開いて、端部は外方に屈折する。器面は内外面ともに磨滅・風化する。2は平底の底部破片で、胴部へは大きく開く。鉢形土器の可能性もある。器面は内外面とも磨滅・風化する。3は僅かに外底面が上げ底状に凹み、胴部へは大きく開く。胴部内外面ともヘラ磨き調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

甕形土器（4～6）　4は逆L字状に外反する口縁部破片で、上面はやや内傾し、端部外面はやや面をなす。胴部外面はハケ目、内面はナデで調整される。5はT字形に近い形で外反する口縁部破片で、上面は内傾し、端部外面は面をなす。口縁部下に台形断面の凸帯が巡らされる。胴部外面は磨滅・風化するが、内面はヘラ磨き調整される。鉢形土器の可能性もある。6は細く窄まる底部破片で、外底面は浅くレンズ状に凹む。胴部外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、灰黄褐色などに焼成される。

これらの土器は、その特徴から、弥生時代中期前半頃に含まれる。




**第49図**　1号住居跡実測図（1/60）

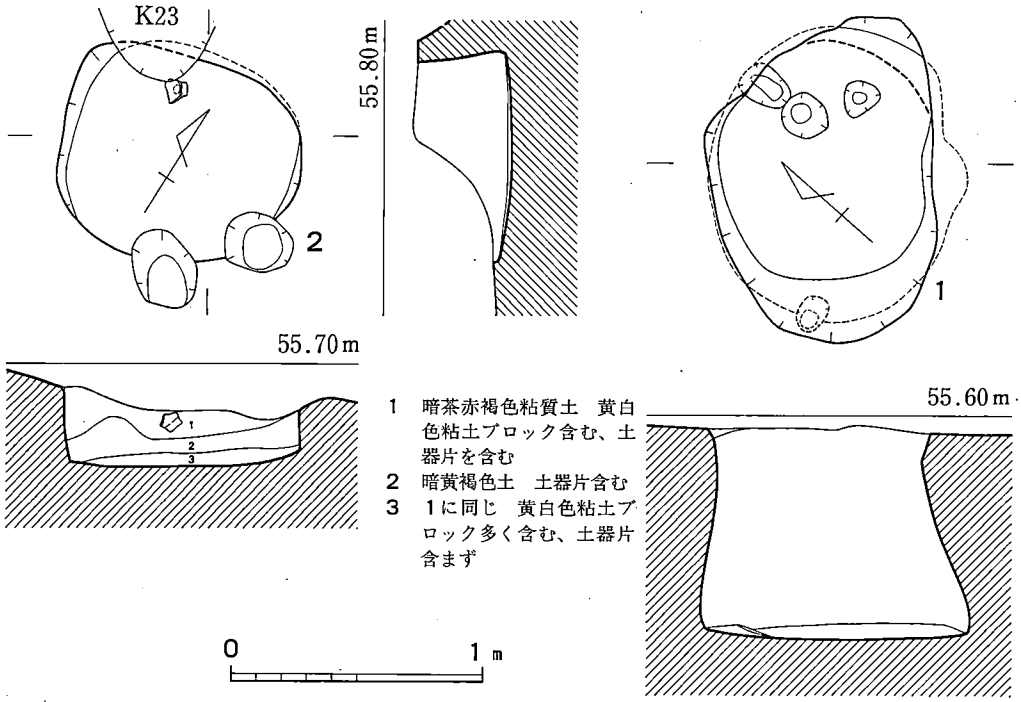



**第50図**　1号住居跡出土土器実測図（1/4）

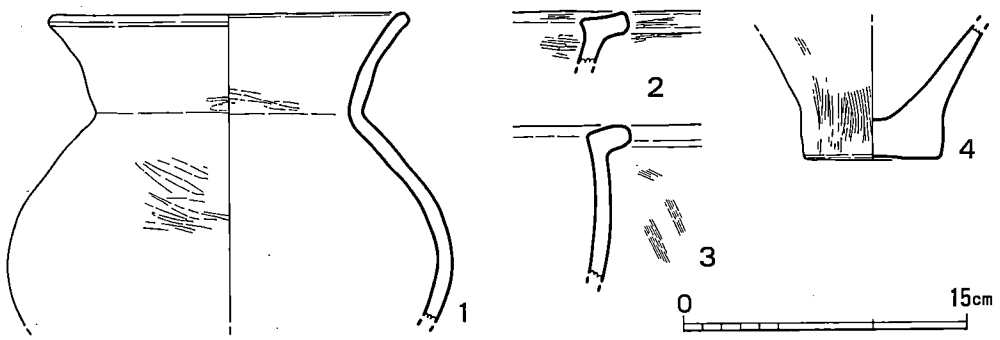
## （2）袋状竪穴・方形竪穴

**1号袋状竪穴**（図版31-1、第51図）

調査区の中央部で発見された遺構で、1号住居跡の北西北側に隣接した位置にある。上面では長径1.2m、短径0.9mの不整楕円形プランで主軸方向N49°Wを向く。一旦窄まってから裾広がりになるフラスコに似た彫り込み掘り込みで、深さ0.8mに残る。床面はやや平坦で、長径1.1m強、短径1.0m弱の不整円形を呈する。床面を切り込む小柱穴状のピットが北東側に3ヶ所、




**第51図**　1・2号袋状竪穴実測図（1/30）




**第52図**　1・2号袋状竪穴出土土器実測図（1/4）

南西側に1ヶ所あるが、いずれも直径10～15cm、深さ5～10cmと小振りである。

出土土器（図版31-2、第52図）

壺形土器（1・2）　1はなで肩気味に膨らむ胴部に、直線的ながらも緩やかに外反する口縁部が付く器形の壺形土器で、口縁端部はそのまま丸くまとまる。外面と口縁部内面はヘラ磨き調整され、胴部内面はナデ調整される。復原口径19.0cm、残存器高16.2cm、胴最大径23.4cmの大きさ。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。2は逆L字形断面で、上面が僅かに内傾して内面側が突出するが、端部外面は面をなす。器面はヘラ磨き調整される。鉢形土器の可能性もある。

甕形土器（3）　逆L字形断面で、上面はやや内傾するが、端部外面は丸みをもつ口縁部破片で、胴部は余り膨らまない模様である。胴部外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、暗黄褐色に焼成される。

これらの土器の特徴から、弥生時代中期前半頃の時期とみられる。

**2号袋状竪穴**（第51図）

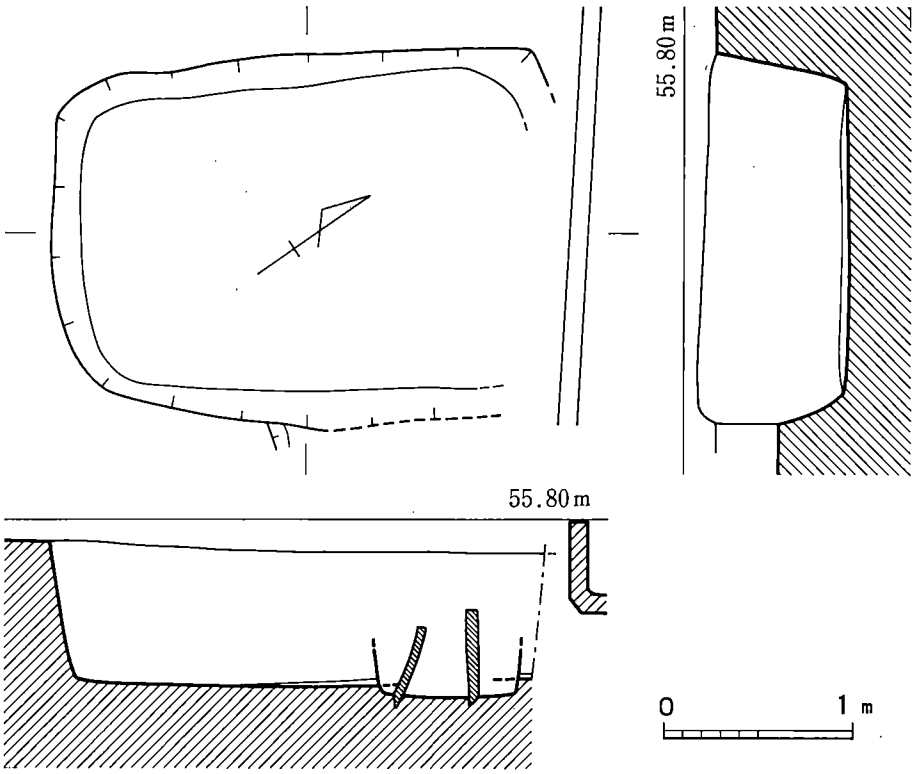
調査区の東部で発見された遺構で、大溝の北西肩部、7号甕棺墓と23号甕棺墓の間に位置する。北西側を23号甕棺墓、南東側を大溝によって削られるが、検出面では直径0.9m～1.0mの不整円形プランを呈し、深さ0.4m程に残る。周壁は僅かに内傾する部分もあるが、直に立ち上がる。坑内には地山の黄白色粘土塊を含む暗茶褐色・暗黄褐色土などが堆積する。

出土土器（第52図）

甕形土器（4）　細く窄まった底部破片で、外底面は僅かに上げ底状に凹む。胴部外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成される。底径7.2cm、残存高7.0cmの大きさ。弥生時代中期前半頃のものであろう。

石　器（図版40、第82図）

円盤状石製品（14）　緑泥片岩製で、縄文時代の所産とみられる。縄文時代の項で触れる。



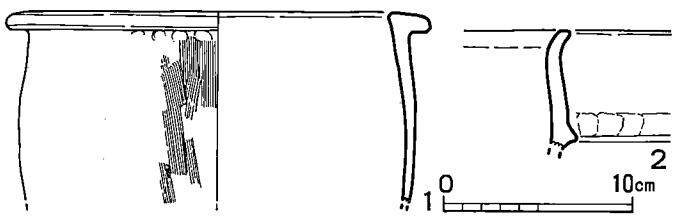

**第53図**　方形竪穴実測図（1/40）

### 方形竪穴（第53図）

調査区の北部で発見された遺構で、北側が石棺墓と重複する。20号・25号甕棺墓とも西側で一部重複するが、甕棺墓よりも先行する模様である。石棺墓の墓壙との境目は明確でなく、調査時には石棺墓に付属する祭祀遺構の可能性も考慮したが、輪郭は不明瞭であった。水路のU字溝施設時の攪乱で壊されているものの、長さ2.8m、幅2.0mの隅丸方形プランで、長軸方向はN35°Eを向き、深さ0.7mを有する。周壁はやや直に近い部分もあるが、僅かに傾斜し、床面はほぼ平坦である。竪穴内にはやや暗黄褐色に近い茶褐色粘質土で、床面付近は黒っぽい色調を呈する。

出土土器（第54図）

甕形土器（1）　上面が平坦で、外面端部が丸みをもつ逆L字形口縁をもち、胴部が僅かに膨らむ器形の甕形土器。復原口径22.4cm、




**第54図**　方形竪穴出土土器実測図（1/4）

残存器高9.9cm、胴最大径21.0cmの大きさ。外面はハケ目調整、内面はナデ調整されるが、頸部外面には指押さえ痕が明瞭に残る。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成される。

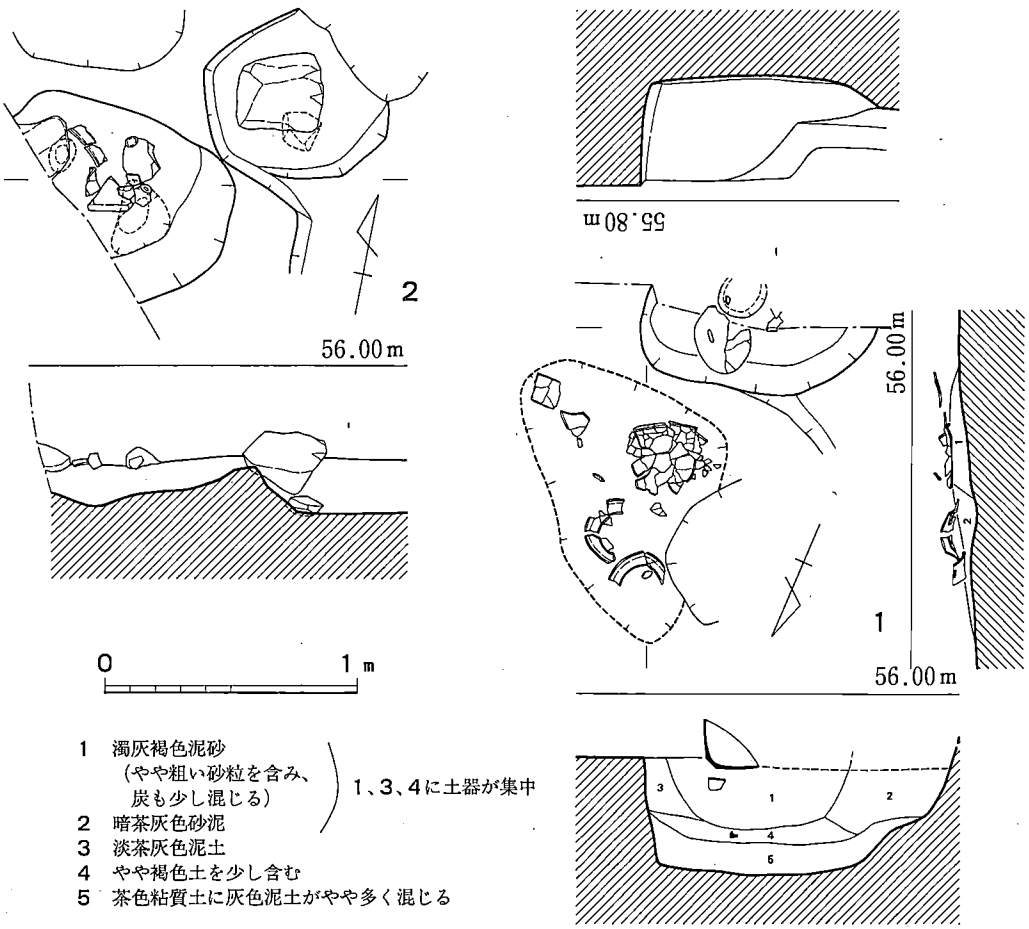
鉢形土器（2）　如意状の端部を有する口縁部破片で、胴部屈曲部に台形断面の凸帯が巡る。内外面ともヨコナデ調整されるが、凸帯の脇には指押さえ痕がみられる。胎土に細砂粒・角閃石を含み、黄茶褐色に焼成される。弥生時代前期末頃のものであろう。

石　器（図版40、第82図）

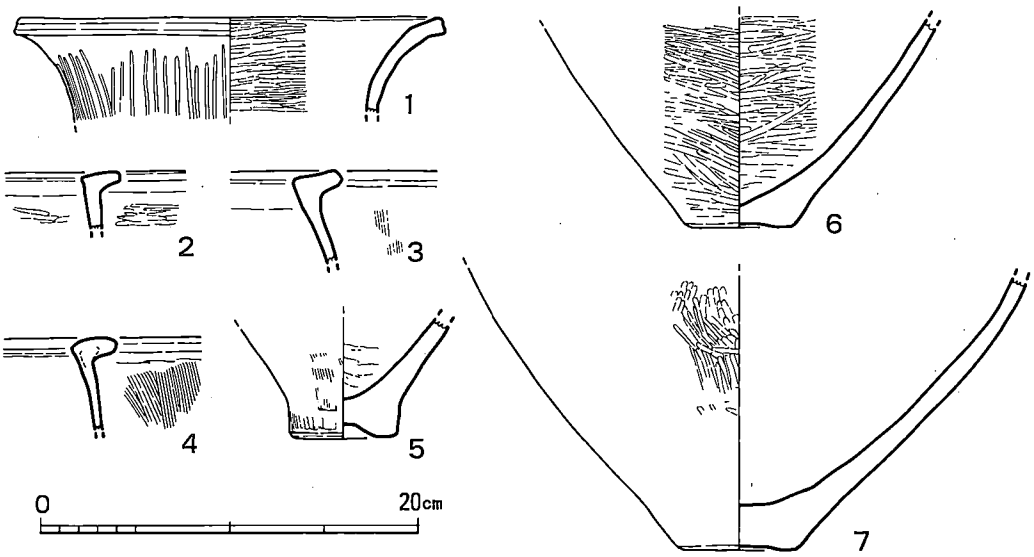
敲　石（11）　安山岩質の円礫を用いた敲石で、別項の縄文時代遺物の項で触れる。

## （3）土器溜まり

### 1号土器溜まり（第55図）




**第55図**　1・2号土器溜まり遺構実測図（1/30）




**第56図**　1・2号土器溜まり遺構出土土器実測図（1/4）

調査区南東隅部で発見された遺構で、南側調査区域外に潜る土坑状部分と、その肩部にある不整形で浅い凹みに、土器片がややまとまって出土した。後世の柱穴状ピットに北西側の一部を切られるが、甕形土器などの破片が押し潰されたような状態で発見されたが、土器片の集中する部分はほぼ南北方向で、長さ約1.0ｍの間にある。

出土土器（図版31-2、第56図）

壺形土器（１・７）　１は口径22.8cm、残存器高5.3cmの大きさ。口縁部は緩やかに外反し、端部が摘み上げ気味で、端部外面は僅かに凹む。内外面ともにヘラ磨き調整され、外面には放射状の暗文が描かれる。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成される。７は底径6.8cm、残存器高14.6cmの底部破片。胴最大径が30.0cm強程の大きさであろう。外底面は浅く上げ底状に凹み、胴部へは膨らみ気味に開き、底部はやや厚い。内外面とも磨滅・風化するがヘラ磨き調整らしい。 胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

甕形土器（２）　上面が平坦で、僅かに内傾する逆Ｌ字形口縁の破片で、内側端部は僅かに突出気味、外面側端部は面をなす。胴部内外面はヘラ磨き調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、暗黄褐色に焼成される。弥生時代中期前半頃のものであろう。

**２号土器溜まり**（第55図）

調査区の南東隅部で発見された遺構で、１号土器溜まりの約２ｍ西側に位置する。浅い不整形な土坑状の落ち込みで、南西側は調査区域外に潜る。細かな土器片が多く、ややまとまった

土器片は図示する程度しか検出できなかった。

出土土器（第56図）

甕形土器（３～５）　３は口縁部上面が平坦かつ内傾する逆Ｌ字形口縁で、甕形土器の破片らしい。胴部へ膨らむ器形で、胴部外面の一部にハケ目が残る。４は逆Ｌ字形口縁だが、上面が膨らみ加減に肥厚して、端部外面が丸みをもつ。胴部への膨らみは少なく、外面はハケ目調整されるが、内面は器面が風化して調整手法は不明。胎土に砂礫・赤褐色粒などを含み、暗黄褐色に焼成される。５は外底面が上げ底になる底部破片で、細めに窄まる。胴部外面はハケ目調整、内面は部分的に指頭ナデ痕の残るナデで調整される。胎土に砂礫・赤褐色粒・雲母を含み、黒～暗黄茶褐色に焼成される。弥生時代中期前半頃のものであろう。

壺形土器（６）　底径5.6cm、残存器高10.8cmの大きさの底部破片。外底面は浅く上げ底状に凹み、胴部へは膨らみ気味に開く。内外面ともヘラ磨き調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成される。

## （４）土　坑

**１号土坑**（第57図）

調査区の南西部で発見された遺構で、長軸方向Ｎ６°Ｅを向く楕円形プランの土坑。長径1.1ｍ強、短径1.0ｍ弱、深さ0.4ｍ弱の規模で、周壁はやや傾斜する。床面上には黄白色粘土がまとまって発見されたが、上部には暗茶褐色土が堆積して、土器片が東北側から傾斜して堆積する。

出土土器（図版31-2、第58図）

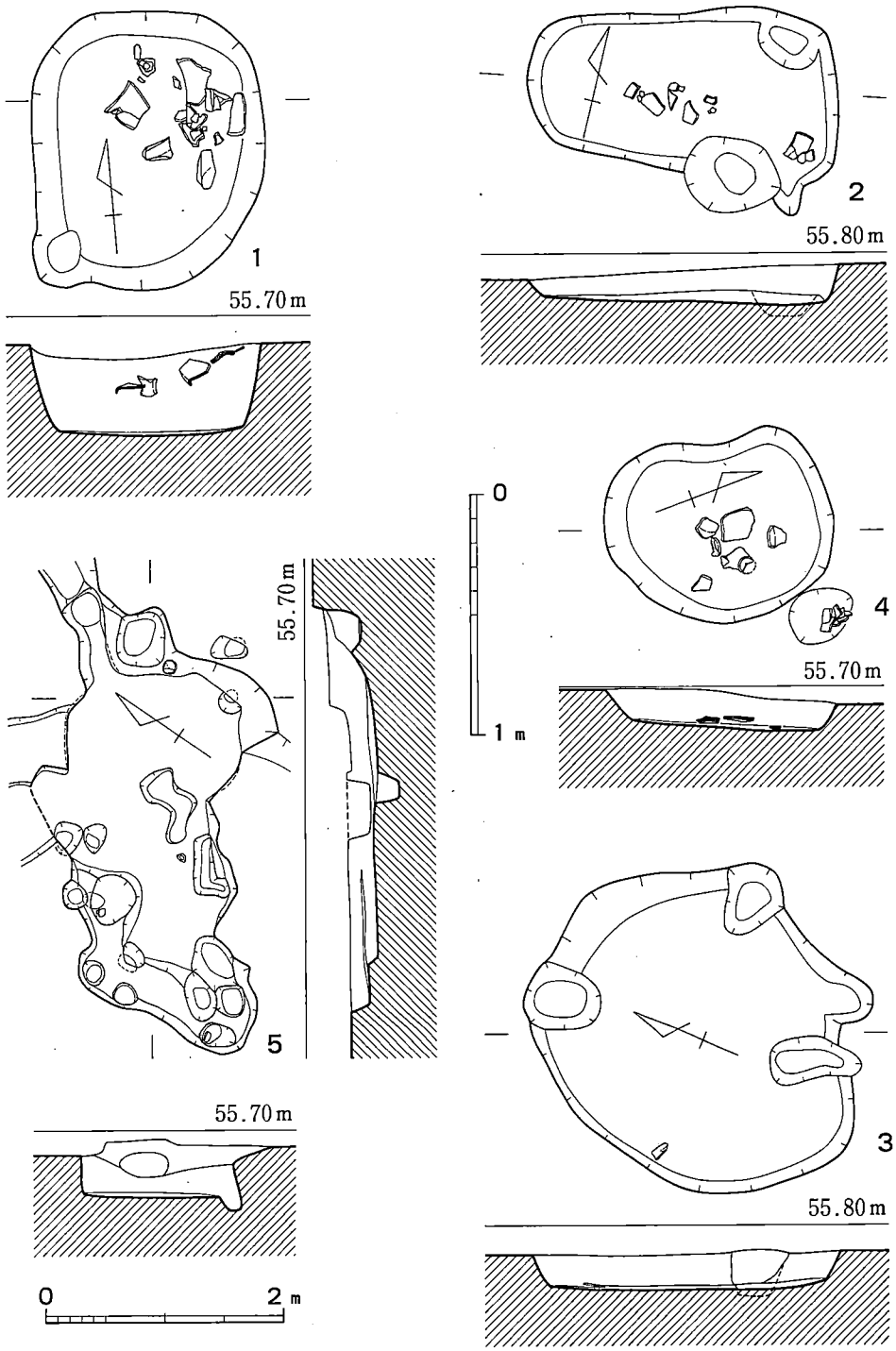
甕形土器（１）　器壁が薄く脆弱な胴部で巧く接合しないが、復原口径26.0cm、推定器高30.0cm、胴最大径24.0cmの大きさ。平坦な上面が僅かに内傾し、端部外面が丸みをもつ、逆Ｌ字形口縁の甕形土器で、胴部は余り膨らまないが、底部は細く窄まり厚めである。胴部外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

**２号土坑**（第57図）

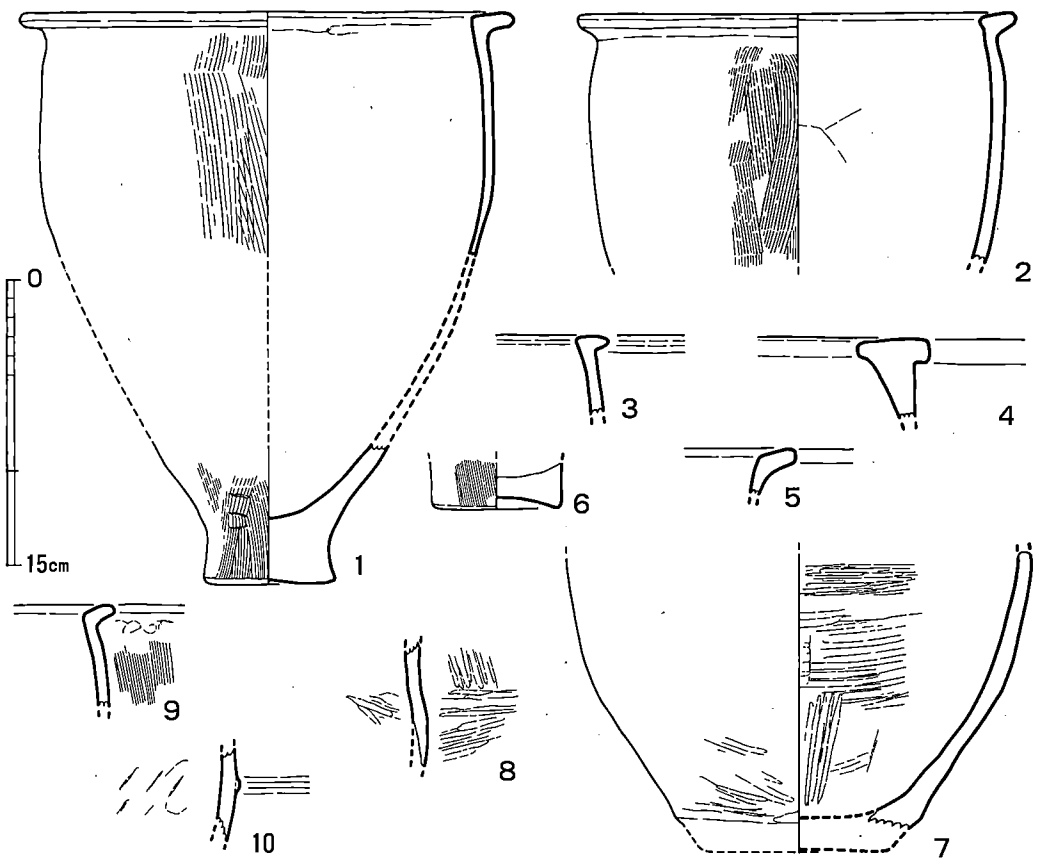
調査区の北部で発見された遺構で、方形竪穴の南側に隣接した位置にある。長さ1.3ｍ、幅0.6～0.7ｍの隅丸長方形プランの土坑で、長軸方向はN80°Eを向く。深さは0.1ｍ前後しか残らない。

出土土器（図版31-2、第58図）

甕形土器（２・３）　２は復原口径23.0cm、残存器高13.2cm、胴最大径21.8cmの大きさの逆




**第57図**　1～5号土坑実測図（1/30・1/60）




**第58図**　1～5号土坑出土土器実測図（1/4）

L字形口縁で、胴部があまり膨らまない器形の甕形土器である。口縁部は肥厚気味で、平坦な上面がやや内傾し、端部は丸みをもつ。外面はハケ目調整、内面は板ナデおよびナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成される。3は2と同様な特徴を有する口縁部破片だが、口縁部はさほど肥厚しない。

**3号土坑**（第57図）

調査区の北部で発見された遺構で、2号土坑の約2m南西方に位置する。長径1.4m、短径1.2mの不整円形プランの土坑で、長軸方向はN42°Eを向く。深さは0.1m強しか残らない。

出土土器（第58図）

甕形土器（4）　逆L字形よりもむしろT字形に近い断面形をもつ口縁部破片で、平坦な上面は僅かに内傾し、端部外面は平らな面をなし、内面側はつまんだように突出する。胴部へは殆ど膨らまないが、内面側は内彎する。器面は風化・磨滅するが、ナデ調整であろう。胎土に

砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成される。

**4号土坑**（第57図）

調査区の北西部で発見された遺構で、3号甕棺墓の約1m西北西に位置する。長径1.0m弱、短径0.8m弱の不整楕円形プランで、長軸方向はN20°Eを向く。周壁は傾斜し、深さ0.1m強しか残らない。坑内には暗黄褐色土が堆積し、中央部床面直上に土器片が数点出土した。

出土土器（第58図）

甕形土器（6）　細く窄まった底部破片で、厚みを有するタイプであろう。外底面はレンズ状に凹むが、内底面側は残らない。胴部側外面は細かめのハケ目で調整される。胎土に砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成される。

壺形？土器（7）　胴部最大径のあたりで口頸部側を欠失する破片資料で、底部も欠く。胴部外面は風化するが、底部付近にヘラ磨きの痕跡がある。内面は条痕風の板ナデに近い調整痕もみられるが、ヘラ磨き痕も明瞭に残る。なお、胴部側の欠損面は擬口縁状である。胎土に砂礫・赤褐色粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成される。

**5号土坑**（第57図）

1号住居跡の北東部と重複して、住居跡よりも先行する土坑で、住居跡床面下から発見された。上部が削られているものと思われるが、長軸方向はN56°Eを向き、長さ3.2m、幅1.0～1.7mの楕円形に近い不整形プランを呈する。北東隅部は後世の柱穴状ピットと重複しているが、床面はほぼ平坦で、深さ20～40cmに残る。

出土土器（第58図）

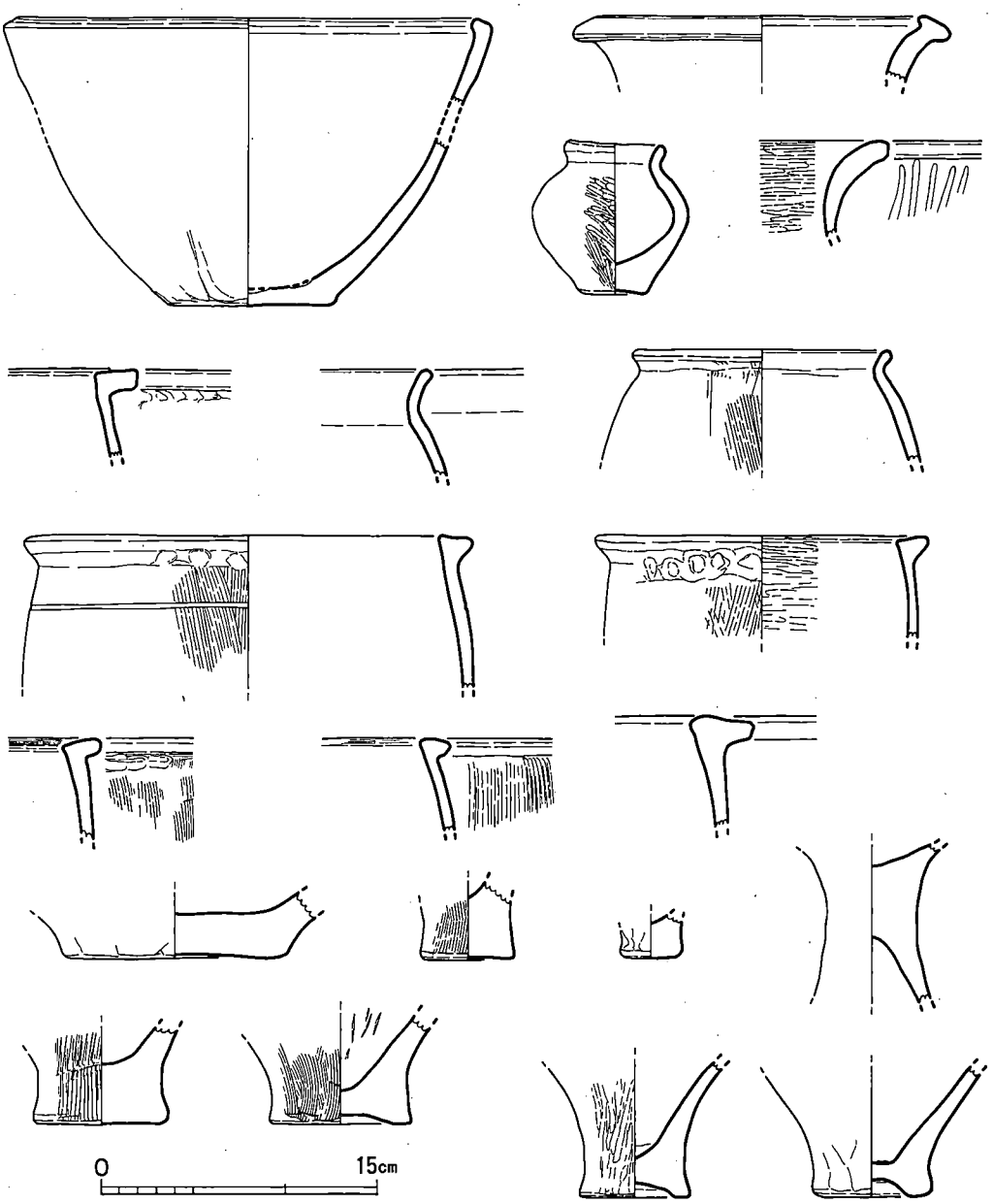
壺形土器（8）　胴部から頸部にかけての破片で、緩やかに屈曲するが、内外面ともにヘラ磨き調整される。胎土に砂粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成される。

甕形土器（9・10）　9は如意状に近い屈曲の逆L字形口縁で、外面の口縁部直下に指押さえ痕が残り、胴部はハケ目調整される。内面側はナデ調整らしい。胎土に砂粒・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成される。10は三角形断面の凸帯が巡る胴部破片で、外面はヨコナデ、内面は板ナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・雲母を含み、橙褐色に焼成される。

土坑出土土器では、1～5号土坑では弥生時代中期前半頃のものだが、6号土坑出土例は如意状に近いタイプを含むなど古式の様相をみせる。6号土坑が住居跡より先行する遺構であることから、中期初頭頃を下らないものであろう。

**ピット出土の遺物**（図版34、第59図）

壺形土器（1～4）　1は西端部のピットから出土した。復原口径20.4cmの大きさの口縁部




**第59図**　ピット出土土器実測図（1/4）

破片で、頸部は外反して開き口縁部が突出気味ながらも上部は内傾する。鋤先状口縁にやや似るが、突出は短い。内外面ともにヨコナデ調整されているが、磨滅する部分が多い。胎土に細砂粒・角閃石・雲母などを含み、淡茶褐色に焼成される。2は外反する口縁部破片で、端部は肥厚気味ながらも外面が凹み気味に面を整えられる。内外面ともにヘラ磨き調整されて、外面

には放射状の暗文がみられる。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、茶褐色に焼成される。３は１号住居跡北東部の２ｍ外側に位置するピットの肩から出土した。小形のほぼ完形の壺で、口径5.6cm、器高8.2cm、胴最大径8.5cm、底径3.8cmの大きさ。底部と口縁部が窄まった形の扁球形体部で、口縁部は短く外反する。外底面は僅かにレンズ状に凹む。外面はヘラ磨き調整、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、褐色に焼成される。４は大溝底面に切り込み、２号土器溜まりの北側に位置するピットから出土した。復原口径14.0cm、胴最大径18cm前後の大きさになる口縁部破片で、口縁部は短く外反して、端部はやや肥厚して丸い。胴部外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、灰黄褐色ないし黒茶褐色に焼成される。これらの壺形土器では１～３は中期に属すが、４は後期であろうか。

鉢形土器（６・13）　６は復原口径26.6cmの口縁部片と底径9.1cmの底部片が巧く接合しないが、器高14.0cm前後になるものと思われる。体部が膨らみながら開く鉢で、口縁端部は摘まれたように内側に短く屈折する。底部付近の外面に工具痕を残し、板ナデ調整されるものと思われるが、大半はナデ調整である。胎土に砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、赤褐色に焼成される。13は住居跡の東北隅にかかるピットから出土した、平底の底部破片で、底径12.2cmの大きさ。内外面ともにナデ調整される。

甕形土器（５・７～12・15～19）　５は11号甕棺墓の東南側ピット出土の口縁部破片で、膨らんだ胴部から頸部が括れ、緩やかに僅か外反する口縁部は端部が丸みをもつ。器面は内外面ともにナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成される。７は19号甕棺墓の西側ピットから出土した、逆Ｌ字形口縁の破片で、上面は僅かに内傾し、端部外面は面をなす。内外面ともにナデ調整されるが、外面の屈曲部には指押さえ痕が明瞭に残る。胎土に砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、暗黄褐色に焼成される。８は復原口径24.2cm、胴最大径24.4cmの大きさの胴部が膨らむ器形で、口縁部は逆Ｌ字形よりむしろ断面三角形状に肥厚した形状をなす。９も同様の器形の甕口縁部破片で、復原口径18.0cmの大きさ。外面はハケ目調整され、内面はヘラ磨き調整されるが、８では口縁部下に浅い沈線が１条巡る。胎土に砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成される。８は11とともに１号甕棺墓の北側のピットから、９は調査区西端部の溝状ピットから出土した。10・11は逆Ｌ字形口縁の破片で、上面の内傾、外傾の違いはあるが、端部は丸みをもつ。胴部外面はハケ目、内面はナデで調整される。10は４号甕棺墓の南側ピットから出土した。12は逆Ｌ字形口縁部の破片で内外面ともに磨滅するが、外面の屈曲部には指押さえの痕跡が残る。砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成される。15・16は厚みのある底部破片で、外底面は殆ど凹まない。胴部外面はハケ目、内面はナデ調整される。17～19は上げ底の底部破片で、外面はハケ目調整されるが、18の外面はヘラ磨き調整される。17は大溝東肩部のピット、18・19は大溝西肩部のピット

から出土した。

不明底部（14）　手捏ね風小形土器の底部破片で、体部の形状は不明。器面は風化磨滅する。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒などを含み、黄茶褐色に焼成される。

高杯？（20）　半中実の柱状部破片で、器面は磨滅する。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成される。

これらの土器類は、弥生中期後半を中心に中期初頭～後期後半の時期幅をもつ。

## 4　その他の弥生時代以降の遺構と遺物

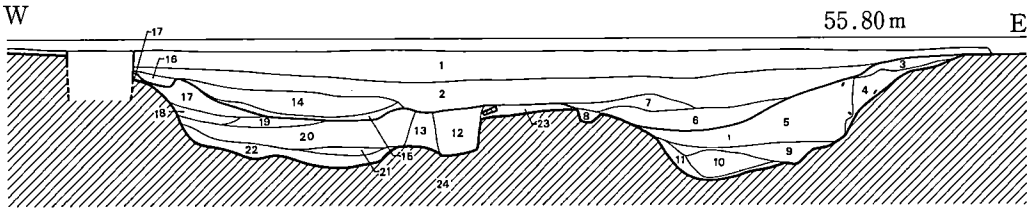
**大　溝**（図版7-1、第60図）

調査区東端部で発見された遺構で、調査区を横断し、西肩部では１号住居跡と１ｍ余の距離が空いている。上面で4.5ｍ～6.0ｍの幅を有し、南北方向を向くが幾分か右曲がりに弧を描く。両側の壁は緩やかに落ち込み、深さ0.9～1.0ｍを有するが、床面の凹凸は激しく、中央部に島状の突起を残す部分もみられ、恒常的な流路かは疑わしい。堆積土は、下層が黄褐色・黒褐色・茶褐色などの色調を呈する粘質土で、中位に相当する上縁から0.3～0.6ｍ下に茶褐色系の色調を呈する砂層が広がって堆積している。

出土土器（図版32～34、第61～65図）

弥生土器

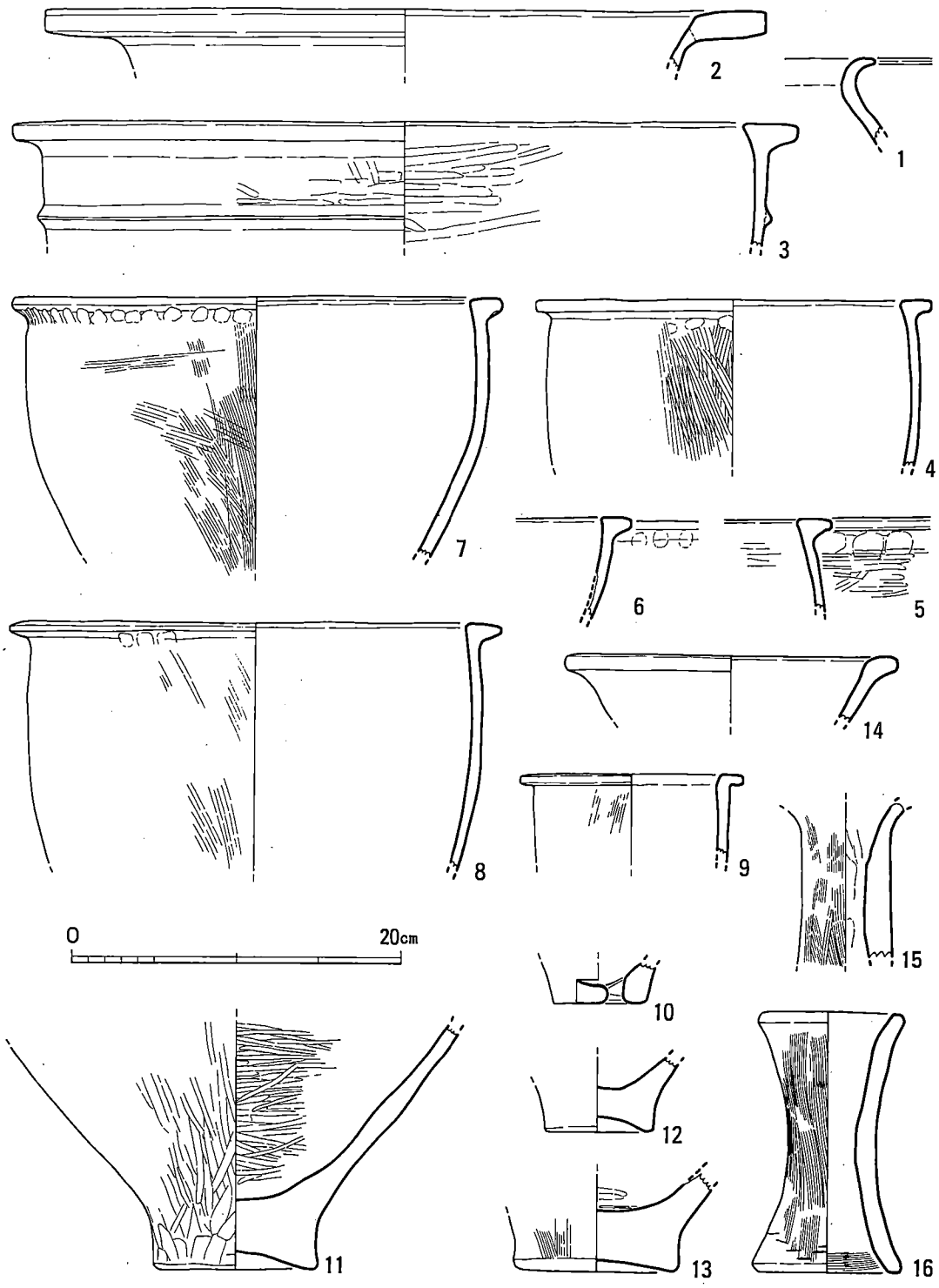
壺形土器（１・２）　１は端部が肥厚せずに外反する口縁部破片で、頸部は短めである。器面は磨滅して器面調整痕は分からない。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、黄橙色に焼成される。２は復原口径44.0cmほどの大きさの鋤先口縁に近い形状の口縁部破片。端部は肥厚して上面は平坦、外面は凹み気味ながらも平坦な面をなす。器面は磨滅して調整手法は不明。胎土に砂粒・




1　黒褐色粘質土（床土下）
2　茶褐色粘質土Ⅰ　　}青磁を含む
3　明茶褐色粘質土Ⅰ
4　暗黄灰色粘質土（地山黄灰色粘土のよごれたもの）
5　明黄茶褐色粘質土（他に比べて砂を多く含む）（弥生土器を含む）
6　黒色粘土Ⅰ（須恵器を包含する）
7　やや砂を多く含む茶褐色粘質土
8　茶灰色粘土
9　地山粘土のブロックを含む　暗黄茶褐色粘質土（砂を多く含む）
10　黒灰色粘質土（有材質を含む）
11　地山粘土のブロックを多量に含む　明茶褐色粘土
12　砂を含む暗黄灰色粘土Ⅰ
13　12より明るく、24より暗い、黄灰色粘土
14　黒色粘土Ⅱ　6に近い（砂を含み、須恵器を包含する）
15　茶褐色砂土
16　明茶褐色粘土質Ⅱ　3に近い
17　暗黄褐色粘土Ⅰ（地山土のよごれたもの）
18　黒黄褐色粘土Ⅰ（17より黒い）
19　暗茶褐色粘土Ⅱ　17に近い
20　砂を多く含む　黒黄褐色粘土Ⅱ
21　砂を含む　黄灰色粘土
22　黒黄褐色粘土Ⅲ（Ⅰ・Ⅱに比して粘土分多し）
23　暗茶灰色粘土Ⅱ　12に近い
24　明黄灰色粘土（地山）

0　2ｍ

**第60図**　大溝断面土層実測図（1/60）




**第61図**　大溝出土土器実測図１（1/4）

角閃石を含み、黄褐色に焼成される。

甕形土器（3～5・8・9）　3は復原口径48.0cmの大きさの逆Ｌ字形口縁の破片で、口縁部下に断面三角凸帯が巡る。やや肥厚する口縁部上面は平坦で、内面側は拡張されて内彎する。器面は内外面ともにヘラ磨き調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・角閃石・雲母を含み、灰黄褐色に焼成される。4は復原口径24.0cmの大きさの逆Ｌ字形口縁の甕で、胴部は僅かに膨らみ、外面をハケ目、内面をナデで調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み、茶褐色に焼成される。5・8はＬ字形口縁の甕で、肥厚する口縁部は端部外面に丸みをもつ。5は内外面にヘラ磨き痕がみられるが、8は外面が粗いハケ目の後ナデ消しで内面はナデ調整される。8では復原口径30.0cmの大きさで、胴部の膨らみは少ない。9は復原口径13.6cmの逆Ｌ字形口縁の小形甕で、胴部の膨らみは少ない。外面の一部にハケ目がみられ、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

鉢形土器（6・7）　ともに逆Ｌ字形口縁の鉢形土器で、胴部は丸みをもって底部側へ移行する。上面が平坦な口縁部は短めに肥厚して、口縁部下は指押さえ痕が明瞭に残る。7では胴部外面がハケ目調整、内面はナデ調整され、復原口径30.0cmの大きさ。胎土に砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

底　部（10～13）　10は甑に使用されたとみられる平底の破片で、底面に焼成後の穿孔がみられる。胎土に砂粒・雲母を含み、黄褐色に焼成されるが、外面には炭化物が付着する。11～13は外底面がレンズ状に凹むもので、甕の底部であろう。11・13はヘラ磨き調整されるが、13の外面にはハケ目も部分的にみとめられる。

高　杯（14・15）　14は復原口径20.0cmの大きさの短く外反した口縁端部が肥厚する口縁部破片。内外面共に器面が風化磨滅する。15は中空の柱状部破片で、内面側に絞り痕、外面にハケ目がみられる。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

器　台（16）　器高15.5cm、口径・裾径が8.7～8.9cmの大きさの上下に緩やかに反りながら開く器形で、胴部径は5.4cm程度。外面はハケ目調整、裾部内面は一部ハケ目調整されるが、内面の大半はナデ調整される。胎土に砂粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

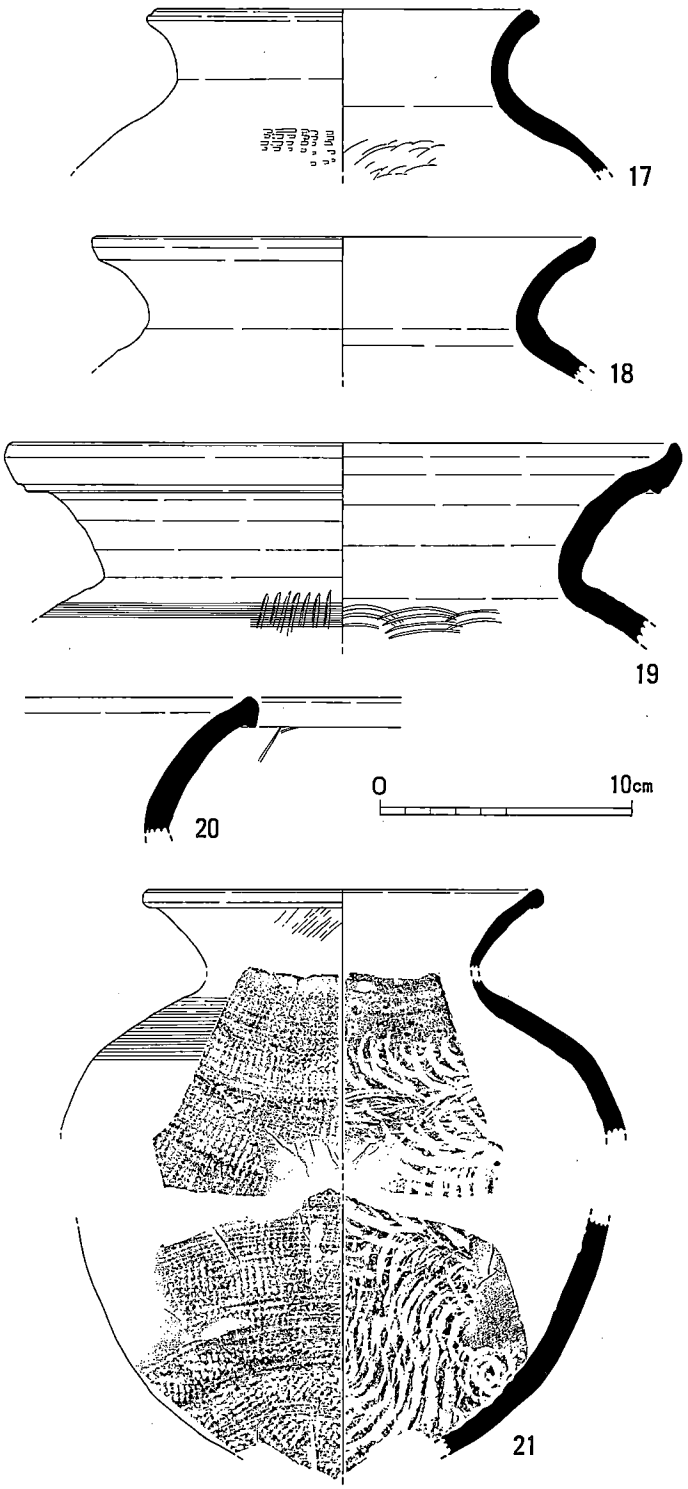
須恵器

甕（17～24）　17は頸部が締まり、口縁部が短めに外反する器形で、口縁端部は殆ど肥厚せずに、摘まれたような突起を有する。胴部の外面は平行叩き痕、内面は同心円当て具痕がみられる。復原口径15.6cmの大きさ。暗茶褐色に堅く焼成される。18は17に比して口縁部の外反が長めで、端部は殆ど肥厚しないが、上側に短く屈曲させる。復原口径20.1cmの大きさ。灰色ないし暗茶褐色に堅く焼成される。19は復原口径26.3cmの大きさでやや大きい甕。口縁部の反りは18に似ているが、端部の屈曲は大きく、屈曲部外面に低い断面三角凸帯を作るため、境目が明瞭である。胴部外面は平行叩き痕とカキ目がみられ、内面は同心円当て具痕が残る。灰色に

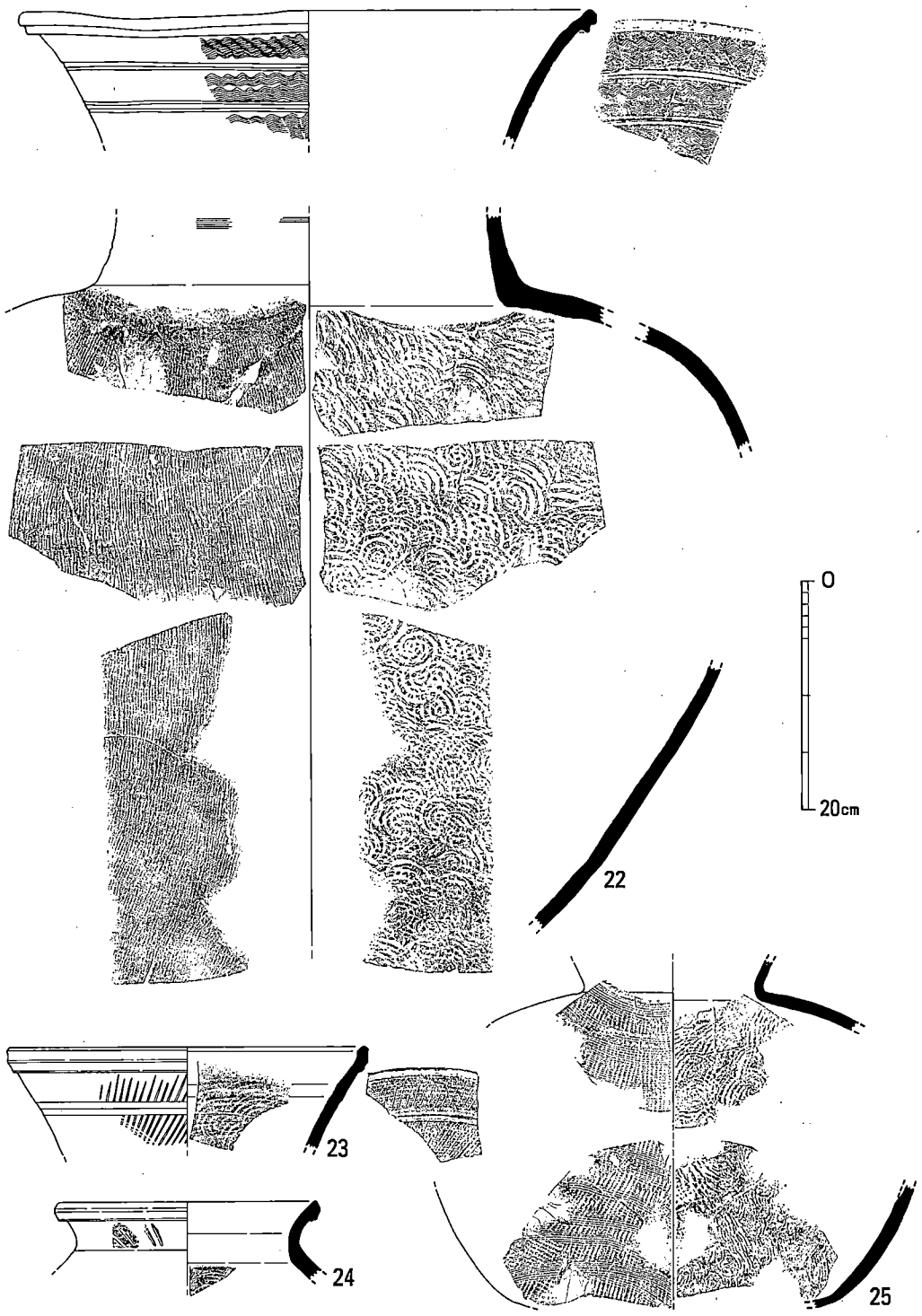
堅く焼成されている。

20・21は口縁端部が外側に短く折畳んだように肥厚する甕。20の口縁部直下にヘラ先による記号らしい切り込みがみられる。21は巧く接合しないが胴上半部の破片・下半部の破片と同一個体で、図上復原値では口径16.0cm、胴最大径22.5cm程の大きさ。口縁部直下の外面に板状工具による端部圧痕がハケ目状に残り、胴部外面は平行叩き痕とカキ目調整され、内面は同心円当て具痕が明瞭にみられる。暗灰色に堅く焼成されている。

22は同一個体と目される、口縁部、頸部、胴上半部と胴下半部の破片があるものの巧く接合しない。復原値では口径51.2cm、胴部最大径77.0cm前後、器高80.0cm前後になるものと推定される。口縁部は長めで緩やかに外反して開き、端部は丸みをもって肥厚するが、端部下側に断面台形の凸帯を巡らせる。２条単位の浅い沈線を横走させて、沈線に区画された部分にカキ目原体を用いた波状文巡らせる。




**第62図**　大溝出土土器実測図２（1/3）




**第63図**　大溝出土土器実測図３（1/6）

胴部は上位に肩が張り気味に膨らみ、外面は平行叩き、内面は同心円当て具痕がみられる。精良な胎土で、灰色に堅く焼成される。

23は頸部から直線的で長めに開いた口縁部が、内彎気味に屈曲して立ち上がる。外面に平行に斜行する沈線文様がみられ、中位に浅い凹線が巡る。また内面はナデ調整されるものの同心円当て具痕が残る。復原口径31.9cmの大きさ。胎土に砂粒を含み、青灰色に堅く焼成されるが、灰を被った自然釉がみられる。

24は短めで緩やかに外反する口縁部破片。口縁端部は下側に断面三角形の凸帯をなすように肥厚する。回転ナデ調整されるが、外面の口縁部下には短直線が2本並ぶヘラ記号らしい痕跡がある。復原口径23.4cmの大きさで、精良な胎土を用いて、灰色に堅く焼成される。

横　瓶（25）　頸部と胴下位の破片で、口縁部と胴部中位および底部を失うため、巧く接合せず、全体の形状は不明。胴部の破片のカーブに偏りがあることから、横瓶と推定される。体部は長さ45cm前後、幅25cm前後の俵形を呈すものと思われ、外面の調整は平行叩きの後にカキ目調整され、内面に同心円当て具痕が残る。胎土に砂礫を若干含み、青灰色ないし明灰色に堅く焼成されている。

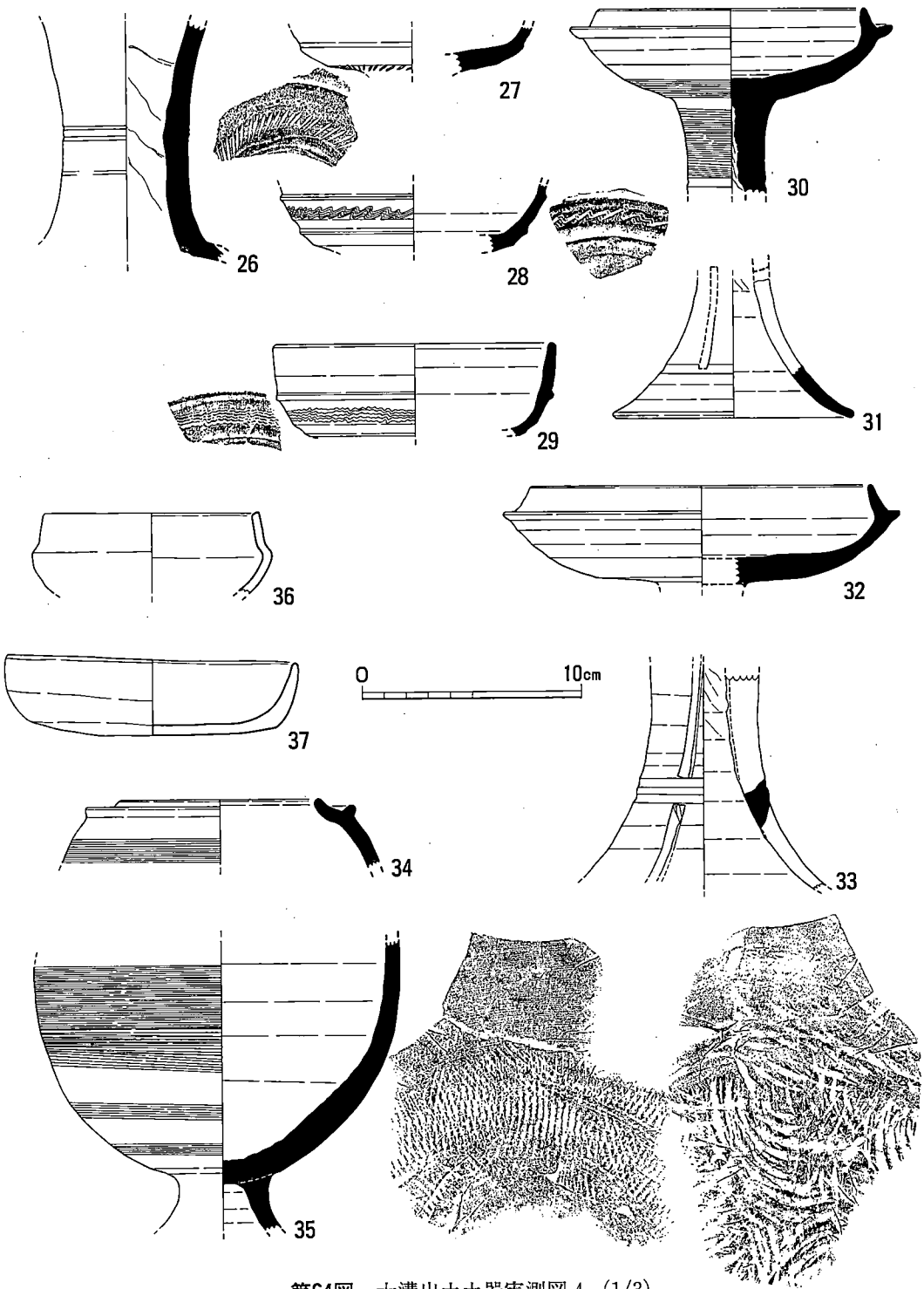
長頸壺（26）　頸部のみだが、径5.7cm～7.2cmで、長さ10.0cm程が残る。最も細まる部分に細い沈線が2条巡り、外面は回転ナデ調整、内面は絞り痕が残るもののナデ調整される。淡灰色に堅く焼成される。

高　杯（27～33）　27～29は杯部破片として図示するが、蓋かも知れない破片資料で、外面に文様帯を有す。27は杯部外底面（もしくは外天井）に板状原体の小口を斜方向に連続押捺した文様をもち、28・29は体部外面にに櫛描き波状文を巡らせている。29は復原口径13.0cmの大きさ。口縁部は内彎気味ながら直に立ち上がり、低い断面三角形の低い凸帯を巡らせている。いずれも胎土に砂粒を若干含み、灰色に堅く焼成される。

30・31は、器面の様子と大きさから同一個体の可能性を考慮できるが、接合しないため明確ではない。蓋受けのかえりをもつ杯部と、幅狭で切り込みに近い形状の長方形透かし窓を3ヶ所にもつ柱状部から裾部の破片である。30は口径12.3cm、杯部高4.0cm、受け部外径14.8cm、柱状部径3.5cmの大きさ。口縁部は幾分か内傾して、杯部は浅めである。杯部外底部と柱状部上半はカキ目調整される。31は裾部復原外径21.0cmの大きさで、裾へは喇叭状に開く。胎土に細砂粒を若干含み、黄色味を帯びた灰色に焼成される。

32は、復原口径15.4cm、杯部高4.3cm、受け部外径18.0cmの大きさ。口縁部は幾分か内傾して、杯部は浅めである。

33は、浅い2条の沈線が巡る柱状部の中間を挟んで上下に切り込み状の透かし窓が三方に空けられる。裾部へは喇叭状に開くが、端部は残らない。胎土に細砂粒を若干含み、明灰色ないし黒灰色に堅く焼成される。




**第64図**　大溝出土土器実測図４（1/3）

台付壺（34・35）　同一個体の可能性が高いものの接合しない。34は有蓋高杯の口縁部に似るが、35と同一個体にみた場合は壺であろう。内傾して立ち上がる口縁部の周囲に蓋受けが設けられる。復原口径9.2cm、受け部外径12.2cmの大きさ。口縁部は回転ナデ調整、胴部外面はカキ目調整される。35は台部裾を失うが、残存器高13.0cm、胴部最大径16.1cmの大きさで、胴部は半球形に残る。台部は径4.1cmから裾部へ緩やかに開く。胴部外面はカキ目調整されるが、胴下部では斜方向に交差した平行叩き痕が残る。内面は回転ナデ調整されるが、胴下部には同心円当て具痕が残る。胎土に細砂粒を含み、灰色ないし黒灰色に堅く焼成されるが、灰被りの自然釉が付着する。

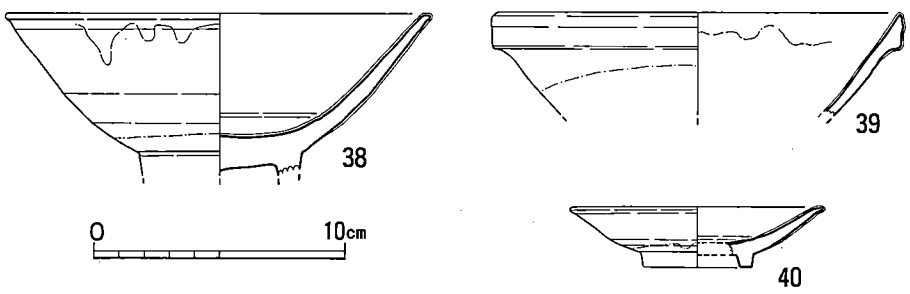
土師器

杯　身（36・37）　36は蓋受けのかえりを有する器形の杯身で、復原口径9.7cm、受け部外径10.9cmの大きさ。口縁部は僅かに内傾して立ち上がり、胴部下半は丸味をもつ模様である。器面は風化磨滅して調整手法は不明。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成される。37はやや平坦な底部から口縁部が立ち上がる器形の杯身で、口径13.3cm、器高3.4cm、底径11.3cmの大きさ。口縁部内外面はヨコナデ調整、外底面はヘラケズリされたような痕跡がみられる。胎土に細砂粒を含み、黄褐色に焼成される。

これらの須恵器・土師器は、34のような5世紀の有蓋高杯にた形状の例もあるが、他の例は概ね6世紀後半頃のものである。

陶磁器

白磁碗（38・39）　38は口縁端部が短く外反する碗で、高台畳付を欠くが、復原口径17.0cm、残存器高6.3cm、高台外径6.0cm前後の大きさ。体部内面に沈線が1条巡り、釉は内面と外面の体部下半まで掛かり、口縁部には釉垂れがみられる。39は玉縁口縁の碗で、口縁端部は断面三角形状に肥厚する。体部下半を失うが、復原口径16.3cmの大きさ。胴部外面の大半が露胎で、釉は内面側に釉垂れを生じている。胎土は黒色の細粒混じりの灰白色で、淡緑灰色の釉調を呈する。



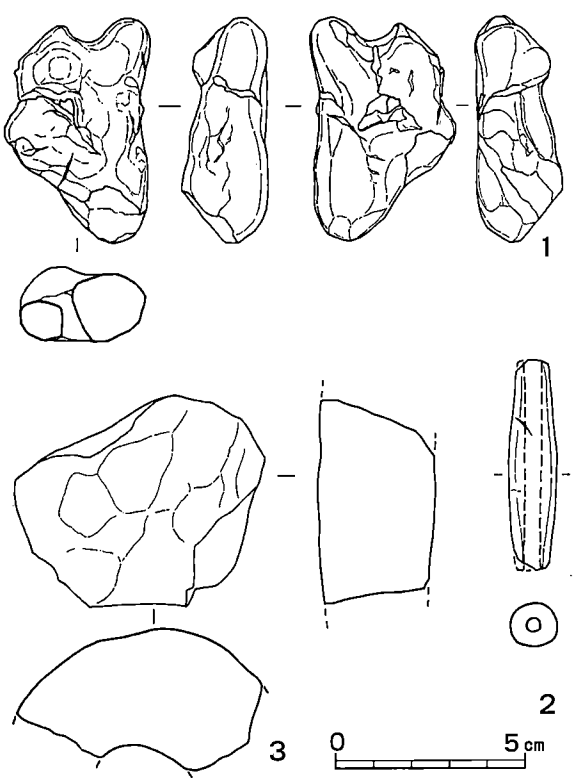

**第65図**　大溝出土土器実測図5（1/3）

白磁皿（40）　口縁部が緩く外反して、露胎の高台が付く皿で、内底面の釉は環状に掻き取られる。復原口径10.1cm、器高2.4cm、高台外径4.3cmの大きさ。灰白色を呈する精良な胎で、釉は淡緑灰白色を呈する。

これらの白磁類は大宰府などで、12世紀中頃以降の後半期にみられるものである。

土製品（図版35-1、第66図）

用途不明土製品（1）　破損面と破損面か否かの区別が明確でない面があるため、本来の形状も理解し難いが、用途も分からない土製品である。丸みをもった小突起が一方の端部に2ヶ所あり、他方の端部は破損のため不明だが、1ヶ所ないし2ヶ所に付く。長さ5.9cm、幅3.9cm、最大厚2.3cmの大きさ。風化磨滅が進行しているが、ナデ調整されているものとみられる。胎土に砂礫・角閃石・赤褐色粒を含み、暗黄褐色ないし暗灰黄褐色に焼成されている。重量38.2ｇを測る。




**第66図**　土製品実測図1（1/2）

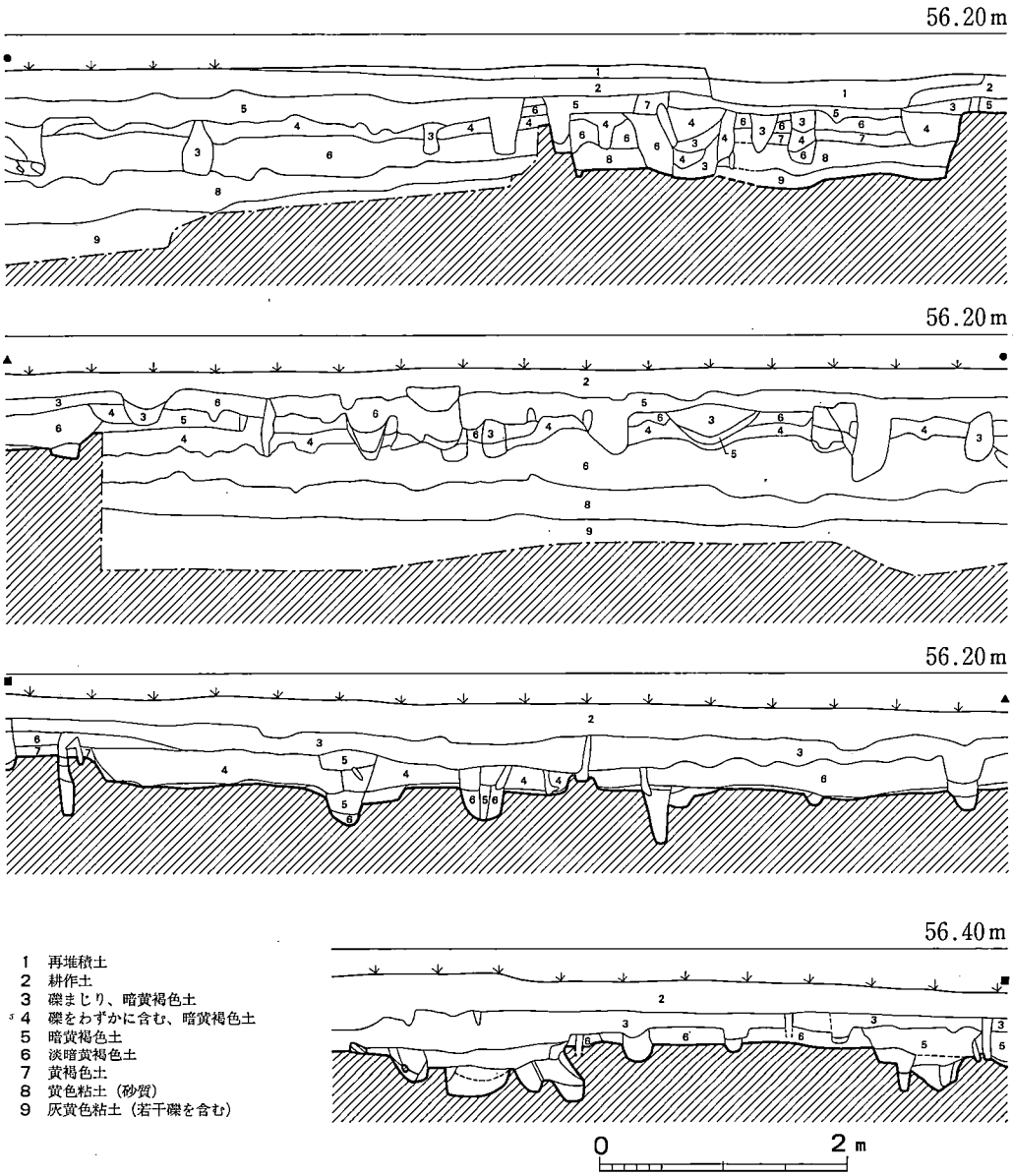
管状土錘（2）　端部を若干破損するが、エンタシス状の円筒形を呈する。長さ5.5cm、中央部直径1.2cm、端部直径0.8cm、孔径0.3cmの大きさで、重量6.6ｇを測る。胎土に砂粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成される。

**包含層出土の遺物**（図版34･35、第68・69図）

原の東遺跡Ⅰ区の堆積層は、第67図に示すように、水田開削時のものとみられる床土が広がり、床土下に堆積していた暗黄褐色土を除去して遺構検出作業を実施したが、検出面は色調が幾分か淡くなる暗黄褐色粘質土であり、色調の変化は漸次的であった。このため明確な分層は行わず、遺構検出面などで一括して収拾した遺物がある。

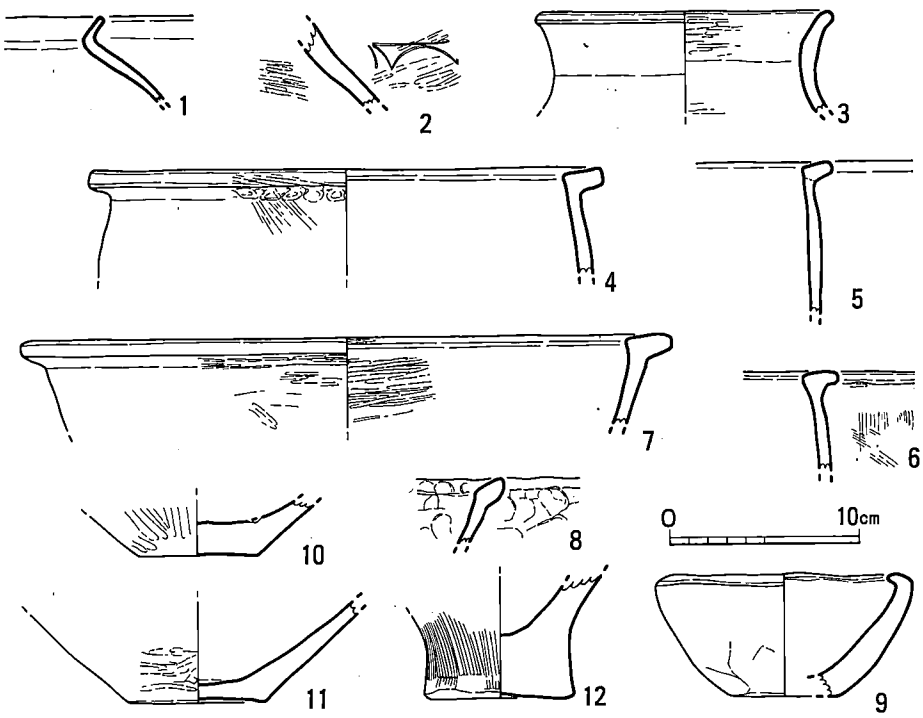
弥生土器

壺形土器（1～3・10・11）　1は丹塗り磨研の短頸壺の破片で、口縁部は緩やかに外反する。胎土に細砂粒を含み、灰黄褐色に焼成されるが、外面と口縁部内面は赤褐色を呈する。2




**第67図**　調査区南壁土層実測図（1/60）

はヘラ磨き調整される胴部破片で、外面にヘラ描きによる沈線で頸部界線を巡らせ、その下に円弧文様を描いている。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、黄茶褐色に焼成される。3は口縁部が肥厚気味で僅かに外反する口縁部破片で、復原口径15.6cmの大きさ。器面はナデとヘラ磨きで調整される。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、黄茶褐色に焼成される。10・11は胴部外面をヘラ磨き、内面がナデで調整され、外底面が僅かに凹む底部破片で、胴部へは大




**第68図**　包含層出土土器実測図（1/4）

きく開く。鉢形土器底部の可能性も残る。胎土に細砂粒・角閃石・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

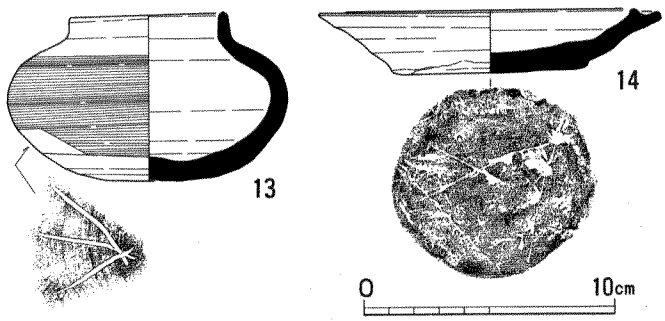
甕形土器（4～6・12）　4～6は逆L字形口縁の甕形土器で、4は上面と端部外面が凹み気味に整えられるが、5・6は端部が丸味をもつ。胴部は僅かに膨らむ模様で、4は復原口径27.0cm、胴部最大径26.0cm前後の大きさ。5は器面が磨滅するものの、4・6では胴部外面がハケ目調整、内面がナデ調整される。12は厚みのある底部破片で、外底面は僅かに凹む。胴部外面はハケ目、内面はナデ調整される。これらは胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒などを含み、灰黄褐色ないし茶褐色に焼成される。

鉢形土器（7～9）　7は復原口径34.4cmの大きさの逆L字形口縁の破片。口縁端部は丸味をもち、内面側は内彎する。内外面ともにヘラ磨き調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母を含み、褐色に焼成される。8は手捏ねの鉢形土器らしい口縁部破片で、肥厚して短く外反する口縁端部は丸味をもつ。内外面ともにナデ調整されるが、指押さえ痕が明瞭にみられる。胎土に細砂粒・角閃石・雲母を含み、灰黄褐色に焼成される。9は復原口径13.5cm、器高6.4cm、底径5.6cmの大きさの椀形に近い器形で、口縁部が強めに内彎する。器壁は厚めで、内外面をナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

これらの弥生土器類は、概ね弥生中期前半頃に含まれるものである。

須恵器

**短頸壺**（13）　口径6.1cm、器高6.6cm、胴最大径11.1cmの大きさの、扁球形体部に短く立ち上がる口頸部が付く器形の壺である。体部外面はカキ目調整され、底部外面はヘラ切り離しされる。胴部下位に3本の短直線を一ヶ所で交差させるヘラ記号が描かれる。胎土に細砂粒がやや目立ち、灰色に堅く焼成される。




**第69図**　ピット出土土器実測図（1/3）

**杯　身**（14）　蓋受けのかえりを有する杯身で、口径11.6cm、器高2.5cm、受け部外径13.6cmの大きさ。外底面はヘラ切り離しの後軽くナデられる。胎土に細砂粒を若干含み、灰色に堅く焼成される。

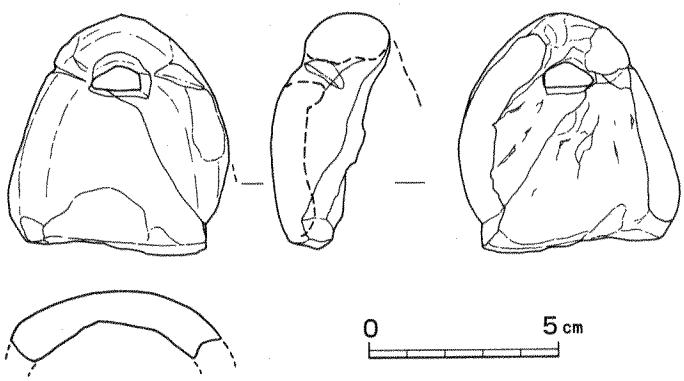
2点の完形の須恵器は、6世紀後半頃の所産であろう。

土製品（図版35-1、第70図）

**銅鐸形土製品**　半欠資料だが、小銅鐸を模倣したものとみられる土製品である。長さ6.4cm、現存幅5.6cm、現存厚2.5cmの大きさで、本来は幅6.0cm強、厚さ4.0cm強程の大きさであったと推定される。砲弾形を扁平にしたような体部で、下側が開き空洞になる。上部に半円形の穴が穿孔されるが、反対側の面にも穿孔されるものと推定される。下端部の処理は幾分か内側に曲がるが、均一でない。外面はナデ調整され、内面は絞り痕の残るナデで調整される。胎土に砂礫・雲母・角閃石を含み、橙褐色に焼成される。1号甕棺墓・5号甕棺墓周辺の表土除去時に遺構検出面の直上から出土した。

鉄　滓（図版35-1）

7.0cm×9.0cmの不整楕円形を呈し、厚さ4.0cm強の大きさの椀形滓である。17号甕棺墓付近の攪乱坑から出土した。

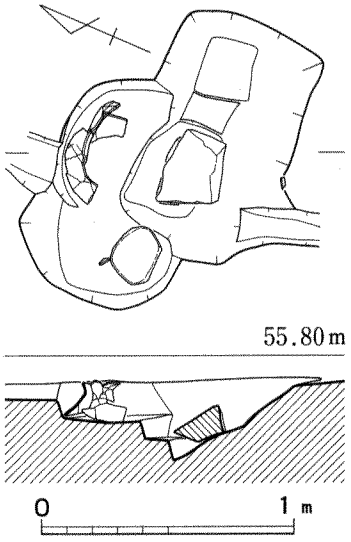



**第70図**　土製品実測図2（1/2）

## 5　縄文時代の遺構と遺物

**1号埋甕**（図版36-1、第71図）

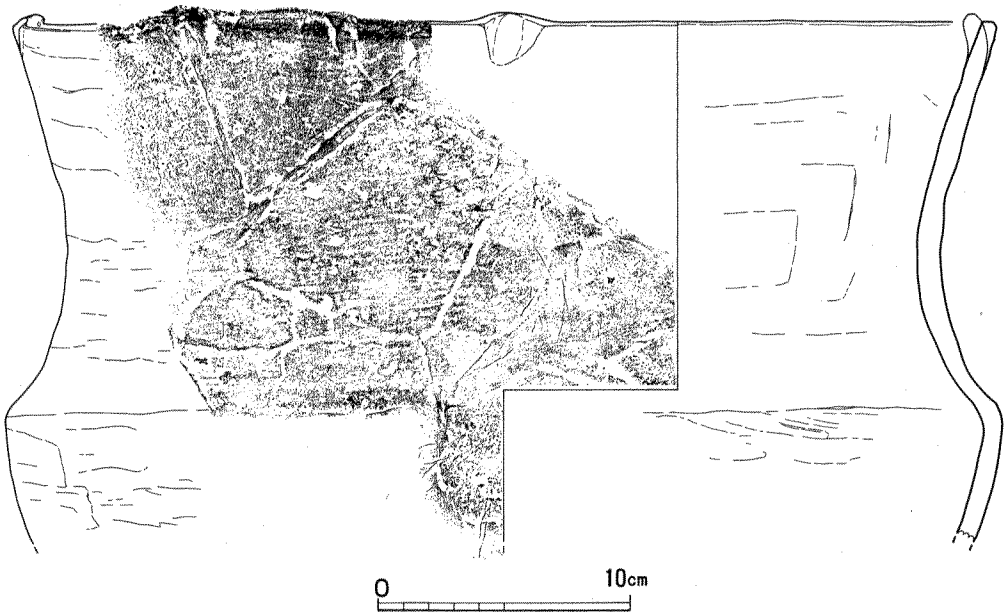
調査区の北西部に位置する。土壙は東西0.9m、南北0.5～0.6mの楕円形プランらしく、深さ0.15m程度に残る。甕？形土器が倒立状態で埋置され、西端部に人頭大程の扁平石が1つみられ、葡萄栽培時の施肥溝が上部を貫き、南半部は葡萄棚の支柱の礎石坑で攪乱されるため、土器は北側の一部しか残らない。




**第71図**　1号埋甕実測図（1/30）

埋甕使用土器（図版36-2、第72図）

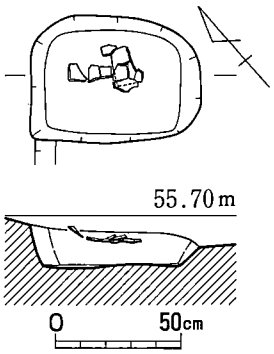
復原口径38.0cm、残存器高21.0cm、胴最大径38.6cmの大きさの甕（深鉢）形土器で、胴下半部を失う。口縁部は長めで緩やかに外反しながら開き、端部4ヶ所を外面側から指先で内面側へ押さえて突起に似た効果を得ている。胴部は稜をなして屈曲し、胴下半へは緩やかに膨らむようである。粗製の類で、外面は指頭痕の残るナデで調整されていて、内面には板ナデ痕がみられる。胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み、淡茶褐色にやや硬く焼成される。




**第72図**　1号埋甕使用土器実測図（1/3）

### 方形土坑（第73図）

調査区の北部に位置する。主軸方向N49°Wを向く隅丸長方形プランの土坑で、長さ0.7m弱、幅0.5m、深さ0.1～0.15m程度に残る。周壁はやや緩やかな傾斜をもち、床面はほぼ平坦である。床面より10cm弱ほど浮いた位置に、口縁部を北西側にした甕形？土器片が出土した。




**第73図**　方形土坑実測図（1/30）

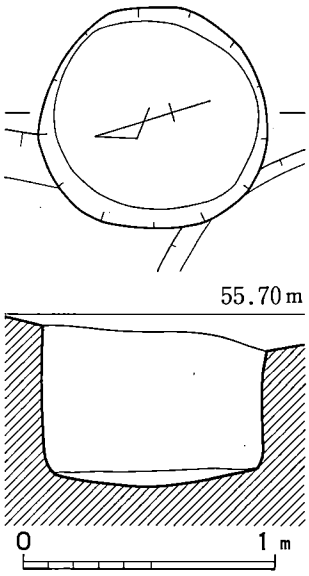
出土土器（図版36-3、第75図）

粗製深鉢（1～4・7・8）　1は直線的に開く口縁部破片で、口唇端部は面が整えられる。外面は条痕に近いナデ、内面はヨコナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・石英・褐色粒を含み、茶褐色に焼成される。2は胴部破片で、底部に向かって直線的に窄まる。外面は板状ナデ、内面はヨコナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・褐色粒を含み、茶褐色ないし暗茶褐色に焼成され、胴屈曲部る付近の外面に煤が付着する。3は「く」字形に屈曲する頸部破片で、口縁部側が肥厚気味に開く。外面は掻きナデたような条痕、内面は雑なヘラ磨きで調整される。胎土に砂粒・雲母を含み茶褐色に焼成される。4は緩やかに反る頸部破片で、口縁部側は一旦膨れる模様である。砂粒・角閃石を含む胎土で、内外面ともにヨコナデ調整され、暗茶褐色に焼成される。7は胴下半部の破片で、外面は板ナデ、内面はヨコナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・褐色粒を含み、茶褐色に焼成される。8は復原口径42.0cm。残存器高25.8cm、胴最大径40.6cmの大きさ。「く」字形に屈曲して膨らむ胴部から頸部に緩やかに括れ、口縁部は一旦僅かに膨らみながら緩やかに外側に開く。4の頸部破片と同様な特徴を有し、口唇部は面が整えられる。外面は頸部に指押さえ痕が残るが、板状ナデ、内面はヨコナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・褐色粒を含み、茶褐色ないし暗茶褐色に焼成されるが、胴部外面には煤が付着する。

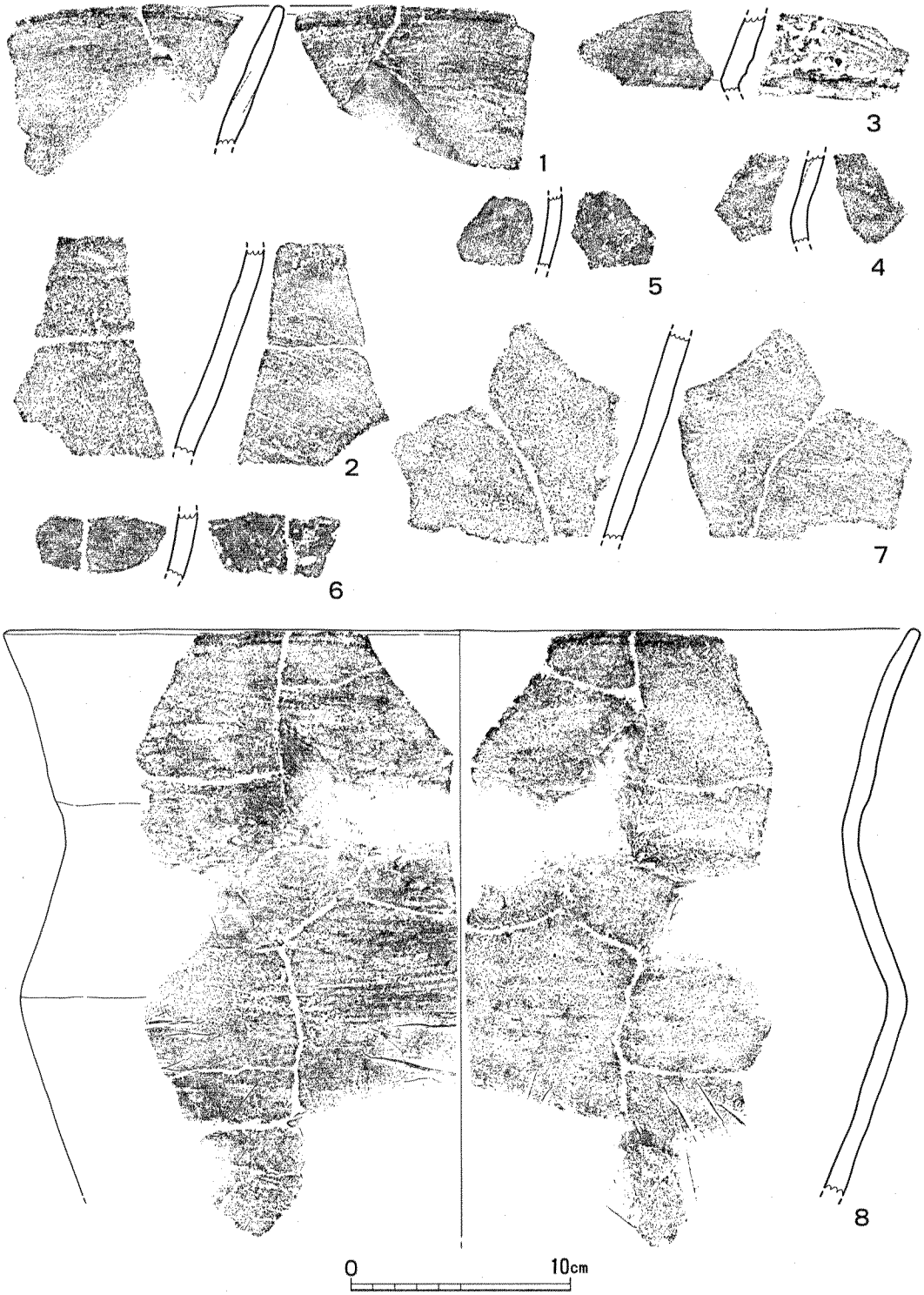
精製深鉢（5・6）　ともに胴部破片で、内外面はヘラ磨き調整される。胎土に砂粒・雲母を含み、茶褐色に焼成される。

### 円形土坑（第74図）

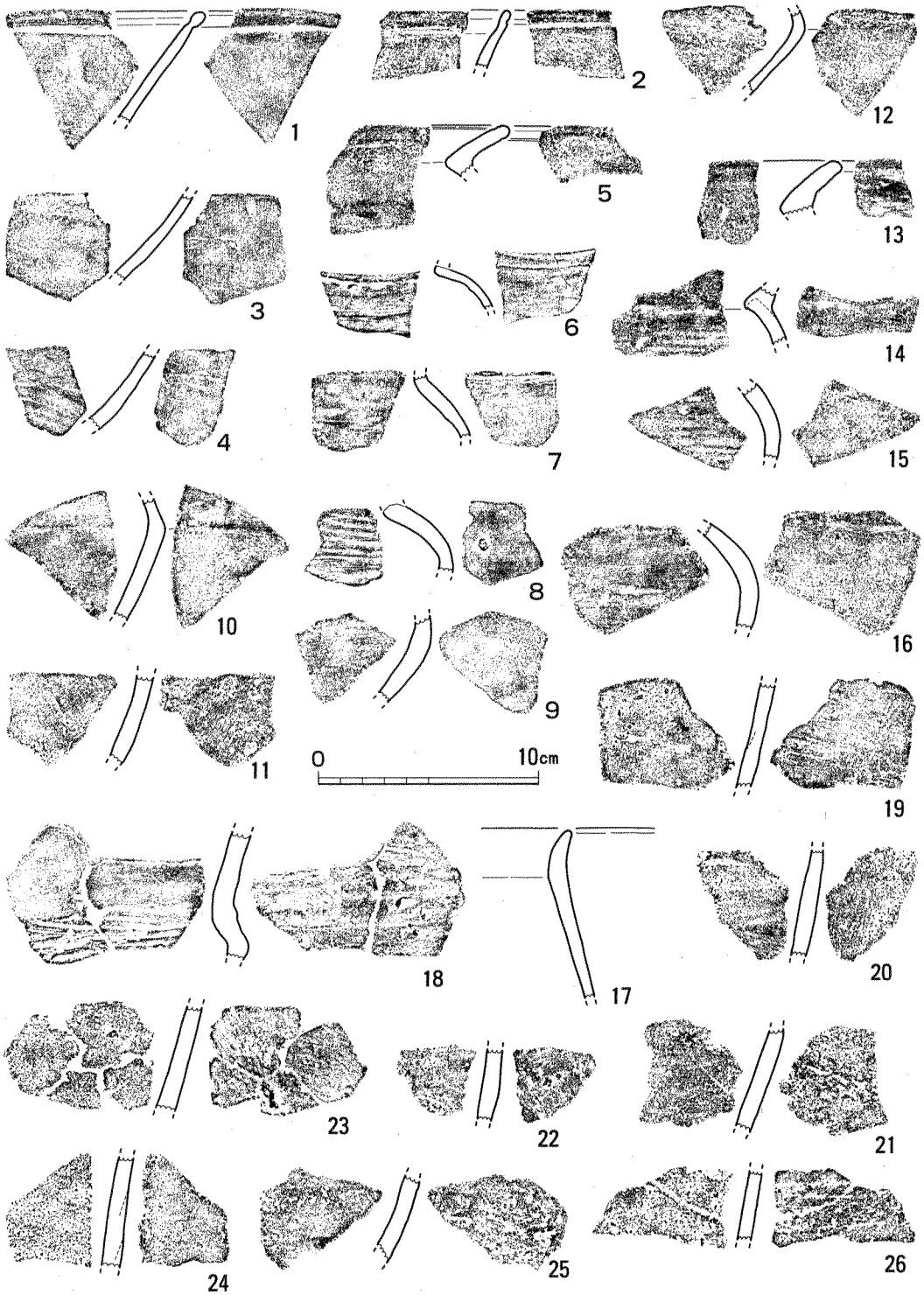
調査区の中央部のやや西寄りに位置する。西側を2号・22号甕棺墓墓壙によって切られるが、直径0.9m弱の大きさの円形プランで、深さ0.6m程に残る。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦ながらも中央部が幾分か深い。



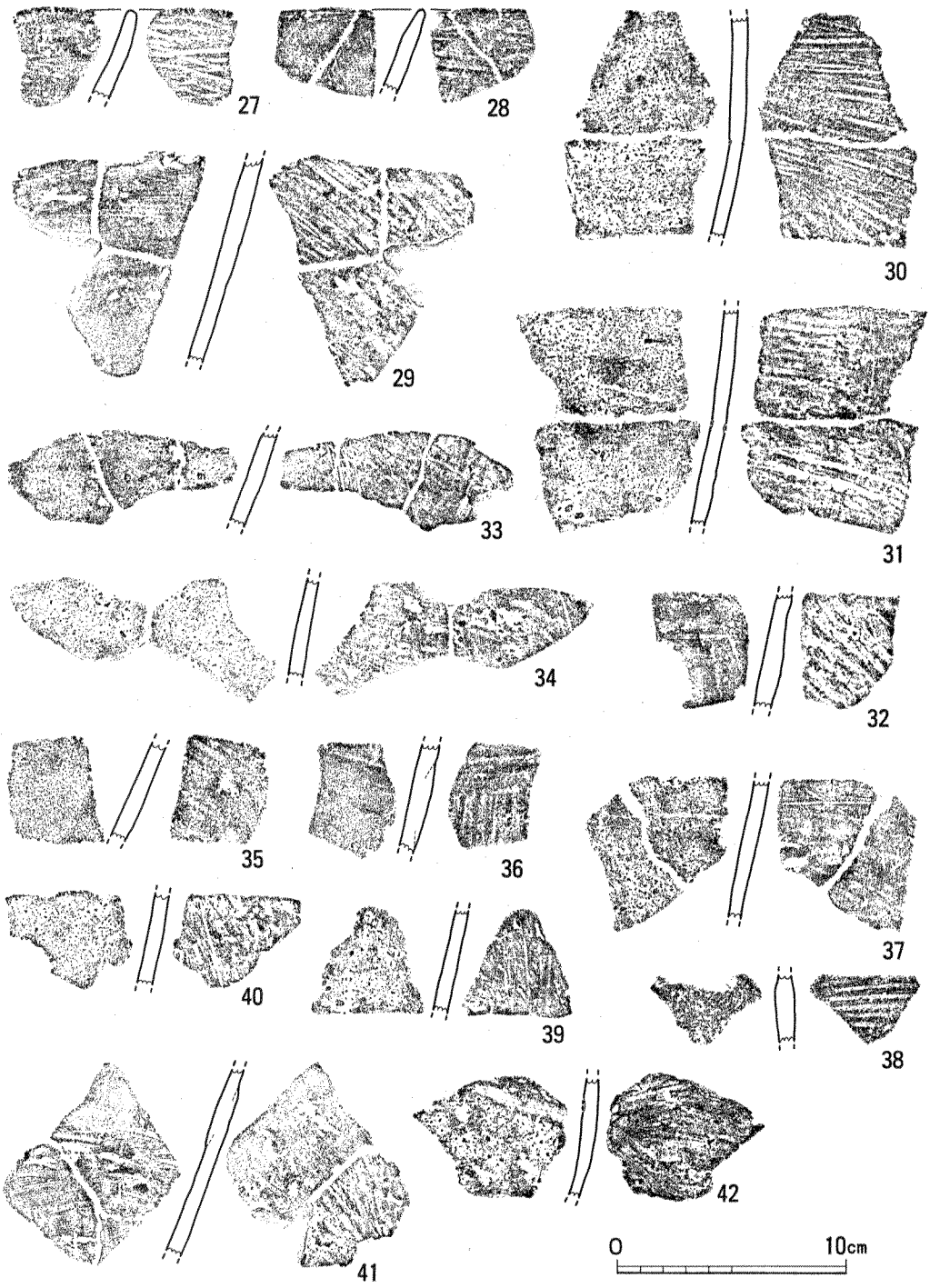

**第74図**　円形土坑実測図（1/30）




**第75図**　方形土坑出土土器拓影（1/3）




**第76図**　円形土坑出土土器拓影１（1/3）




**第77図**　円形土坑出土土器拓影２（1/3）

出土土器（図版37、第76～78図）

精製浅鉢（１～８）　１・２は口縁部が長めに開く浅鉢であろう。内外面ともヘラ磨き調整され、器壁は薄い。口縁端部は内外面に段状の沈線を巡らせて、口唇部は丸みをもつ。３・４は胴下半部の破片で、器壁は薄い。これらは胎土に砂粒・角閃石・石英・褐色粒などを含み、暗茶褐色などに焼成される。５は口縁部が肥厚気味に外反し、端部内外面に浅く細い沈線が巡り、口唇部は丸みをもつ。６～８は胴部が誇張気味に膨らむ浅鉢で、内外面ともにヘラ磨き調整されるが、内面側は条痕状の段を生じている。胎土は細砂粒を僅かに含むが精良で、暗茶褐色に硬く焼成される。

精製鉢（９～17）　９～12・15・16の胴部破片のうち、10・12の屈曲部はやや稜をなす。内外面ともヘラ磨き調整される。胎土に砂粒・角閃石・石英を含み、茶褐色に焼成される。11には胎土に雲母と植物種子を挟雑した痕跡がある。13～15は巧く接合しないが同一個体であろう。短く外反する口縁部は肥厚し、頸部は内面側に突出して、丸く膨らむ胴部に乗る。胎土に砂粒・角閃石を含み、暗茶褐色に焼成される。16も丸く膨らむ胴部である。17は肥厚気味の口縁部が緩やかに短く外反する。胎土に砂粒・角閃石・雲母を含み、暗黄褐色に焼成されるが、外面に煤が若干付着する。

粗製鉢（18～26）　18は「く」字形に屈曲する胴部から短く括れた頸部を介して緩やかに口縁部が開く器形の破片で、内外面とも条痕の残るナデで調整される。胎土に砂粒を含み、茶褐色に焼成される。19～26は底部に向かって直線的に窄まるとみられる胴下部破片で、19～24は内外面ともにナデ調整、25・26は外面が掻きナデないし板状ナデ調整で、内面はナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石などを含み暗黄褐色などに焼成される。

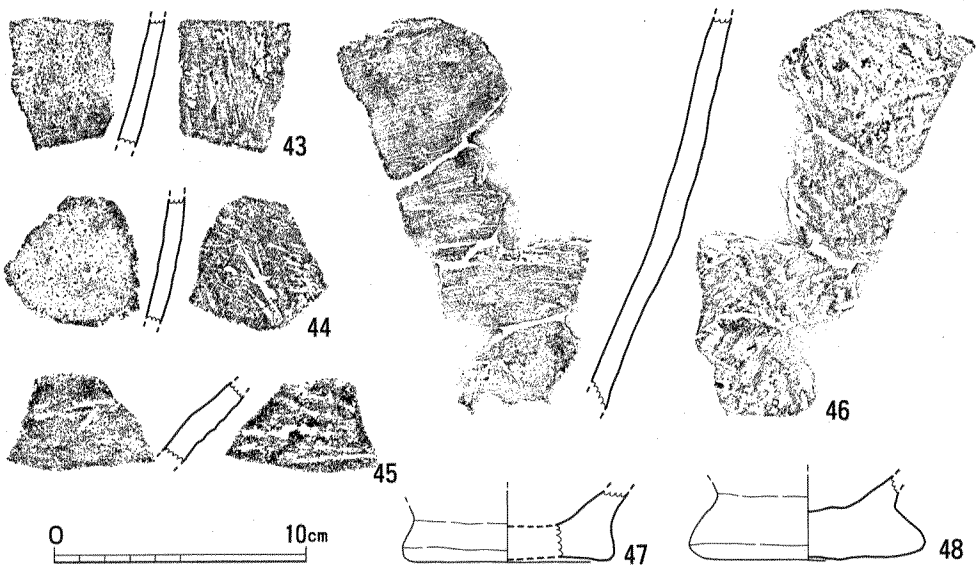
粗製深鉢（27～46）　27～38は外面を二枚貝条痕、内面をナデで調整されるもので、33～37の外面にはナデ調整が加わる。27の口縁部破片は内彎気味に立ち上がり、端部に丸みをもつが、28の口縁部は直線的に開き、端部に丸みをもつ。いずれも胎土に砂粒・角閃石・褐色粒などを含み、茶褐色あるいは暗茶褐色などの色調に焼成される。

39～46は外面が掻きナデあるいは板ナデ調整されて条痕状をなし、内面はナデないし板ナデ調整される。胎土に砂粒・角閃石・雲母・褐色粒などを含み、茶褐色などに焼成される。

底　部（47・48）　47は外底面がレンズ状に僅か凹むもので、精製鉢の底部であろう。内外面ともにやや丁寧にナデ調整される。胎土に砂粒・褐色粒を含み、茶褐色に焼成される。48は底部が厚めで裾広がりなもので、内外面ともにナデ調整されるが、組成深鉢の底部であろう。胎土に砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、茶褐色に焼成される。

石　器（図版40、第82・83図）

すり石（８・９）　ともに掌に納まり易い大きさの、安山岩質の円礫を素材にして、平坦な両面を擦る機能に用いたものである。８は長さ10.7cm、幅9.5cm、厚さ5.5cmの大きさで、周縁




**第78図**　円形土坑出土土器拓影３（1/3）

に敲打痕が顕著に残り、敲く機能を併せもっていたことが分かる。重量873.0ｇを測る。９は長さ11.7㎝、幅9.7㎝、厚さ5.0㎝の大きさ。周縁も擦れて磨耗が進むが敲打痕が一部に残る。重量935.7ｇを測る。

**掻　器**（17）　サヌカイト製の剝片を用いて、周辺を打ち欠いて調整している。長さ6.6㎝、幅5.8㎝の円形に近い形状で、2.2㎝の厚みを有する。なお剝片の先端側は片面からの調整である。重量74.8ｇを測る。

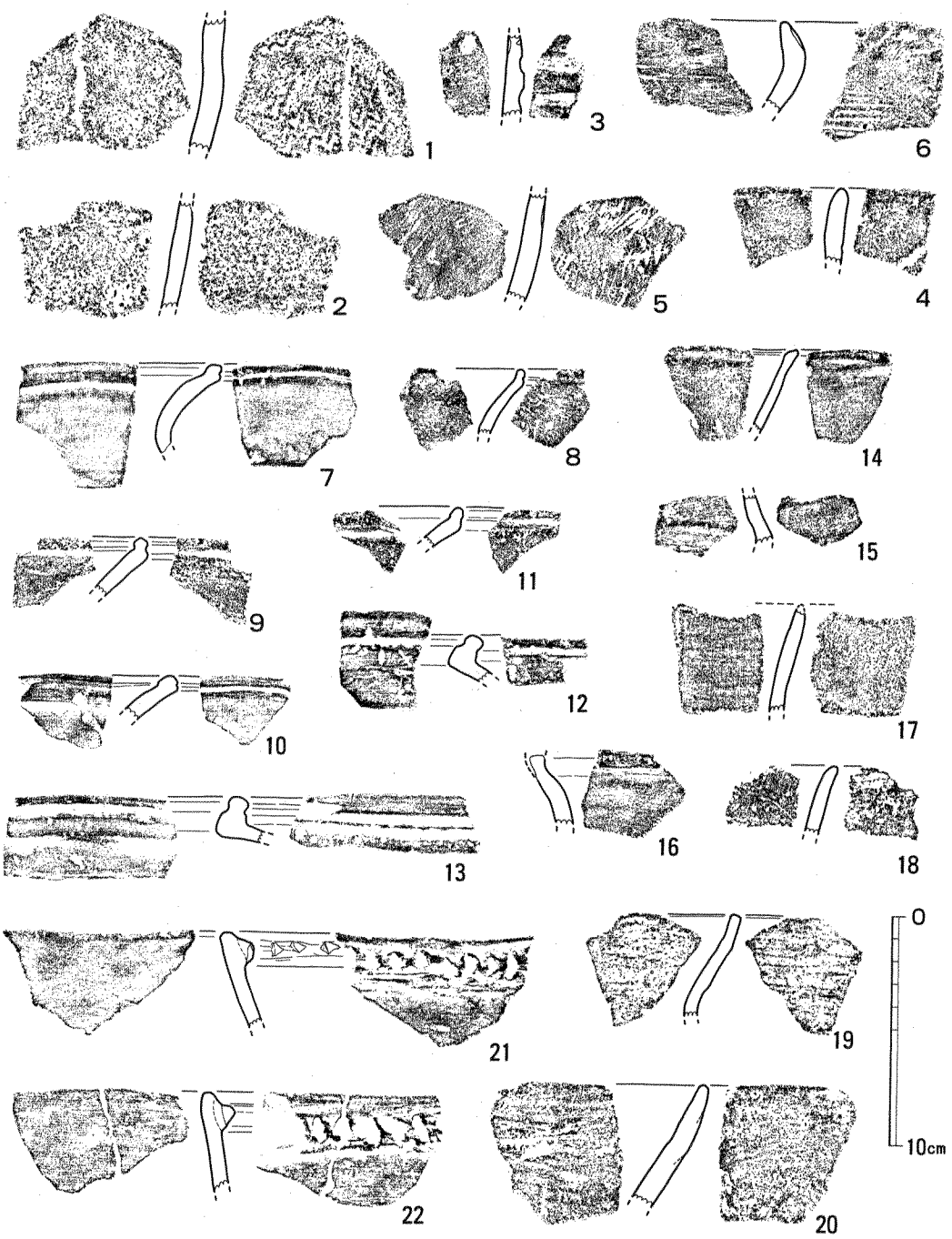
## 包含層出土の遺物（図版38～40、第79～84図）

縄文土器（図版38、第79・80図）

**押型文土器**（１・２）　器面が風化磨滅して不明瞭だが、山形押型文が外面にみられる破片である。ベルト施文の可能性があり、内面はナデ調整される。胎土に砂粒を含み、茶褐色ないし淡褐色に焼成される。

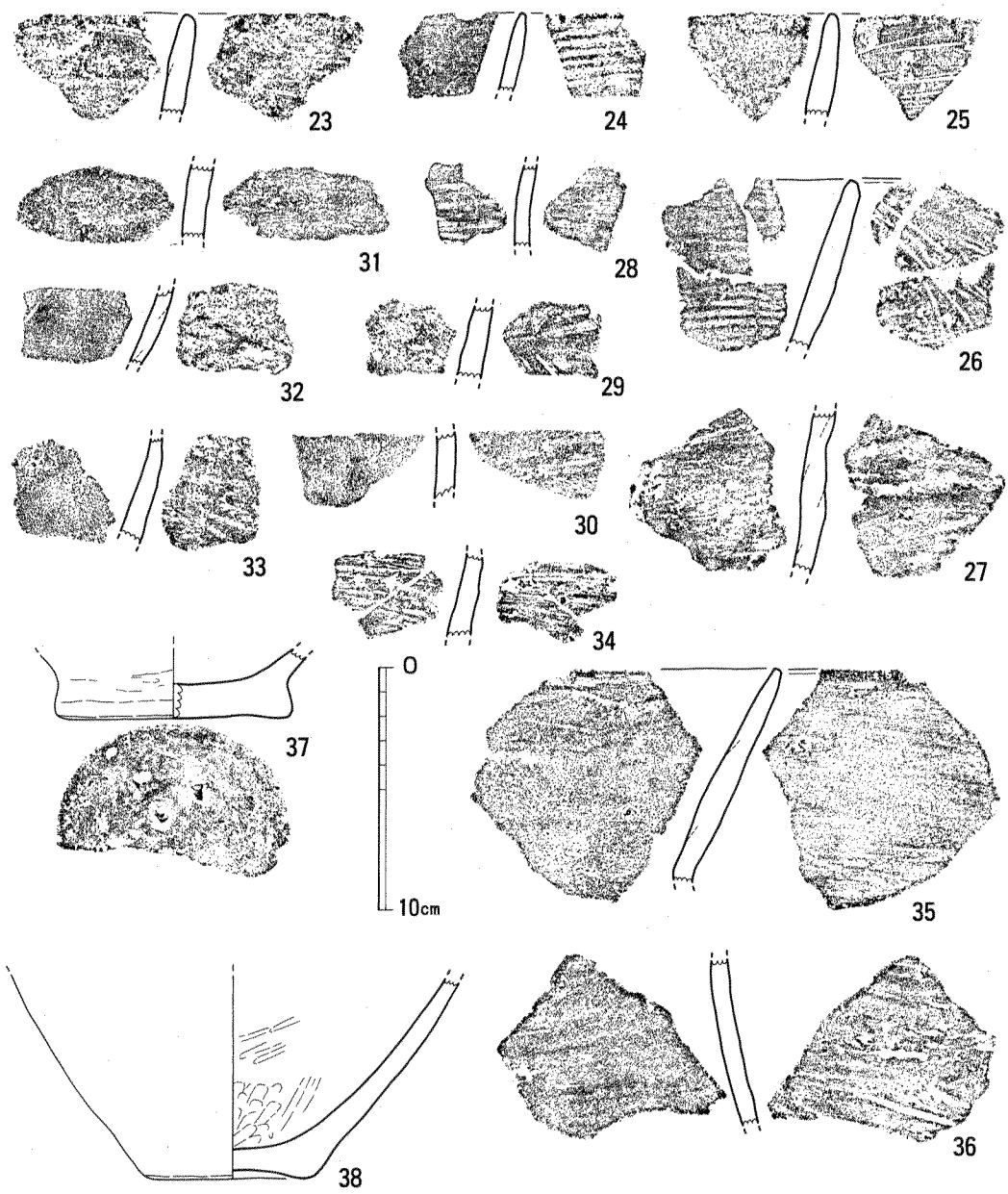
**阿高系土器**（３・４）　３は胎土に滑石粉末を含み光沢のある破片で、外面に横走する凹線、上側の内外面に刺突痕がみられるので、端部を欠くものの口縁部破片であろう。４は外反気味ながら直立する口縁部破片で、胎土に滑石粉末を含む。内外面ともナデ調整されて、外面の一部に斜行する沈線がみられる。

**形式不明の土器**（５・６）　５は外面に爪形状条痕、内面に板ナデ痕のみられる破片で、胎土に砂礫を含み、茶褐色に焼成される。６は内彎する口縁部破片で、端部に指先によるとみら




**第79図**　包含層出土縄文土器拓影１（1/3）

れる凹点が付される。内外面ともに二枚貝条痕で調整されて、内面側はナデが加わる。凹点には細かな放射状の痕跡もみられる。胎土に砂粒を含み、茶褐色に焼成される。後期土器であろう。




**第80図**　包含層出土縄文土器拓影２（1/3）

晩期黒色磨研土器（7～16）　7・8は外反する口縁部破片で、端部内面は段状に凹み、外面に浅く細い沈線が1条巡る。内外面とも丁寧にヘラ磨き調整されるが、7の口縁部の反りが強めで器壁が厚めなのに比して、8は緩やかに外反し、器壁は薄い。7は鉢形、8は浅鉢形の器形であろう。9～11は外反する口縁部が端部で短く屈折する浅鉢の口縁部。屈折部内外に明瞭な沈線を有する例9、外面の沈線が細く内面が段状をなすもの10、内外面とも沈線が段状をなすもの11のバリエーションがある。12・13は胴部が誇張気味に膨らむ器形の浅鉢の口縁部で、口縁部は短く立ち上がり、内外面に沈線を巡らせる。13では外面の沈線が明瞭だが、12の外面の沈線は退化して段状をなす。14は浅鉢の口縁部破片だが、直線的に外方に開き、端部の沈線が退化して単につまみあげたような形状のもの。これらはいずれも内外面ともヘラ磨き調整される。胎土に細砂粒・角閃石などを含み、暗黄褐色などに焼成される。15は頸部破片で、胴部の屈曲に稜を有する。16は胴部が丸く膨らみ、口縁部側は剝落するが擬口縁をなす。15・16は外面がヘラ磨き、内面がナデで調整される。晩期中頃の所産であろう。

精製鉢形土器（17・18）　17は外反気味に開いた口縁部が端部で内彎気味になるもの、内外面ともにヘラ磨き調整されるがやや粗い調整である。18は端部で外側に緩く反るもので、内外面ともにナデ調整される。17・18は口縁部のみの破片のため全体の器形は不明ながら、バケツ形を呈するものと思われる。

粗製鉢形土器（19・20・23～35）　19は括れた頸部から内彎気味に口縁部が開き、口唇端部は面を整えられる。内外面ともに二枚貝条痕で調整される。胎土に砂粒・雲母・石英を含み、明るめの淡茶褐色に焼成される。20は内彎気味に朽ち縁部が開き、口唇端部が丸くまとまるもの。内面には二枚貝条痕が残るものの、内外面ともナデ調整される。胎土に砂粒・石英・褐色粒を含み、茶褐色に焼成される。後期中葉から晩期前半のものであろう。

23～26・34は直線的に開く口縁部破片で、口唇端部は面が整えられる。器面は二枚貝条痕およびナデで調整され、24・25は外面に、26は内外面ともに二枚貝条痕が明瞭に残るが、他は条痕の後にナデ調整が加わり、34では条痕は殆ど痕跡を残さない。27～29は外面が二枚貝条痕の後にナデ調整が加わる胴部破片、30・31はナデ調整、32・33・35は掻きナデ条痕、34は内外面ともに二枚貝条痕で調整される。

夜臼式土器（21・22）　ともに口縁部直下に刻み目突帯を巡らせる口縁部破片で、刻み目は粗い。刻み目の施文原体は21が直線的な板小口で、22は波状を呈する板状？原体である。ともに内外面は磨きに近い丁寧なヨコナデで調整される。胎土には砂粒を含み、暗茶褐色に焼成される。

底　部（36・37）　36は底面側に僅かに広がる底部破片で、内底面はヘラ磨き調整されるが、外面はナデ調整される。胎土に砂礫・角閃石を含み、茶褐色に焼成される。37は外底面がレンズ状に凹む底部破片で、内外面ともにヘラ磨き調整される。胎土に細砂粒・雲母・褐色粒・角

閃石を含み、茶褐色に焼成される。

石　器（図版39･40、第81～83図）

打製石斧（1～7）　1は1号住居跡の西側、2・4・7は大溝、3は1号土器溜まりの西側のピット、5は5号土坑の西側のピット、6は1号住居跡床面から出土した。いずれも緑泥片岩を素材にしたもので、4・5の体部はやや厚みを有するものの、扁平打製石斧である。

1・2は平面形が撥形を呈し、周縁のみを調整剝離している。全長が11.4cm、12.7cmで、刃部側に最大幅5.5cmがある。厚さは0.9cmと1.1cmで、重量は86.0ｇと126.4ｇである。刃部両面に主軸方向の擦痕がみられる。

3は両側縁に抉りのみられる撥形を呈し、ふぐしに似た形状のもの。長さ11.6cm、幅4.7cm、厚さ1.0cm、重量70.9ｇを測る。刃部はやや磨耗するが、擦痕の方向はよく分からない。

4は一部欠損後に再度調整剝離を加えたもので、両側縁に抉りをもつが、再調整のためか軸線が反る。基部側も欠損するため当初の法量は分からないが、残存長12.5cm、幅5.8cm、厚さ1.7cm、重量139.4ｇを測る。刃部は側縁側などで磨耗するが、擦痕の方向は不明である。

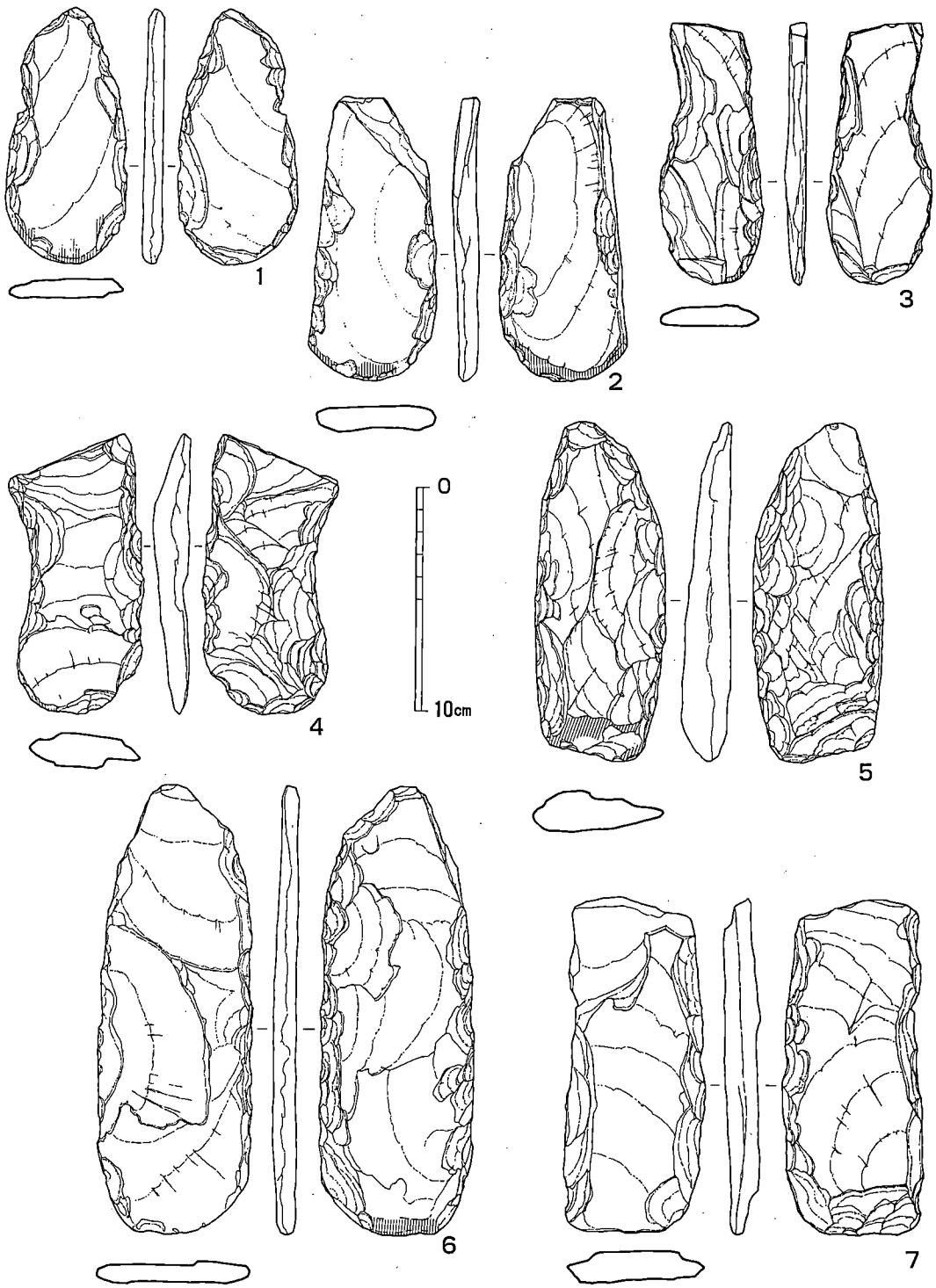
5は短冊形で、両側縁が僅かに膨らむ。長さ15.2cm、幅5.9cm、厚さ2.2cmで、刃部側に厚みがある。刃部に主軸に対してやや斜めに向かう擦痕がみとめられる。重量253.4ｇを測る。

6は短冊形だが、基部側は窄まる。厚さ1.1cmの扁平な素材を用いて、両側縁は丁寧に調整剝離を加えて直線的に整えられる。長さ20.2cm、幅7.0cmとやや大振りで、重量245.4ｇを測る。刃部は丸みをもち、磨耗するが、擦痕は不明である。

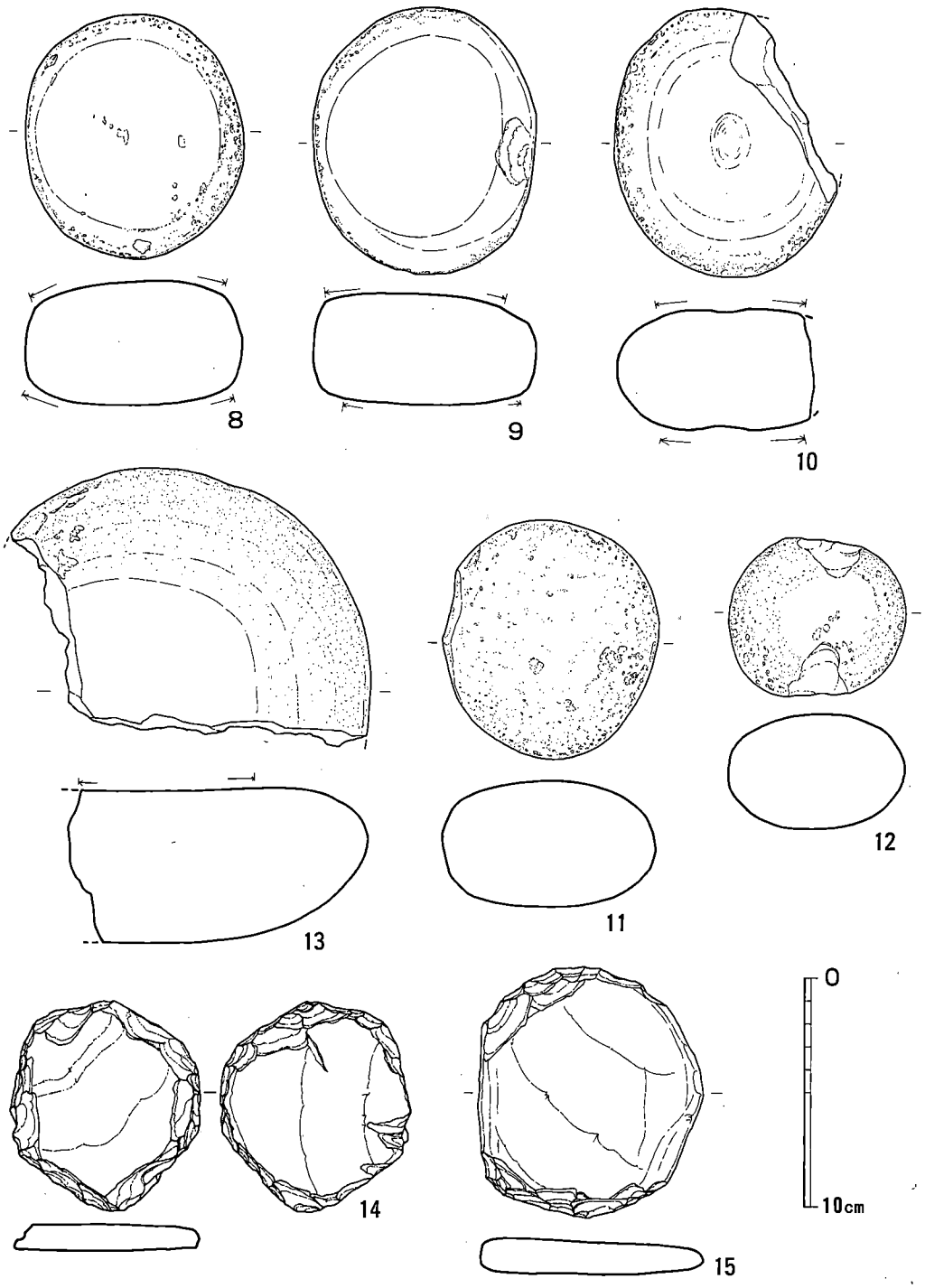
7は長さ15.2cm、幅6.3cm、厚さ1.2cmの大きさで、短冊形を呈するが、基部側は一部欠損する。刃部はさほど丸みをもたず、やや磨耗するが、擦痕は分からない。重量230.8ｇを測る。

敲　石（10～12）　10は大溝内堆積土の下層に含まれていた。一部欠損するが、長さ11.8cm、幅9.8cm＋α、厚さ5.3cmで、掌に納まり易い大きさの安山岩質の円礫を用いている。平坦な両面は擦り面に用いられるが、中央部に敲打痕を有する凹みがある。また周縁にも敲打痕が明瞭に残る。重量の現存値857.1ｇを測る。11は方形竪穴内下部の黒灰色土に含まれていた。長さ10.5cm、幅9.4cm、厚さ5.5cmの大きさの安山岩質円礫で、周縁に敲打痕が顕著にみられる。すり石にも使用されたらしく平坦な面はやや磨耗するが顕著でない。重量733.8ｇを測る。12は26号甕棺墓の墓壙内から出土した。直径7.3～7.8cm、厚さ5.1cmの安山岩質円礫を用いているが、全体に敲打痕が及び、中央部の帯状に凹んだ部分は擦れて磨耗する。すり石というよりは砥石のような用途を併せもっていたものと思われる。重量322.3ｇを測る。弥生時代に含まれる可能性もある。

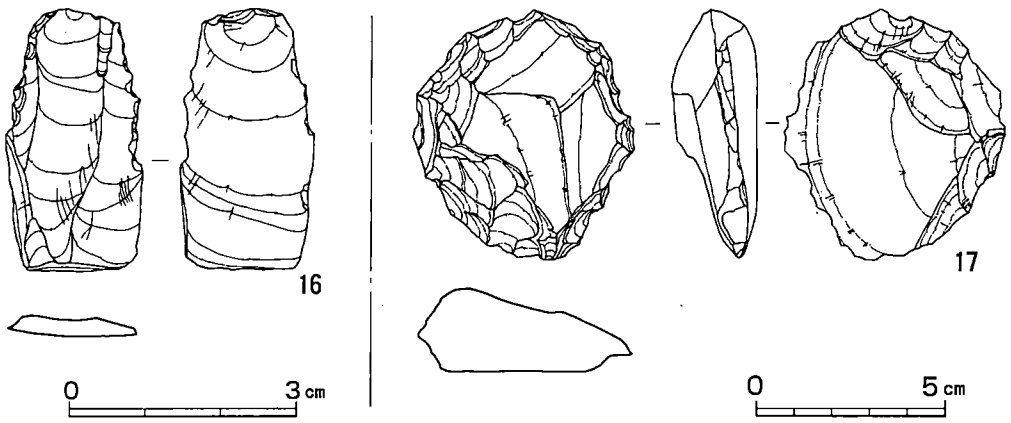
石　皿（13）　3号木棺墓の北西側に隣接する土坑状ピットから出土した。全体の1/4程度と推定される花崗岩質円礫の破片で、残存長･幅は11.5～15.5cm、厚さ6.8cmの大きさ。片面の中央部が凹むタイプのもので、周縁側に4～5cmの縁を残し、凹んだ面はよく擦れている。重量




**第81図**　縄文時代の石器実測図１（1/3）




**第82図**　縄文時代の石器実測図２（1/3）




**第83図**　縄文時代の石器実測図３（1/1・1/2）

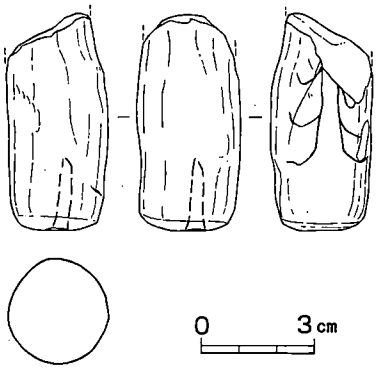
の現存値は1759.6ｇを測る。

円盤状石製品（14・15）　14は２号袋状竪穴から、15は１号住居跡の床面に接して出土した。ともに緑泥片岩の板状素材を用いて、縁側を調整剝離して円盤状に整えたものである。14は直径8.2～9.2cm、厚さ1.2cm、重量130.9ｇを測る。15は直径9.7～11.0cm、厚さ1.6cm、重量260.2ｇを測る。

削　器（16）　26号甕棺墓の墓壙内から出土した。伊万里湾産の黒色黒曜石の縦長剝片の両側縁を主要剝離面側から僅かに調整剝離するもので、長さ3.45cm、幅1.80cm、厚さ0.21cmの大きさ。重量2.4ｇを測る。

土製品（図版40、第84図）

土偶片　北部の遺構検出面で発見された。片方の腕もしくは脚の破片で、全体の形状は不明である。残存長5.7cm、最大幅・厚さ2.6～2.7cm、端部の幅・厚さ2.3cm前後の大きさで、先端部から細い穴が穿孔されるものの、深さ1.9cmの位置で止まる。片面には浅いヘラ描き沈線で文様が描かれる。文様は左右対称に枝分かれで先端が外反するものの意匠は分からない。胎土に砂礫・角閃石・雲母・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成される。




**第84図**　土偶実測図（1/2）

## 6　おわりに

原の東遺跡Ⅰ区では、縄文時代、弥生時代、古墳時代および中世の各時期の痕跡をみることが出来る。

縄文時代の遺物では、僅かに早期のベルト施文らしい山形押型文土器片、中期の阿高系土器片を含み、石器類と晩期の土器片が包含層から幾らか出土しているものの、遺構としては晩期の円形・方形の土坑、埋甕がそれぞれ1基発見されたに過ぎない。石器類では、後期後半以降にみられる扁平打製石斧や、すり石もみられるが、石皿は擦り面が中窪みのものでやや時期的に遡る可能性もある。円盤状石製品は晩期にみられるものだが、用途についてはよく分からない。土偶は片腕か片脚部分の破片で、全体の形状は分からないが、細い線で文様を描いていることからみて、後期末以降で、土器類である程度まとまった遺物量をみる晩期の広田Ⅳ期頃に該当する可能性を考えておきたい。包含層出土土器には、近年晩期末よりも弥生早期に包括される夜臼式土器も含まれているが、球形の敲石は弥生時代まで下る可能性もあろう。

弥生時代は、このⅠ区で最も顕著に痕跡をみることのできる時期で、特に中期の甕棺墓を中心とした墓地群は、住居跡・土坑などの生活関連遺構に比して、遺構数も多く明瞭である。墓地の配置状況では、東西の2群に大きく分けることができる。

東側墓地群は、2号木棺墓とこれに平行する6号・7号甕棺墓と、向きは変わるが近接する23号甕棺墓が位置する。調査できたのは4基のみだが、本来は更に数が増えるものと思われる。南東側が大溝で削られ、北側は水路と農道があったため調査し得ず、残念ながら拡がりを確認できなかった。

西側墓地群は、甕棺墓23基、石棺墓2基、木棺墓2基、土壙墓4基を調査した。このうち木棺墓1基は他の墓と少し距離を隔てて位置していて、更に別の群の存在を考える必要もある。北端が不明ながら南北15m、東西10m程の範囲内に分布し、重複は北半部で殆どみられないものの南半部で顕著である。北半部は配置から二列埋葬に類似するが、南半部では時期的に古い甕棺を核に群がる状況がみられる。なお、墓地に伴う祭祀遺構は明確でない。また、墓地群南端と弥生時代中期の住居跡周壁との距離は約2mであることから、居住区域と墓地群は概ね隣接していることになる。

個々の墓地の諸元を第1表に示すが、甕棺墓のうち成人甕棺は3基で、内法が1.0mを越す中形の甕棺は西群で5基、東側で可能性のある1基のみで、過半数が小形の小児棺である。石棺墓、木棺墓、土壙墓が成人ないし中間クラスの被葬者用の墓地であるとしても、小児棺の優越性は変わらない。また、時期的には概ね中期初頭～中頃に集中している（註1）。成人甕棺使用土器の大形土器は中期初頭から前葉に限られていて、中頃には小児甕棺のみであることから、前葉までは集団内あるいは周辺に甕棺製作工人が存在したか、交流が強固であったものの、中

**表1　原の東遺跡Ⅰ区弥生時代の墓地　一覧表**

| No. | 形　式 | 上甕＋下甕 | 棺内法 | 種別 | 主軸方向 | 埋置角度 | 標　高 | 群 | 時　期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 接　口 | 鉢　＋　甕 | 約80cm | 小児 | N58°15′E | 0° | 55.6m | 西 | K II c |
| 2 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 122 | 小児 | N30°50′E | 5°30′ | 55.3m | 西 | K II b |
| 3 | 単 | 壺 | 約60 | 小児 | N75°W | ° ′ | 55.6m | 西 | K II c |
| 4 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 107 | 小児 | N57°E | 1°30′ | 55.4m | 西 | K II c |
| 5 | 接　口 | 鉢　＋甕甕 | 74 | 小児 | N32°10′E | 2°30′ | 55.3m | 西 | K II b |
| 6 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 75 | 小児 | N 4°30′W | 0° | 55.6m | 東 | K II c III |
| 7 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 約110 | 小児 | N 0°45′E | 4° | 55.3m | 東 | K II a |
| 8 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 72 | 小児 | N40°20′E | 10° | 55.4m | 西 | K II b |
| 9 | 挿　入 | 壺　＋　甕 | 68 | 小児 | N66°E | 11°30′ | 55. m | 西 | K II b |
| 10 | 覆　口 | 甕　＋　甕 | 70 | 小児 | N20°30′E | 6° | 55.4m | 西 | K II b |
| 11 | 接　口 | 壺甕＋　甕 | 98 | 小児 | N86°W | 2°30′ | 55.3m | 西 | K II c |
| 12 | 接　口 | 甕壺＋　甕 | 81 | 小児 | N87°W | 8° | 55.3m | 西 | K II bc |
| 13 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 175 | 成人 | N37°E | 6°30′ | 54.9m | 西 | K II ab |
| 14 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 66 | 小児 | N43°40′W | 7°30′ | 55.4m | 西 | KIIb |
| 15 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 80 | 小児 | N31°E | 7° | 55.3m | 西 | KIIc |
| 16 | 接　口 | 鉢　＋　甕 | 75 | 小児 | N51°30′W | 1°40′ | 55.3m | 西 | KIIb |
| 17 | 接　口 | 鉢　＋　甕 | 106 | 小児 | N81°30′E | 5° | 55.0m | 西 | KIIb |
| 18 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 105 | 小児 | N26°E | 1° | 55.2m | 西 | KIIbc |
| 19 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 105 | 小児 | N34°W | 0°20′ | 55.3m | 西 | KIIa |
| 20 | 接　口 | 鉢　＋　甕 | 91 | 小児 | N19°30′E | 0° | 55.3m | 西 | KIIcIII |
| 21 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 86 | 小児 | N22°E | 2°30′ | 55.3m | 西 | KIIc |
| 22 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 165 | 成人 | N22°E | 4°10′ | 54.8m | 西 | KIIab |
| 23 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 67 | 小児 | N63°30′W | 3°30′ | 55.5m | 東 | KIIb |
| 24 | 挿　入 | 甕　＋　甕 | 約100 | 小児 | N82°E | 3°30′ | 55.2m | 西 | KIIc |
| 25 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 約75 | 小児 | N21°30′E | 7° | 55.3m | 西 | KIIc |
| 26 | 接　口 | 甕　＋　甕 | 180 | 成人 | N38°E | 1° | 54.8m | 西 | KIIb |

| | 長軸 | 短軸 | 深さ | 石　材 | 棺内法 | 主軸方向 | 標　高 | 群 | 時　期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1石 | 228cm | 91cm | 85cm | 側各3、口各1 | 160×35 | N49°W | 54.9m | 西 | |
| 2石 | 102 | 53 | 19 | 側1、口1 | 55×26 | N43°E | 55.4m | 西 | |
| 1木 | 170 | 90 | 46 | 口2 | 92×36 | N30°E | 55.2m | 西 | |
| 2木 | 150 | 70 | 35 | | 132×59 | N 2°E | 55.4m | 東 | |
| 3木 | 170 | 88＋ | 30 | | 120×77 | N71°W | 55.1m | 西′ | |
| 1土 | 160 | 50？ | 45 | | 100×— | N30°30′E | 55.2m | 西 | |
| 2土 | 186 | 96＋ | 30 | | 117×40 | N63°E | 55.2m | 西 | |
| 3土 | 161 | 92 | 6 | | 152×41 | N75°E | 55.4m | 西 | |
| 4土 | 160？ | 80 | 40 | | 140×50 | N25°W | 55.2m | 西 | |

頃での交流停止、集団自体の移動を含めた衰退化が想起される。

朝倉郡東部での、該期の甕棺墓を含む墓地群は、甘木市栗山遺跡で甕棺墓77基、土壙墓６基、石棺墓２基など（註２）、甘木市柿原遺跡Ｅ地区で甕棺墓23基、木棺墓14基、石棺墓１基、石蓋土壙墓４基（註３）、朝倉町大庭久保遺跡で甕棺墓38基、木棺墓33基、石棺墓８基、石蓋土壙墓など49基（註４）、杷木町杷木宮原遺跡で甕棺墓18基、木棺墓７基、土壙墓２基（註５）から成る墓地群が調査されている。これらの遺跡で共通することの一つに、成人甕棺使用土器の器壁の厚さが福岡平野などの甕棺盛行地域の成人甕棺の例に比して厚いことが指摘される。また、二つめの共通点に、中期初頭から中期中頃までの時期幅に納まることがあげられる。原の東遺跡の成人用甕棺に使用された大形甕は、大庭久保遺跡の例よりも大きく、杷木宮原遺跡・中町裏遺跡の甕棺の規模に近い。

このことから、これらの墓地を営んだ集団が、中期初頭期には甕棺盛行地域と密接な関係をもっていたことと、そしてこれらの集団の移動を含めた中期中頃の衰退化が朝倉郡東部一帯にあったとみて、大きな誤りがないと言える。

弥生時代の出土遺物では、甕棺墓等に帰属するかは判断しえないが、１・５号甕棺墓周辺の遺構検出面で小銅鐸形土製品が出土している。中期中頃で集団の衰退化が進んだとした場合、小銅鐸の時期を遡らせて考える必要も生じる。

古墳時代以降の遺構では、大溝から出土する須恵器から６世紀後半頃、上層の白磁から12世紀後半ないし13世紀初頃の利用が窺える。

註１　甕棺の型式・時期は、橋口編年に従い、時期幅は細分記号を続けて表示した。
　　橋口達也　198　甕棺の編年的研究　九州縦貫自動車道関係文化財調査報告ＸＸＸＩ　福岡県教育委員会
註２　甘木市教育委員会　1982　栗山遺跡　甘木市文化財調査報告書　第12集
註３　福岡県教育委員会　1987　柿原遺跡群Ⅲ（Ｅ・Ｆ地区）九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―12―
註４　福岡県教育委員会　1995　大庭久保遺跡　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―36―
註５　福岡県教育委員会　1991　杷木宮原遺跡・中町裏遺跡　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―21―

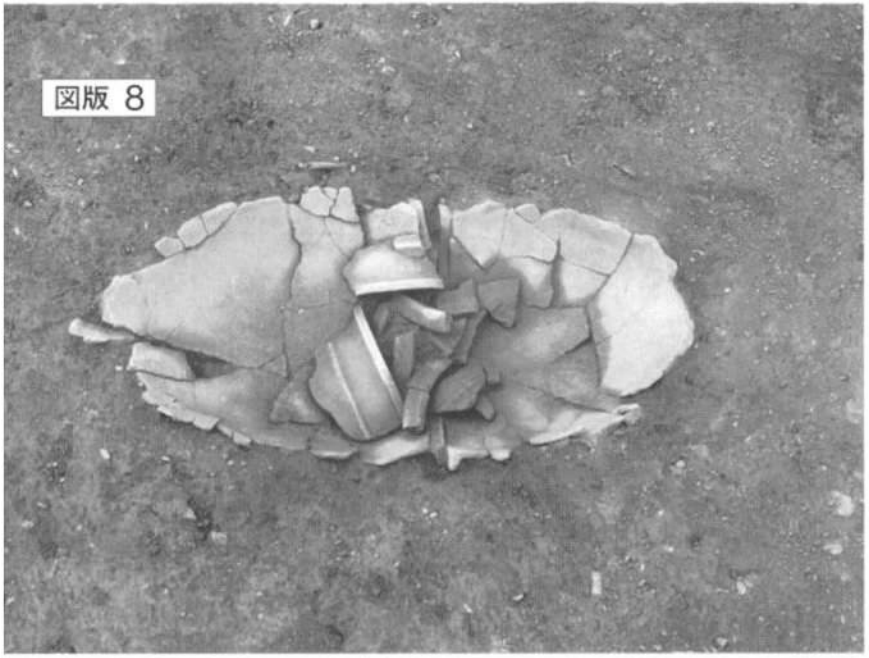
# 図　　版

1

2

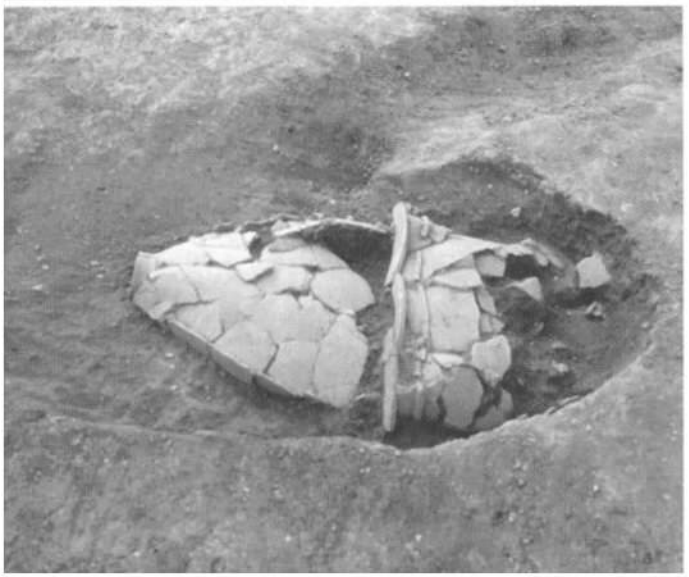
1　原の東遺跡Ⅰ区全景（東から）　　2　Ⅰ区弥生時代墓地群（西群、北から）

図版 8



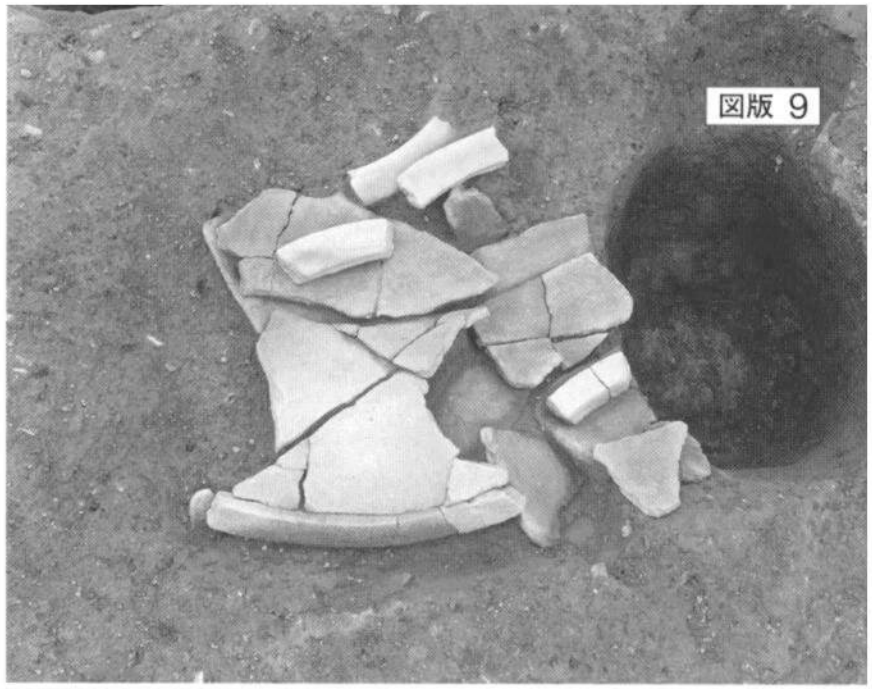
1

2



3

1　1号甕棺墓（南東から）
2　2号甕棺墓（西から）
3　2号甕棺墓（東から）



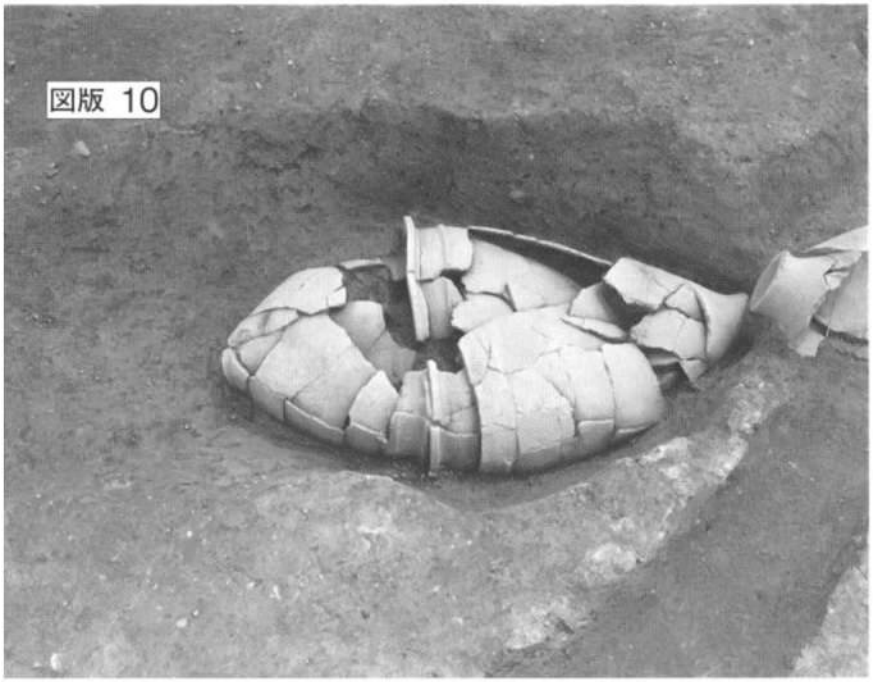
1

2

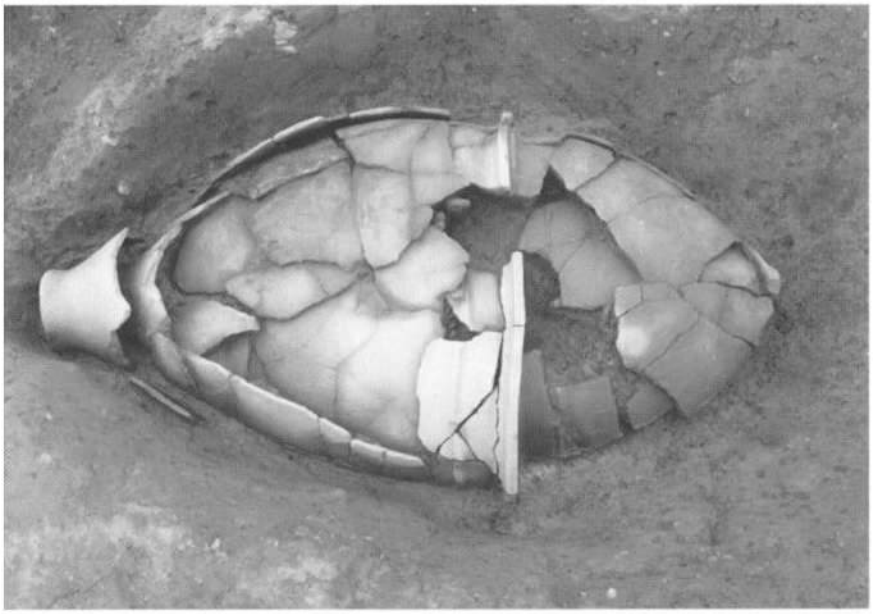
3

1　3 号甕棺墓（東から）
2　4 号甕棺墓（南東から）
3　5 号甕棺墓（東から）

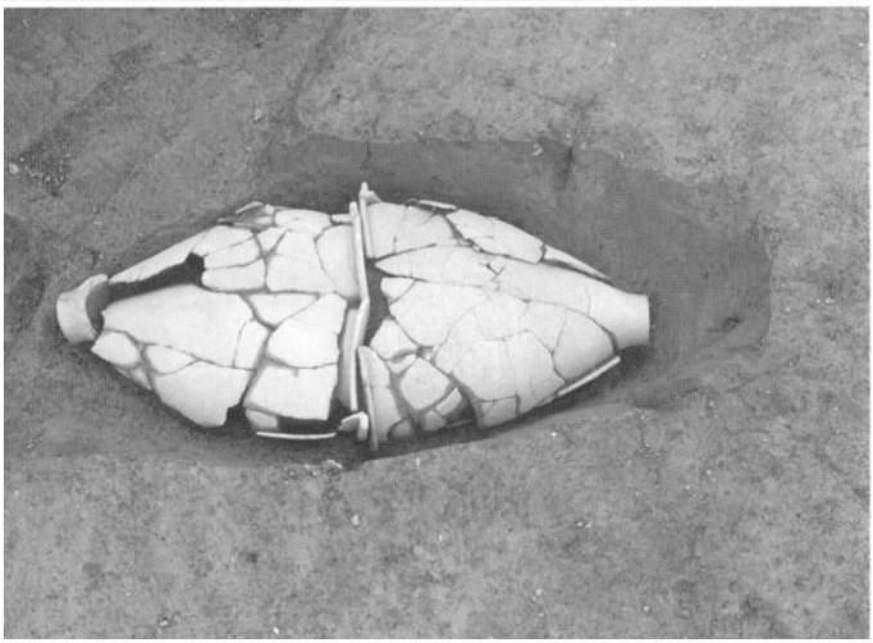
図版 10



1

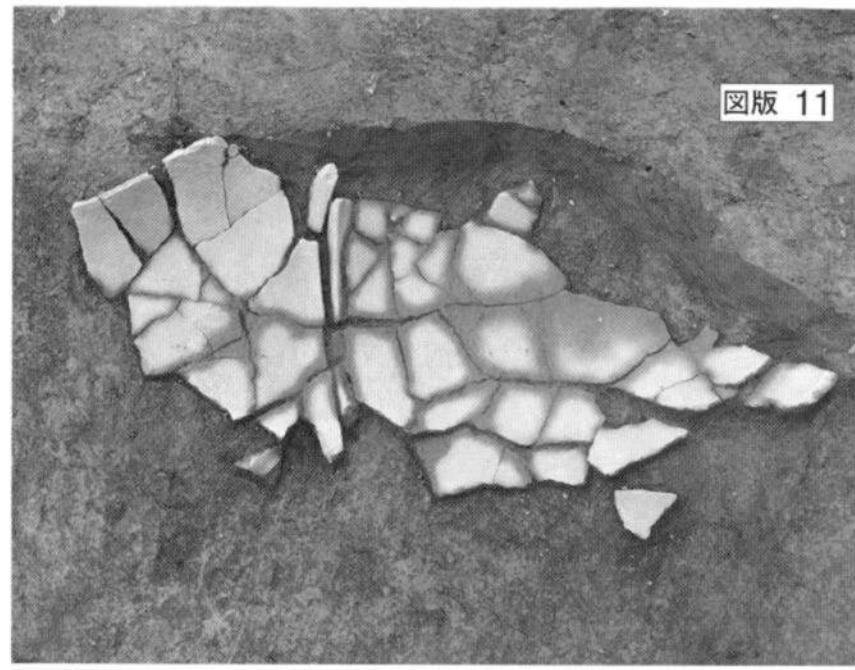


2

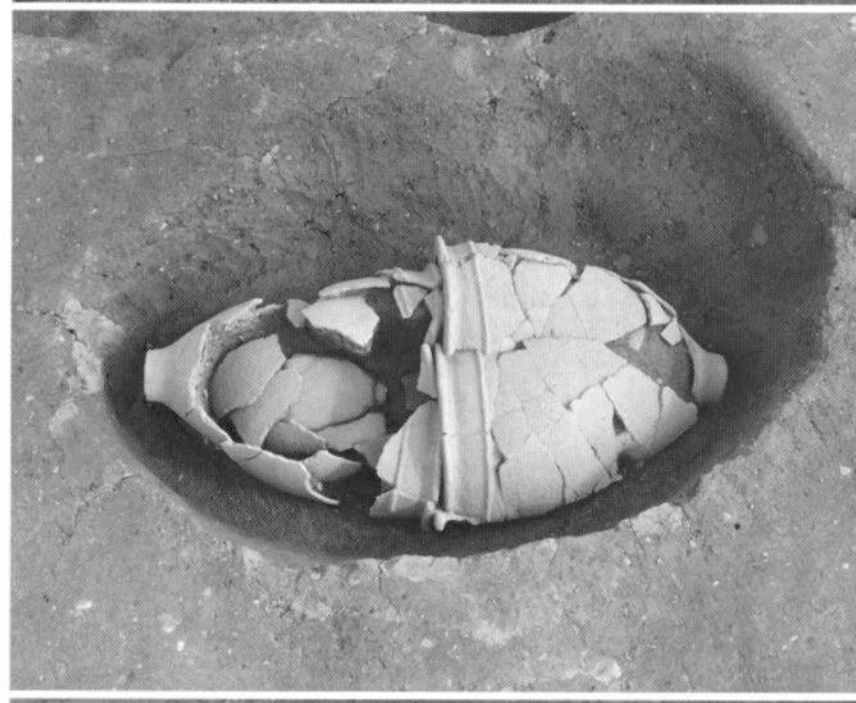


3

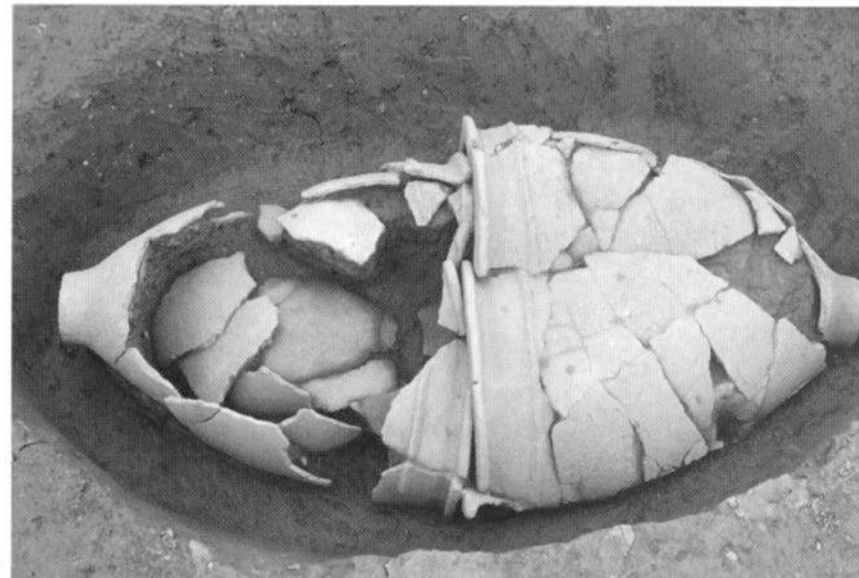
1　5号甕棺墓（西から）
2　被下甕除去後の5号甕棺墓（東から）
3　6号甕棺墓（西から）



1



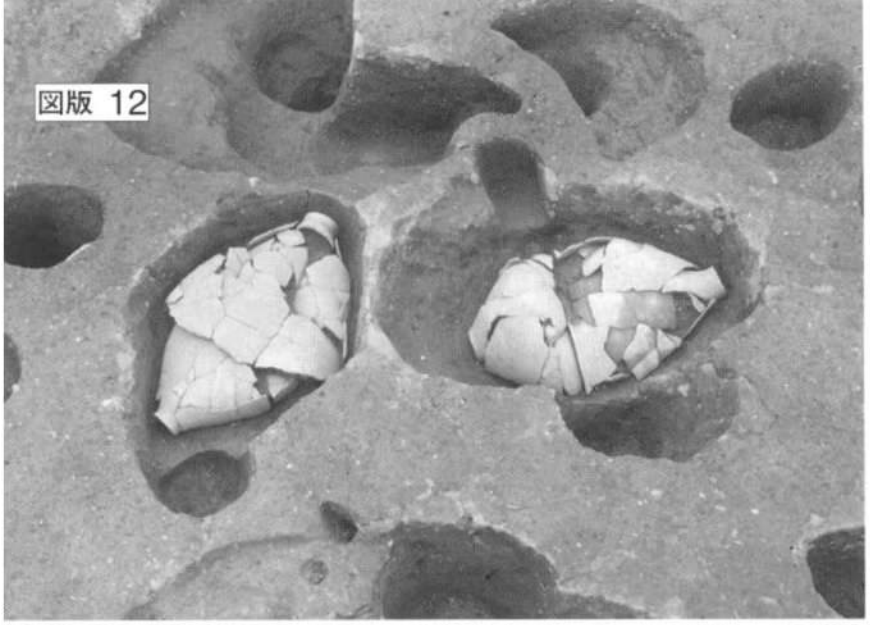
2



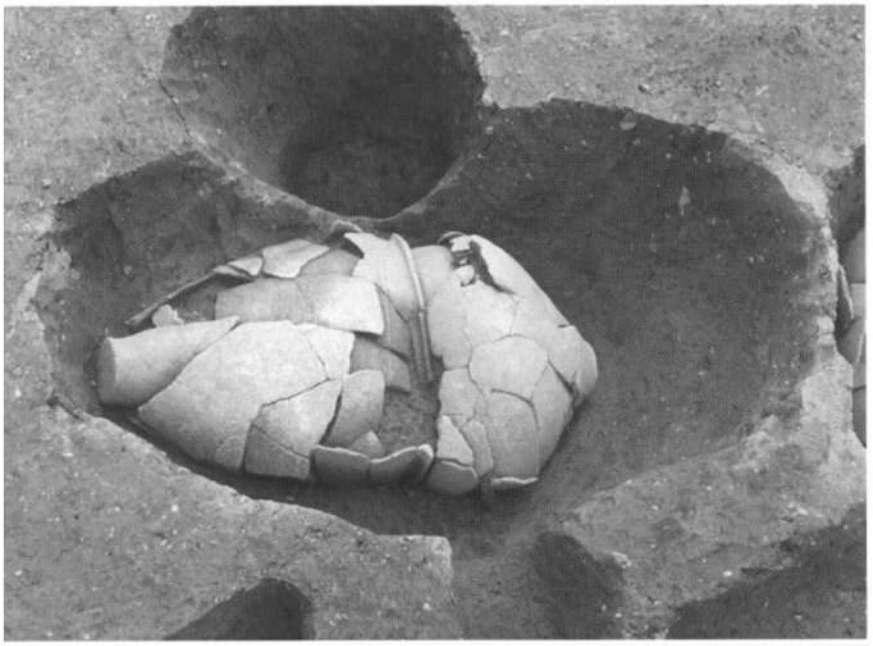
3

1　7号甕棺墓（東から）
2　8号甕棺墓（北西から）
3　8号甕棺墓近景（北西から）

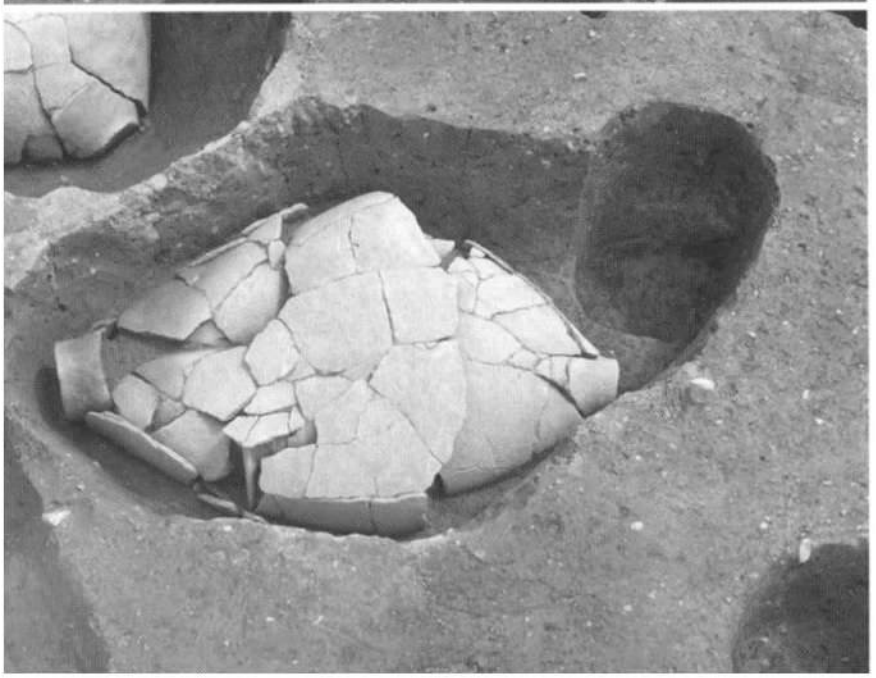
図版 12



1



2

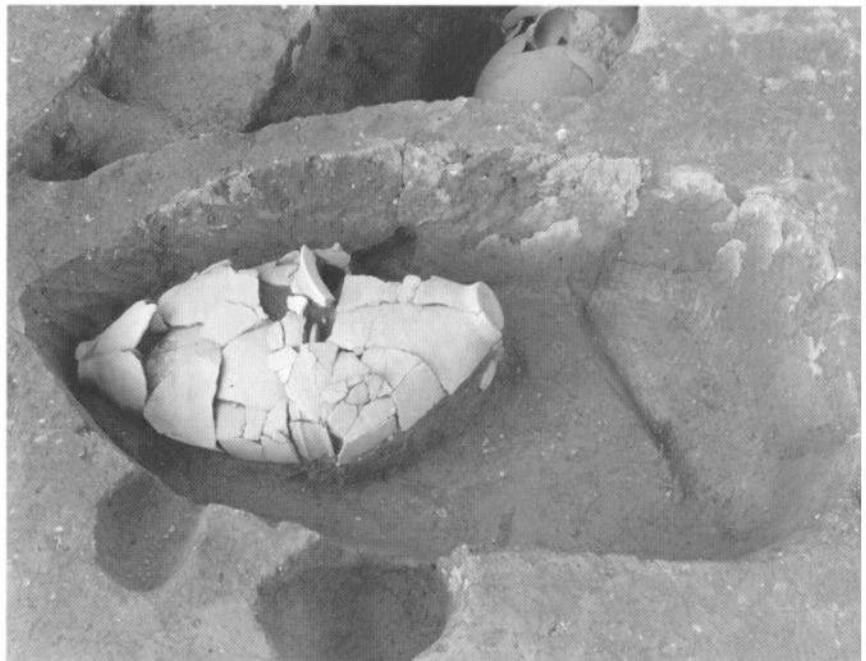


3

1　9・10号甕棺墓（南から）
2　9号甕棺墓（北から）
3　10号甕棺墓（西から）

1

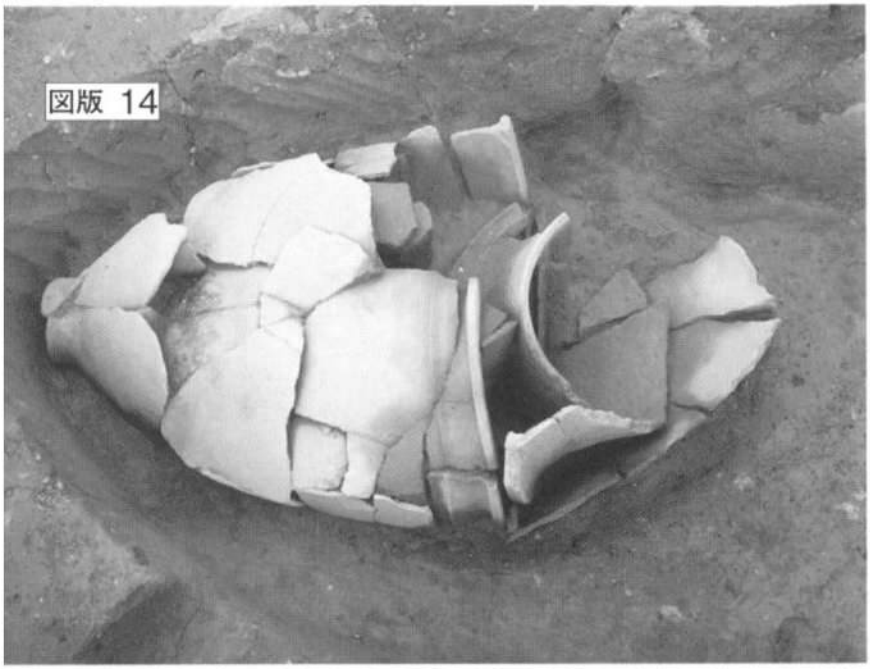
2



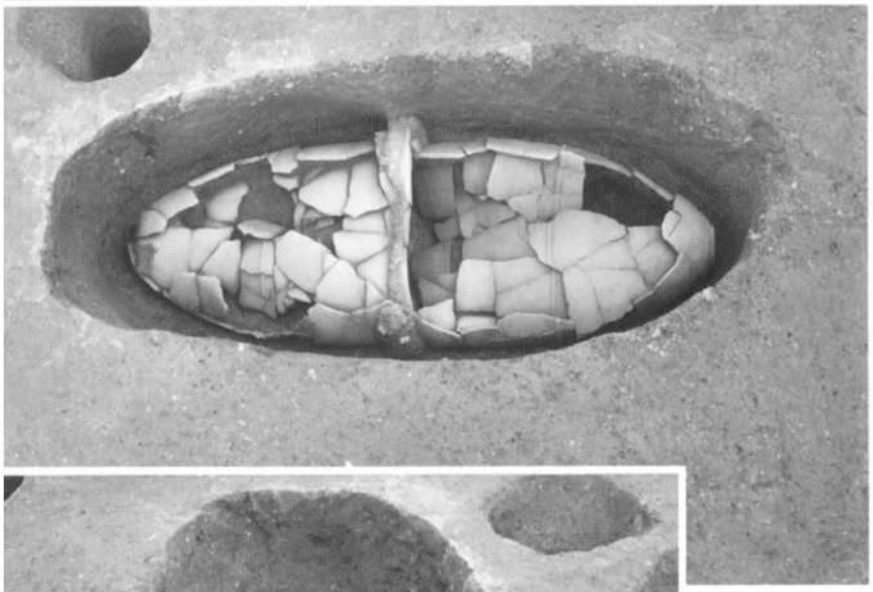
3

1　11号甕棺墓（南から）
2　被上甕除去後の11号甕棺墓（南から）
3　12号甕棺墓（南から）

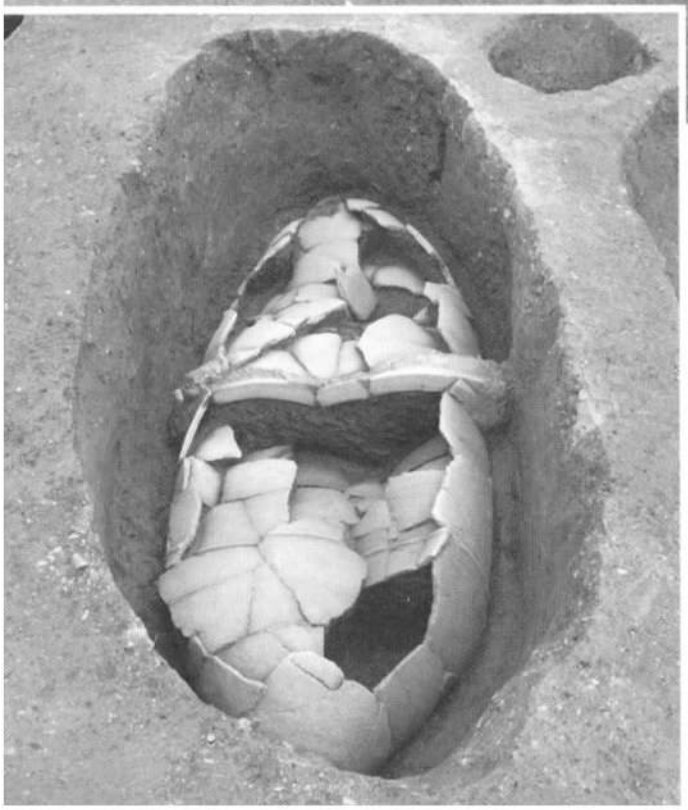
図版 14



1

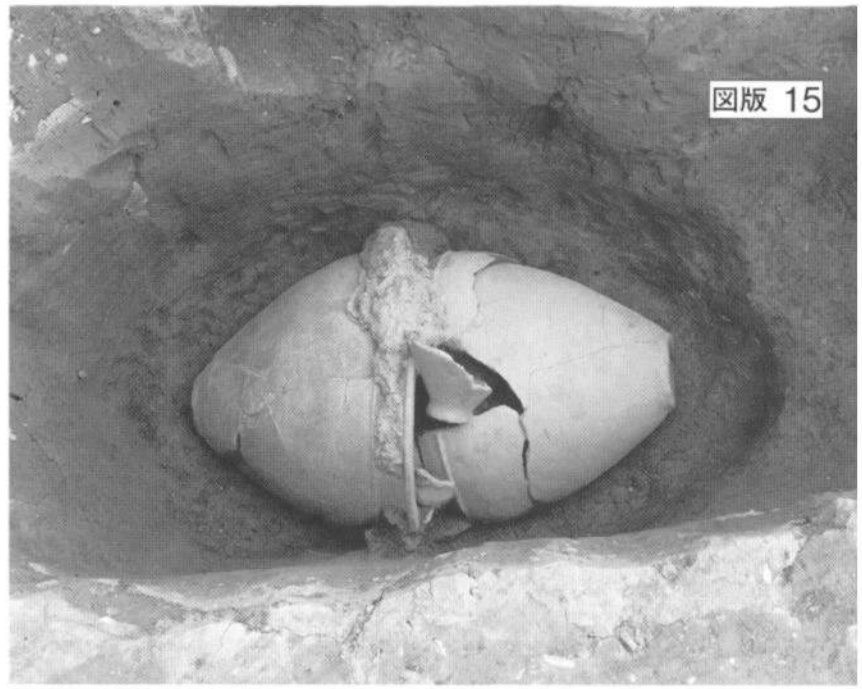


2



3

1　被上甕除去後の12号甕棺墓（南から）
2　13号甕棺墓（南東から）
3　13号甕棺墓（北東から）



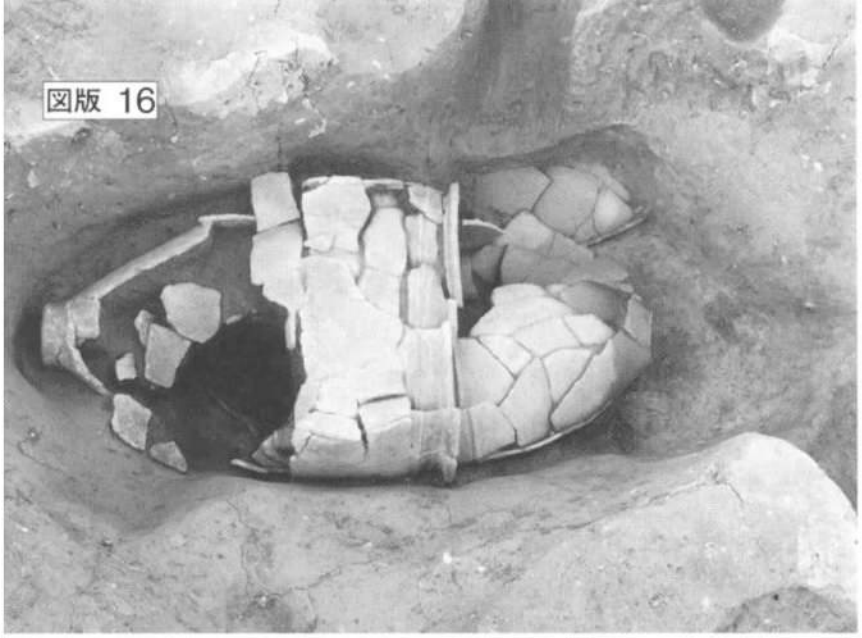
1

2

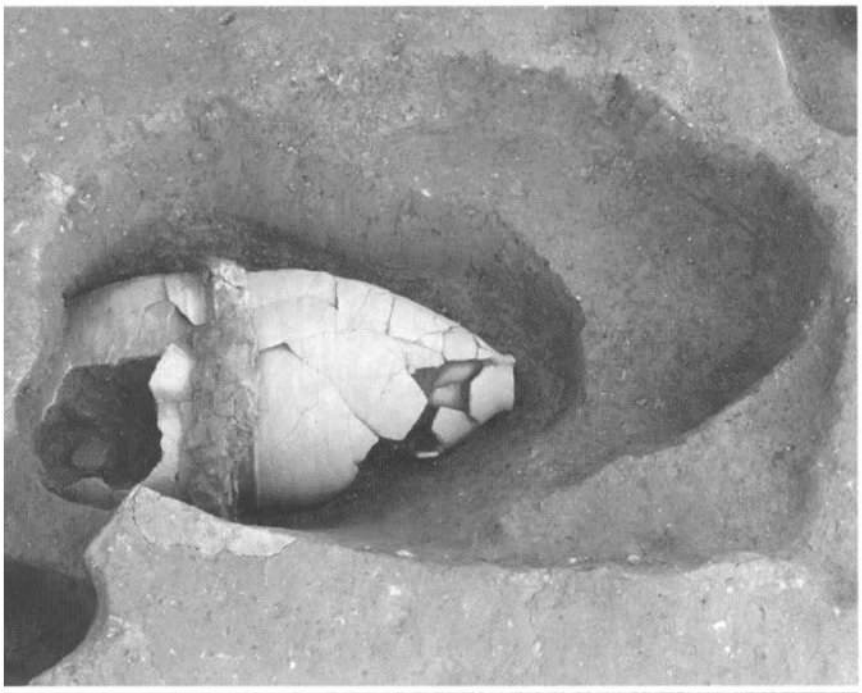
3

1　14号甕棺墓（南東から）
2　15号甕棺墓（北西から）
3　16・17号甕棺墓（南から）

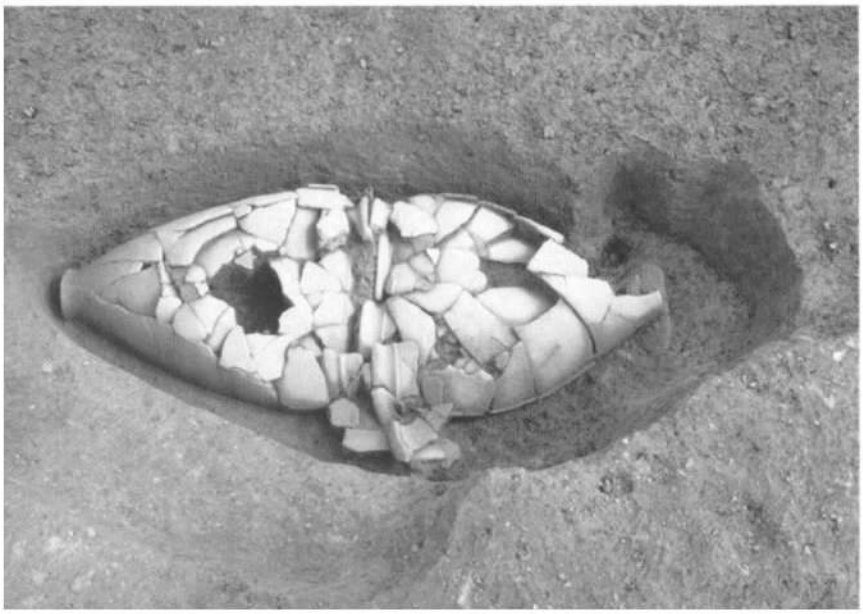
図版 16



1



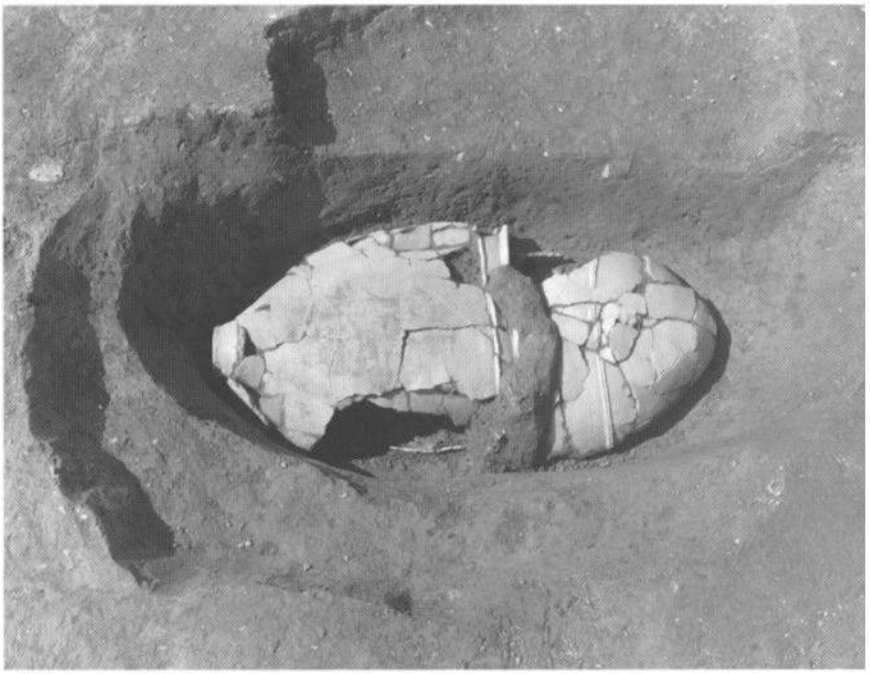
2



3

1　17号甕棺墓（南から）
2　18号甕棺墓（西から）
3　19号甕棺墓（南西から）

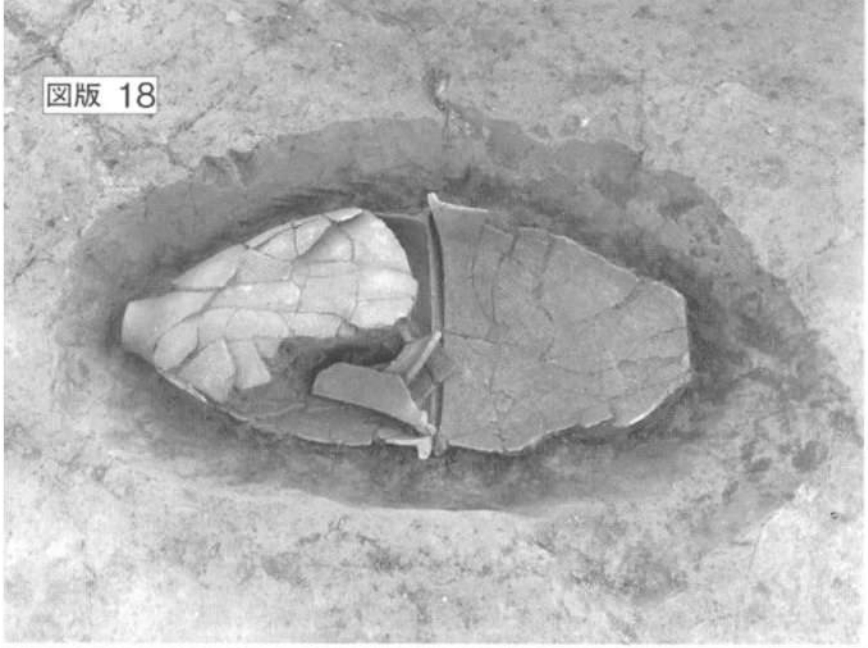
1



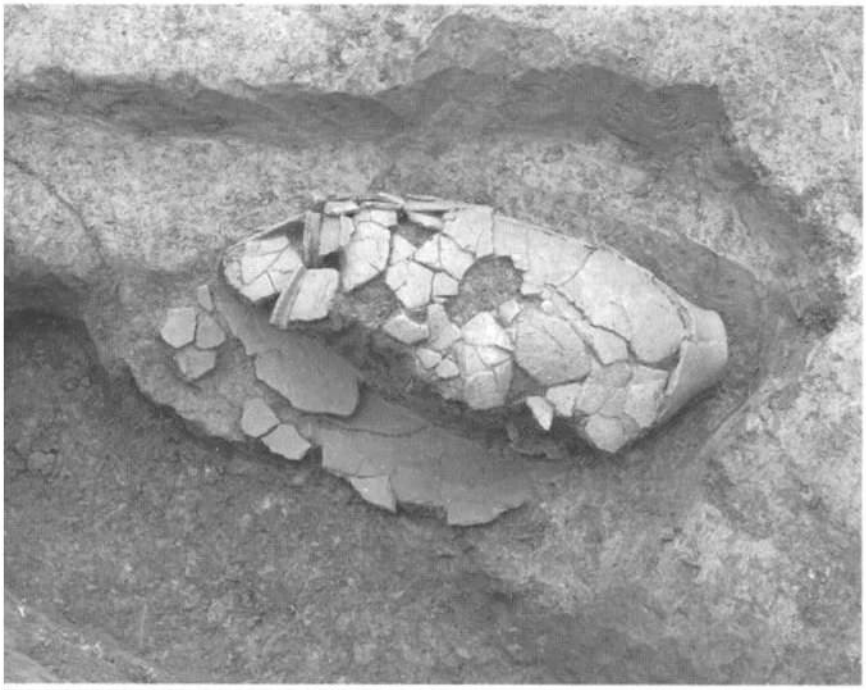
2

3

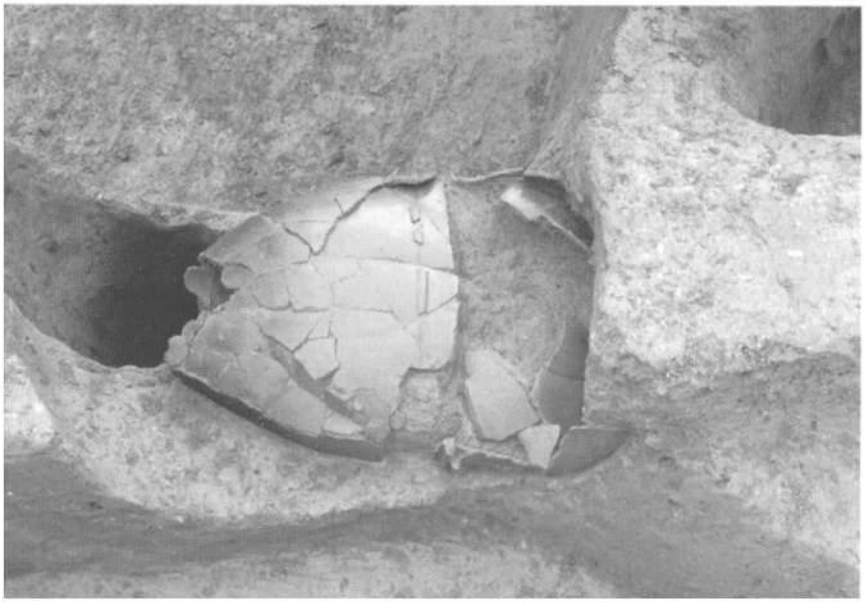
1　20号甕棺墓（西から）
2　21号甕棺墓（東から）
3　22号甕棺墓（南東から）



1



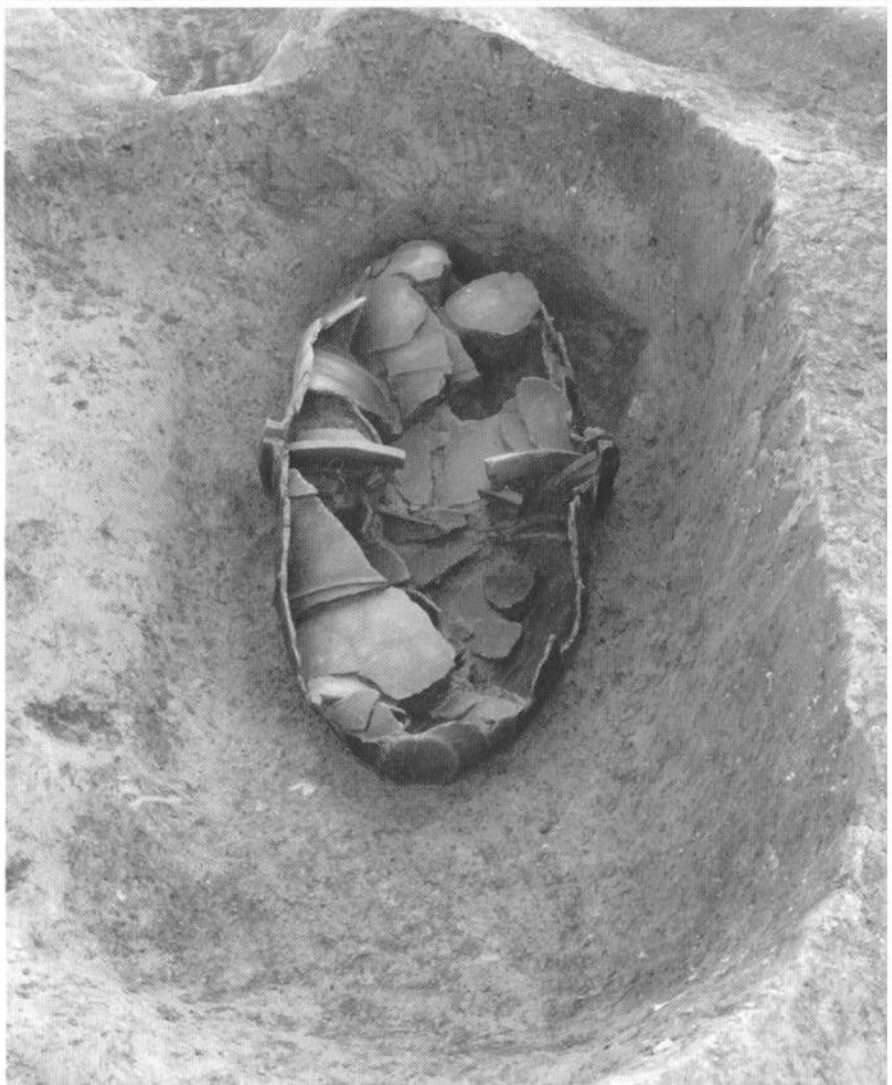
2



3

1　23号甕棺墓（北西から）
2　24号甕棺墓（北から）
3　25号甕棺墓（西から）

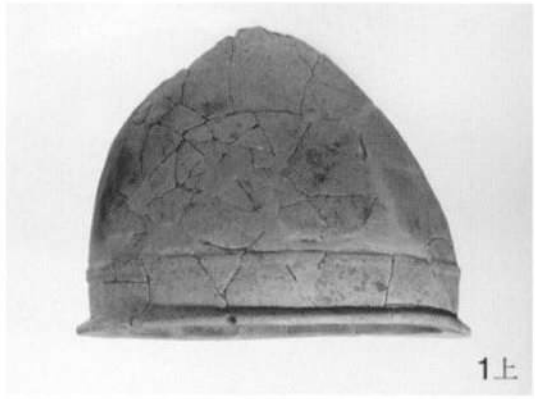
1



2

1　26号甕棺墓（南東から）
2　26号甕棺墓（北東から）

図版 20


1上

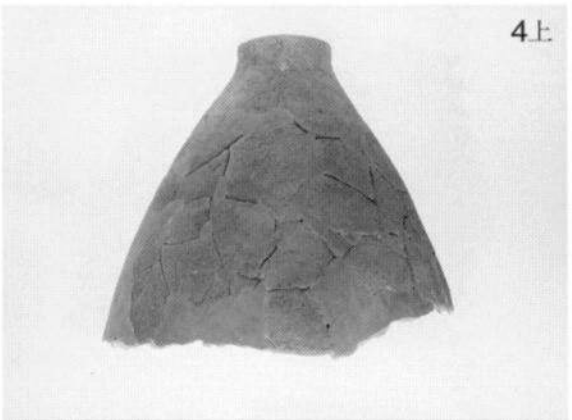
1下

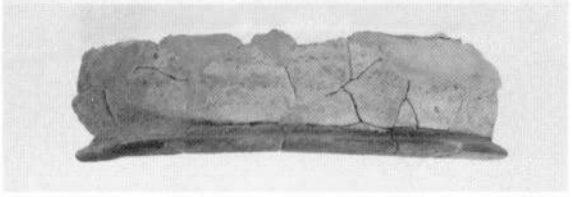
3

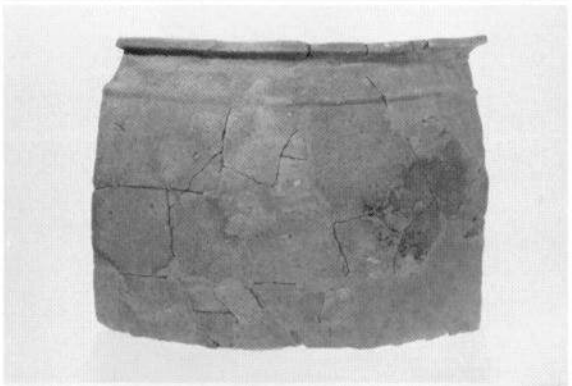
2上

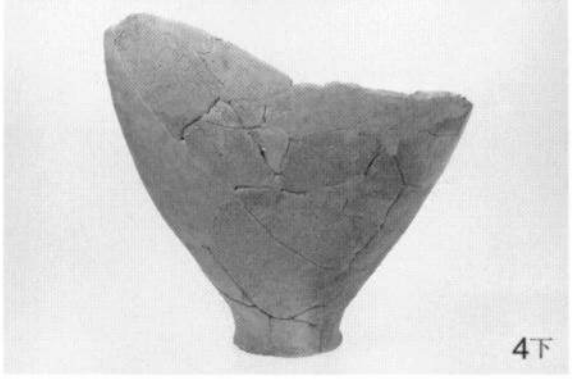
2下

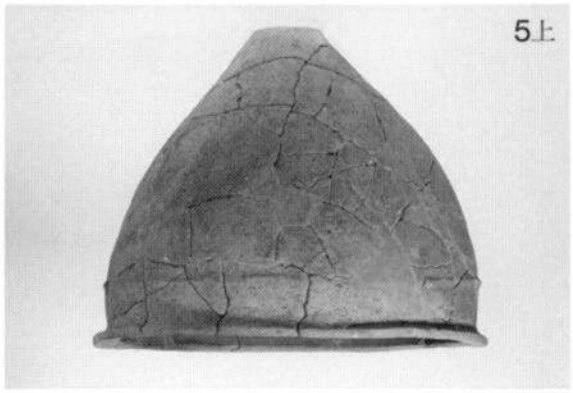
1～3号甕棺使用土器


4上






4下


5上

5下

5被下

4・5号甕棺使用土器

図版 22

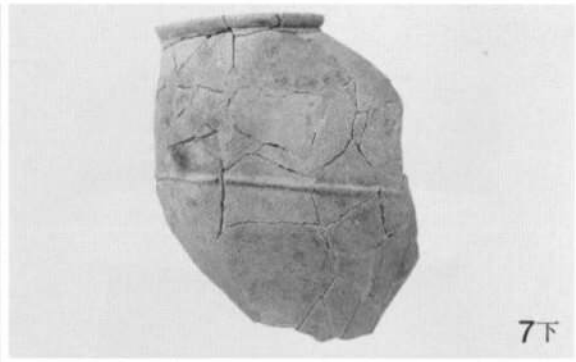
6上

6下

8上

8下

7上

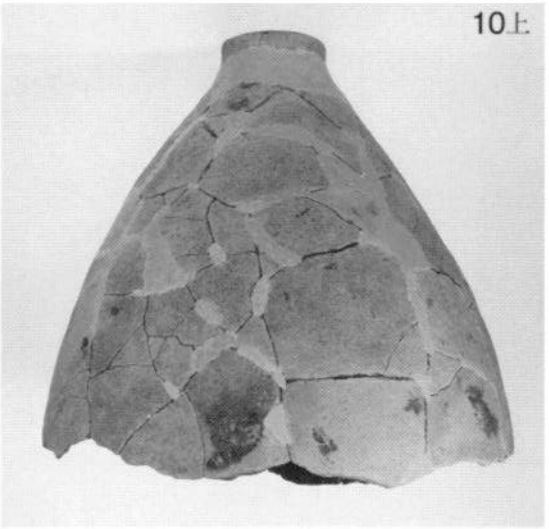

7下

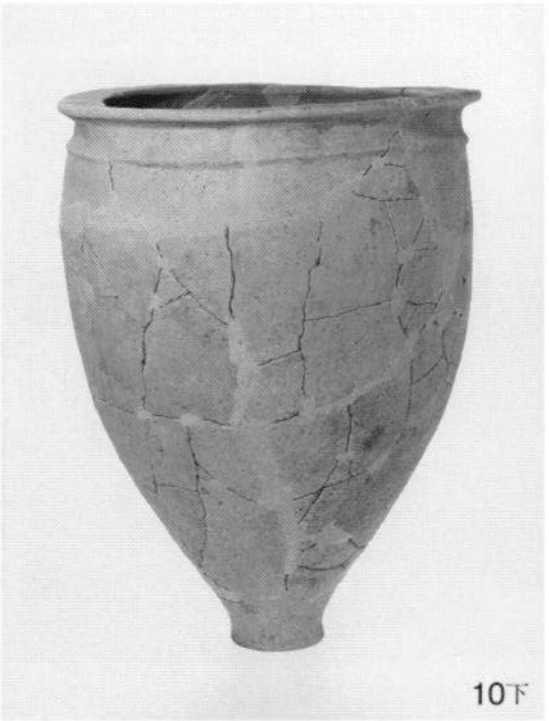
9上

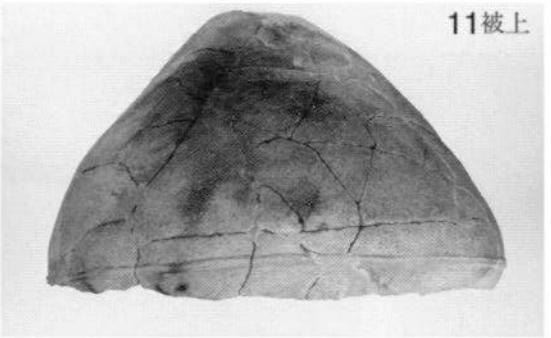
9下

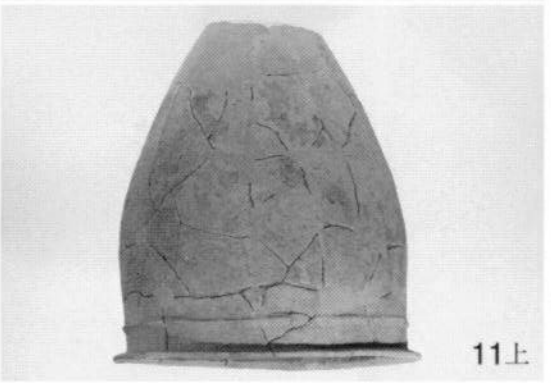
6 ～ 9 号甕棺使用土器

10～12号甕棺使用土器

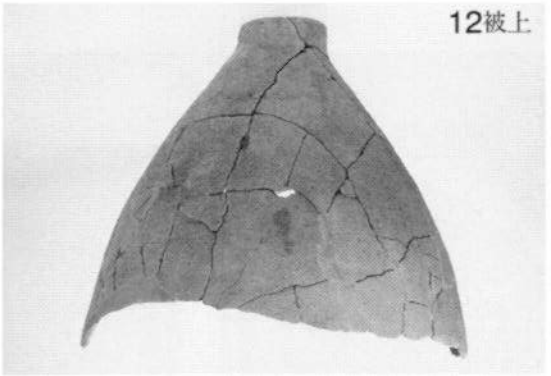

10上

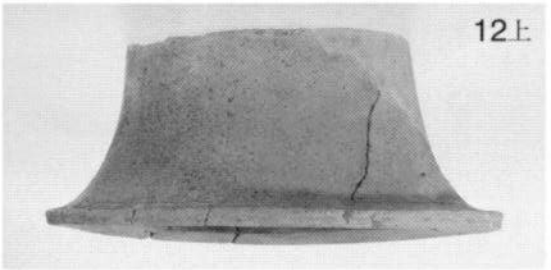

10下

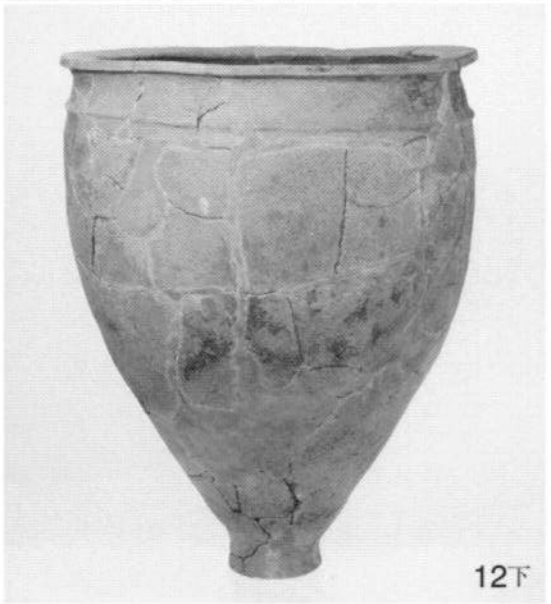

11被上


11上

11下


12被上


12上


12下

図版 23

図版 24

13上

13下

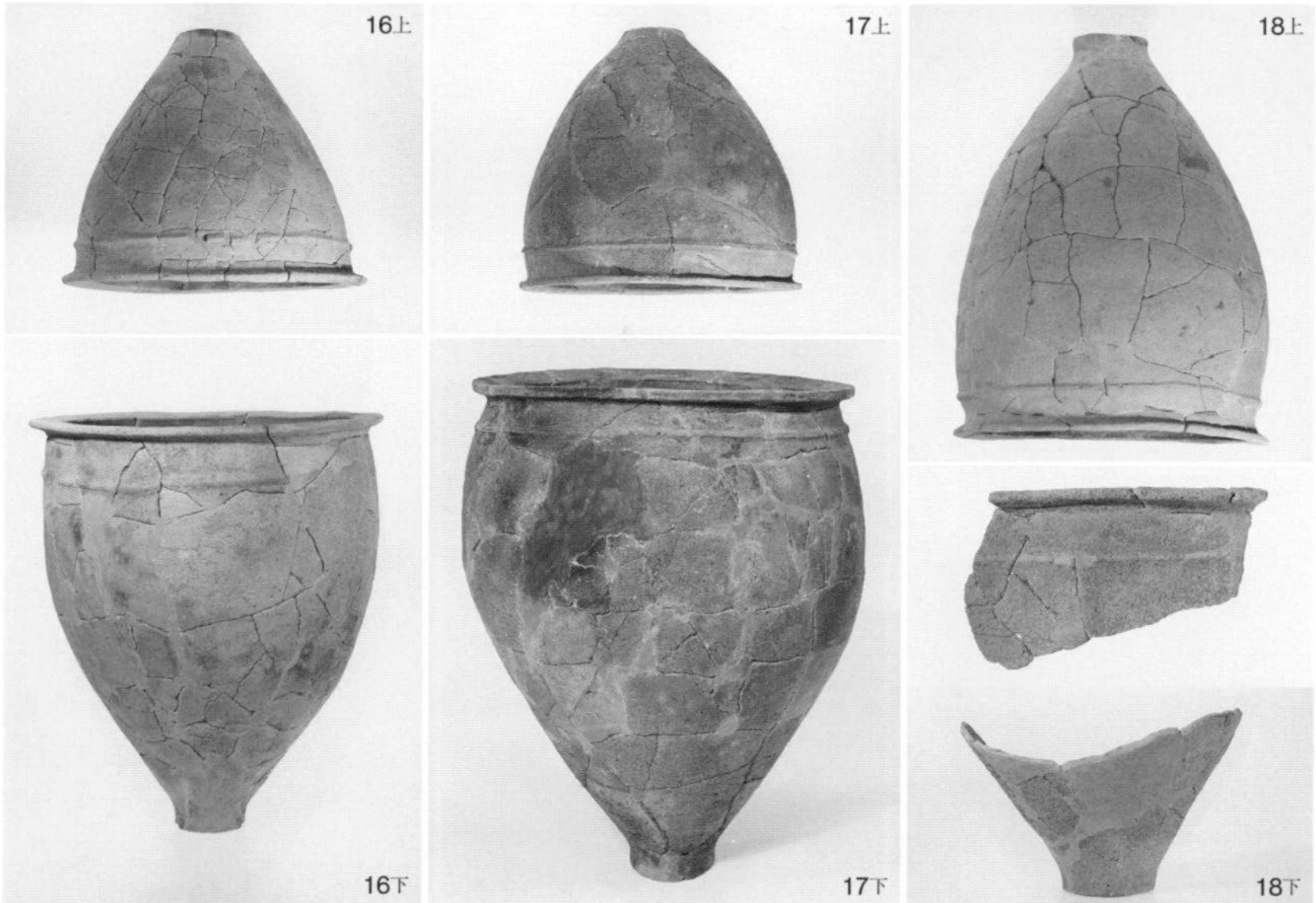
14上

14下

15上

15下

13～15号甕棺使用土器

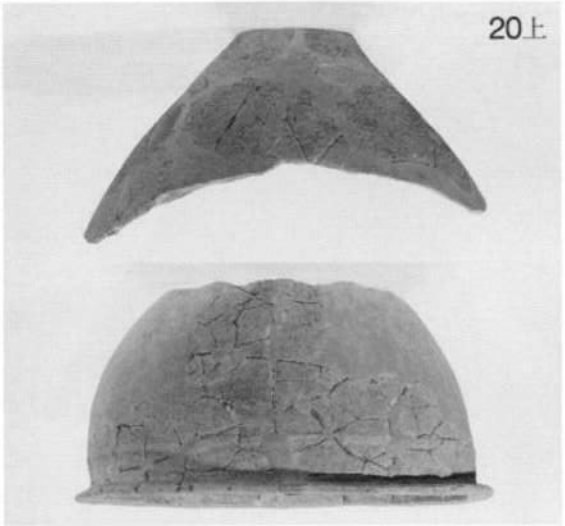



16～18号甕棺使用土器

19～21号甕棺使用土器

19上

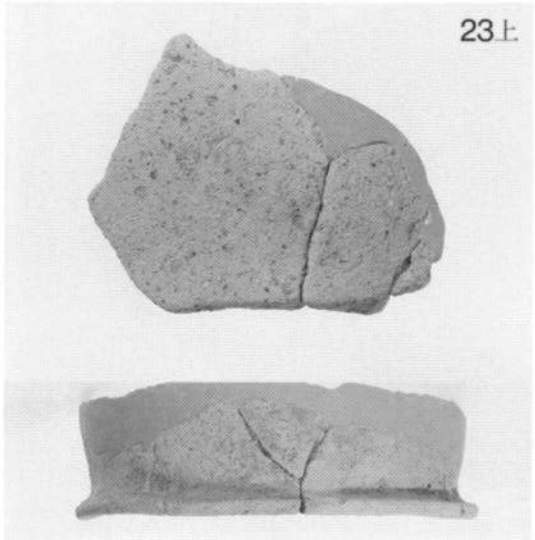
19下

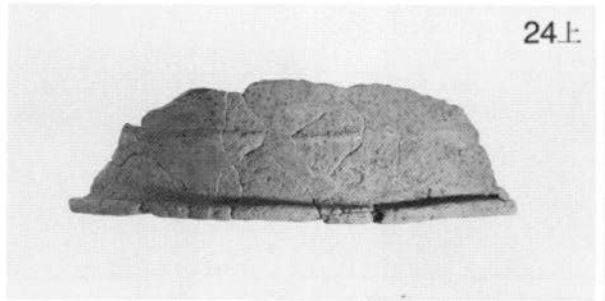

20上

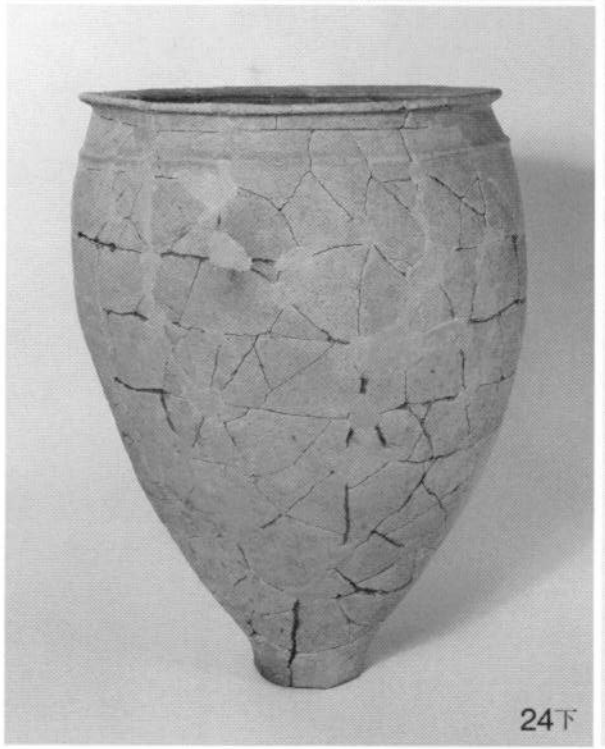
20下

21上

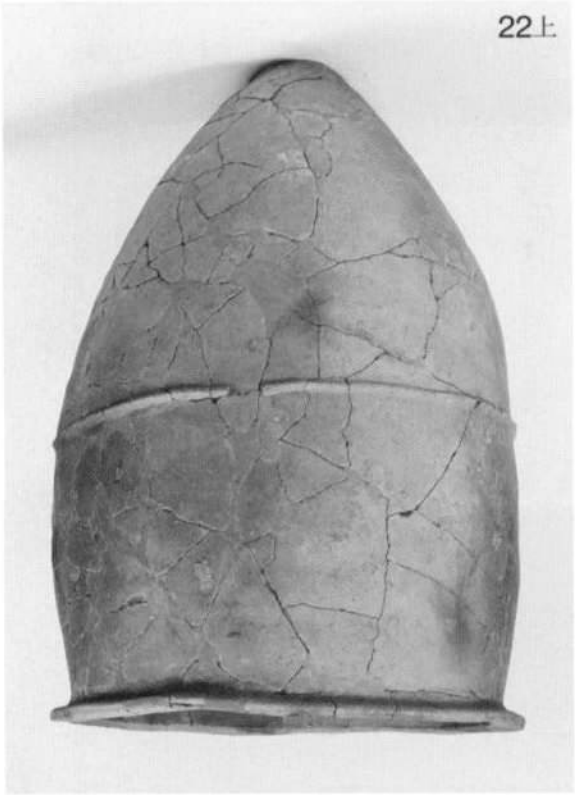
21下





23～25号甕棺使用土器



22・26号甕棺使用土器

1

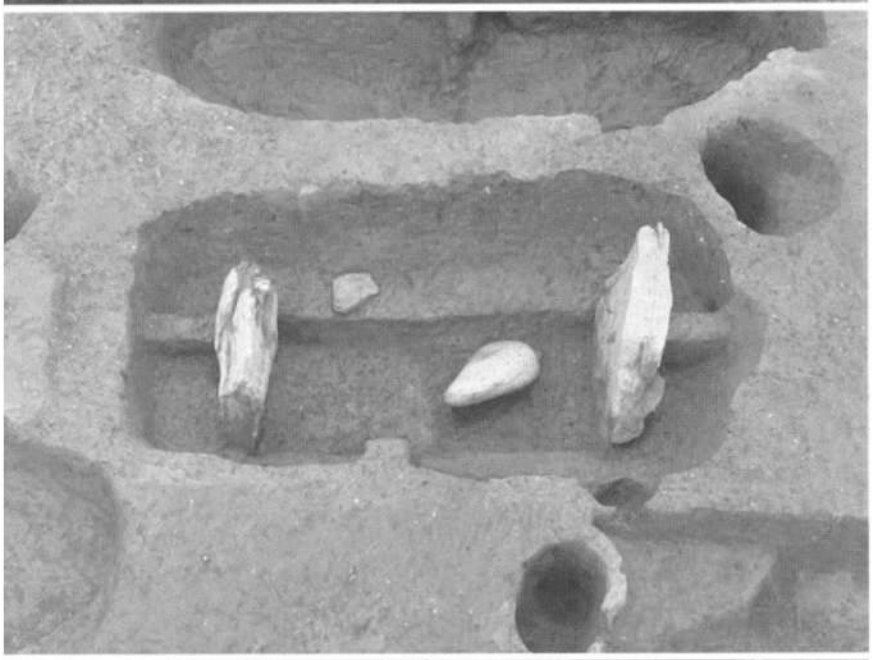
2

3

1　1号石棺墓（南東から）
2　2号石棺墓（西から）
3　3号木棺墓（北から）

図版 30

1



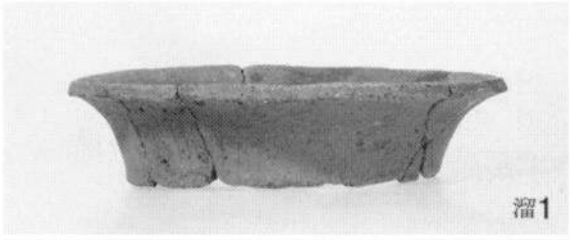
2

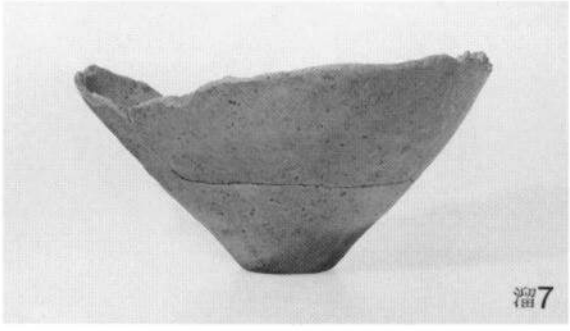
3

1　1号木棺墓（東から）
2　1号木棺墓（西から）
3　2号土壙墓（北から）

1

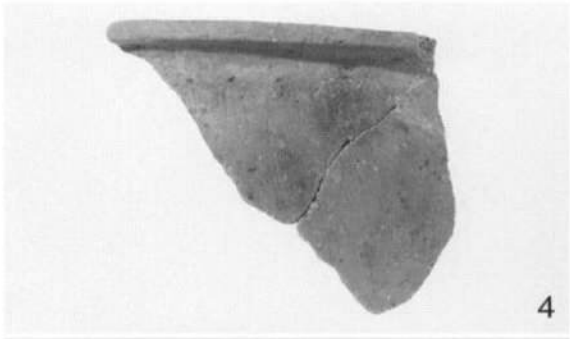
2

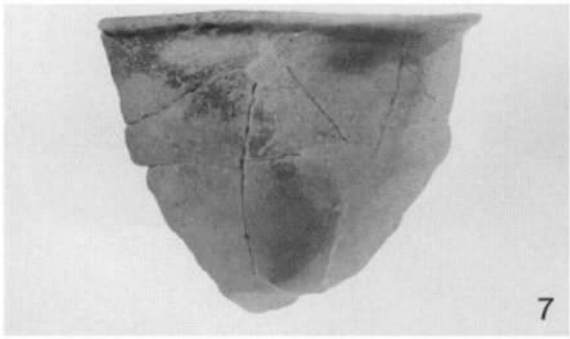




1　1号袋状竪穴（南東から）　2　袋状竪穴・土器溜まり・土坑出土土器

図版 32

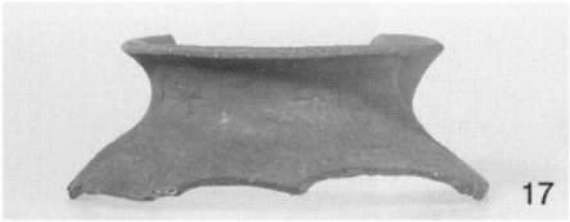

4

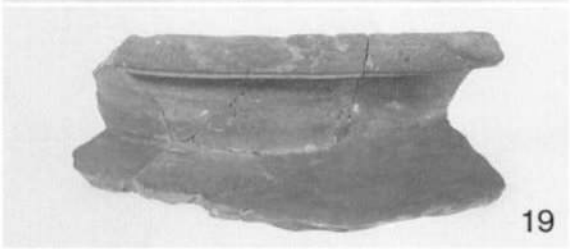

7

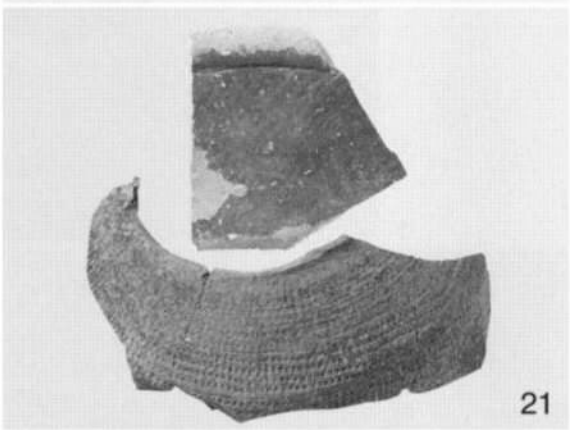
8

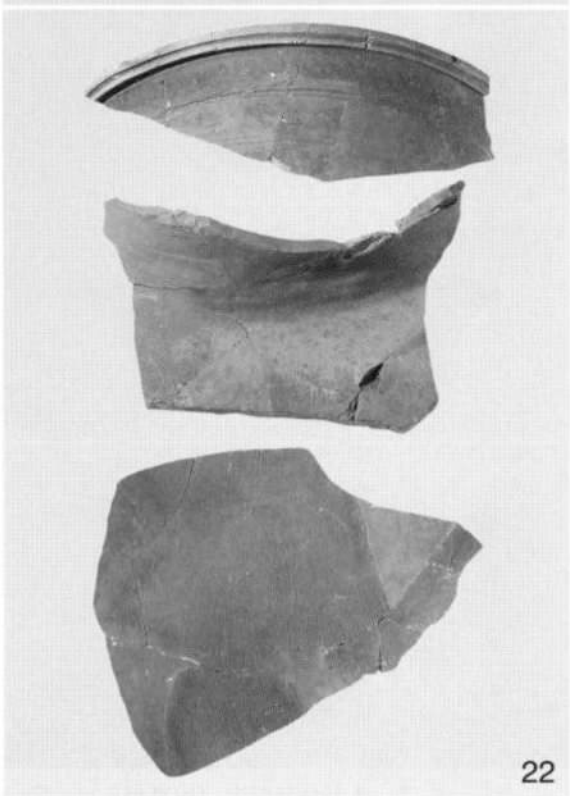
11

16

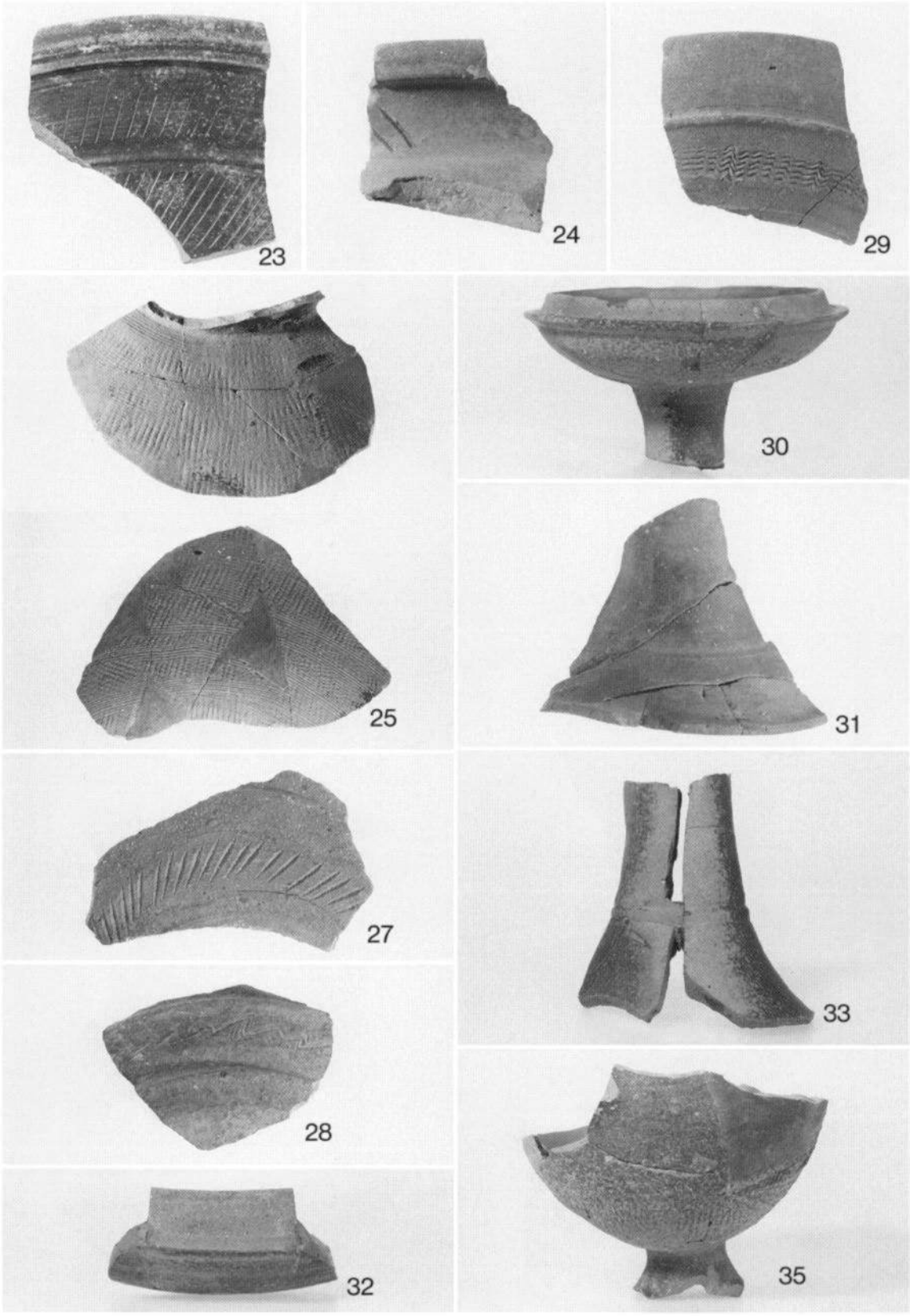

17


19


21

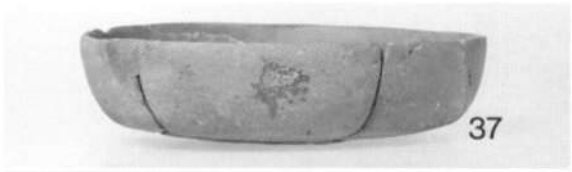

22

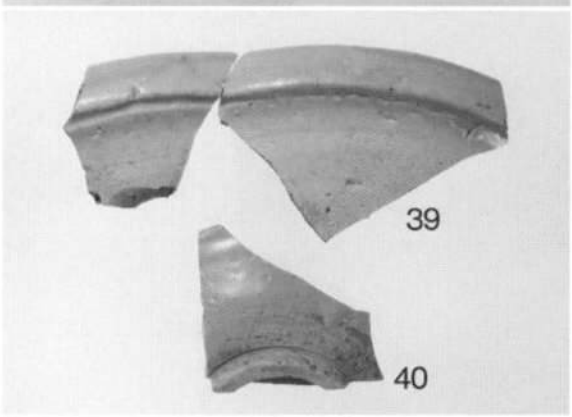
大溝出土土器 1

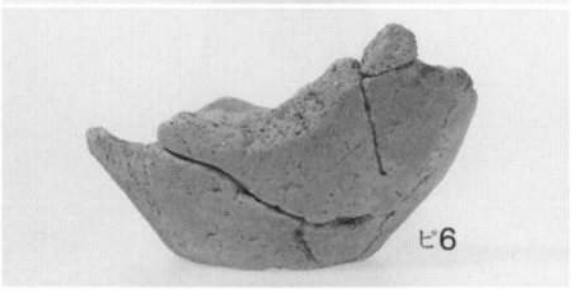


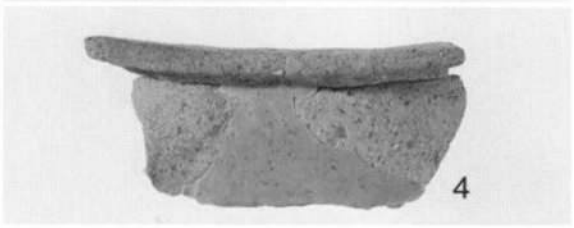

大溝出土土器 2

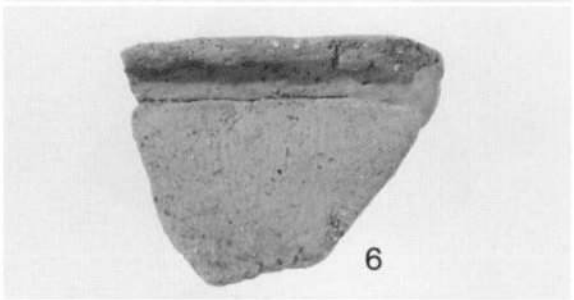
図版 34

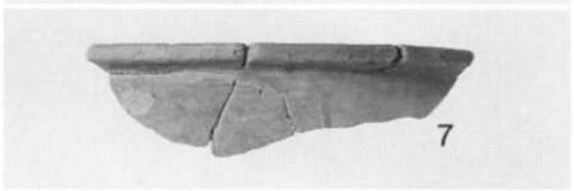


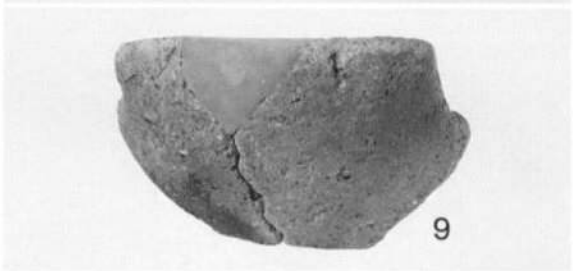


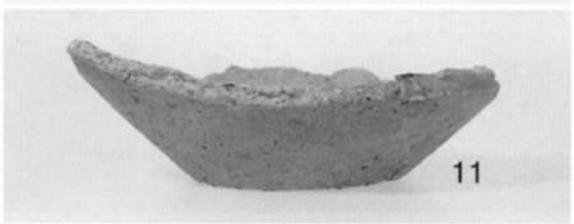




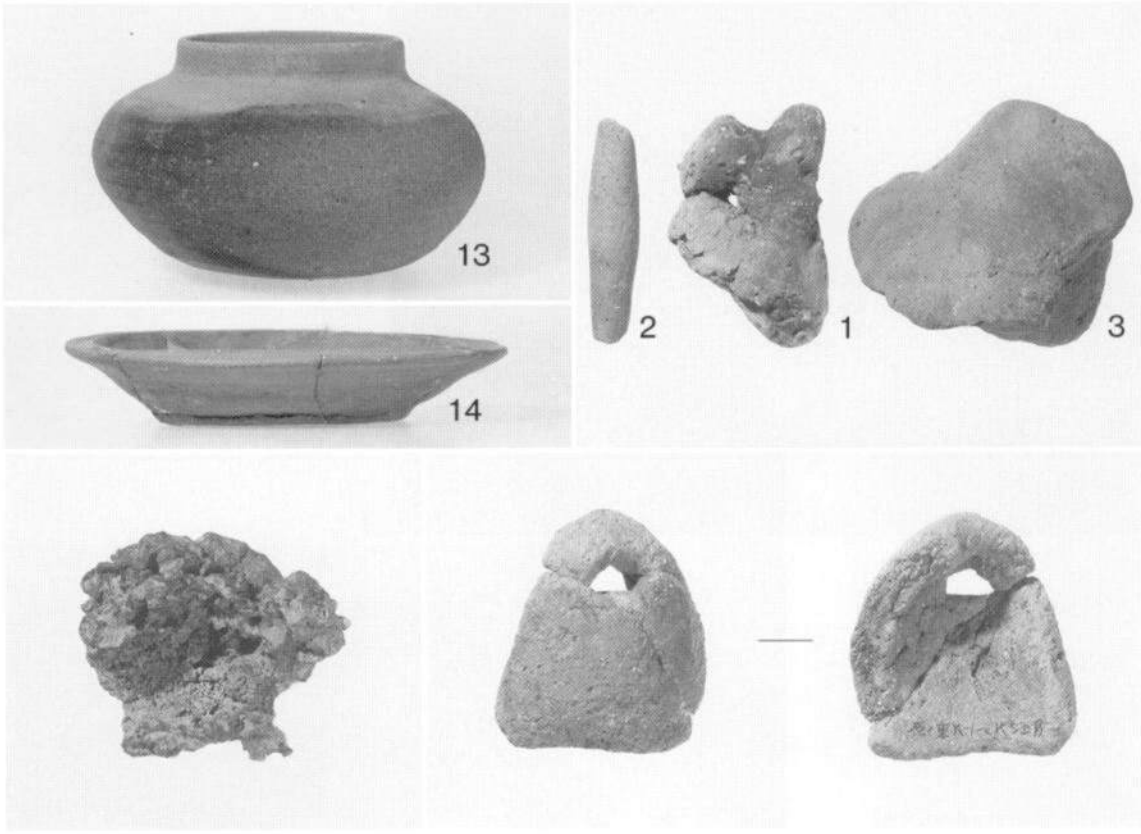




大溝・ピット・包含層出土土器

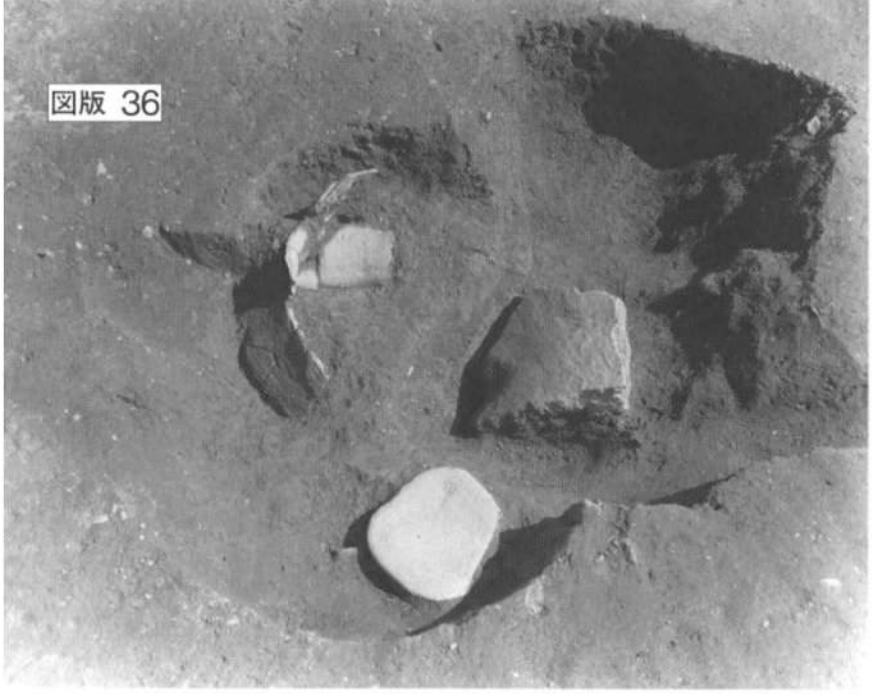



1

2

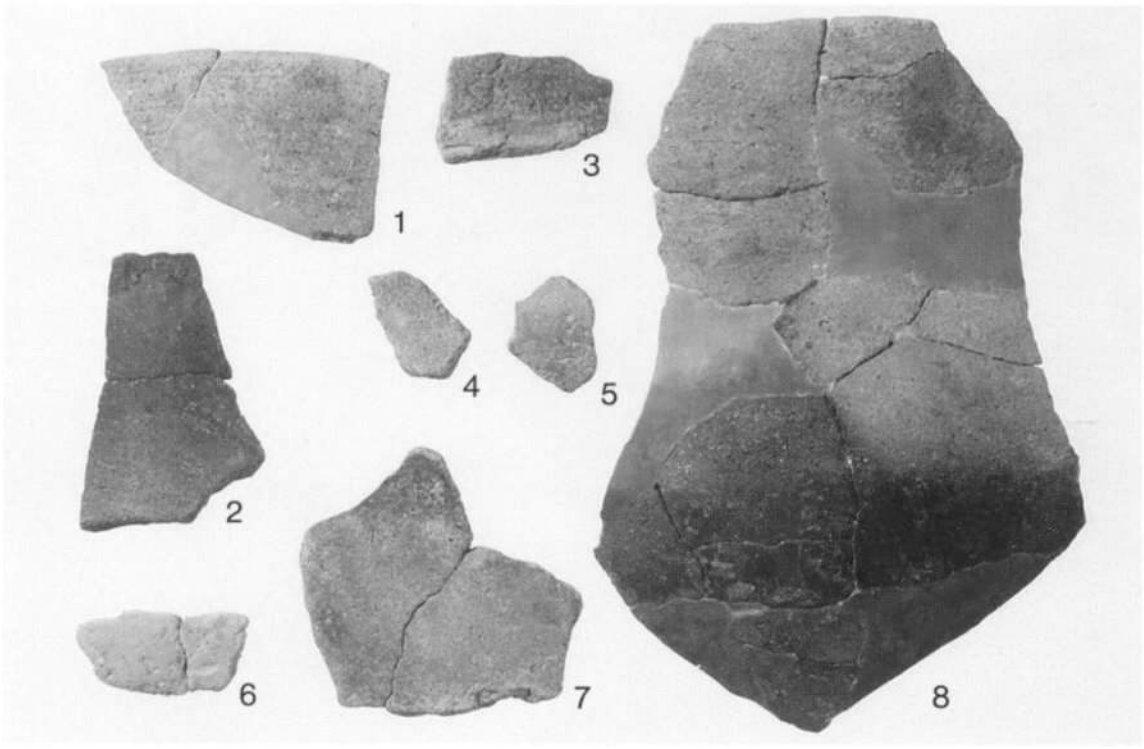
1　包含層出土土器・土製品・鉄滓　　2　調査風景

図版 36



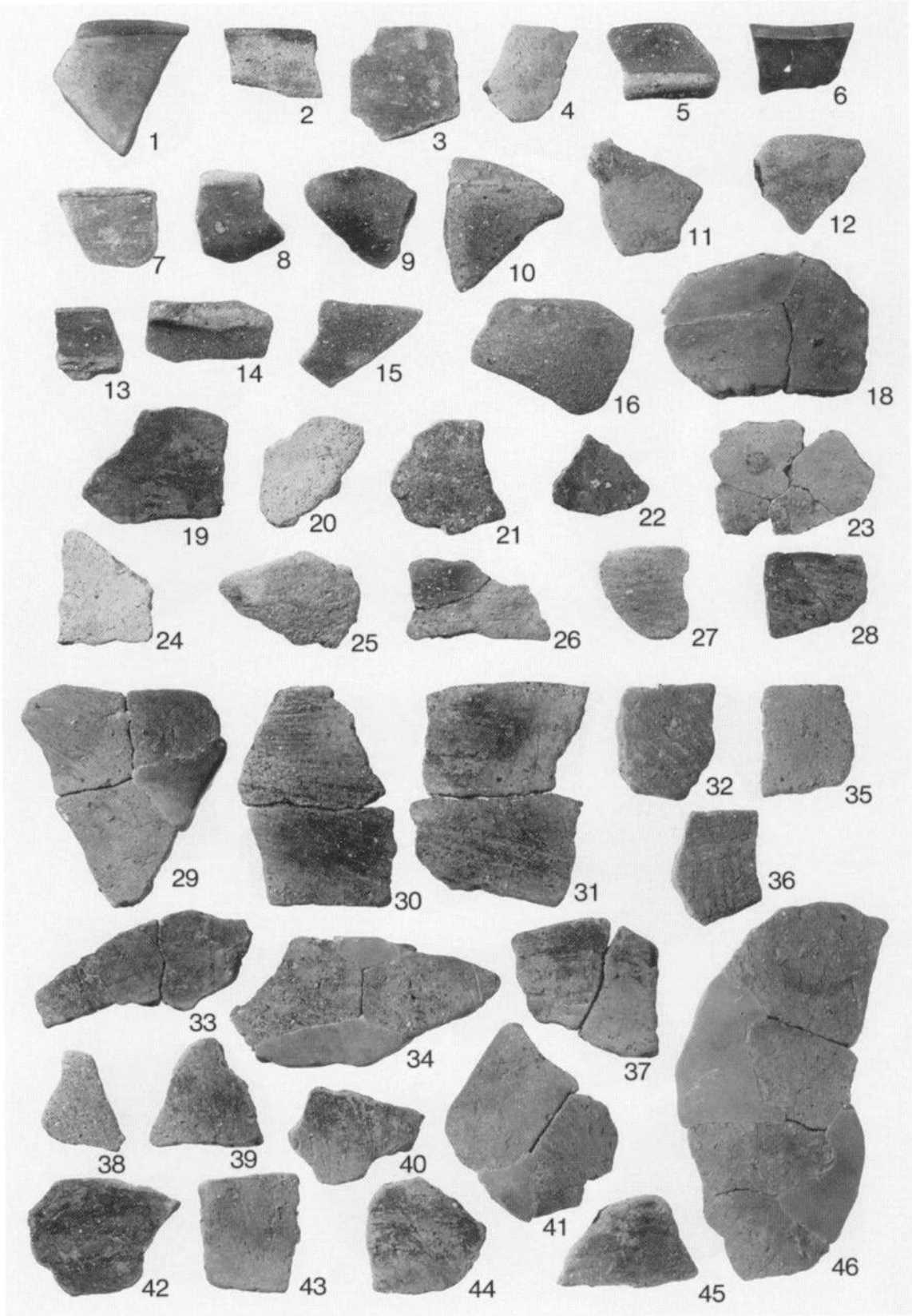
1

2

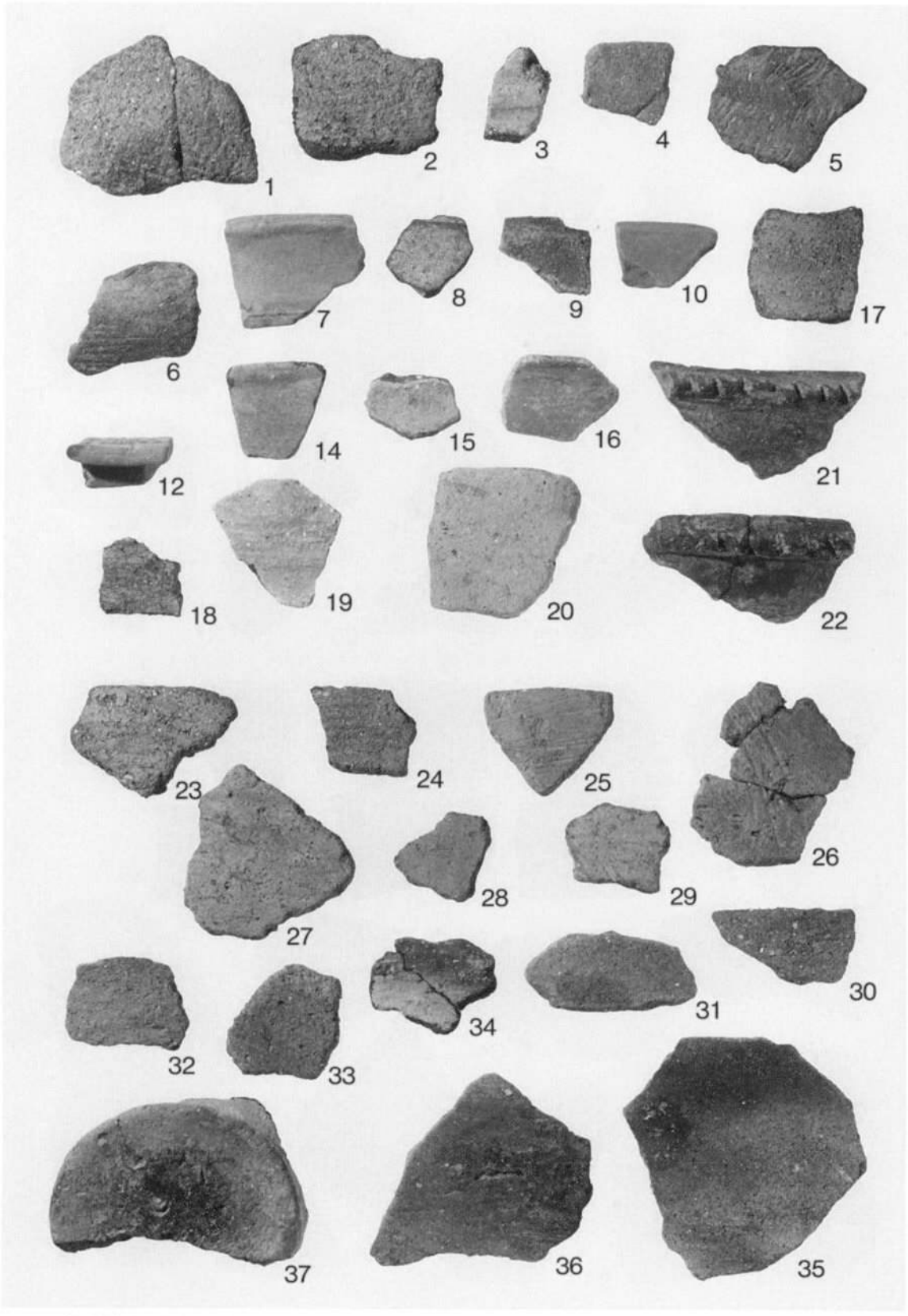



3

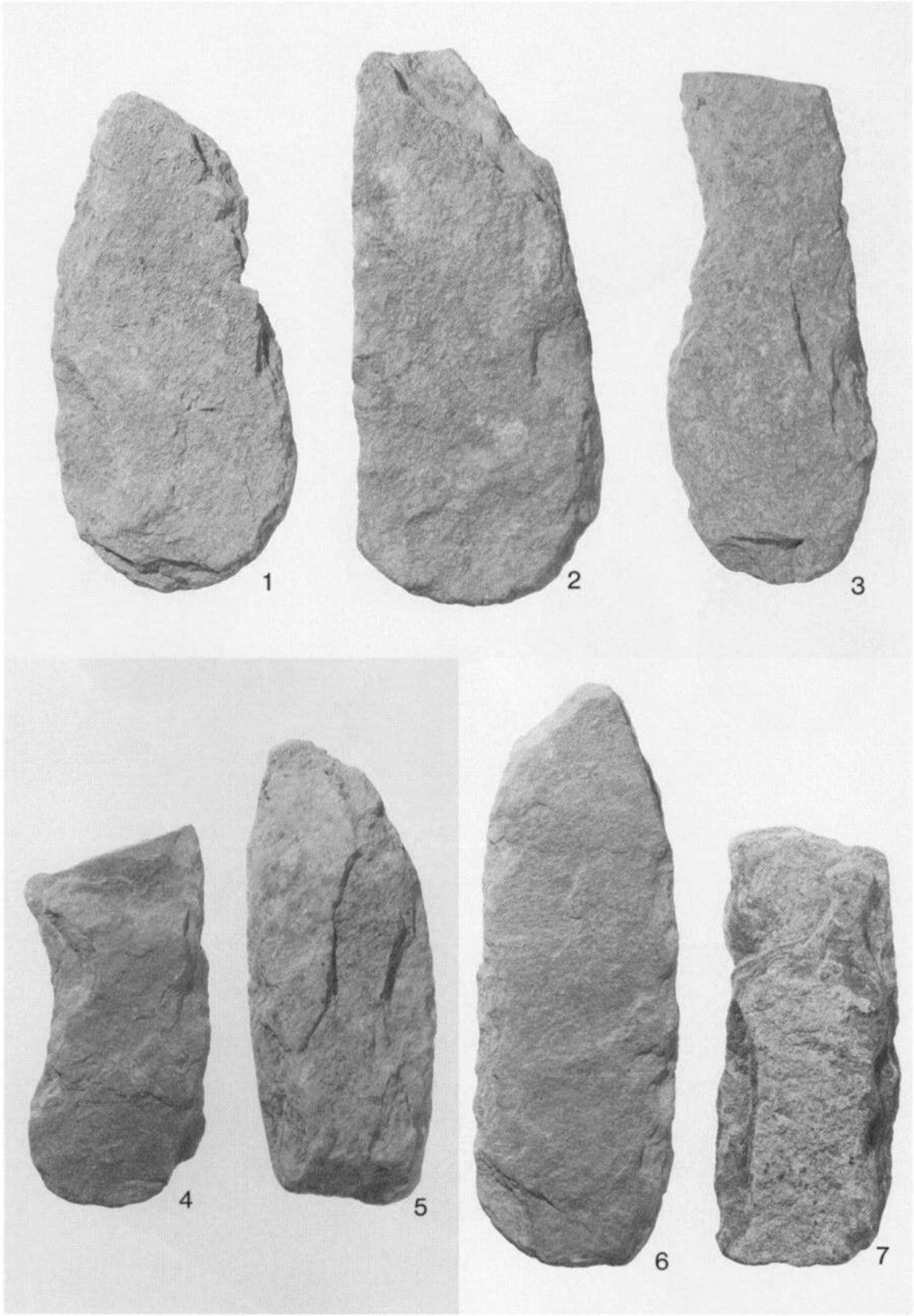
1　1号埋甕　　2　埋甕使用土器　　3　方形土坑出土縄文土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
35
36
33
34
37
38
39
40
41
46
42
43
44
45

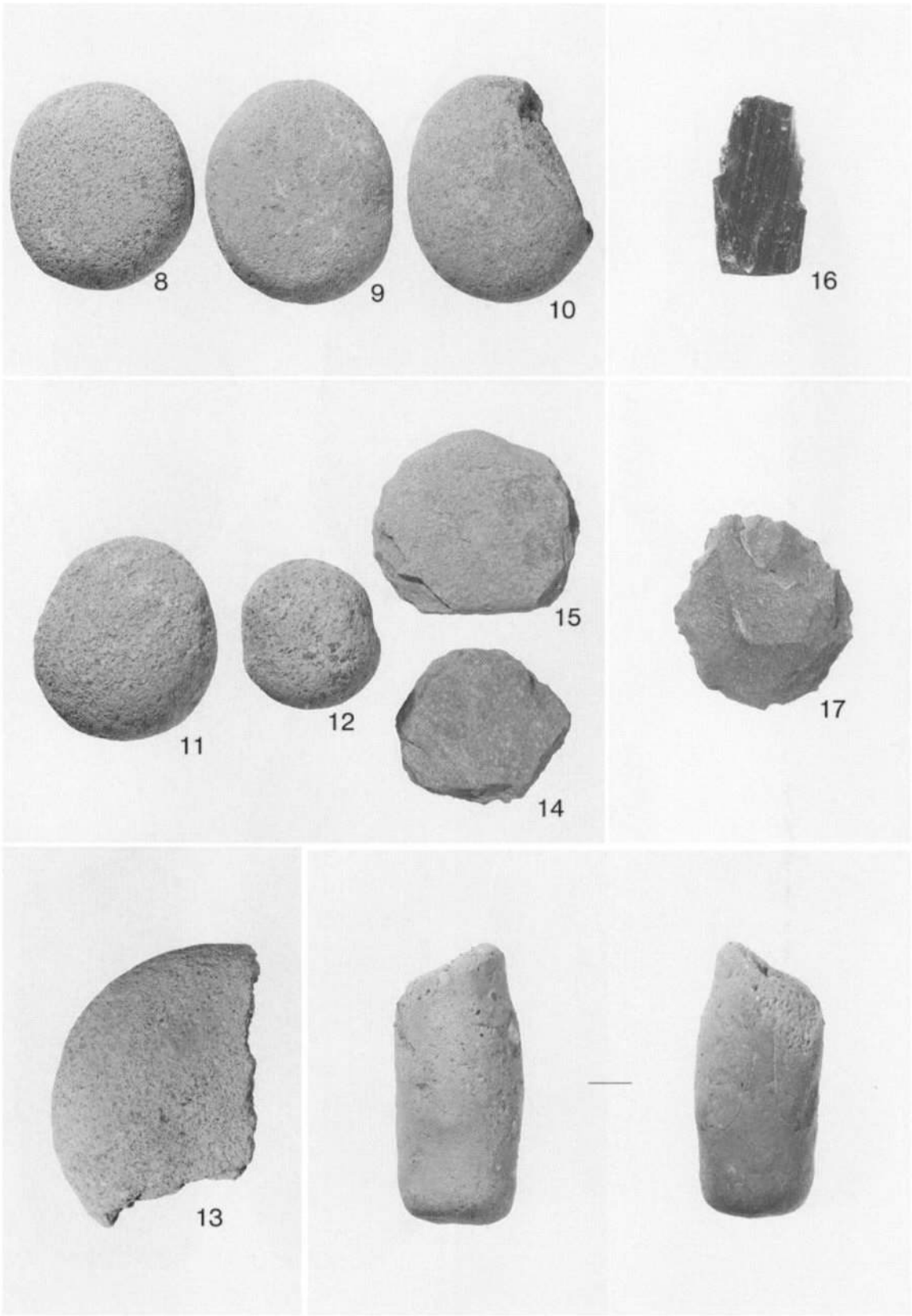
円形土坑出土縄文土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
17
12
14
15
16
21
18
19
20
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
37
36
35

包含層出土縄文土器




出土石器 1




出土石器 2 ・土偶

# V　原の東遺跡IV区の調査

（第２次調査）

# V　原の東遺跡IV区の調査

## 1　はじめに

原の東遺跡は、第１次調査分（Ｉ区）は今回の報文中に収録しているが、第２次調査については、今年度と平成10年度の２回に分けて収録することとなった。今回収録した地区は、工事用道路を挟んで第１次調査地点の北側に位置し、第１次及び第２次調査II区の段丘上より3.0m～4.0m低い地点で、調査を実施する以前には当該区には遺構が遺存しないと考えていた。

本格的な調査に入るにあたりここをII区の排土場にあてる予定であったが、重機で試掘調査した結果、当該区にも遺構が存在することが判明したため、この区域から東に向かって既設の道路を挟む形でIV区・II区・III区と便宜上区分けをし調査を実施した。

IV区は周囲よりも3.5m前後の比高差があるにも拘らず遺構が存在しているということは、耕作による削平はあるものの、旧地形がそう変化していないということの証であろう。原の東遺跡の調査は、昭和62年６月９日からII区から開始したが、II区には文化層が５乃至６層あることが判明したため、II区の上層の調査がある程度進んだ段階でIV区の調査に取りかかった。IV区の調査は８月20日から開始し、９月１日で終了した。

## 2　遺跡の概要

原の東遺跡は、福岡県朝倉郡朝倉町大字菱野字原の東に所在する。遺跡は、筑後側の右岸に形成された台地上にあり、北東側の丘陵には、過去、福岡県立朝倉高等学校が調査した妙見古墳群や墳墓群があったが現在は消滅している。九州横断自動車道建設で昭和62年にその一部を調査し、「妙見墳墓群」―第29集―として刊行している。

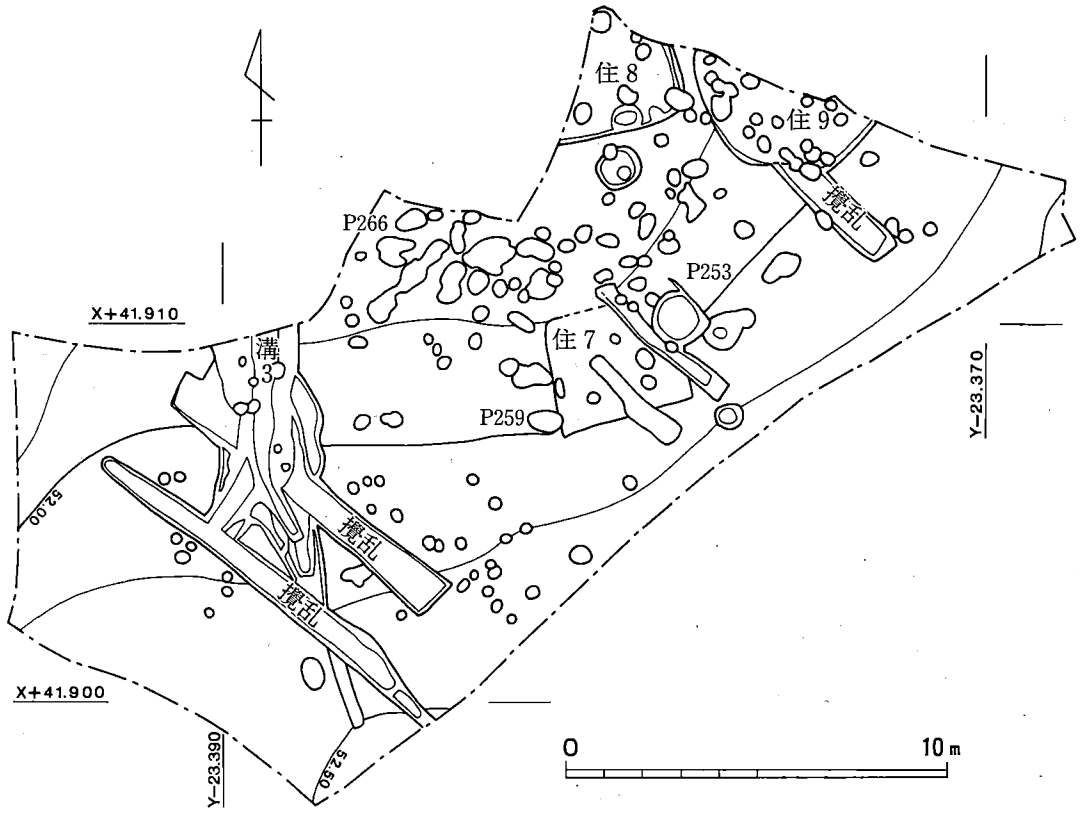
遺跡は、これら古墳群・墳墓群が形成されていた南西側の台地上に営まれていたが、第１次調査では弥生時代の甕棺墓群、竪穴住居跡、溝などを調査し、第２次調査では、縄文時代創早期の土器片、早期の石組炉35基（III区を含む）と集石遺構９基、晩期の貯蔵穴３基、弥生時代前期の方形竪穴住居跡１軒と貯蔵穴３基、中期の円形竪穴住居跡６軒、古墳時代中期の古墳16基、奈良時代の竪穴住居跡３軒と溝１条など幾重にも重なる文化層が確認され、その中でも縄文時代早期の押型文土器が調査区のほぼ全域に分布しており、下層の包含層を除去した結果、石組炉と集石遺構が多数発見され注目された。

また、調査地点のIII区は農道を挟んでII区の東側にあたり、弥生時代や古墳時代の遺構はなく、先土器時代や縄文時代早期の包含層が深さ2.0mほど検出され、多くのナイフ形石器・台形

石器・スクレーパーなどが出土している。

調査地点のIV区は、第１次調査及びII区の地点に比較して遺構は希薄であったが、3.0m～4.0mの比高差のある地形で、西に向かって緩斜面をなし傍には妙見川が流れ、その西は谷間を形成している。

調査の結果、検出した遺構は弥生時代中期前葉頃の円形竪穴住居跡１軒、奈良時代頃の方形の竪穴住居跡２軒、溝１条、ピットのほか新しい溝状の攪乱がある。このほか縄文晩期の甕の破片も出土しており、この時代の遺構も遺存していたと思われるが、削平されたためか確認されていない。




**第85図**　原の東遺跡IV区遺構配置図（1/200）

## 3　遺構と遺物

### 1　竪穴住居跡

#### 7号竪穴住居跡

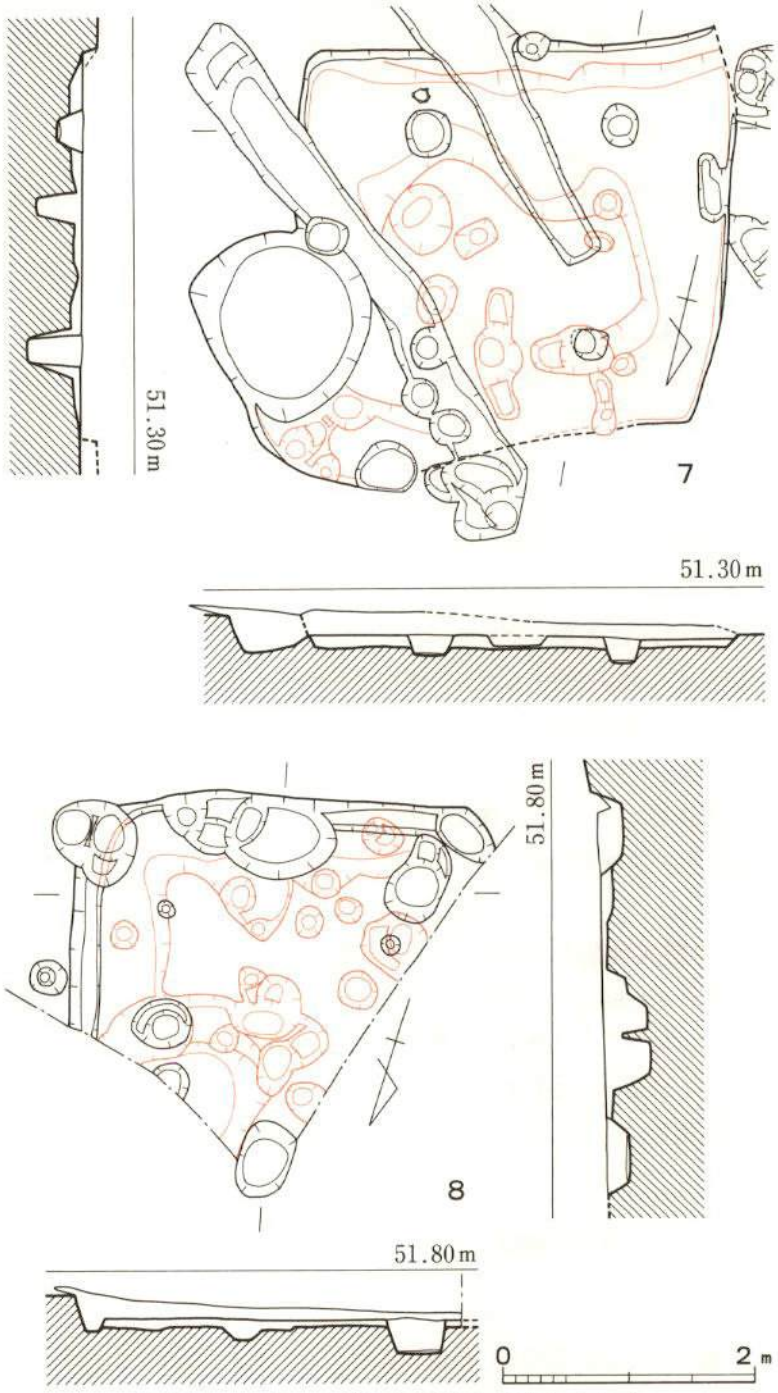
（図版42-1、第86図）

Ⅳ区の標高52.0ｍにある方形の竪穴住居跡で、葡萄畑の肥料穴と思われる２本の平行した溝状と植樹穴の攪乱により一部破壊されている。

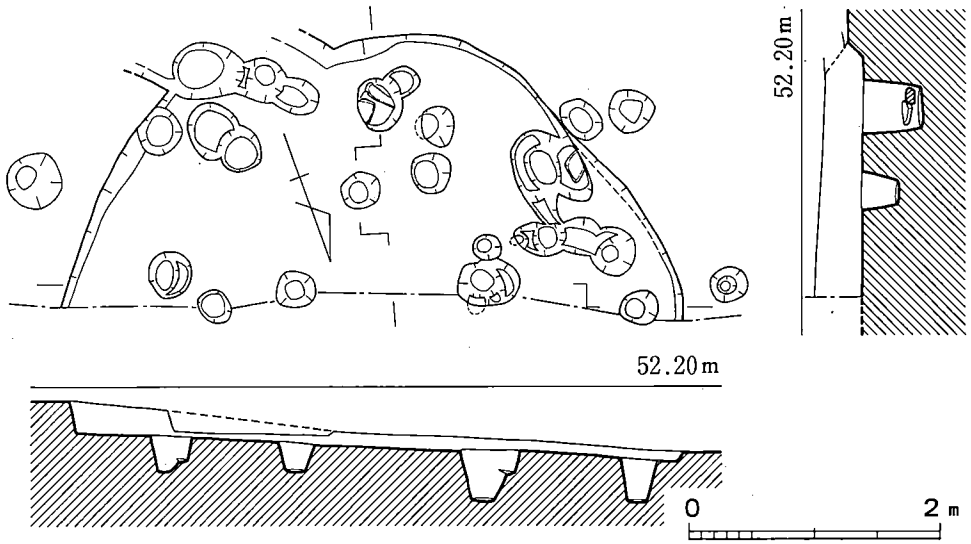
住居の平面形態は方形を呈し、南壁辺は3.30ｍ、西壁辺が3.10ｍ、壁高は10㎝～20㎝を測る。

支柱は４本でその位置からＰ１からＰ４が相当し、その柱間はＰ１-Ｐ２が1.55ｍ、Ｐ１-Ｐ３、Ｐ２-Ｐ４が1.70ｍ、Ｐ３-Ｐ４が1.25ｍを測るが、深さが浅い。

床全面に貼り床を施し、出土遺物からカマドを付設していると思われるが、破壊されている。




**第86図**　７号・８号竪穴住居跡実測図（1/60）




**第87図**　9号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物は土師器の甕・坏、須恵器の椀の破片がある。

**8号竪穴住居跡**（図版42-2、第86図）

調査区の北端で検出した竪穴住居跡であるが、約1/2を検出したが完掘していない。平面プランは方形乃至長方形であろう。床面上では多数のピットを検出したが、どれが支柱穴か明らかでない。

出土遺物は少ないが、縄文晩期の深鉢片、弥生時代中期初頭の甕の口縁部片、奈良時代の土師器の甕の口縁部片があり、当該住居に伴うものは土師器の甕であろう。

**9号竪穴住居跡**（図版43-1、第87図）

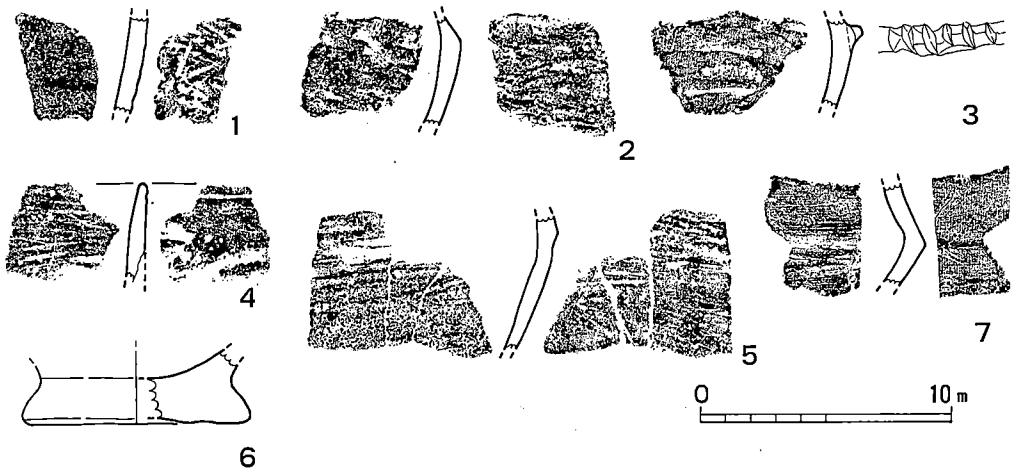
8号住居に隣接して検出した竪穴住居跡であるが、この住居も北側1/2が調査区外にある。平面プランは円形で、検出した範囲での直径は4.95m、深さは10cm～20cmを測る。支柱穴は床面上にある壁沿いに巡るP 1-P 5が相当すると思われる。

出土遺物は、弥生時代中期前葉頃の壺・甕の破片がある。

## 2　溝状遺構

**3号溝**（図版43-2、第85図）

号数はII区の溝番号からの通し番号で3号溝としたもので、ほぼ南北に延びる浅い溝状遺構である。全長6.0mを検出した。南に向かって浅くなり、谷から台地に上る道かも知れない。




**第88図**　IV区出土土器実測図１（1/3）

## 3　出土遺物

**土　器**（図版44、第88～90図）

縄文土器（１～７）　１は７号住居跡の床面下層から出土した粗製の深鉢片で、内面ナデ、外面条痕がみられる。２も粗製の深鉢で１と同様の仕上げである。８号住居下層の溝状に掘られた覆土内から出土した。３は内傾する口縁部の粗製の深鉢片で、屈折部に粗い刻み目の凸帯を貼付するタイプのものである。８号住居の覆土内からの出土である。１～３はいずれも奈良時代の竪穴住居跡から出土しており、周囲の縄文晩期の遺構が破壊されたことを示していると考えられる。

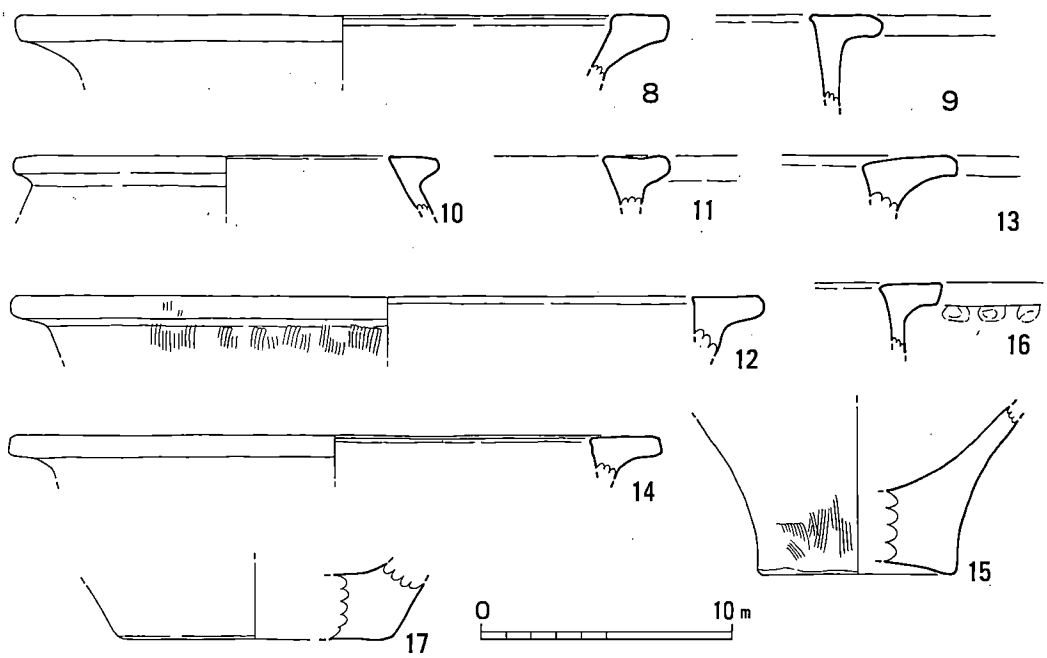
４は畑耕作で攪乱された新しい溝から出土した粗製深鉢の口縁部片で、口唇部に細い沈線が巡る。外面に煤が付着している。

５・６はピット内から出土したもので、５は内外面に条痕がみられる粗製深鉢である。P-259から出土した。６は深鉢の底部片で、復原底径が9.0cmを測る。P-253からの出土である。

７は浅鉢の破片で内外面がナデ仕上げである。表採遺物である。

弥生土器（８～17）　９号竪穴住居跡から出土した土器は壺・甕がある。８は壷の口縁部片でやや厚手の未発達の口縁部をなす。復原口径は25.6cmを測る。９は逆「L」字状に発達した甕の口縁部片で内外面に二次火熱を受け赤変する。11・12は未発達の逆「L」字状口縁部をなす甕の小破片である。８・11・12は形状から共伴するが、９はやや新相を呈する。

10・13・14・15は調査区の北から南、つまり谷側から台地方向に延びる上り道状の遺構から出土した土器である。10は無頸壺の口縁部片で未発達の口縁部をなす。復原口径15.4cmである。




**第89図**　IV区出土土器実測図２（1/3）

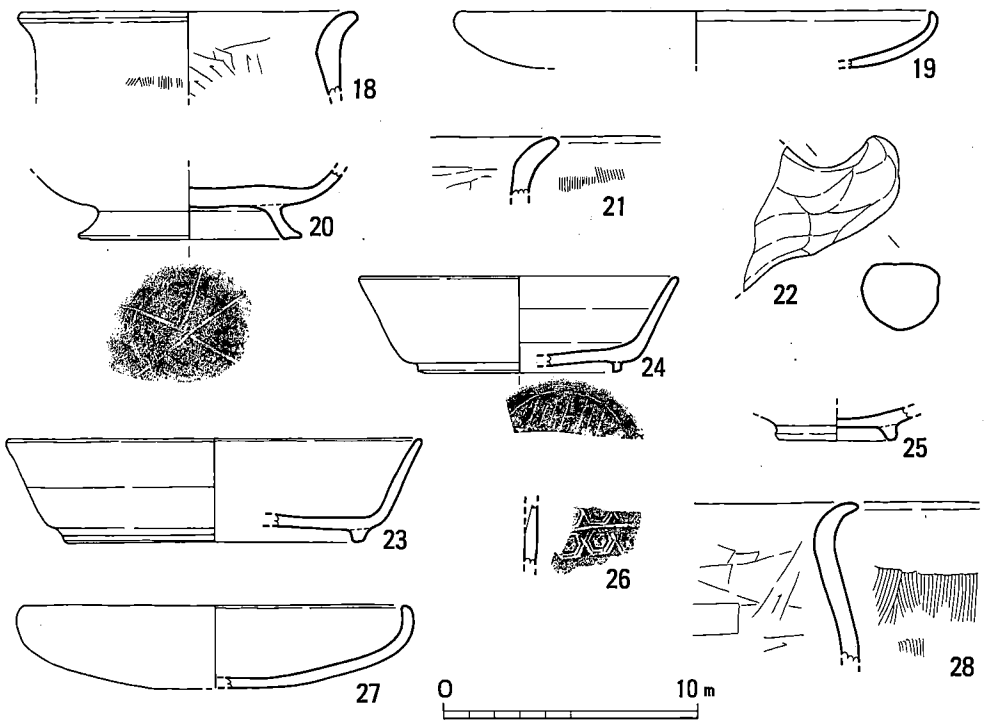
13は逆「L」字状に外反した甕の口縁部片である。14はやや未発達の逆「L」字状口縁部を有す甕の口縁部片で復原口径が25.2cmを測る。15は上げ底をなし厚みのある甕の底部片で、復原底径は7.6cmである。

16はP-266から出土したやや厚手の逆「L」字状の甕の口縁部片である。口縁下には粘土紐の接合部を押さえた圧痕がある。

17は新しい溝状の攪乱から出土した厚手の底部片で、器壁の厚さから甕棺の底部片の可能性がある。復原口径10.2cmである。

**土師器・須恵器（18～28）**　18～20は７号竪穴住居跡から出土した土器である。18はカマドの支脚などに転用される土師器の小型甕の口縁部片で、緩く外反する厚手の口縁部をなす。復原口径13.0cmである。19は口径の大きな土師器の坏の破片である。胎土には精製された粘土を使用し。復原口径は18.6cm。20は高い高台の付いた椀の底部片で、床面からの出土である。復原底径は7.8cmを測る。底部外面にはヘラ記号を刻む。21は８号竪穴住居跡から出土した土師器の甕の破片である。

22～26は溝３から出土した土器で、22は甑の把手部、23は低い高台を貼付する須恵器の椀の破片で、復原口径は16.2cm、高台径は11.2cm、器高は4.1cm である。24も同様の椀で復原口径が12.4cm、高台径が7.3cm 、器高は3.8cmを測る。底部外面に板目痕が残る。26は土師質の破片




**第90図**　IV区出土土器実測図３（1/3）

で表面に沈線を挟んで六角形のスタンプ文が配されている。器種は分からない。以上のように溝３から出土した土器には、弥生時代と奈良時代の土器類が出土しており、設置時期が明らかでない。

27・28はピット内から出土した土師器の坏と甕の破片である。前者は口縁部を内彎させ、体部は扁平なつくりである。胎土には精製粘土を使用し、復原口径は15.0cm、器高は3.3cmを測る。28は緩く外反した口縁部の甕の破片で、外面に煤が付着する。

## 4　おわりに

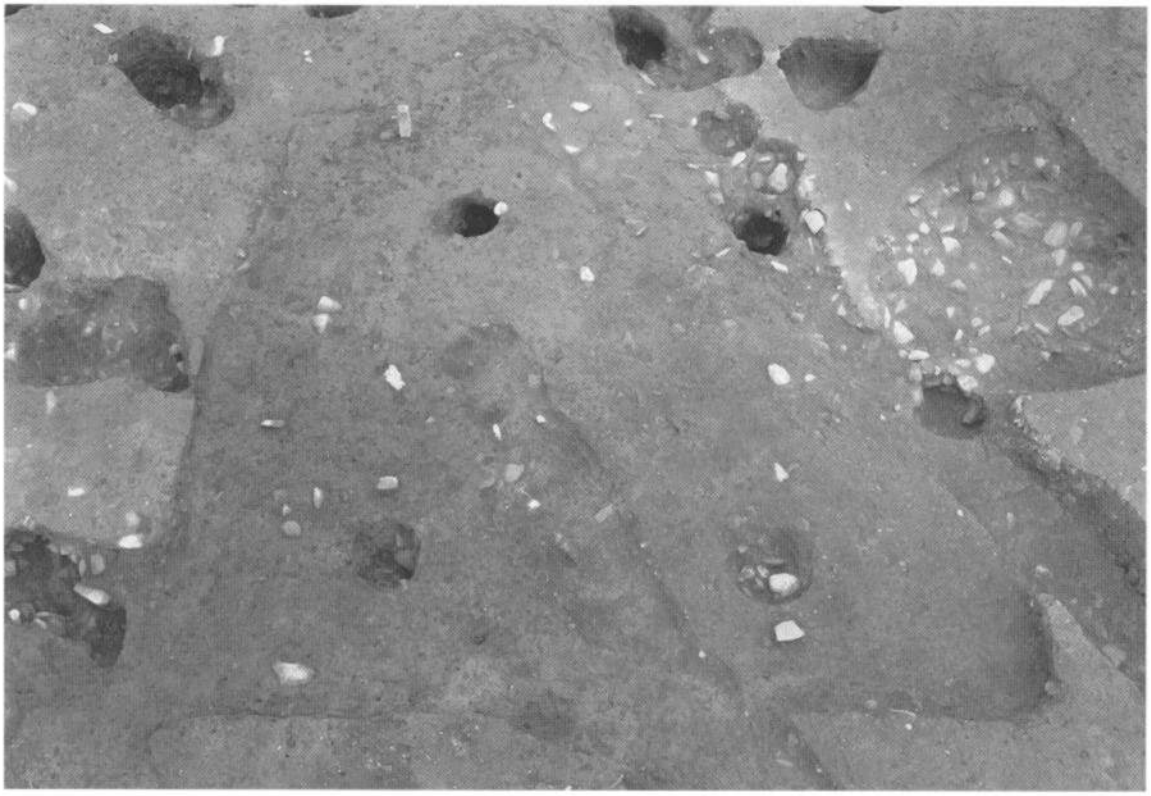
今回報告した第２次調査分は一部分であり、竪穴住居３軒と溝状遺構のみの報告であることから、原の東遺跡の第２次調査のまとめについては平成10年度の報告書に詳細に述べることにして今回の報告では割愛したい。

# 図　　版

(1) 原の東遺跡俯瞰

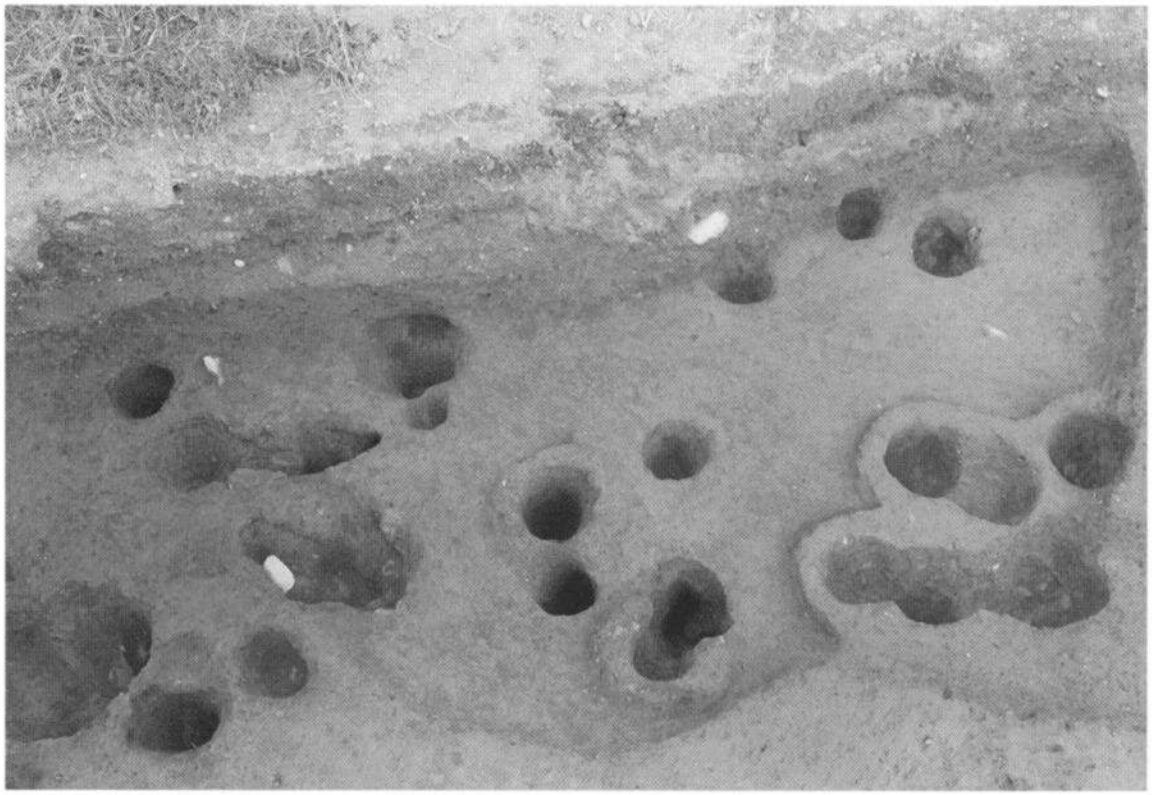
(2) IV区全景

図版 42



(1)　7 号竪穴住居跡（南から）

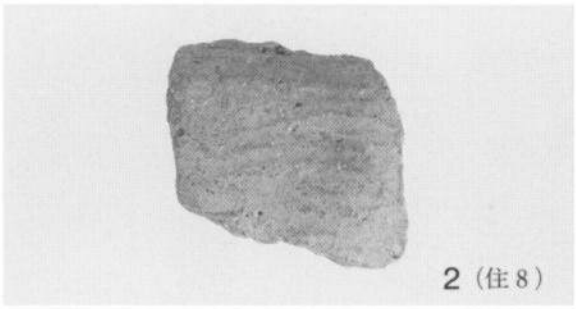
(2)　8 号竪穴住居跡（南から）



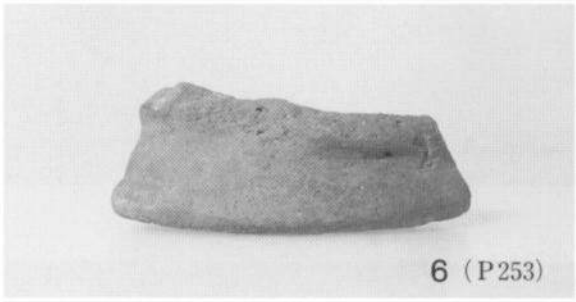
(1)　9 号竪穴住居跡（南から）

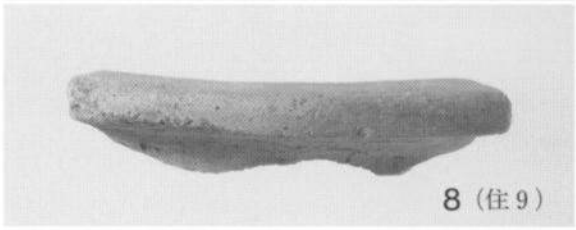
(2)　溝 3 （北から）

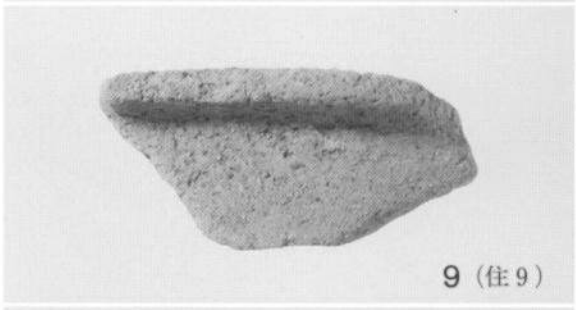
図版 44

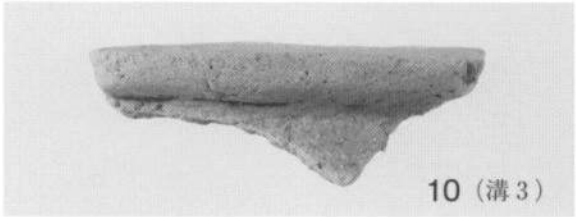

2（住8）

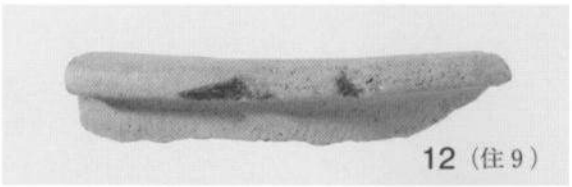
3（住8）

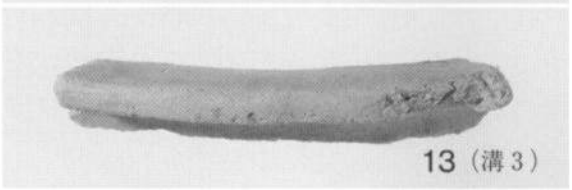

6（P253）


8（住9）

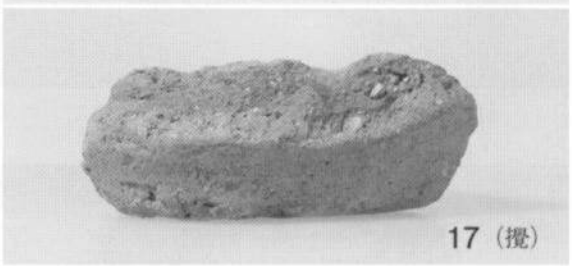

9（住9）

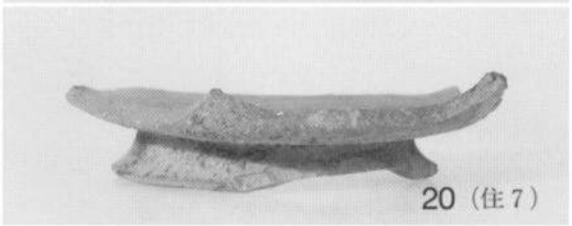

10（溝3）


12（住9）


13（溝3）

15（溝3）


17（攪）


20（住7）

24（溝3）

27（P254）

IV区出土遺物

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | なかみょうけんいせき　はるのひがしいせきⅠ |
| 書名 | 中妙見遺跡・原の東遺跡Ⅰ |
| 副書名 | 朝倉郡朝倉町所在中妙見遺跡の調査・原の東遺跡の調査Ⅰ |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | －50－ |
| 編著者名 | 小池史哲 |
| 編集機関 | 福岡県教育委員会 |
| 所在地 | 〒812-0045 福岡市博多区東公園7-7 |
| 発行年月日 | 西暦　1998年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | <br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>m² | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 中妙見 | 朝倉町大字須川<br>字中妙見・下妙見 | 404420 | 570367 | 33°22′40″ | 130°44′49″ | 19830601<br>～<br>19830608 | 480 | 九州横断自動車道建設 |
| 原の東 | 朝倉町大字菱野<br>字原の東・楠平 | 404420 | 570368 | 33°22′40″ | 130°44′55″ | 19830907<br>～<br>19831027<br>19870820<br>～<br>19870901 | 600<br><br><br>300 | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 中妙見 | | 奈良時代 | 住居跡 | 2 | 須恵器、土師器 | |
| | | | 掘立柱建物跡 | 2 | | |
| | | | 竪穴遺構 | 1 | | |
| | | | 土坑 | 1 | | |
| | | | 柵列状遺構 | 1 | | |
| 原の東 | | 弥生時代 | 甕棺墓 | 26 | 甕棺使用土器 | |
| | | | 石棺墓 | 2 | | |
| | | | 木棺墓 | 3 | 弥生土器 | |
| | | | 土壙墓 | 4 | | |
| | | | 住居跡 | 4 | | |
| | | | 竪穴 | 3 | | |
| | | 古墳時代 | 大溝 | 1 | 須恵器、土師器、白磁 | |
| | | ～ | 溝 | 1 | 土製品、鉄滓 | |
| | | 中世 | 土坑 | 5 | | |
| | | 縄文時代 | 埋甕 | 1 | 縄文土器、石器、土偶 | |
| | | | 土坑 | 2 | | |

# 九州横断自動車道関係
# 埋蔵文化財調査報告

— 50 —

朝倉郡朝倉町所在中妙見遺跡の調査

原の東遺跡の調査 I

# 付　　図

付図1　原の東遺跡西部（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区）遺構配置図（1/200）